
LUNAR ~ 英雄伝説 ~

セラフィム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LUNAR（英雄伝説）

【Nコード】

N50630

【作者名】

セラフイム

【あらすじ】

暗黒の破壊神ゾファアとの戦いから千年。再び復活したゾファアと青き星のルシアとの戦いは両者の引き分けに終わった。傷ついたルシアはエネルギーの衝突により見知らぬ星へと飛ばされてしまい、帰還の方法を探し出す。そこでは出会ったエステルやティオたち、遊撃士、人々の笑顔があった。そして影で蠢く陰謀。この戦いの末に訪れるのは破滅か、それとも……………。

プロローグ（前書き）

この物語は、両原作を知っておいた方がよりイメージはし易いかと思われま

プロローグ

最後のドラゴンマスター・アレスの冒険譚からどれほどの時が過ぎたのか……。

彼らの活躍がルナに住む人々の記憶から薄れて伝説となってしまうところ、アルテナ神団を名乗る教団が現れた。彼らは女神アルテナの名の下にルナを強力に統べようとしていた。

そのとき、ひとりの少女が凍てついた青き星で目覚めた。天空に輝くルナを見て彼女はつぶやく

「まだ目覚めのときではないのに……」

考古学者の卵であるヒイロは、ルナに存在する最古の遺跡ともされる青き塔を盗掘……もとい、発掘していた。まんまと竜の目と呼ばれる宝を入手したヒイロの前にまばゆい光が走り、少女が姿を現わした。

彼女は言う。

「わたしの名はルーシア。青き星からやってきました。この世界は危機に瀕しています」

強力な魔法を操り、塔に棲む魔物を一掃するほどの力を持つルーシアであったが、かつて青き星を滅ぼしたゾファアの前にその力を奪われてしまう。

ルーシアは冒険を通じ、ヒイロや仲間たちと触れ合い、人間らしさを身につけていった。

だがその結果、ゾファアの完全復活とルーシアの敗北、そして女神アルテナが人間に最後の転生をしていたという、女神不在の真実であった。

ヒイロはルーシアを助けたいと叫び、暗黒の破壊神『ゾファー』と戦った。

限りない人間の可能性を見せつけたヒイロはルーシアを助け出し、ゾファーを打ち破った。

2人はその後、青き星へと渡り、2人っきりで青き星の再生と復活を見守り続けたのである。

それが、およそ1000年前の話。

そして今。

復活して緑溢れ、数多の命が存在する青き星が、再び全滅の危機に陥っていた。

「……………」

少年がひとり、荘厳で神聖、天高く聳え立つ神殿の最深部にいた。年の頃は5歳ほどだろうか。

青い髪。緑色の瞳。黒の衣服に身を包み、紅い外套を身につけ、真っ白の雪の世界へと変貌した大地を見下ろしていた。

下界は唯一の命ある者たちであった動物たちが、一斉にこの塔へと集まってくる。

その身を腐らせ、悲鳴を上げ、雄たけびを上げ、呪いの怨嗟を上げていた。

「……………」

少年がスツと手を挙げるとそこに水晶が出現し、『死滅した青き星』とそうなった『元凶』の姿を映した。

少年は外套を翻し、宙に浮いて下界へと舞い降りた。

生きる死体となった、大切な動物たち。

目には映りにくい、小さな微生物たち。

それらが皆、敵の手に落ちた。

『青き星のルシア。再び滅ぼされる事になった青き星はどうだ？』

「……………」

ルシアと呼ばれた少年の前に立ちふさがるのは、天から大地へと突き出てる巨悪。

実態無き存在。人々の悪意から生まれる災害。1000年の刻より蘇った、女神の敵。

暗黒の破壊神『ゾファー』

『フハハハハハ。青き星のルシアは言った。人々の可能性を信じて。女神アルテナも言った。人々を信じると。その結果がこれだ』

「……………」

ルシアはゆっくりと、左腕を天へと掲げた。

『そう。そうだ、そうして私を滅ぼすがいい！ルナの人間の所為で、ふたたび青き星を死の星へと変えるが良い！』

「……………」

少年の瞳が揺れ動いた。

その眼に映るのは、変わり果てた愛すべき青き星の命たち。

「アルテナの光よ……………」

一縷の光が青き星を包んだ。

つんざくような落雷の音。大地を雷が穿ち、世界中から小さな命の結晶である魔素が集まる。

その数は、無限。

数多の光が少年が掲げた左手へと集う。

世界から色が無くなり、灰色の世界へと変貌する。

『だが我は同じ失敗はしない。貴様も一緒に』

少年は目を瞑り、そしてゆっくりと目を開けた。

周囲を見回して再度目を閉じる。

「アルテナの……………光よ」

『死ねええええええええええええええええええええええええ』

ゾファーから放たれる死の一撃。

山を吹き飛ばし、生ける死体となった青き星の動物たちを消し飛ばし、少年へと迫る。

それを見て、少年は左手を。

その手を振りおろした。

この日。

青き星は再び滅び、ルナの人々は青き空を見上げてそこに映る青き星の異変を知った。

衝突した力と力は全てを吹き飛ばし、青き星は誰もいない死の星へと変わり果てた。

ゾファーも、そして少年も。

その場には誰もいなかった。

プロローグ（後書き）

主人公イメージは、アレス。

そこにルーシアのように感情が無かった当初のような感じ。

物語開始前の設定（前書き）

序盤の主人公ステータス。

あくまでも主人公をイメージしやすくするためのものです。

物語の設定やステータスは、当然ながら物語に影響されます。

物語開始前の設定

主人公 ルシア

外見年齢 5歳

青き星在住時。

Level 99
 HP 10000
 EP EX

STR 3
 DEF 2
 ATS EX
 ADF EX
 SPD 3
 DEX EX
 AGL 5
 MOV 1
 RNG 1

クラフト

サテライトボム 20
 スパークショット 40
 ホーミングキャノン 10
 カタストロフ 50
 シールド 10
 ヒーリング 10
 剣舞 30

大円・攻撃・駆動中技・アーツ解除
 単体・攻撃
 直線・攻撃+遅延
 大円・攻撃
 2回被攻撃無効
 単体・全回復
 自己・ATS・ADF以外全パラ

メーター + 90%
飛翔天舞斬 30 3回連続攻撃 + 気絶

Sクラフト

アルテナの光 星を破壊します

アルテナの加護 死者蘇生

龍召喚 黒龍・青龍・白龍・赤龍を召喚します。

ドラゴンマスター 全てのステータスが3倍になります。

評価：

超絶能力。たった一人で戦っていたので魔力だけは凄いです。
ただし身体能力は5歳児のままですので、そこは低すぎる。
剣術も使えます。ただし腕力は子供相応の力。魔力でカバーします。

LUNARファンはすぐに気付くかもしれないが、ルシアは実は……。

第1話 全ての始まり

その日は、世界情勢からいえば不釣り合いな位、気持ちよすぎる程の快晴であった。

春も麗らかなこの頃、ゼムリア大陸西部に位置する街、リベール王国。

千年以上の歴史を誇る小国で、君主制を布いているが貴族制は廃止されている国家であり、2つの大国『北のエレボニア帝国』と『東のカルバード共和国』と国境を接している。

小国でありながらも豊富な七耀石資源と高い導力器技術、そして現在の国王・第26代目となる女王アリシア？世の巧みな外交によって両大国とも対等な関係を保っており、緊張感の高い両大国の間に位置する緩衝国として働いている二つの大国に挟まれていた。

導力器「オーブメント」と呼ばれる技術が発達した世界。

そんなゼムリア大陸西部の情勢は今、緊張状態であった。

「エステル！ こっちよ！」

「お、おかあさんっ！」

随所であがる悲鳴。銃声が響き、爆発が起こる。

人々は逃げ惑い、所々で倒れている人はその身を赤く染めていた。

リベール王国の一都市・ロレントの街は。第一次産業、つまり農業・鉱業が産業の中心となっており、揶揄的に田舎と呼ばれる事もあるが、導力器に欠かせない七耀石を産出する鉱山を擁するなど導力器産業にとって非常に重要な都市。

その都市が襲撃され、綺麗な時計台を擁する街並みは破壊の一途

を辿っていた。

「ここで一旦やり過ごしましょう」
「う、うん」

そんなロレントの象徴ともいえる時計台の物陰に隠れた1人の女性と小さな女の子。

2人の名は、女性の方を『レナ・ブライト』と云い、女の子の方を『エステル・ブライト』と云った。

レナやエステルは茶色の髪をしていて、瞳は綺麗な紫。

特にレナは綺麗な長い茶色の髪を腰まで伸ばし、穏やかな雰囲気も相なつてなんとも優しい雰囲気を感じていた。

そんなレナの血を色濃く受け継いでいるのか、エステルもまたレナに近い容姿をしている。

レナの旦那にしてエステルの父親はカシウス・ブライトと云い、このリベール王国においては、大佐の肩書きを持ち、また『剣聖』と称されるほどの腕前を持つ、まさにリベール王国において重要且つ最強の軍人であった。

そのカシウス・ブライトの空からの攻撃、もとい反撃により孤立したロレント襲撃の部隊。

半ばヤケになってロレント襲撃した部隊で、それは大局的にはこの戦争では大した意味はもたない。だが現地住民にしたら大災害だ。その身を追われ、害され、殺害される。

「何処にいった!」

「探せ! カシウス・ブライトに対する重要な人質だ!」

「市民も皆殺しだ! 殺せ!」

軍人の罵声と共に幾人も足音が時計台を通り過ぎて行く。
レナはホッと溜息を吐き、己の腕の中にいるエステルを見遣る。

「エステル大丈夫？ 怪我はない？」

「うん。大丈夫だよお母さん」

「そう、良かったわ」

レナは緊迫した状況の中でも優しく微笑み、周囲を警戒した。

(それにしても、どうしてエレボニア帝国はいきなり……………)

後に『百日戦役』と呼ばれるこの戦いにおいて、エレボニア帝国は突然の攻撃を仕掛けてきた。

……………いや、正確には エレボニア帝国南部にあったハーメル村を突如武装集団が襲い、村人がほぼ全滅した事件。 思い出せばあれからエレボニア帝国はきな臭い動きはあった。

夫・カシウスがそうぼやいていたのも記憶に新しい。

だが、完全に攻め込んできたのは不意打ちだった。

駐留していたわずかな軍と現地の『遊撃士』たちが応戦した事により戦闘が勃発していた。

そのわずかな軍と遊撃士はその未熟さと数的不利により敗北したようだ。

(どちらにせよ、ボースモルーンも攻め込まれていると考えていいわね……………)

夫のいる王都グランセルまで、どうしても導力飛行船や船に乗る必要がある、それもエレボニア帝国により近い都市であることから、ここよりも先に襲われているだろうし、船が無事だとは戦略上且つ

移動価値から思えない。

より安全かつ無事、迅速なルートを考えているレナ。だが、それがいけなかった。

ドオオオン！

激しい閃光。一瞬だけ辺りが闇に包まれ一瞬で切り替わり白い世界に。

つんざくような爆発音と共に、ソレはレナと愛娘に襲いかかった。

「エステル

！」

「きゃあ~~~~~！」

爆破され崩れ落ちる時計台。

レナは力の限りに必死でエステルを突き飛ばした。できるだけ遠くへ。母親として愛娘を守りたい一心で。

それは己を顧みない助け方であった。

「おかあさん！！」

地面に転がったエステルは起き上がり母親がいるはずの方へと目を向けた。

エステルの目に飛び込んできたのは、あつた筈の時計台が半ばから無くなっていて、瓦礫となって崩れ落ちている光景と。

その瓦礫の下敷きになっている母親の姿であった。

エステルは必死に駆け寄り、母へと泣き縋った。

「おかあさん！ おかあさん！」

「…………… エス…………… テル…………… 怪我は、ない？」

意識が飛んでいたのか、エステルの声でようやく目を開け、弱々しい笑みを向けるレナ。

そんなレナを見て、なんの知識もない子供であるエステルも本能で悟ったのだろう。

母は死んでしまうと。

「おかあさん！ しっかりして！」

「…………… エステル…………… 逃げなさい」

「いやだあ！」

「お母さんの事は…………… いいから…………… 早く…………… 逃げなさい……………」

爆破されたのはエレゴニア帝国の兵士。おそらく取り残された事からリベールに対して腹いせまがい、ロレントの象徴の時計台を破壊したのだろう。

そう予測したレナは、エステルを一刻でも早くここから逃がそうとする。

（早くエステルを逃がさないと…………… 帝国兵が来てしまう）

これだけ派手に崩れ落ちたのだ。遅かれ早かれ帝国兵士はやってくるはずだ。

「だれかあ！ おかあさんがたいへんなの！ だれかたすけて〜」

「……………！！」

逃げ惑う人々に助けを求めるエステルだが、人々もそれぞれではない。

自分の身が危ないのだ。一刻もはやく逃げ出したいのだろう。誰もエステルに取り合わないし、目も向けない。

「だれか~~~~~!」

「エス……テル……」

全く逃げようとしていないエステルに、レナは全身に走る痛みに必死に耐えながらエステルに話しかけようとしていた。

自分が死ぬ前に、早く逃げると云うつもりだった。

だが事態はさらに急変する。

突如、恐るべき速度で空が暗雲に包まれ、昼間の快晴があつという間に夜のように暗くなった。

雨雲ではない。

まるで雷雲。真つ黒な雲が天を多い、目に見えるほど雷が天を走っていた。

それは、まさに10秒に満たないあつという間の出来事。

その異常事態にレナはただならぬ嫌な予感を感じ取り、エステルへ叫ぼうとした。

「!~~~~~!」

だがついに声すら出なくなったのか、掠れたうめき声しな出ない。

「おかあさん!」

そんな母の様子に気づいたエステルが再び駆け寄ってきて、岩を退かそうと必死に押した。

びくともしない岩でもエステルはひたすらどかそうと必死に力を込める。母を助けて逃げようと必死だった。

そして、ついに『ソレ』は来た。

「きゃっ！」

数メートル先に、天から一陣の光が降ってきたのだ。
青い光。

青の光が暗雲から打ち降ろされるように降ってきて、エステルたちの目と鼻の先に舞い降りた。

エステルは悲鳴を上げてレナに抱きつき、レナもその事態に意識が朦朧としながらもエステルを庇おうと抱き寄せる。

ゆっくりと青い光は収まりを見せ始めた。

そして青い光が完全になくなった時、何時の間にかそこにいた。

「……………」

真っ赤な外套、つまりマントを身に纏い、赤い烏帽子のようなものを被り、黒いブーツがコツンと地面に触れ音を立てた。

その人物はレナの身立てでは、エステルと歳が変わらない幼い少年だ。

だが重傷の身であるにも関わらず、全身が鳥肌が立つほどの圧迫感。

その気配から訳の解らない神聖さすら感じる程。

目を瞑っていた少年はゆっくりと目を開け、辺りを見回す。

エステルたちとも一瞬目が合ったが、すぐに興味無さそうに周囲へと目を向けた。

暗雲が弾けるように飛び散り再び真っ青な空を映しだすと、その少年は空を仰ぎ、ジッと見つめる。

「ここは、ルナでも……青き星でもない」

ポツリと呟く。

不自然なほど、辺りに浸透する声。

「ゾファー……」

声に抑揚がなく、まるでロボットかなにかが喋っているかのよう
な、そんな声だった。

エステルはハッと我に返り、その少年に駆け寄った。

「ねえ、おかあさんが大変なの！ あの石どけるの手伝って！」

「……………」
「ねえったら！」

外套を掴んでひっぱるエステルに、ようやく目を向ける少年。
必死に助力を請うエステルに少年は云った。

「何故、それをする必要がある？」

「え……………」

「私にその義務はなければ義理もない。ここはルナでも青き星でもない。なら私が人々を助ける必要はない」

「だって、おかあさんが死んじゃう！」

「時間の無駄です」

「手伝ってよ！」

少女の悲痛な叫びにも、少年は顔色ひとつ変えずに切つて捨てる。興味を無くしたようにその場を去ろうとする少年にエステルは必死に追い縋った。

まともに考えれば、エステルと同じくらいの子供に助力を求めたところで事態は好転しない。だがエステルは母を助ける為に必死だった。誰でもいいから助けてほしいかった。

「お願い！ おかあさんが死んじゃったら、わたしっ！」

「……………」

「大好きなおかあさんの！」

背を向ける少年にエステルは叫んだ。

コツコツと音を立てる少年はようやく立ち止り、無機質な、なにも感情を灯さない目をエステルへ向け、そして後ろで虫の息になりつつあるレナを見た。

「……………」

少年は空を見上げ、そこに何も無い事に目を細め、そして小さく溜息を吐いた。

ゆっくりと手を挙げ、手の平をレナへと向ける。

ブンつと青い光が少年に集ったかと思えば、次の瞬間には瓦礫の山の『全て』が一斉に持ち上がり、街を囲う塀へと押しやりそこに落とす。

ドシンつと音を立てる、何重トンにも及ぶ瓦礫の山。

瓦礫の下敷きになっていたレナの身体は真つ赤な血に染まり、岩に潰されたと思える足は紫色へと変色していた。

「おかあさん！」

そんな母を見て涙を零しながら駆け寄るエステル。
ついに返事をしなくなった母に、大粒の涙を零しながら何度も何
度も呼びかけ続けた。

「……………」

少年はそんなエステルとレナを見詰めていた。すると小さな、ほ
んの小さな頭痛が走る。

自分の頭を撫でる、綺麗な白い手。

誰の手か、分からない。ただ何かを語りかけていた、そんな記憶
の欠片。

「……………」

すぐに去るつもりだった。訳の解らない場所に出て、仕方なしに
力を貸した。

だからあの人間の女性が死のうがどうでもよかった。瓦礫をどか
したのも耳触りだったからだ。

しかしそんな少年は、刹那に過った知らない光景の後、僅かなが
ら沈黙し、そして再び手をかざした。

「……………ヒール」

途端、レナを包む青い光。

時間が逆行するように強制的傷口が塞がっていき、レナの顔色は

再び血行の良い色へと戻る。

欠損した肌ですら復元するそれは、まさに奇跡。

とある魔法をかけた少年は、己の手の平をジッと見詰めて目を細めた。

するとバタバタと響く足音が聞こえ、あっという間に時計塔の周りは武装した帝国兵に囲まれてしまった。

「さっきの光はなんだったんだ！」

「貴様か！ 武器を捨てる！」

銃を向けてくる人間に、少年は光のない瞳を向けた。

「おい、ここに女が倒れているぞ！」

「ほう、怪我しているようだが、上玉じゃねえか」

「連れて行くこうぜ、ヒヒヒヒヒ」

血に染まった服を見て怪我をしていると『誤解』した兵士。エステルはそんな兵士たちに怯え、母を守ろうと覆いかぶさる。

「やはり人間の所為でゾファーは……」

少年はポツリと呟いた。

感情が見えないその瞳のまま帝国兵を眺め、そして

「愚かな……」

その瞬間、ロレントは閃光に包まれた。

「う、うゝゝん。ここは……」

レナは鳥の囀りと風で擦れ合う木の葉の音を聞き目を覚ました。ぼんやりとした頭で周囲を見回し、そしてハツとなる。

（私は死んだはずじゃ……って、エステル！）

自分の身体を触り、怪我がどこるか痛みすらないことに驚愕し、そして愛する娘を思い出す。

探そうとして、自分の足元に娘が倒れていることに気がついた。

慌てて怪我がないか確認し、無事であることに安堵のため息を吐いた。

「いったい誰がここまで……」

長年住んでいたレナだから解る。

ここはロレント郊外の、森の中だ。

間違いなく先ほどまでロレント市内の時計台にいたはず。そこで致命傷を負い、エステルを逃がそうとして、不思議な男の子が現れたところまで記憶にあった。

そこから先が記憶にない。

レナはエステルを抱き上げるとロレントを眺めれる丘に上がった。

「あの子も無事だと良いんだけど」

レナと同じ年齢くらいの子供。おそらく母親と逸れたんだろうと予想したレナは、同じ歳の子供を持つ親として、少年の無事を願った。

そしてようやく丘に着き、ロレントがある方角を眺め、

「えっ!?!」

驚愕するレナ。

それも当然だった。

銃声や怒声が響き渡っていたロレントは、まったく音がせず、火事などの音しかない。

さらに時計台周辺は導力器のダイナマイトを何十個も爆破したかのように、真っ平らの更地に化していたのだから。

この日。

ロレントにいたエレボニア帝国兵は全滅。

ロレント市民は何故か郊外へと飛ばされていて、救助にきた王国軍や各地に散らばっていた遊撃士たちがそれを発見し驚愕し、首を傾げる事になった。

エレボニア帝国は遊撃士とリベール王国軍により殲滅されたのだと解釈し、引き続きリベール王国を攻める決意を新たにしたのである。

第1話 全ての始まり（後書き）

ロシアはとある理由から、人間を愚かだと称しました。

それは後に判明する事実からようやくこの意味が理解できます。

ロシアは今後なにをし、どう変わっていくのでしょうか。

第2話 歩き出した少年

ロレント郊外のとある民家。

百日戦役と名付けられた戦争が無事に終結したりベール王国。リベール王国軍を指揮し、エレボニア帝国の撤退に大きく貢献した、リベール王国軍所属のカシウス・ブライト大佐。

彼は戦後処理が本格的になる前に、大慌てでロレントの自宅へと帰ってきていた。

もちろん軍の中枢に携わり、そのような戦功をあげたカシウスが戦後とはいえ一時でも帰ってこれたのは、周囲の協力と、とある情報からによるものが大きい。

それは『レナ・ブライト重傷』の悲報。

帝国兵を幾名か拿捕した際に、敵の無線に入った一つの情報。厄介な敵、カシウス・ブライトの妻を発見。時計台を爆破する事により生き埋めにしてやった、とのこと。

精神的攻撃を狙った一将兵の狙いは、実に効果的だった。

顔を真っ青にしたカシウスは動揺が酷かったが、リベール王国軍の最高位のポジションにいるモルガン將軍、彼もレナをよく知る人物であり、カシウスの面倒をよく見ていて、自分の後継者にしようとしていたモルガンがカシウスの為に融通を利かせて、彼を妻の元へと遣った。

この事態にその対応は部下に反感を買いそうなものであるが、なによりもカシウスの功績を知っていたし、この戦争では彼のお陰で

戦死者が減り、早期終結した事は誰もが理解していた。

だから誰もがカシウスを心から送り出した。

そういった『人徳』も、カシウスのカリスマ性を表しているといえよう。

そうして大慌てで戻ったカシウスだったが、家の扉を蹴破るように開けると、そこにいたのは怪我ひとつ負っていない愛する妻の姿であった。

呆然としたカシウスは、笑顔で「おかえりなさい、あなた」というレナの言葉で我に返り、矢継ぎ早に無事かどうか尋ね、ペタペタと体中を探り怪我がないか診る。

レナ自身も驚くほど取り乱しているカシウスを落ち着かせ、事の顛末を説明した。

瓦礫の下敷きになったのは本当。

怪我もした。

死にかけていたのも本当。

そこに現れた、1人の少年。

気がつけば、ロレント郊外にいたこと。

レナは全て説明した。

「それは……気になるな」

「ええ。私もあの子がどうなったか、気になって気になって」

いや、まあそれもあるんだが、とカシウスは心の中で呟く。

当然その少年に改めて礼をしたいという感情はある。むしろ感謝の気持ちでいっぱいだ。

レナの意識が朦朧としていた所為か、いまいち話に要領が得ない。

するとレナの膝の上でデザートを頬張っていたエステルが父に言った。

「あのねえ、真つ赤な服を着た男の子だった！ あとあと、青い光が手から出て、石が浮き上がってドシーンって！」

「……………」

「そしたらお母さんの体も青い光でブワ〜ってなって、そしたらそしたら」

エステルの説明は拙いものであり、他人が聞けば意味不明だろうが父親のカシウスやレナはその意味を悟っていた。

「あなた」

「ああ。どうやらその少年のお陰、と考えるのが妥当だが……だがどうやって」

アーツの力ではない、そうカシウスは予想する。隣ではレナがエステルに紙を渡し、その少年の似顔絵を描いてもらっていた。

そもそもアーツにそのような力はない。

破壊系のアーツ、補助系のアーツ。回復系のアーツ。

どれも大体知っているが、岩を『浮かして除ける』アーツなどないし、それは『エネルギー保存則』に反している。

回復系にしても同じであり、瀕死の致命傷を塞いで回復させる力など聞いたことがない。

ロレント郊外にいたというのも可笑しな話であり、さすがにそれは少年の仕業ではないだろうと踏むが、カシウスはロレントの一部が荒野と化した事も踏まえて、一連の流れはその少年の仕業ではな

いかと、勘がそう告げていた。

「とりあえず、レナ」

「はい」

「大丈夫だと思うが、一応念のために王都の病院で検査はしてもらおう。念の為にな」

「ええ、分かったわ」

「それから……」

「？」

「今回の事で私は痛感した。軍においては大切なものは守れない。私の一番守りたいものは、守れない」

「……………」

レナは黙ってカシウスの言葉を聞いた。

リビングが静まり返り、エステルの似顔絵を描いている鉛筆の音だけが響いている。

「私は軍を辞め、遊撃士になろうかと思う……………どうだろうか？」

一家を預かる男として、職を手放すのはそう簡単な問題ではない。カシウスは愛する妻へとそう問いかけ、

「あなたの望むようになさって下さい。夫を支えるのが妻の役目ですから」

レナの温かな笑顔にカシウスは口元を緩める。

「ありがとう」

2人はテーブルの上で手を繋ぎ、コクリと頷き合った。

それから温かな空気が漂い、エステルは鼻歌が響く中、カシウスは続けた。

「実はそれ以外にも気になっていることもあるんだ」

「それ以外？」

「ああ。最近、エレボニア・カルバート・クロスベルで奇妙な事件が起こっている」

「……………もしかしてクロスベルタイムズに載っている、子供が謎の失踪を起してる事件ですか？」

「ああ。まだ数人だが……………どうにも嫌な予感がする。まだ始まりに過ぎないような、そんな気が」

「そんな……………」

「妙な組織もあるようだ。それらを探るには、軍人ではしがらみが大きすぎる」

「そうですね」

エステルほどの子供が行方不明になっている、その事実は子を持つ親としては不安だ。

レナはエステルをギュツと抱きしめた。

「將軍には申し訳ないが」

「ええ。そうですね」

「できた……………！！」

と、そこでエステルの元気な声があがった。

エステルは嬉しそうに両親に、自分が描いた少年の似顔絵を見せる。

「ほ……………」

「あら、エステル上手ねえ」

「えへへへ」

なんとも子供らしい子供の絵だが、特徴をよく掴んである。赤い帽子を被り、赤いコートを羽織り、下は全身黒い服装の少年。髪は青色。瞳は緑色。

エステルの絵を見て、レナもおぼろげながら少年の姿を思い出したらしい。夫を見てコクリと頷いた。

カシウスはその絵をジッと見詰めた。

それから2ヶ月後。

カシウス・ブライトはリベール王国軍を退役。

『剣聖』と謳われた剣を振るうことはなかった。

一方、海岸線を歩いていた『渦中の少年』こと、ルシアは己の手をジッと見ていた。

砂浜に佇み、紅い夕日を浴び、波の音が響く。

「……………」

力が、弱くなっている。

完全な弱体化が起こっていた。

ゾファアとの戦いの代償か。そして『アルテナの力』を使った代償か。

今の自分に、少し前までの力はない。

数日前の人間を助け、攻撃し、魔獣と呼ばれる獣を倒している内に、己の力がどんどん弱まっている事に気づいた。

「……………」

ここは異世界。

アルテナの加護もなければ、青き星のルシアとしての命令が、星に通用しない。

さらに青き星での結晶体の中にいない為、己の身体は歳を重ねるようになってしまう。

青き星を司る者としての使命。

それは滅んだ青き星の再生。

その為には女神アルテナに会う必要がある、またその為には異世界から元の世界へと帰る必要があった。

そもそも大前提の話として、

「ゾファア……貴方は本当に滅んだのですか？」

一番の問題はそこだ。

確かにアルテナの光は直撃した。あれでは無事ではすまない。

だが『封印』もしていない。

もしかしたらルナの星に降り立ち、破壊の限りを尽くしているのかもしれない。

「まずはこの星を探り、異世界へ渡った原因と、青き星への帰り方を探さなくては」

青き星やルナであれば星が回答を教えてくれる。だがここではそれは無理だ。

面倒だが、今後は自力で探し回らなくてはならない。

この広大な空の下で、どこまでも。

砂浜に、一つずつ、確かに足跡を残して歩き出した。

第2話 歩き出した少年（後書き）

ルシアに仲間はいません。

それを苦にもしません。なぜならそれが理解できないからです。

第3話 マリアベルのお説教

異邦人ルシアはボースに向かう街道を南下していた。

看板の文字を読もうにもなんて書いてあるか分からないので、何かがあるらしき方向へ歩くだけだ。

よって暫くは彷徨い続け、夜も野宿だった。

魔獣がいるのに危なくないかと疑問が湧くが、彼は気にせず眠り、襲われたら戦うという流れだった。

さて、この世界には手配魔獣という桁違いの強さを誇る魔獣もいる。その強さもピンキリだが、中には遊撃士でも高ランクの者たちが4人がかりでも苦戦、もしくは敗北する相手すら存在する。

つまり、人々にとっては街の外に出れば危険極まりなく、また軍人でも遊撃士でも、気が抜けないということだ。

ところで、そんな危ない道を5歳にも満たない子供が一人で歩いていて、通り過ぎる人が不審に思わない訳があるのか。

そう。

つまりどうなるかといえば。

「おい坊主。もう少しでボースに着くからな」

「……………」

「まったく。なんとか言えつつーんだ」

旅の商人だという男が馬車の中にいるルシアに文句を吐いていた。野道を歩いてきた子供がいて、危ないからと馬車に乗せてみれば、無口で何も喋らない薄気味悪い子供だった。瞳もどこか焦点があつていないように思える。

商人は、妙なガキを乗せちまったぜ、と自分の親切心を後悔した。

するとルシアが男の問いに答えず、こう問うた。

「女神アルテナを知っていますか？」

「ん？ 女神……アルテナ？」

「はい」

「アルテナなんて聞いたことねえな。というか、我らの女神はエイドスだろ」

「エイドス………そうですか」

「アルテナって何だ？」

「……………」

「何なんだいったい。そんな事も知らないなんて気味の悪いガキだな」

誰もが生まれたら最初に教わる女神エイドスの存在。それを知らない子供。

再び黙りこむルシアに商人の男は思わず毒吐いていた。

こうして沈黙したままボースに到着すると、ルシアは馬車から降り、スタスタと街中へ進んでいく。

「おい坊主！ おめえ礼も云えないのか！ それにボースでいいのかよ！」

（礼とは………なんでしょうか）

と商人の男が言っていたが、ルシアは全く分かっていなかった。そのまま街を歩いていると、宿泊施設の前にやってきた。

「？」

この建物が何なのかよく理解できず、不気味なほど見詰める。するとホテルの最上階、宿屋の最高級と言われている部屋のベランダから、1人の女の子が顔を出していた。彼女はルシアのように幼い女の子だった。特徴的な金髪縦ロールヘアのツインテールは彼女のお気に入りの髪型だ。

名を、『マリアベル・クロイス』という。

(あの子、なにしてるのかしら?)

宿屋の前で看板をジッと見つめるルシアを見つけて不思議そうに首を傾げた。

「おや、どうしたんだいベル」

「おとうさま！ へんな子がいるの！」

「変？」

愛娘の言葉に眉を寄せる男性。

名を『ディーター・クロイツ』と言い、自治州クロスベルに本社を構える巨大企業の総責任者にして総裁を勤める若きカリスマどあつた。

彼が何故リベールの地方都市にいるのか。それはグループの新規事業のネタ探し、を含めた息抜き観光だった。

普段が忙しいため、愛娘とのふれあいが無い。それが嫌でしよつがなかったので、この機会にという感じだ。

まあ、タイミングを間違えてしまい戦争に巻き込まれてしまったのだが、『そういうタイミング』だからこそ見えるものもある。そう考えたディーターだった。

ようやく戦争が終わって一段落かと思つたが、そうは問屋が卸さないらしい。

ボディーガードの者が素早くマリアベルを部屋へと入れ、ディーターは窓からこっそりと伺う。

(成る程。確かに妙な子だ。暗殺者や何かかと思ったが、それならこんなに堂々と街中を、あんな目立つ服装で歩くはずはない)

終戦になったばかりのリベールにおいて、戦後の復興作業で慌ただしいとはいえ、あんなにも怪しいスタイルは悪い意味で目立つ。

そんな事を考えていたディーターだが、少年の背後にやってきたガラの悪い男に絡まれ始めたのを見て息を飲んだ。

おいはぎだ。戦後間もなければ治安は悪く、これはおかしくない事態だった。

しばらく男が喚んでいるようだったが、何やら悪い方へ事態は進んでいるらしい。

男が懐からナイフのようなものを出して、周囲に見えないように脅していた。自分が見えたのは一重に上からという角度の問題だった。

ディーターは「しまった!」と思わず叫ぶ。

こんな所で様子を見ていた為、子供が1人危険な目に遭っている。自分の失態に後悔し、ボディーガードに助けるよう命令しようとした瞬間だった。

「あの子を保護する!ここに連れてくるんだ!」

「暫くはここに身を潜めておくんだ。ここなら警備隊や軍の目を誤魔化せるだろう」

「……………」

抵抗もしくは警戒されるかと思ったディーターだったが、呆気なく従い目の前に座った少年におかしさを感じていた。

自分の立場故に少しばかり神経質になっていたらしい。

反省しなくちゃなと自分を叱り、目の前の少年を見遣った。

「さつきは大丈夫だったかい？ 戦争は終わったとはいえ治安はまだまだどこも悪い。極力外出は避けるか、1人で行るのは止めた方が良いんだよ」

「……………」

「ああ、何か飲み物を出そう。君、ココアを」

何も喋らない少年に対し、ディーターは近くのボディーガードにアイスココアを持って来させた。

その前にと、隣を見ると娘が目を輝かせて少年を観察していた。気が強く、好奇心旺盛な娘だと思っていたが、この『風変りな男の子』に興味を持つとは、とディーターは少し頭が痛くなった。

氷が入った冷たいココアが出来上がり、少年の前に置かれた。

少年は穴が空くんじやないかと思う程ジツと、ココアを見つめていた。

「ほら、好きに飲みなさい。落ち着くだろう」

「……………」

「どうしたんだい？」

「……………これは何です？」

「なに？」

「あなた、そんなことも知らないんですの？」

マリABELが「私がおしえてさしあげますわ」と胸を張って説明しはじめた。

ディーターはここで勘違いに気付いた。

ココアを見詰めていたのは、最初は毒などを警戒しているのかと思った。だが違った。あれは初めて見るものに対する観察だったのだ、と。

「美味しいから飲んでみなさい。きつと気に入るだろう」

「……………」

ルシアはココアを手に取り、ジッとココアを見詰め、そして口につけた。

無感情だった瞳が、本当に極僅かに、百戦錬磨の選眼を持つIB
C 総裁の目でギリギリ気付くくらいの、小さな変化を見た。

「……………」

「ふむ。気に入ってくれたようだなによりだ。ところで聞いてもいいかい？」

「……………」

「ありがとう。で、下で何をしていたんだい？ ご両親は？」

「……………」 両親とはなんでしょう？」

「はあ！？ あなた、バカにしているのですか！」

ルシアの言葉にいきり立つマリABELだが、ディーターはマリABELの前に手を翳す事で彼女を黙らせた。

その一言で『おおよその事情』を何となく察した。

「両親とは、自分を生んでくれた親の事だが……まあ、いい。それ

で、君は何をしてたんだい？ いや、何をしようとしてるのかな？」

「……………女神アルテナに遭わなくてはなりません」

「ふむ……………聞いた事ないな。エイドスではなく、アルテナか」

ディーターの言葉にルシアは目を伏せた。まるで無駄な時間を過ごしてしまったと、云わんばかりの振る舞い。

マリABELはそんな態度にムツときたが、父が自分に許してないので、迂闊に発言できなかった。それは、幼いながらもIBC総裁の娘という、特殊な立場が彼女をそうさせていた。

ルシアは立ち上がり、去ろうとした。

しかしディーターはそんな彼へ助言をした。

「そのアルテナというのは分からないが……………」

「……………」
「この世界には、まだ人々が知らぬものがたくさん眠っているはずだ。そこを回るには、立場や金銭的な問題も発生する」

「……………」
「君に、それができるのかい？」

「……………できるできないではありません。それが義務です」

「ふむ」

「どうやら、自分の想像以上に訳の解らない存在らしい。その程度には理解した。」

ディーターは本来なら保護し、慈しみ、導かねばならない存在に對し、『ほぼ対等の存在』のように相手に話していた。

「ならば、君は『遊撃士』になるのがいいだろう」

「遊撃士？」

「ああ。彼らは市井の味方であり、弱者の味方であり、正義の味方

だ。依頼があれば世界を回り、さまざまな遺跡や建造物に入ったりもできる。貴重な文献も目にする機会もあるだろう」

「……………」
「もつとも、まだ君の年齢では門前払いを喰らうだろう。ある程度の実力も必要だし、遊撃士にいきなりなれるものでもない。だが記憶の片隅に留めておくといい」

なるほど、とルシアは思った。

目の前の人間は事情を全く知らないにも関わらずに適切な助言をする、と驚嘆した。

「君が望むなら、私が責任をもって君の身を保障しよう。しかるべき所に紹介し、施設に住めるように頼むこともできる。クロスベル自治州のIBCビル本社に来てくれればいつでも歓迎しよう」

「…………… 必要ありません」

「…………… そうか」

やはり、と心で呟く。

目の前の少年は只者ではない。それをディーターは察していた。知っていて当たり前的事を知らないこと、知らなさすぎる事、座っているだけでも伝わってくる雰囲気、普通の子供がこんな事になる筈がなかった。

ルシアが去ろうと扉の前に移動した。ディーターも見送るために後を追いつ、娘のマリアベルも付いてくる。ディーターは少年に声をかけるか迷う。

この少年に関わるべきではない、何を言っても今は伝わらない、そう勘が告げていた。

だが。

「ちょっとあなた」
「……………」

振り返ったルシアに、びっくりした顔を向けてきている父親を無視してマリABELは言った。

「食べ物を食べるときは、いただきます。食べ終わったら、ごちそうさまでしょう。それくらい知っておきなさい！」

「……………」
「分かりまして!?!」

ドーンと指を指して言う娘にディーターは呆気にとられ、ルシアは真つ暗な瞳でマリABELを見た。

「……………」 わかりました」
「それでいいのです。それに！ またいつか会いましょうね！」
「……………」
「そこは背きなさいよ！ って………… ああ、もう！ 私はマリABEL・クロイツ。あなたは!?!」
「……………」

逆ギレ気味に怒鳴るマリABELを一瞥し、ルシアは扉を開けた。
そして扉が閉まる寸前。

「私は、青き星のルシア」

そう言ったのだった。

第3話 マリアベルのお説教（後書き）

何故か彼女が真っ先に登場してしまった……（笑）

それに総裁ってゲーム本編、かつこよすぎですよね。あの名セリフもよかった。

ちなみに、ルシアに遊撃士フラグが立ちましたが……さて、どうなるのでしょうか。

第4話 歌という魔法

ブレイサーギルド
遊撃士協会

民間人の安全と地域の平和を守ることを第一の目的とし、魔獣退治・犯罪防止に従事する遊撃士ブレイサーの、管理・派遣といった取りまとめを行う組織の名称。

時には国家間交渉の仲介役を担うなど中立的な側面を持ち、ゼムリア大陸各地に支部が存在する。

リベール国内においては五大都市に支部が配置されている。

遊撃士は、まず見習いである準遊撃士となり、リベール国内においては、各都市にある支部から与えられる仕事をこなし、各支部から正遊撃士資格の推薦状を貰う事で正式に任命される。正遊撃士はその人格・実績に応じてAからGの7階級に区分されているが、停戦などの国家間交渉を担う関係上、上位の正遊撃士にはある程度の外交術が要求される。そして最上位のA級でも20数名しかいない。

「……………」

と、仕入れた情報を頭の中で纏めるルシア。

遊撃士という存在がどのような存在なのか、ようやく輪郭がつかめていた。

「…………でも年齢が足りません」

明確な年齢基準がないが、それでも15歳前後が普通のように、自分では背丈が足りない。

「幻影の魔法があればいいのですが……………」

ボースの遊撃士協会の前でそんな事をぶつぶつ呟くルシア。
その時期まで待つのではなく、どうやら魔法で詐称しようとする
辺り、彼はまだそこら辺の機微が分かっていたいなかった。

実際に身体を大きく見せる幻影の魔法もあるのだが、弱体化して
いる今、アルテナの力が自然回復するまで待つしかなく、常時展開
しなくてはならないような事は避けたい。

従って、データー・クロイスが教えてくれた「遊撃士になる」
というのは当分の間は却下だ。

それからルシアは、街道へと出て遺跡周りを決めた。データー
は遺跡に入るには許可が必要であると言ったが、それを気にしては
いなかった。

何故なら彼は、正面以外からでも入れればいいと考えていたから
だった。

遺跡保護や文化財の破損禁止など彼の範疇にはなかった。

人に聞けば、近くに洞窟や灯台があるらしい。

何かあるかもしれない。そう思ったルシアだが、彼は近くの農
村に立ち寄った。ここでも帰還の為の重要な情報が聞けるかもと思
ったからだ。

農村は小さなもので、百人ほどしかない。

近くにいた中年の女性に尋ねようと近づくと、その人はルシアを
見て駆け寄ってきた。

「ちょっと、そのボク。悪いんだけど、暫くこの子見といてくれ
ない？」

「え？」

そう言って押し付けてくるのは、背負っていた赤ん坊だった。

「漁に出てた男どもが突然帰ってきたみたいだね。戦後って事もあって張り切ってたみたいだけど、予想以上に大漁だったみたいでさ。人手が必要なんだよ」

そう言って女性は走って行ってしまった。

余程焦っていたのか、眠っていた赤ん坊を起こす程揺らしてしまっていた。

「……………」

「だぁ……………うう？」

困りましたと呟く。

何をどうすればいいのかさっぱり分からない。

「うう……………ふええ」

じわりと赤ん坊の目から涙が溢れ初め、

「オギャアアアアア！」

激しく鳴き始めた。

「あ、あの、泣き止んで下さい」

「オギャアアアアア！」

「困りました。眠りの魔法を使えばいいのでしょうか」

途方にくれるルシア。いくらお願いしても泣き止まない赤ん坊にどうしていいか分からない。

泣き喚く赤ん坊と立ち尽くす少年。何とも滑稽な感じだが、暫く経つと先程の女性が戻ってきた。

「あらあら、こんなに泣いちゃって。坊やには難しかったかねえ」
「……いくらお願いしても泣き止まないの」
「ハッハッハ！ それじゃあ駄目さ。いいかい、よく見ておきな」

そう言っただけで女性は子供を抱え、ゆっくりあやしなから、歌を紡いだ。

「ラ〜ララララ〜ラララ〜ラララ」

その女性が歌いながら微笑むと、不思議なことに赤ん坊が静かになり、うとうとし始めた。

そしてゆっくりと目を瞑り、母の腕の中で幸せそうに眠りに入っただった。

「ね。こうすればいいのさ」

「それは魔法ですか？ 聞いた事がない魔法ですが」

「嫌だね、何言ってるんだい。普通の子守唄じゃないか」

「子守唄？」

「そう。あんたも赤ん坊の時はお母さんにこうして貰ったんだよ」

「そして子守唄は誰もが使える歌の一つじゃないか」

「誰もが使える……………」

歌とは不思議な魔法だとルシアは思った。自分に出来なかった事を果たした年配の女性。

しかもそれを自分も体験したことがあるらしい。

あのような、誰かの腕の中に収まってしまっ程の大きさの自分。それを昔に。

『ル　　のかい？』

『ええ。この子ったら

のにね』

向かい合う男と女。

女性儂く微笑み、激しい閃光と共に赤ん坊になった。

赤子は成長し、見目麗しい、一人の女性が髪をなびかせて微笑んで。
。

「 や、坊や大丈夫かい？」

「 え、ええ。大丈夫です」

ルシアは頭を振って平気だと答えた。

それからルシアは村の人に遺跡などを聞いて回り、特に収穫がないまま、村を出た。

頭にこびりついた、赤ん坊と母親の顔を忘れる為のような、早歩きで。

けれど腕にはしっかりと温もりが残っていた。

霧降り峡谷・廃坑などを調べて回ったルシア。

「 ……ダメですね」

帰還方法などある訳もなく、ただ魔獣を倒して回っただけだった。

己の手にある一振りの剣を見る。

望むとソコに現れた、荘厳な剣。
結局ゾファーとの戦いで使わなかったが、間違いなく自分の武器
となっていたその剣。

その名を『アルテナの剣』 通称、ドラゴンマスターの剣。

ドラゴンマスターと龍、作り主にしか使えないと言われた剣。
自分が使えるのは、青き星の御子だから。

「これがあつて助かりました……………しかし、私は剣術をどこで…
…」

記憶に靄がかかっているようで、全く思いだせない。
だが確実に誰かに教わっていた。半端な力しかないこの身でも、
効率よく使えた。

「お…………い坊主…………！ 無事だったのか！」

「…………先ほどの」

やって来たのは、廃坑の作業員だった。

1人止める間もなく奥へと入って行ったルシアを探しに来たよう
だ。

「ここに来るまでの魔獣の死骸を見たが…………坊主、強いんだな。驚
いたぞ！」

「……………」
「つと、ゆつくりしてる場合じゃない。手配魔獣が現れたんだ！」

「？」

「ケタ違いの魔獣だな。C級遊撃士ですら敵わず今まで放置されて
いた魔獣が、この洞窟に入り込んだんだ！ 他の鉱員は逃げたから、

俺たちも早く逃げるぞ！」

作業員に連れられて走り、運良く魔獣に遭わずに出口まで戻ってきた。

だが、入口付近に居座るようにそいつはいた。

2メートルは超える巨体に幅も人間3人分はある。

全身から棘のようなものを出し、ケロイド状になった部位は正直気持ち悪い。

そう。それは、かつて青き星をゾファアが侵略した際に、青き星の住人が生ける死体と化した状態に似ていた。

勿論ゾファアとは関係ないのだが、容姿がそれを連想させた。

「……………」
「ど、どうすりゃあ……………」

思わず後退りする作業員。

するとルシアが手の平を向け、青い光を収束し始めた。

アルテナの剣を使わないのは、ただ早くその目ざわりな姿を消し去りたかったからだ。

そして剣では仕留めるのに時間がかかる、そう判断してのことだった。

それを見た作業員は慌ててルシアを留める。

「ま、待て！ こんなところでアーツなんか使ったら崩落する！」
「……………」

「俺たちの仕事場なんだ！ それにここが埋まったらしばらくロレントとボースの行き来が不便に」

「関係ありません」

作業員の言葉を切って捨て、そしてそれは放たれた。

「
スパークキャノン」

百日戦役終結から2週間。

夕暮れ時に起こったボース郊外の廃坑は、突如入口が崩落し、1人の男性鉱員が怪我を負った。

軍が事情聴取をした結果、5歳程度の子供がアーツを放ったのが原因と証言があり、それを軍は一笑に伏した。

そもそも子供がアーツを使える筈がない事。そしてあまりにも馬鹿げた威力だったので、アーツにできる範囲を超えていた為だった。

その結果、魔獣は崩落により潰されて死亡とされ、坑道の復興に時間を割かれたのであった。

幸いにも男性鉱員の怪我は大したものではなく、およそ1週間の自宅療養で済んだのだった。

第4話 歌という魔法（後書き）

ルシアの所為で怪我人が出ました。
そして記憶の中の人物たち。ルシアとどんな関係があるのでしょうか。

第5話 狙われ始めた少年

あれから

百日戦役から半年が経過した。

リベール王国は戦争前の活気を取り戻し、復興の兆しを見せ始めた。

「何？ 各地の魔獣が……？」

リベール王国。王都グランセル。

そのグランセルにある、遊撃士協会『グランセル支部』

受け付けにて、遊撃士訓練を異例の速度で終え、準遊撃士として各支部に旅立とうとしていた男がいた。

その男の名を『カシウス・ブライト』と云う。

リベールにおいて正遊撃士になる為には、この地方では異例の各支部を周り、推薦状を貰うと正遊撃士へと昇格できる。

戦闘力、問題への対応力、判断力、解決手腕。

それらを総合的に見て、問題なしと認められれば正遊撃士へと昇進できるのだ。

元々『剣聖』として有名であり、軍部の大佐として名を馳せたカシウスは既に遊撃士協会でも有名であり期待の遊撃士だ。いや、既に中心物の1人として見られていると言っている。

つまりカシウスが正遊撃士になるのも時間の問題だった。

レナ・ブライトの定期健診が終わり、カシウス自身も依頼を終えてグランセル支部の推薦状を受け取った時の事だった。受付にて雑

談を交わし、レナとエステルも挨拶をした後、耳より情報で受け付け人である年配の男性が言ったのだった。

「そうなんじゃ。ここリベールのみならずカルバート、エレボニアの各地で手配魔獣が次々と仕留められておるそうじゃ」

「それは良い事ではないのですか？」

「ねー、なんのお話……？」

「いや、問題はそこではないのだレナ。おそらく遊撃士の手ではないのだろう？　そして軍の手でもない」

「その通りじゃ」

遊撃士協会の元に討伐依頼がある手配魔獣。それが遊撃士の手で討伐されていないという。

討伐できないほど手ごわいから遊撃士協会に依頼が来るのに、遊撃士以外の人物が倒しているというのは本末転倒な話だった。

ちなみにエステルは相手にされず不貞腐れた。

「依頼人は魔獣を倒した人物の事を知らないの？」

「うむ。それなんだが……全身を黒ずくめで覆った、小さな子供らしくてな」

「……………は？」

「いや、私もその話を聞いて疑ったんだが、どうやら魔獣の噂を尋ねてきた子がいるらしくてな。対峙する代わりに報酬をくれと言ったらしい」

「なんと……………」

「まあ」

「依頼人も子供が勝てる訳がないと止めようとするんだが、無口であまり喋らず、さつさと先へ行ってしまいうらしくてのお。そうこうしている内に強力なアーツと剣術を駆使して勝ってしまうらしい」

「外見や他の情報は？」

「身長は110センチほどで男。その少年は青い髪をしているそう
で『何でも屋兼考古学者』を名乗っているそうだ」

「青髪の少年……」

お爺さんの言葉にレナとカシウスは『まさか……』と目で会話を
する。

余りにも馬鹿げた予想だが、こういった直感には存外馬鹿にでき
ないと知っていた。

いかんせん知っている服装は違うが、あれから半年も経っている
のだから違つて当たり前だ。

「早期解決は遊撃士協会の理念、民間人の人命の保護という点から
すれば望む所、といたい所じゃが」

「ええ。ですがその少年の命を守る事も、遊撃士の使命だ」

「じゃが怪我人も出ているようだな。その少年は如何せん心の機
微を察するのに欠けているようだな。まあ子供だからといえばそれ
までなんじゃが、少年の所為で怪我をする者も出ているようじゃし」

「そういつた事を教えるのも大人の役目ですが、彼の傍には大人が
いないのでしょうか」

「かもしれぬな。それに正式な立場が人を守ることもある。その少
年の事情を知り、なるべくなら手助けをしたいところじゃな」

「はい。私も各地をこれから回ります。それとなく気をつけておき
ますので」

「うむ。よろしくの」

カシウスとレナは顔を見合わせ肯き合い、エステルは不貞腐れて
いた。

「お腹が減りました……」

グー、と特大の音が空しく辺りに響いた。

通常の人間の体質になったルシアに起こった問題は、空腹という名の問題だった。

野草や木の実、川の魚を集めて食べるのも良いが、やはり毎日食べれるというものではない。

よって食料調達する訳だが、ミラというお金がない。

そこで思いついたのは、なんちゃって遊撃士の仕事だった。適度に問題を見つけて解決し、お金を貰って行く。

村で子供たちがやっていた『遊撃士ごっこ』を参考に思いついたのだ。

だが身入りは少なく、汚れた服も購入した服2着を着まわすだけで精いっぱいだった。

現在の場所は、エレボニア帝国郊外の森の中。

剣の稽古をしながら旅を続け、各地の遺跡を回った半年だが……

（どうやら大陸東部にはないようですね……）

エレボニア・リベール・カルバート等、どれもが国が管理しているものばかりで、これといって真新しい遺跡はなかった。

となると、次に向かうのは。

「……クロスベル自治州」

エレボニア・カルバートの両国が熾烈な争いを続ける領土で、現在も緊張状態にあるという特殊な事情のある土地。

二国家が争う土地であるが故に、未だに放置されている遺跡が数多く眠っているらしい。

そこに、きつと自分が望む何かがある。

そうルシアは確信していた。

その瞬間だった。

背後に何者かが現れたのは。

ルシアはアルテナの剣ではなく、購入したロングソードを手に立ち上がり、それを睨みつけた。

「……何者です」

「……」

現れたのは全身をフードで覆った、仮面の人物だった。

それが2人。

前方と背後に立つ2人に、ルシアは警戒するように剣を抜いた。

「抵抗はするな。君を良い所へ連れて行ってあげよう」

「他にも同じような年齢の子供たちが大勢いる。友達がいつぱいだ」

サツと仮面の2人が動いた。木を蹴り、目を見張る身のこなしで迫る。

ルシアは敢えて前方の男へと肉薄し、剣を振るう。

「……………っ！」

「シッ！」

ルシアが剣を持っていた事により、仮面の男も懐からナイフを取り出し、両者の剣撃が重なり合う。

背後からの男からの攻撃を『フォースシールド』を発動する事で防ぐ。

背後の男が、見えない壁により自分の攻撃が防がれた事に動揺する気配を見せた。

だが拮抗したと思われた刃同士は一方的に押され始め、ルシアは後方の木へと叩きつけられる。

「カハッ！」

衝撃に息が詰まり、痛みに眉を顰める。

地面に片膝を付き痛みを堪えて仮面の男2人を警戒した。

（腕力も身体能力も間合いも、こちらが下回っていますね……）

男たちはナイフに液体を掛け、こちらに歩み寄る。おそらくは痺れ薬か睡眠薬の何かか。

盾で弾かれた事でプライドを刺激されたのか、片方の男がいきなり加速し、ルシアへと襲いかかった。

（接近戦ではまだ勝てない。なら……）

ルシアはギリギリまで視て横飛びで地面に転がり、片手を振り上げ呪文を唱えた。

「フリーズアロウ！」

頭上に出現した5つの50センチほどの矢は、回転しながら男へと迫り。

「ガアアアアア！」

避ける事は叶わず、仮面の男へと次々と直撃し絶命させた。

「チイツ……………！」

「はぁ……………はぁ……………」

舌打ちした男はルシアから距離をとった。

ルシアは荒れる息を整え、仮面の男を警戒する。

男はやられた仲間の死体に近寄り、肩へと背負う。

「……………」

「……………」

無口同士の2人は、お互いに声を発しないまま森の闇へと消えていった。

「あれは一体……………私を狙うなど、ゾファアの手先しか考えられないのですが」

妙な相手に襲われたと首を捻ったルシア。

襲われた事を、自分が狙われたと自覚するくらいには半年で成長したルシアであった。

（覚えておきましょう。仮面に全身を隠した特徴的な人間。恐らく

は私の敵)

自分の帰還の妨げとなると認識したルシアは彼らの特徴を脳裏に刻む。

こうして、ルシアは向かった。

魔都といわれた、クロスベルへ。

第5話 狙われ始めた少年（後書き）

2人しかいなかった為、なんとか撃退。

近接戦闘では今は敵わないが、それでも『魔法攻撃』ならば彼の右に出るものはいません。しかし威力は全盛期の10%にも満たない状態です。

第6話 来訪、クロスベル

「何？ 失敗？」

「はい。どうやら一組失敗したそうです」

「それは驚きました。護衛でもいたのですか？」

「いえ。どうやらかなりの力をもったアーツを使う少年のよう
「ほう……………」

机の前に座る1人の男と、その前に立つ1人の男。

手元の資料を読み、男たちは口元を歪めて密談を重ねていた。

「気になりますね、この少年」

「実力が、ですか？」

「分かっているのでしょうか？ この子は一体どれほどの
ふふふ」

「分かりました。では重点的にこの少年を狙いましょう」

アアアアアアア！

男たちの部屋に聞こえてくるのは、悲鳴。

幼い声の断末魔。

「今日も不作のようですね」

「……………申し訳ありません」

「良いのですよ。見つかるまで、連れてくればいい」

男が手元にあったボタンを押し、開いた窓から『ソレ』を見下ろ
した。

そこに広がっていたのは、幾多の子供たちの、分解された遺体の

空を飛ぶ。

「ここが……クロスベル自治州」

上空500メートルの高さまで飛んだルシアは、その高みから見下ろす。

リベールなどに比べると、圧倒的に技術が進んだ街並み。

あちこちで工事が行われていたり、中途半端に完成したビル姿が見えることなど、未だにこの街は未完成なのだと思えることができる。

ルシアはコクンと頷くと、クロスベルの南東の一角へと飛んだ。

「オラア！」

「死ねえ！」

物騒な言葉が飛び交い、激しい殴打の音と共に囃したてる声や悲鳴も上がる。

そこは、クロスベル自治州の中でも旧市街と呼ばれるエリア。

完全に無法地帯と化しており、警察もこのエリアには積極的に関わろうとはしない。

故に喧嘩は日常茶飯事であり、犯罪も多発。他に類を見ないほど治安が悪いエリアであった。

そして今日も、肩が当たったからという些細な争いから始まった喧嘩だったが、今日はいつもとは少し違っていた。

「おら、お前ら！ また喧嘩か！」

「げっ。変わり者のセルゲイだ」

「やべえ、ズラかれ！」

そこにやってきたのは20代後半の男性。スーツにコートを着用し煙草を吹かしている男性。

セルゲイ・ロウと呼ばれる彼は、このクロスベル自治州の警察官だ。

凄腕の優秀な捜査官だが、アクが強すぎるので上司や上層部から煙たがれており、いつも貧乏クジを弾かされている男性だ。

そして彼は腕っ節も強い。

様々な理由から見放されている旧市街にも、彼はたまに顔をだし、こうして目を光らせていた。

野次馬だった連中はセルゲイの姿を見ると逃げ出すように散っていく。

だが当事者たちは腕自慢でもあり、興奮状態でもあるが故にセルゲイの介入は苛立たせただけだった。

彼らは隠してあったナイフや鉄パイプ、ナックルなどを取り出し、セルゲイに相対する。

「ぶっ殺すぞ、セルゲイ！」

「あゝゝゝ、やめようぜお前ら。その気力をもっと違う事に使ってくれりゃ、俺も楽なんだが」

「うるせえ！」

セルゲイのやる気のないというか、馬鹿にした態度にさらに腹を立てた男たちは一斉に飛びかかろうとした。

セルゲイも一瞬で目を細め、彼らの動きに警戒する。

その瞬間だった。

ドンっ！！

「……………失礼」

空から降ってきた「何か」に男たちが轢かれ弾き飛ばされ、砂塵を巻き起こす。

そして抑揚のない声で小さく発せられた、幼い声。

「は？」

セルゲイは訳の解らない事態にタバコをポロリと落として呆気にとられてしまった。

「そうか。リベールから」

「……………最後にいたのはエレボニアですが」

あれから30分後、彼らはクロスベル自治州の中にある喫茶店にいた。

ルシアに弾き飛ばされた不良の一団は目を回して気絶してしまい、結局セルゲイは苦勞せずに鎮圧できてしまったのだ。

肩すかしを喰らったセルゲイは、とりあえず近隣の住人の安否を気遣って周り、結果的にルシアに助けってもらった事などを踏まえてお礼のご馳走をしていたのだ。

まあ、早朝という事もあり、自分の朝食も兼用していたのだが。

「そいつは大変だな坊主。いろんな遺跡を見る為にそんな歳から」
「……………」

事情を聴きだすのに数十分、単語を理解するのに数分という無駄に時間がかかるこの対話に、普通なら頭痛がするような所だが、セルゲイは飄々としていた。

ルシアが何故空から降ってきたのか、そもそもどうやって空から降ってきたのか、どうして怪我ひとつしていないのか、など疑問があるはずなのだが彼は一切聞いてこない。

「それでどうするんだ？　これから」

「……………クロスベル近辺の遺跡を回ります」

「泊るところはあるのか？」

「……………外で眠ります。この1年で慣れましたので」

「おいおい」

あっさりというルシアに、流石のセルゲイも突っ込んだ。

「一応、施設もあるんだぞ。行く当てがないんなら『七耀協会』でもいいし、孤児院もある」
「必要性を感じません」

そう言って席を立つルシアに、セルゲイは溜息を吐いた。

加えていた煙草の灰を灰皿に落とし、そして言った。

「もし宿に困るようなことがあれば、ここに来い。俺の家を宿代わりに使え」

「……………」

そうやって、名刺をルシアのポケットに無理やり突っ込む。

ルシアはそれを手に取りジッと見詰め、セルゲイに振り返った。

「なぜ？」

「あゝ、まあ、そういう奴もいるってことだ」

「……………」

ルシアはもう一度名刺を見て、そして何も言わずに喫茶店を後にした。

出て行ったルシアを見て、セルゲイは一言呟く。

「とんでもない子供だな……………」

ポツリと呟いたセルゲイ。

今までグツと握りしめていた手には、脂汗が滲み出ていた。

後に、セルゲイはこの時の自分の思いつきの判断は間違っていたなかつたと、そう言った。

「ここが、七耀協会……………」

その日の晩、七耀協会をルシアは訪れていた。外が雨という理由もあり、屋根があるところを探していたのだが、ちょうどセルゲイの言葉を思い出し、まだ行った事がない事もあり、訪れてみる事にしたのだ。

「……………」

街はずれの階段を上がると、荘厳とでもいうべき協会が見える。思わず青き星にいた時の自分の住み家を思い出すが、あっちの方がもうちよつと無機質であった。

ここは、人が住む匂いがする。

ルシアは扉の前に立ち、ドアをノックした。

「はいはい、こんな遅くにどなた？」

「……………」泊させて欲しいのですが」

「あらあら、まあ」

扉を開けた先にいたのは、高齢のシスターであった。

夜も暮れた遅くに協会を訪れたのが、あまりにも幼い子供であったのでシスターも驚いたのか、目を丸くしていた。

「どうぞ中にお入りなさい。雨はこれから強くなりそうですから」
「……………」

中に入り、シスターの個室らしき場所へ通されると、変わりの着替えを渡された。

ルシアはそれに着替えて居間に戻ると、自分の服が暖炉の傍で乾かされ、机の上にはホットミルクが置かれていた。シスターはそれ

をニコニコと微笑みながら勧めてくる。

「どうぞ、これを飲んで温まってね」

「……………」

受け取り、一口飲む。

温かい、そう呟いた。

「そうそう。今日はそのこのベッドを使いなさいな。私はこちらの布団を使いますから」

「……………」

コクンと頷くと、シスターは笑みを深くし、ルシアの頭を撫でた。

「明日はどうするのかしら?」

「…………… 近辺の遺跡を周ります」

「まあ……………！ 魔獣も出て危ないでしょうに」

「問題ありません」

シスターは止めるように勧めてくるが、ルシアもそこは譲らない。一方でシスターは、このルシアのあまりにも常識が備わっていない素振りに不安を感じていた。

(この子は普通の子とは違う……………この小さな身体から発せられる気。明らかに普通ではないわ。恐らくそれが原因でこの子はたった独りなのね)

いつもなら迂闊な想像や邪推もしないシスターだが、ルシアの振る舞いにどうしても嫌な想像しかできなかつた。

「そう………なら、遺跡の調査が終わったなら、またここに戻ってくるのですよ」

「………一か所に留まる必要はありませんが」

「何事も心にゆとりを持たねばなりません。急いた心は余裕を無くし、視野を狭めます」

「………」

「そして私と貴方の出会いは、きっと女神エイドスのお導きでしょう。何かしらの意味があるはずです」

「女神エイドス………それは女神アルテナではないのですね？」

その言葉に、空気が凍った。

「な、何を言っているのです。我らの女神は女神エイドスですよ。それは貴方も教わったはずですよ」

「………」

「いいですね？ 2度と女神エイドスの名を間違えたりしてはいけません。それが協会の耳に入れば、貴方は最悪、異端審問をかけられ、その身を追われるかもしれませんよ！」

「………」

「分かりましたか！？」

「………分かりました」

シスターの剣幕に押され、ルシアは思わず肯く。

額の汗を拭く仕草をしたシスターは安心したように頷き、飲み干したコップを片付けた。

（名前を間違えたくらいで異端審問………つまり肅清ですか。どうやらこの世界の女神は余程、器が狭いとようです）

人間の暴走という線も否定できないが、それを放置しているのな

らば女神も同罪だ。

ルナの人々は女神アルテナに対して尊敬し崇拝していたが、同時に否定する人間に対しても公正だった。

まあ、アルテナを否定する人間などそうはいなかったのだが、それでもアルテナはそれも人間の一部分だとそう考えていたようだ。

（って、待ちなさい。なぜ私が『アルテナの考え』を知っているのです。まだ遭っていないというのに）

ズキン、と強烈な痛みが走った。

こちらの世界に来てから、一番の痛み。

その痛みは激しさを増していく。

「……………」

「？ どうしました？ …………… って、大丈夫ですか!？」

シスターが慌ててこちらに駆けてくるが、対応できないほどの痛みが頭を襲っていた。

「……………」

自分は、何かを忘れている。

それを確信した瞬間、ルシアの意識は反転し、闇へと落ちて行った。

第6話 来訪、クロスベル（後書き）

セルゲイとの邂逅イベント。

そして協会でのイベント。

この出会いが、ルシアに大きな影響を与えます。
そろそろガイやセシルも登場するかも。

第7話 シスター・マーブル

『七耀暦1193年 春の刻』

今日、聖ウルスラ医科大学より定期健診から戻るとシスター・セレナが迎えたという少年に出会った。

その少年はルシアと云い、およそ6歳〜7歳程度。

私の教え子であるロイドやエリイたちとほぼ同じ歳か、2つくらいは下だと思われる。

エリイは早熟で賢い子だが、ルシアは『眩暈がした程に聡明な子』であった。

端々に見えるその頭脳の高さ、纏う空気。それらは特別性を感じさせた。

無理して大人ぶってる子供でもない、大人のように振舞っている子供でもない。

その早熟さは、嫌な言葉を使えば異常。

けれど私たちは彼を普通の子供として対応した。

彼、ルシアは毎朝早くに出かける。

そして夕方近くにこの教会へと帰ってくる。

全く感情を見せない彼に他の子供たちも気味悪がって近づこうとはしない。

だがその聡明さから、シスターたちは時折ルシアに手伝いを頼むこともあった。

常識の欠如から、最初は彼は全く役に立たなかったが、事務作業などはすぐに出来るようになる。

相手の気持ちを考えなくてはならない作業は、正直いつて彼は苦手のようだ。

私たちは彼、ルシアに何をしてあげられるだろうか。
あの子が、人間らしい感情を取り戻す手助けは出来るのだろうか？
せめて願わずにはいられない。

彼、ルシアに空の女神の御加護がありますようにと。

シス

ター・マーブルの日記より『

何時もより早く遺跡探索を終えて帰って来たらしいルシアは、頼まれた協会の庭先を掃除していた。

捨て子の1人を背負いながら、箒で掃除をしている。

「おぎやあああああ！」

「あ、どうしましょう………困りました」

揺れた事で起きたのか、赤ん坊が大泣きしてルシアは全く困った表情をしないで、赤ん坊を掲げて途方に暮れていた。

その様子に、忙しそうに働いていたシスター・セレナが慌てて駆け寄ろうとする。

それをマーブルは止めた。怪訝そうに尋ねてくるセレナ。

「どうしてです、シスター・マーブル」

「少し……様子を見ましょう」

「あの子は何もしらない子です。赤ん坊が泣いたまま何もできないでしょう！ まだ教えてないのですから」

「いえ……あれを」

マーブルが指した先では、赤ん坊の両脇に手を入れぶら下げるように掲げてたルシアが、ゆっくりと腕の中に抱き抱えるルシアの姿があった。

その姿に、思わず停止する。

「……………教えたのですか？」

「……………いいえ。私は何も」

どこかで知ったのだろうか。それとも誰かの真似をしているのだろうか。

しかし赤ん坊は泣きやまなかった。それはルシアの無表情さが原因だろう。

確かに正しい抱きかかえ方にはなつたが、赤ん坊は感覚が鋭い。ルシアの何も暖かみのない行為に赤ん坊は気付いたのだろうか。

「……………」

ルシアは目を瞑って何か考え込み、目を開く。するとゆっくりと、身体を左右に揺り動かし、リベール地方特有の子守唄を歌い始めた。

「ラ〜ララララ〜ラララ〜ラララ」

その歌声は、驚くほど透き通る声であった。

子供の声であるのに、協会中に浸透するかのよつな歌声。

その声は、まるで……………

「歌姫……………」

「……………姫という単語は相応しくありませんが……………それが正しい気がします」

あり得ない。

圧倒される。その声に。

赤ん坊は泣き止み、目をぱちくりとさせてルシアを凝視している。相変わらずの無表情。だがルシアは確かに歌っていた。

するとピタリと停止し、彼は頭を押さえた。

「ルシア！」

「ルシア！」

セレナとマーブルは顔を強張らせて声をあげた。

この子は突然、意識を失うほど強烈な頭痛を伴う時があるのだ。まるで発作。そう言わざるを得ない。

慌てて駆け寄ろうとした時だった。

発作が治まったように突如姿勢を正し、再び身体を揺れ動かす。大丈夫なのか、とセレナとマーブルが立ち止り様子を見ようとした時、その瞬間だった。

「ラ~~~~~~~~、ラララ~~~~。ラララ~~~~ラ~~~~ララ~~~~
~~~~~」

その歌は聴いたことがない曲だった。

だが彼の周りに小さな光が集まりだし、赤ん坊はゆっくりと気持ちよさそうに眠った。

光景は幻想的。

光は遊ぶようにルシアの周辺を回り出し、彼が立ち一部だけ天からスポットライトが当たるかのように明るく見える。



周りで遊んでいた子供たちも、協会の参拝客も、神父も、全員が彼に注目していた。

彼が歌い終わると、子供たちは今までとは打って変わってルシアへと駆け寄った。

「すげ〜〜〜〜〜！」

「アタシに歌って〜〜〜〜〜！」

「他にも他にも！」

一瞬にして大人気になってしまったらしい。

ルシアは驚いたようで呆然として子供たちを見詰めていた。

子供たちは彼に抱きついたり、纏わりついたり、手を握ったりしていた。

彼はそんな温もりを確かめるように、全ての者に目を向け、そしてそれを感じているようだった。

「今の歌って、なんていうの〜〜〜？」

一人の女の子がそう尋ねた。

それは自分たちも気になる、そうマールブルは思った。

ルシアは一旦目を伏せ、そして彼女に答えた。

「今の歌は……アルテナの歌、です」

「あるてな、ってなあに？」

「さて……何でしょうね？ 私も今、思いましたのです」

その瞬間の彼を、私は一生忘れることはないだろう。  
マールはそれを見たとき、そう確信した。

そして自然と涙が零れ落ち、口元が自然と微笑んでいた。  
何故そんなことになったかつて？

それは簡単。

「シスター・セレナっ！」

「ええ……ええ！」

お互いに顔を見合わせ、笑った。

「あの子が……ルシアが………笑ったわ！」

その笑顔は、まるで陽だまりのように美しい笑顔だった。

第7話 シスター・マーブル（後書き）

今回ののは、後への大きな伏線です。

## 第8話 過去と未来

七耀協会で行われている日曜学校とは、幼少の頃から大体15歳くらいまでの子供が通う、無償の学校のようなものだ。

何時来るのも自由であり、完全に任意制でもある。

故に毎日通う者もいれば、年齢を重ねれば重ねる程面倒臭がって通わない者もいる。

必然的に幼少組みが多くなる訳だが、ここクロスベルの日曜学校は意外と通う子供も多い。

クロスベル出身者でありクロスベル在住の者は基本的にこの日曜学校に通う。

先週、ひよんな事からその場にいた者には人気が出たルシア。

だが基本的に日中は留守にするのが当たり前で、日曜学校も基本的に夕方前には終わる。

つまり殆どの者とは会いもしなければ会話をする事もない。

そして一部の者に人気が出たとはいえ、会話も必要最低限しか行わない。

だが。

小さな変化は確かに出ていた。

「ご飯を食べるときは、いただきますっていうのよ」

「……………いただきます？」

「きみ、さっき言ってなかったでしょう！」

「……………それは言わなくてはいけないのですか？」

「何言ってるのよ。あたりまえでしょう」

「……………そうですか」

親の都合で夜まで残っていた、女の子の姉妹。

先週の騒動で、真つ先にルシアに近づいた子だった。

最初は尊敬の眼差しを向けたのだが、『ありがとう』『いただきます』『ごちそうさま』の言葉すら知らないルシアを見て、妹がいるその子はお姉さん風を吹かしたのだ。

その子の名前は『ノエル・シーカー』。妹の『フラン・シーカー』を面倒見る、しっかりものの女の子だった。

妹のフランはルシアがまだ苦手のように少し怯えているが、ノエルはルシアを友達になったと思っっているようで、お互いに会話が成立している（かなり一方的だが）のだった。

木製の机の上でスープやパンを食べながら話している2人と沈黙者1名。

その光景をニコニコと嬉しそうに見ていたマーブルだった。

（これが、命……）

赤ん坊を抱きながら、夕暮れ時の時間をルシアは過ごしていた。

遺跡探索が早く終わり、早くに帰宅するとシスター・マーブルに子供たちの面倒をお願いされた。

以前にあやした赤ん坊を抱き抱えながら砂場などで遊ぶ子供を見つめた。

(私は、確かにアルテナの歌を誰かに教わっていた。そして剣術も、  
武術も)

断片的に蘇る記憶の欠片。顔ははつきり思い出せないが、剣術や  
武術を身体が覚えていた。

きっとクリスタルの中で眠りについていて、前の話  
ゾファー復活により目覚め、対峙して滅びた青き星。

目覚めの前に、深い眠りについていて自分だが、きっとそれが理  
由で記憶の一部に欠損があるのだ。  
その一部が、どうしても気になる。

「………」  
「だあ」

赤ん坊は手を伸ばし、ばしばしと頬を叩いてくる。

乳臭い匂いと乳児特有の柔らかい手の感触。それが鼻をツンと刺  
した。

「………」  
「だああ」

無邪気に笑うその笑顔に、胸に言い表せない何か浸透してくる。  
それもきつと、命の灯火。

「ちよつとルシア！ あんたそんな所にいないでこつち来なさいよ  
！」

「………」この子も面倒を見ているので無理です  
「いいからこつち来るの！ かくれんぼやるの！」

「……………かくれんぼ？」  
「そうよ？ 友達みんなでやるの！」  
「……………」

友達、と口の中で呟く。  
不思議な感覚だった。だけど、そう。  
例えるなら。

（悪くない…………）

口元が緩み、肯いた。  
かくれんぼというのは分からないが、この『友達』とならきつと  
青き星の再生の手がかりも見つかりそうな、そんな気がした。  
ノエルが差し出してくる手を掴み、輪に加わろうとした時だった。

ふと、気がついた。

（これが命というものなら…………）

ならば、今まで自分が守って来たものは？  
青き星の動物たちは？  
こちらの星にきて殲滅してきた魔獣たちは？  
依頼者や現場に居合わせた人たちが怪我したことは？  
最初に殲滅した、エレボニア帝国兵は？

塔の下敷きになり命を落としかけていた女性を身捨てようとした  
ことは？

「……………」

背中に嫌な汗が流れ落ち、ゾクリと背筋が寒くなった。

「ルシア？ どうしたの？」

「？」

ノエルやフラン、そして皆が振り返る中、ルシアは突如固まったように動かなくなり、顔色を悪くして呆然と立ち尽くしていた。

「どうしたのですか、ルシア」

「……………」

シスター・マーブルがやって来て、様子がおかしいルシアに尋ねる。

彼の正面で屈み、手を取って窺うが、彼は何もしゃべらずに目を閉じて考え込んでいた。

そしてゆっくりと目を開けると、こう言った。

「……………少し、用事ができました」

「用事？」

「はい……………リベールへ出かけてきます」

「リベールって……………今から？ 列車はあつたかしら？」

マーブルは突然の話に驚き、眉を顰める。

ノエルやフランも急変したルシアに驚いているが、そんな彼女たちに赤ん坊を預けてルシアは一步、皆から離れた位置に立つ。

服装もいつもの身軽な服ではなく、漆黒のエナメル質の服装にブーツ、真っ赤な外套を羽織り、帽子をかぶる。

「では……………」



その一言と共に、激しい光がルシアを覆う。  
天へと光が走り、ルシアは消えた。

「……………」

一度自分が訪れた事がある場所ならば、どこへ居ても一瞬でそこへ移動する事が可能。

それがルシアの持つ魔法の1つ、テレポート。

リベール王国、ロレント郊外の森にテレポートしたルシアは、一息吐いて辺りを見回した。

「着きましたか……………さて……………ロレントにいればいいのですが」

ルシアは復興作業中のロレントで聞き込みをすることにした。

幸い、ルシアの恰好を見てこの地に降りた時の人物だと気付く人はいなかった。

彼は「とある人物たち」の行方を街の人に尋ねて回った。

外見の特徴しか覚えておらず、いかなせん情報が少なすぎたが、それでもすぐに聞く事ができた。

「どうやら「あの人物たち」はロレントではそこそこ有名なようで、すぐに居場所も分かった。」

ルシアは覚えたばかりの『ありがとう』という言葉でお礼を述べると、急ぎ足で向かった。

向かった先は、ロレント郊外の森の中。

山道から外れたところに、その家はあった。

「ここが……………」

一戸建ての一軒家で庭があり、木造の家で白と赤の混じった外装は、なんだかとても暖かみがある。

煙突から煙がモクモクと出ているところと、辺りに漂う香りを嗅ぐと、どうやら夕飯らしい。

「……………人の気配が、2人……………いえ、3人」

ルシアは森の中から家の様子を窺う。

そこには、満面の笑みを浮かべる女の子と、幸せそうに微笑む女性と男性の姿があった。

（良かった……………）

安堵のため息を吐いた。

きつと自分がやった事は、意味があった。

青き星を滅んだ事と、全く逆のベクトルの意味が、そこにある。

目が潤んできた。

身捨てなくて良かった。少しでもあの子の助けに成れて良かった。

小さなツインテールの髪少女を見詰め、小さく頭を下げて後ろへ振り返った。

一度とはいえ見捨てようとした自分が恥ずかしいのか。それとも少女や女性に対し申し訳なく思っているのか。確かなのは。

「テレポート」

ルシアは青い髪をなびかせながら、小さくポツリと呟いた。少年が消えたそこは、空しく風が通り過ぎて行った。

「いなくなっただか……」

カシウスは窓越しにポツリと呟いた。その声に反応したのは、レナであった。

「あなた、どうかしたのですか？」

「ああ。外に何者かがいたのでな。警戒していたんだが」

「まあ……」

カシウスの不穏な言葉に、レナも頬を強張らせる。だがカシウスの言葉にそれは吹き飛ばされた。

「外見はエステルと同じくらいの子供。髪は青色。赤いマントを羽織っていた」

「！ それって!?!」

「ああ。ひょっとしたらあの子かもしれないな」

カシウスは口元に手を当てて考え込む。

レナは慌てて窓に近寄り、その姿を探す。だが誰も見つけることはできなかった。

すると両親の言葉に反応したエステルが、カシウスとレナの元に駆け寄ってきた。

「ねえねえ！ あの子が来てたの？」

「え、ええ。そうみたいなの」

「それならここに呼ぼうよ！ あたし、仲良くなりたいな！」

「まあ」

エステルの言葉にレナは目を丸くする。

カシウスは娘の頭を撫でて聴いてみた。

「友達になりたいのか、エステル？」

「うん！ だって、お母さん助けてくれたし！」

「そうか。それもそうだな。今度見つけたら、お父さんが自宅に招待しておくよ」

「やった~~~~!!」

父の言葉にびよんびよん跳ねて喜びを表すエステル。

実際、エステルはその少年の事を気に入っているのだろう。そうカシウスは思う。

絵を描くにしても、何枚もその少年を描いているし、その少年の

力の真似、つまりポーズをとっている姿をよく見る。

まだ幼い今の時に、母を失いかけるというショックな体験をし、そこを助けてくれた少年に、子供ながら例えようのない憧れをもっているもおかしくない。

カシウスは娘の頭を撫でながら、光の粒が僅かながら宙を漂っているのを眺めていた。

## 第8話 過去と未来（後書き）

正直誰でも好感はもつでしょう。  
それは憧れや尊敬の好感ですが。

エステルフラグが1つ立ちました。

## 第9話 変化

ルシアが変わった。

それが、シスター・マーブルの言葉であった。

「どこが？」

幼いノエルや生徒たちは気付かない。

エリイのように賢すぎる子なら気付いたかもしれないが、まだ2人は会った事はない。

歌が上手い子がいる、くらいならエリイやロイドも噂で聞いているだろうが。

どこら辺が変わったのか、そう問われればマーブルはこう答えざるを得ない。

どこかが変わった、と。

何時もなら、毎朝早く出かけ、大体夕方頃に戻ってくるのが基本だった。

それが、毎朝早くから深夜まで、下手したら帰ってこない日もあるくらいだ。

故に会話が減ったので、顔を見る機会が減り笑顔を見ていない、が正しい表現なのだが。

何時からだろうか。

そう問われれば、マーブルははっきり答えることができる。

(一月前のあの夕方の時。あの後から、様子がおかしくなった)

服が一瞬で変わった事、光に包まれた事、一瞬で消えた事など、不可解な事はたくさんあった。

だがおよそ、あの場にいたのは小さな子供たちしかいなかったし、大人は自分だけであった。

子供たちは単純な手品だと思ったし、勘が良い子はその話をバラまき、だが冗談として一笑されて終わったのだ。

マーブルは日記を片付け、溜息を吐く。

ホットミルクを一口飲んで窓から外を眺めた。

分かっていた。

あの子は普通の子ではなく特別な子だと。

自分にしてやれるのは、普通の子への対応だけだと。

笑うようになったルシアだったが、最近は笑わなくなった。なんだか振り出しに戻った気分だ。

いや、本当に笑わなくなっただのかは分からない。そもそも極稀に口元を緩める笑みを、笑うと言っているのか、それは疑問だ。

子供はすべからず満面の笑みが似合い、それが子供の当然の権利だからだ。

このままでいいのか、そう自分に何度も問うが答えは出ない。

ふと、本棚にある1つの童話が目に入った。

その話は1人の青年が復讐の為に人生を駆け抜け、だがヒロインたる女の子のお陰で最後の最後でようやく凍てついた心が溶けて開放されるという話だった。

この話で重要なのは思いやる心だとか、そういう模範的な解答を



したいのではない。

マーブルにとって今着目すべき点は、数多くの魅力溢れる人物たちがいたにも関わらず、誰にも主人公の青年を変える事はできず、結果的にヒロインという、一番ストーリー上で役に立たなかった女性が唯一、主人公を変えた存在だったというところだ。

謂わば、運命の相手。

ロマンチックな言い方だが、結局はそういう事なのだろうとマーブルは思う。

ルシアへの大きな影響を与える事ができるのは、果たして誰なのだろうか。

今はまだ現れない現状に溜息を吐き、傍らのクロスベルタイムズ新聞に目をやった。

「あら……また現れたのですか」

それは、正体不明の『仮面』の事であった。

クロスベル警察が出動する前に、またも『仮面』のお陰で未然に犯罪が防がれたという。

文面は警察の無能さに対する弾劾から始まり、件の人物像を予想した、酷く下賤な言葉で書き立てられた文末で終わっていた。

記事の精度はさておき、まるでヒーローのような活躍ですね、とマーブルは零したのであった。

『依頼は完了しました』

その旨を一枚の紙に記し、依頼主の自宅へと投げ込む。

全身を紅い外套で覆い尽くし、白い仮面で顔を隠したその人物は、手紙が無事に投げ込まれた事を見届けると、ビルの屋上からその身を舞い、漆黒の闇へと消えていった。

ルシアが始めた『何でも屋』稼業。

仮面をつけたのは、最近多い、正体不明の襲撃者に対する対抗措置だ。

素顔で歩いていると襲撃が多く、対応が面倒だった。

そこで顔を誤魔化したらと思ったのだ。

何故か仮面を思いつき、しかも白騎士なんたらと高笑いする見知らぬ人物が過つたのは妙だったが。

そういう訳で、購入しようとアンティークショップにいったのだが、売っていたのが『蝶仮面』『宇宙人仮面』などどうにも妙なもののばかりだったのだが、ルシアは宇宙人仮面　グレイマスクを購入し、それを付けて何でも屋を運営していた。

現状、マールから教わった文字において、基本的な文脈しかルシアは書けない。

専門用語になると流石にまだ覚えていないのが現状だが、依頼の完了、という文字だけを覚えて手紙に記せば問題なかった。

基本的に護衛任務などは遊撃士に依頼が行くので、ルシアに回ってくる依頼は、誰かと誰かの喧嘩を止めるとか、魔獣がいきなり現れて遊撃士に討伐を依頼する余裕がない、など緊急性を要するものだけだ。

つまり手紙に詳細を書く必要はなく、依頼者が自らの目で確認できるという点で不必要な言葉を並べる必要性もなかったのだ。

料金システムは、前金を貰い、完遂の旨が来れば所定の場所へお金を放置する。

完全に後者は依頼主の心ひとつであるが、今のところは金銭の支払いに関しては滞りなく行われている。

一応、人の良い依頼人は前金で全額払うのだが、そこはルシアにとって問題ではない。

「こんな事をしている時間などないのに……何故私は……」

ルシアは道を歩きながら思わず呟いていた。

こんな事などしている暇などない。

自分は一刻も早く青き星へと戻り、ルナの世界へと降り立ち、アルテナにゾファア復活の旨と自分と相打ちになった事、青き星が滅んだ事を報告せねばならない。

そしてアルテナと一緒にゾファアを完全に滅ぼし、青き星への再生の手がかりを。

なのにこんな事をしている自分に戸惑いと苛立ちすら感じてしま  
う。

ぶっちゃけ………やっている事は遊撃士となんら変わりがない  
のだ。

「何を私はやっている………」

理性が訴えるのは分かる。異世界に来て力も弱り、四龍の力も使

えない自分が異世界の青き星へと戻るには、ゆっくりと確実に方法を探さなくてはならないと。

だが心が訴える。

早く……早くと。

凍てついた青き星。

死体となった青き星の命たち。

この世界で感じた、赤ん坊の温もり。

緑溢れる大地。

そして、元気なひまわりのような笑顔の茶髪の少女と女性。

「……………」

訳の解らない気持ち胸に渦巻き、歯噛みする。  
すると、

「おい、その君！」

「……………」

「君！ 以前会った、ルシアじゃないか？」

「……貴方は」

そこにいたのは、クロスベルに来た当初に出会った男性、セルゲイ・ロウであった。

隣にいる、ブラウン色の理知的な女性が誰かは知らないが……セルゲイは少し驚いた顔をしつつも、慌てて駆け寄ってきたのだった。

数分前に話は戻る。

その日。ソーニャ・ベルツはセルゲイ・ロウと共に街を歩いていた。

別に色気のある話でも何でも無い。

ただ、セルゲイの愚痴に付き合っていたという事と、『今回の騒動』の概要を説明してもらおう為でもあった。

「それで、結局捕まえた少年は直ぐに釈放されて書類送検も無し。被害者への示談金を支払って口止めで終わりってこと？」

「ああ……………くそっ。何度やっても慣れる事はねえな、このクソつたれな対応はよ」

「そうね。それに慣れてはいけないと思うけど」

窃盗犯が帝国派議員の息子という立場であった為、有耶無耶の上にお咎めなしで釈放されてしまった今回の騒動。

自ら捕まえ、逮捕したセルゲイとしては遣り切れない思いがあった。

「まあ、それとどう向き合って、どう対処していくか。それがこのクロスベルで上手くやっていく秘訣だと思うわ」

「そりゃそうだ……………あ、そういえば」

「どうしたの？」

中央広場の椅子にインスタントコーヒーを持って座ると、セルゲイは思い出したように口を開いた。

「いや、そういえば警察学校の生徒でひとり、かなり優秀な奴がいただろ」

「アリオス・マクレインのこと？」

「いや、そっちじゃない。確か……………」

「噂の妙に軽くて煩い坊やの事？」

「そう、それだ。かなりのお調子者でもあるって感じだった……………ええっと、確か……………ああ、思い出した！ ガイ・バニングスか」

「そうそう。そんな名前だったわ。かなり手柄も立ててるみたいだから優秀のようね」

「ああ。そいつが中々面白いこと言っていてな」

「どんな？」

ソーニヤはコーヒーを飲みながら窺う。

するとセルゲイもコーヒーを一口飲み、こう言った。

「クロスベル警察には、自治州のしがらみに捕らわれない部署が必要だ。遊撃士協会ではない、だが似たような類の部署が、だそうだ」

「それって警察官に遊撃士の真似をしろってこと？」

「さあ？ それは詳しく聞いてないから知らないが……………まあそんなもんだろ」

「……………流石にそれは無理ね。上が認めないわよ」

「……………だな」

そもそも警察官にもプライドというものがある。

市民の味方 悪い言い方をすれば、人気取りだけの立場である  
この遊撃士の真似など、できるはずもない。

「悪かったな、愚痴聞いてもらって」

「いいのよ。私の時に付き合って貰うから」

「ああ……その時は喜んで」

理知的な横顔が優しく染まったソーニヤの言葉に、セルゲイも小さく笑って頷く。

クロスベルという、特殊な街で警察官という立場にいる彼らは苦労も多い。

そんな中で警備隊所属のソーニヤと警察官のセルゲイは互いに親交もあり、仲も良かった。

「さて、じゃあ行きますか……って」

「ええそうね。ん？ どうかしたの？」

「あそこにいる子だが……」

「ああ、あの子？ 青い髪が特徴的な子ね。女の子っぽく見えるけど……あの子がどうかしたの？ っ！？」

「おい、その君！」

ソーニヤが聴く前に、セルゲイが大声をあげて話しかけていたのだった。

「久しぶりだな」

「……………そうですね」

「ああ、こっちは俺の同僚、ソーニヤ・ベルツ。警備隊所属だ」

「よろしくね。ソーニヤ・ベルツよ」

「……………どうも」

ペコリと頭を下げるルシア。

彼はジツとソーニヤの持っている飲み物を見ていた。

「……………飲む？」

「……………」

コクンと頷いて受け取り飲むルシアだが。

「……………」

無表情で眉も顰めず硬直した。

「苦いのが不味いのか分かり難いわね」

「ハツハツハ」

ソーニヤは早くもルシアが感情を表に出さない、訳ありの子だと察したようだ。

セルゲイもその突っ込みに大笑いだ。

「あれからどうしてたんだ？」

「……………遺跡を回ってました」

「遺跡？」

聞き逃せない言葉に反応するソーニヤ。

まだ発見されていない遺跡もあるとはいえ、基本的に知られていない遺跡は全て警備隊管轄になる。

未来では警備隊が禁止エリアとして完全に封鎖しているが、現在のクロスベルでは侵入の禁止の旨を市民へ通達しているだけだ。



「こいつは遺跡を回っているんだそうだ」

「ええ……………探し物があるんです」

「でも危ないでしょう」

「……………」

「それでも、探さないといけないんだとさ」

セルゲイが肩を竦めて言うと、ソーニヤが渋々肯く。

本来なら幼い子供を保護し、子供の事情など黙殺して匿うところだが、信頼するセルゲイが見逃しているのだ。何か事情があるのだろうか

と引き下がった。

だがソーニヤは、警備隊の一員として、そして1人の大人としてルシアに忠告する。

「でも気をつけて。最近、クロスベルを中心に子供たちが行方不明になる事件が多発しているの」

「……………」

「ああ、アレか」

「流石にその数が多すぎるわ。エレボニア・カルバート・リベール・クロスベルの上層部を始め、遊撃士協会や七耀教会もこの件を問題視してるわ」

「……………」

「仮にこの事件が誘拐だとしたら、犯人たちは恐ろしいわ。目撃情報も殆どない。そしてその手並みは鮮やかよ」

誘拐事件というのは、拉致する状況、その後の運び方など、成功率は圧倒的に低い、とても難しい犯罪だ。

だがそんな犯罪を何十回と成功させている。

恐ろしい敵だと、ソーニヤは踏んでいた。

(最近妙に襲ってくる、あの仮面の連中のことでしょうか)

ルシアはそう考えるが、そんな訳ないかとすぐに否定する。

襲撃犯を殺した数は、既にニケタ近い。

命を摘み取る事に、最近は躊躇うことも多いが、それでも自分は死ぬ訳にはいかないのだ。

アルテナに会い、自分の使命を引き継ぐまでは。

「ルシア。お前は何か知らないか？」

「……………いえ、何も」

「そうか」

その答えには期待してなかったようで、すぐに違う話を振って来た。

その瞬間だった。

「ドロボー!!!」

「!!!」

クロスベル自治州の、昼も麗らかな時間帯に響く女性の悲鳴。  
全ての視線が発生源に注がれる。

そこにいたのは、地面に倒れている少女とその母親らしき叫んだ女性と、その女性から慌てて離れて走る男の姿が。

男の逃走ルート上に、ルシアやセルゲイたちがいた。

セルゲイはタバコをコーヒーに放り込むと立ちあがり、警棒を片手に構える。

ソーニヤも万が一に備えてのバックアップの為に懐に手を忍ばせて警戒する。

「邪魔だあ！ どけえ！！」

男はセルゲイが邪魔しようとしている事に気付くと、奪った鞆を懐に抱え込み、ナイフを取り出して加速する。

オーブメントでも装備しているのだろうか。

その身体能力には目を見張るものがあり、セルゲイもチンピラに相対するよりも深く警戒し、腰を落とす。

街中に悲鳴が上がってパニックの光景が広がる瞬間だった。

「 閃光斬 」

小さな啖きがセルゲイとソーニヤの耳に届いたかと思い、まばたき1つした直後。

男の背後にルシアが立っていて片手には大人用サイズの剣を手にしている姿と、白目を剥いて崩れ落ちていく男の姿だった。

「 なっ！？」

「 ！？」

セルゲイとソーニヤは驚愕する。

全く見えなかった剣の軌跡とルシアの動き。

2人は呆然としてルシアを凝視した。

周囲も一転二転する展開に固まり、そしてようやく歓声を上げて

少年を讚え始める。

ルシアはそんな周囲に気にせず、相変わらず何を考えているのか分からない顔で、倒れていた少女の元へと歩み寄った。

少女は手を擦り剥いたようで大泣きしていて、掌からは血が出ていた。

どうやら母親のバッグを盗んだ時に、幼い少女は弾き飛ばされたらしい。

「……………」

「ふええええええん！」

「だ、大丈夫よ。大丈夫ですからね〜〜」

母が娘をあやして落ち着かせようとする中、ルシアは少女の手を取り、ジッとその傷を見詰める。

そして何度か少女と手へ視線を往復させると、

「ヒール」

手を翳したルシアから青い光が注がれ、少女の手を覆い始めたではないか。

小さな光だったが、確かに少女の手は癒えていく。

「わあ！ ありがとう、お兄ちゃん！」

「……………感謝など無用です」

痛みが無くなった少女はすぐに泣き止み、ルシアへと満面の笑みを浮かべてお礼を言った。

母親もその後少年にお礼を言い、やってきた警察官が男を連行していく。

アーツによって癒すなんて凄い、幼いのにアーツを使って凄いと周囲は褒め称える。

ルシアは帰っていく少女が手を振ってくるので、それに振り返すことなく少女を見送り、そしてセルゲイたちへ振り返った。

「……………では、私はまだ用事がありますので」

「あ、ああ」

「え、ええ」

何事もなかったようにルシアは去っていった。

その場に取り残されたセルゲイとソーニヤは夢心地のように呆然としている。

ソーニヤはセルゲイに問いかける。

「あの子……………何者なの？」

「分からん……………」

「子供の身体能力を大幅に超えてるわ、あの動き。それに回復系のアーツも。あんなアーツ初めて見た」

「それもそうだが……………気になった事は他にもある」  
「他？」

セルゲイへと顔を向けると、困惑した色を浮かべたセルゲイがいた。

「前に遭った時より、ずっとあいつが不安定に見える」

「……………そうなの？」

「ああ。少なくとも、誰かの為に何かをするような奴には見えなか

つたが……」

「？」

「他に興味が無い、そんな感じだった気がするが、今のあいつは……」

「でも、そうだとしたら良い事じゃない。力を持っている彼が誰かの為にそれを使うなんて」

「……まあ、そうなんだけど……普通なら」

嫌な予感がするぜ、とセルゲイはポツリと漏らしたのだった。

「……………ここが『月の僧院』ですか」

夕方。

陽も沈み、辺りが暗闇に包まれた頃、噂で聞いた遺跡の前にいた。

今は閉ざされた、どこかの山奥に不思議な遺跡があると、何でも屋を運営している時に耳に挟んだ。

そこには何かがあるかもとルシアは思い、やってきたのだが……。

事態は思わず方へと移行することになる。

「……」

八つとなつて月の僧院を見上げる。

断崖絶壁の上に立つ遺跡は、どこか教会を模してあり、けれど比べ物にならないくらいに大きい。

それに。

「これは……人避けの結界」

ルシアはその結界の境目に立ち、手を触れて呟く。

そして一呼吸と共に、魔力を纏った拳を振りおろした。

パリン、とガラスが砕けるような音が響いた直後、『建物から空気が漂ってくる。』

「じ、この気配は……！」

よく知っている気配。

この気配には、自分が気付かない訳がないのだ。

しかも、本当に極僅か。

こうして近寄って警戒し、ようやく気付けた程度の大きさ。

だから結界などを張り、内側に何も無いように見せかけて自分に気づかれないようにしたのだろう。

そうルシアは悟った。

「まさか……この世界でも復活したというのですかっ！」

汗を垂らし、険しい瞳をその建造物へと向けた。

「ゾファーー！」

その声は、限りなく険しいものであり、ルシアは眉を顰めて睨みつけていた。

そして。

この時、そんなルシアを見詰める人物が近くにいた。

髪は白く、どこか顔色も悪い。

だがその瞳は鋭くどこか刹那的であり、地獄の業火を表しているような真っ赤の瞳は恐ろしいものがあつた。

ソレは己の愛剣を手に旅をする、力を渴望する存在。

後に『とある組織』に入る、1人の青年だつた。

「ここが……例の一部の拠点か」

青年はポツリと呟き、そして眼下にいる少年に目を向けた。

少年は剣を片手に、遺跡の中へと飛び込んでいく。

「あの強固な結界で覆われたここに気付き、あまつさえ侵入できるなど……奴らの同士か、元同胞といったところか」



青年は少年へと憎悪の視線を向け、己の成長の糧にすることを誓った。

「……逃がさん」

その男は崖の上から飛び降り、月の僧院の窓ガラスを突き破って突入した。

## 第9話 変化（後書き）

ついにあの剣士が登場。

そして次回は、血みどろの激突。

次回が大きな転換点になります。

## 第10話 涙（前書き）

グロ描写あり。嫌悪する人は読まない方がいいです。

## 第10話 涙

最初に感じたのは、鼻を刺す異臭だった。  
何かが腐ったような、でもそれは生の状態のような。

薬品の臭いと半々に混じり合った臭いが建物内部に染み込み、石造りの壁が何かで染みのように染まっていた。

ルシアが扉を開け中へと進むと、あちこちに白衣を着た男や女たちがいて、彼を観察するかのようじろじろと見ていた。

聖堂の扉を開けるとその瞬間、四方八方から銃口を向けられる。

「ようこそ、可愛い侵入者君」

「……………」

「A級遊撃士すらなかなか見抜けぬ結界に守られたこの研究所を、よくぞ見つけた。子供ながら見事だ」

その中央。

本来なら教会の神父が立つべき教壇の位置に、その男はいた。

髪は黒。

メガネをかけ、病的なまでに色白い肌が妙に印象的であり、線が細い顔つきや身体つきはどこか頼りない。

だがその細い眼やニヤニヤと歪む口元はどこか邪さを感じさせる。

「結界を壊したのは…………先程、上の階に侵入した若い男かな？」

「……………（男？）」

「仲間の男は魔道騎士人形が相手をしている。かなり強いようだが……降すにも相当な時間がかかるだろう。その間にこちらは」

ギラリと好色そうな色が目に浮かぶ。

唇を舌で一舐めし、背後の扉を開け放った。

「君に特別なものを見せようじゃないか！これが目的で侵入したのだろう？」

扉の先、男の眼下には、とある広間が見える。

二階から数多の銃口を向けられ、一階を埋め尽くす程の戦闘者らしき凶器をぶら下げた男たちに攻撃的な視線を向けられながら、ルシアは一歩ずつ前へと向かう。

そして開けられたその先が見える位置までやってくと……。

「……………これは」

思わず言葉が漏れた。

そう。

その先にあったのは、子供たちの死体の山であった。

血が飛び散り、床を血で染め、何かの破片らしきものがあちこちに飛び散っている。

その中央に、人間ではない、何かもいる。

（あれは……………魔族の巻族）

遺体には目も繰れず、魔族を凝視するルシア。

「どうだい？ 目的の子でもいたのかな？」

「……………」  
「ああ、原型が留めていないものばかりだからね。これを見せてあげよう。そのリストの赤いのが下の役立たずな滓ばかり。白が上の階に閉じ込めてある実験体だ」

「……………」

どうやら男は、ルシアが知りあいを取り戻しに来たと勘違いしているようだった。

当然、ルシアにそのつもりはなかった。

誰がどうなつていようが、今は関係ない……………はずだった。

「目的の実験体が生きているなら返してあげよう。ただしこの事は当然黙っていてもらうがね」

「……………」

「永久に」

目の前に、今までにいなかった実験体がある。

それだけで、こここの部署の責任者である彼の興味を引くだけで十分だった。

不気味な静けさと聡明さを纏う不思議な少年。

上の階で暴れている男も、なかなかおもしろそうな結果をもたらしてくれそうだが、それでも目の前の少年の方が気になった。

きつと恐ろしいほどの感応力・適応力をみせ、薬品などにも耐えて新たな結果を出してくれるだろう。

そう確信していたのだ。

（つまり交換という訳ですか……………別に助けに来た訳でもなければ

ば、助けなくてはならない訳でもないのですが)

幾多の死体を前に、ルシアはそう考える。

そもそも自分がここに来たのは遺跡調査の為で、その遺跡を発見して

みれば結界が張られていたから破壊しただけ、更に破壊してみれば

（ゾファー……貴方はこの遺跡のどこかにいる筈。人間に憑いているか、それともまだ形に出来ない程度の侵攻具合か……どちらにする、このまま放置していれば未来において大変な事に……）

それがどういう意味を指すか知っているルシアは、目の前のタンパク質になり果てた子供などどうでもよかった。  
いや、引っかけりはしたがそれよりもゾファーの方が重要だった。

「え？」

不意に、漏れた声。

リストの表紙から七枚目。

5歳前後の子供たちが多くなか、一番若い子供。

0歳未満の乳幼児といえる赤ちゃん。

(拉致した場所……リベール王国・ボース地方近郊ラヴェンヌ村。名前……レナ・クリステイ)

見覚えがある、この顔。

(この子は……歌を教えてくれたあの女性の……)

自分の両手で抱きかかえた。

自分の両腕に、その温もりが今も残っている。

初めて感じた人の温もり。

「……………」

「おや、その子かい？」

「……………」

「でも残念だ。その子は既に死んでいる。その子は適正値も低くてね。やはり赤子とはいえ有象無象は困ったものだ」

「……………」

「まだどこの部署にも良い検体はないみたいだしね。だがこれからは違うだろう。君と言う」

「

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

俯き加減のルシアに延々と口上を垂れていた男の背後から突如、上がった悲鳴。

男は後ろを振り返った。

すると2階席で銃を構えていた暗殺グループの一員と思しき男の1人の首が無くなり、血しぶきを噴水のように上げていた。

悲鳴が上がり喧騒が起ると銃口は一斉に死体の後ろの人物へと向けられた。





「中々の強さだ。完成されればかなりのものになるだろう。だが残念だったな」

男の身体から、黒いエネルギーが放出され始める。

それは、これまでの実験結果により得た力。

服用者に力を与える、最高の薬物であった。

「ふざけるな……………」

「お前のように歳いった男はいらんのだよ。私が滅してくれる」

「はあああああああああ！」

男が杖を振りかざし、4か所へと落雷が落ちる。

青年は素早く身をかわし、己の懐にあった鞘へを握る。

鞘を片手に携えた彼は、それを空へと放り投げ、落ちてきた落雷にぶつけた。

「なに!?!」

そしてそれを素手でつかんだ。当然電流が青年の身体を流れるが、青年はそれを我慢して男へと投げつける。

「クソッ……………つがあっあああああああ！」

咄嗟に避けた男だったが、それに意識を取られすぎた為に青年への意識が一瞬逸れた。

そして生粋の戦闘者ではないが故に生まれた最大の間隙を、青年は見逃さず懐に飛び込み、一瞬にして切り刻んだ。

男の腹部からおびただしい血液が流れ、臓物が零れおちた。

統括しているトップがやられた事で、研究者たちは顔を真っ青にした。

青年は休まずに身体を捻り宙への跳躍、柱を一蹴りして地へと迫る。

前には研究者たちの男・女たち。

「きゃあああああああああ！」  
「に、逃げろおおおおおおお！」

自分たちの身が危うくなつたと悟つたのだろうか、悲鳴が上がって次々に我先にと出口へと逃げ惑う。

白銀の刀が武装兵たちの息の根を止め、科学者たちへ向けられた瞬間だった。

「！」  
「ふっ！」

2振りの刃が激しく衝突し、火花をまき散らした。

一閃、二閃と刃が縦へ横へと振るわれ、その全てが引き裂くことなく刃によって止められる。

裂はくの気合によって振るつた青年の斬撃を、ロシアは受け止めるのは不可能と判断すると、しゃがんで回避する。

そのまま身体を捻って回し蹴りを入れると、青年の腕によって止められていた。腕を踏み台にして蹴りあげ、距離を取る。

「……………」

「やはりこの連中の手先か。あの強固な結界に守られていたここに簡単に入っていったんだ。子供とはいえまさかと思っていたが」

「……………」  
「しかし些か遅かったようだな。戦闘要員も魔道人形も全て破壊した。後はここの化学者たちだけだ！」

青年は懐から取り出したナイフを逃げる化学者たちの1人の背に投げる。

「……………っ！」  
「クッ！」

投擲ナイフを剣で弾き落とし、ルシアは前へ踊り出た。  
風を裂くような一撃を振るうが、青年の腕を浅く切り裂いただけだった。

青年は地面を蹴り、石を砕く事で視界を悪くし、ルシアが怯んだ瞬間に剣を付きだし、連続突きを繰り出した。

「くっ！」  
「はあああああああああ！」

必死にルシアはそれを防ぐが……リーチの差とそもその年齢差からくる基本的な運動能力の差から、僅かに手数が勝った。

右の二の腕、肩を深く突き、首筋を浅く切った。

「……………勝負アリ、だな」  
「……………」

手からドクドクと流れる血で地面が染まる。  
無事の左手で剣を持ち、腰を深く落として青年を見る。

その瞳が映す色は、怒りの色だった。

「これまでに逝った者たちに懺悔して死ぬがいい」

「……………戯言を」

ここで一つの擦れ違いが起こっている。

青年は、少年がこの関係者だと思っている事。

ルシアは 。

「止めておけ。片腕に致命的な傷を負っているんだ。子供の片腕の腕力なんて、たかが知れている」

「……………」

「先ほどの男のように薬物で身体増強を図っているんだろうが……  
剣士が腕と肩に負傷を負ったんだ。もう……………終わりだ」

青年は武器を振り上げ、ルシアへ振りおろそうと構えた。

「……………」

「?」

ゆらり、と立ち上がるルシア。

「……………覚えています、あの時の事を」

「命乞いか」

「……………あれはたしかに、あの人の声は魔法だった」

母親の女性は、今は何をしているだろうか。

「……………あの温もりも」

泣いていた子が泣き止み、安らかに眠る寝顔を覚えている。

「……………あの笑顔も」

「それを奪ったのが貴様らだろうが！」

必死の形相で剣を振り上げ振りおろす青年。

ルシアは剣を投げ捨て、踊るような動きで青年へ飛び込んでくる。

その動きは、今までとは一変した動き。

これまでののが稲妻のような激しい動きだったのなら、今度の動きは蜂や蝶のような、舞う動き。

鋭い刃に合わせるようにルシアは掌を刃へと向ける。

刃が掌を真っ二つに斬り裂こうとする瞬間。

「  
竜神掌

！！」

裂帛の気合と共に、痛みで顔を歪めるだけだったルシアの顔が、気合に染まり、空気が引き締まる。

振動のように辺りが震え、青年は目を見開いた。

まるで、掌底のようにむけた掌から竜が飛び出すように叫び声があがったように聞こえる。

「ガッ

！！」

バキーンと刃が砕け散り、青年の腹部に直撃した。

削岩機のように突き進む『衝撃派』に、青年の肋骨が砕ける音が

響き渡った。

青年は地面に転がり、蹲りながらルシアをジロリと見詰めた。

「くっ！」

「……ハア……ハア……今……のは」

悔しさを滲ませる青年と、自分が行ったこと、口走った事に驚愕している少年。

2人は地面に蹲りながら口元から血を流して相對していた。

「……くっ。今日の所はここで引かせてもらおう」

「あの日から自分自身を鍛えてきたつもりだが……まだまだという事か。薬物使用者に引き分けるとは。こんな事ではまだ目的を達成できないか」

「次に会った時、必ずお前の首を取る。覚悟しておくことだ」

そう言って、青年はお腹や胸を抑えながら去って行った。

化学者たちも皆逃げ出したのか、この建造物は無音の世界へとなっていた。

ルシアはゆっくりと立ち上がる。

腕や肩から零れ落ちる血液を気にせず、ルシアはヨロヨロと立ち上がり、地面に落ちていた被験者リストの紙を拾い上げる。

「……………」

白い髪が赤く染まっていくのを見ながら、ルシアはジッとその紙

を見続けた。  
見知った顔を。

「……………」

これだから人間は、そう眩く。  
ゾファー復活も人間の欲望・憤怒・殺意・金など、あらゆる人間の性質が原因だ。  
だから、青き星も滅ぶ原因となった。

ここの建物から漂ってきたゾファー復活の気配。  
どうやら既に逃げ出したか、どこかへ移動したのか。  
少なくとも、ここの連中がゾファー復活のきっかけになったのも間違いはない。

また自分に滅ぼさせるのか。  
また繰り返すのか。

これが人間だ。  
こんな醜い事件を起こす元凶。

今回死亡した被験者たちも、いずれこんな事を起こしただろう。  
人間同士の因果応報。必然の現象だ。

「？」

不意に、目から『何か』が零れおちた。

次々に零れおちていく『何か』。



「これ……………は……………」

上手く喋れない。

歯が小さく音を立てて振るえた。

「う……………う……………」

止める事ができない小さな声が漏れ続け、ガクリと膝を付いて地面に爪を立てる。

ガリつと音を立てて、爪と地面に血が滲む。

「な、なんで、私は……………」

こんなに動揺しているの？

こんなに目から零しているの？

男から紙を渡された時と同じ何かが、胸に再びこみあげてくる。何もかも無くしたくなる、この衝動。

初めて『睨む』という程目つきを悪くしたルシアは、その衝動に流されるがまま、全方向にその力を振るった。

「サテライトボム！！」

その瞬間、建物内部は激しい閃光と共に全てを滅され、死体も悪魔も、実験資料も全てが消え去った。

「エステル、そろそろ帰るわよ～～～！」

「帰るぞエステルー」

「は～～～い！」

母と父の声に反応した、元氣印の少女、エステル・ブライトは口レントの出入り口にいる両親の元へと駆け寄った。

晩御飯の買い物を終えた母と父の手には食材がたくさんあり、父の遊

撃士の仕事の都合で遅くなってしまった夕食が、今ではすっかり楽しみだ。

あちこちの民家から漂ってくる夕御飯の匂いにエステルはお腹の音を鳴らしながら、両親の両手につかまりながら帰宅する。

「ねえねえ、お母さん」

「なに、エステル？」

「今日のご飯何？」

「今日は美味しいシチューよ。パンと一緒に食べるハムとブロッコリーのソテーも美味しいわよ～～～？」

「わ〜い！」

「ふむ。それは旨そうだな」

はしゃぐエステルに、ひげを触りながら期待するカシウス。

レナはそんな2人に嬉しそうに笑い、前を見た。

こうして笑っていられるのも、旦那とこうして一緒にいられるのも、を生きているから。

本当に幸せだと、レナは思う。

これから愛娘のエステルは自分と同じで、どのような人生を歩んでいくのだろうか。

女の子らしく育てているが、いかんせん趣味がどうも男の子っぽいものばかりで心配だ。

(大丈夫かしら……?)

良い人生と、女にとっての幸せの人生は、また別だとレナは知っている。

チラッとレナは娘を見ると、

「？」

アイスを食べた痕を頬につけたままニンマリと笑う娘に、母として心配になったレナであった。

その直後。

「!?!」

「2人とも下がれ！」  
「ふえ？」

突如、夜空から落ちてきた一陣の光。  
その色は青。

爆風のような風が光の落下地点から吹き荒れ、カシウスは2人の前に立ち庇い、懐から出した警棒のようなものを構えた。

しかし険しい表情のカシウスとは違い、レナとエステルは目を見開いていた。

「この光は……」  
「ねえ、ママ。これって」

その言葉にカシウスは眉を顰めるが、その言葉の意味が分からない。

しかし意外と簡単にその答えは分かったのだった。

自宅近くの林の森。  
そこが光の落下地点。

そこにカシウスが警戒しつつ向かう。

「……………！ おい、君！」

そこにいたのは重傷の傷を負い、血を流し、焼け焦げ汚れた身体  
の1

人の男の子。

「！　あなた、その子は！」

「エステルに見せるな！」

「は、はい！」

カシウスは咄嗟にそう叫び、娘の目を塞ぐ。

そう。

重傷を負ったルシアが、そこにいた。

## 第10話 涙（後書き）

レーヴェはまだ実力的には未熟なレベルです。修行してまだそこま  
で強くなってない。その位。

まだ原作のような考えはしておらず、現状は強くなるために修行し  
ている状態です。

## 第11話 プライト家（前書き）

LUNARを知らない人の為のものです。OPです。

主人公イメージは、出てくる女性で掴んで頂ければと思います。

<http://www.youtube.com/watch?v>

HGWLZSQIEM4

## 第11話 ブライト家

ブライト家。

一軒家の3LDKで、1つが夫婦の部屋。1つがエステルの部屋となり、最後の1つが物置部屋、もとい倉庫と化している。

埃まみれの部屋を急ピッチで綺麗にし、荷物を運んで片付け、簡易ながらもベッドを置いて布団を敷き、そこにとある少年を寝かせた。

晩ご飯の時間帯という事もあり、レナが食事作りを。

カシウスが少年　ルシアの手当てを。

エステルは、心配そうにルシアを見守り、彼女なりに精一杯の看病を行った。

簡易手当てを施したカシウスは信頼できる医者呼び、彼を診断してもらった。

カシウス自身もお世話になっているかかりつけの医師で、腕も確かな人物だ。

その医師はルシアの傷を見ると顔色を変え、大慌てで治療を始めた。

カシウスやエステルは部屋の外へと追い出され、2人は仕方なく1階に降りてレナと共に食事を取る。

終わったのは、夕食の片付けも終わり、レナとエステルが風呂に入って出てきた直後だった。

全ての治療を終えて出てきた医師は、エステルにルシアを看護ておくようお願いし、レナとカシウスに居間で説明する。



「とりあえず、処置は終わらせました」

「先生、ありがとうございます」

「どうもありがとうございます」

「いえ。これで患者が目を覚ましたらもう安心です。尤も、目覚めるのに時間がかかりそうですが」

「そうですか……」

レナは医師の言葉に表情を暗くする。

医師は自分の役割を果たすため、かなりの躊躇いと共にいくつかの紙を出した。

「彼の怪我は、肩と腕、首筋が大きな傷でした。どれもが鋭利な刃物で傷つけられたような跡で、特に肩と腕は完全に刺されています」

「そんなっ」

「全身も少なからず火傷を負っています。なにか……そう。爆発に巻き込まれたような、そんな火傷でした」

「……………」

「傷も縫合しましたし、大事な臓器や血管を損傷している訳でもなかったなので、大事には至りませんでしたね」

「そうですか」

「それで、これが患者がずっと握りしめていた紙なんです……」

「？」

カシウスはその紙を受け取り、目を通す。

血で染まった用紙に一瞬目を細め、内容を見る。

そこには、とんでもない事が書かれていた。

「これは　　っ！」

「あなた、何が

!？」

旦那の様子に怪訝な表情を浮かべたレナが手元を覗き込みその紙を確認する。

その紙に書かれていた内容。

それは、

「……………正直、信じがたい事ではありません」

「……………」

「……………」

「同じ医師として、人間として、私は許せない」

非人道的、外道。そんな言葉でしか表わせないような実験を繰り返したという化学者たちと、犠牲になった子供たちの結末。

それが克明に記されていたのだ。

「その紙に付着している血液や、怪我、リストに載っていない事を考えると、患者はどうやらこの施設の中に入り、そして負傷したのでしょうか」

「そう、でしょうね」

「うむ。これをどうするかは、遊撃士であるカシウス君に任せる。もちろん、私も他言しない事を誓おう」

「それが賢明です。私も慎重に行動しよう」

「では、容態が急変したりしたら、すぐに連絡を下さい」

「わかりました」

レナとカシウスは医師に礼を言うと、医師はゆっくりとした足取りで帰って行った。

「あなた……………」

「ああ。レナ、お前はあの子の面倒を見てくれるか？」

「もちろん喜んで。あの子は私たちの命の恩人なんですから」  
「そうだな。私は少しこの件に関して動いてみる」

カシウスは険しい顔をして紙を見詰めた。

「ねえ？ どうしてケガしたの？ 転んだの？」

「……スウ……スウ」

「早く目覚まさないかな。いろいろとお話したり釣りとか一緒にしたいのに」

エステルはベッドで深い眠りにについているルシアの頬をつつき、彼に語りかけていた。

すると、ルシアが持っていた持ち物の袋の中に、鎖のようなものが入っているのが見えた。

近づいてそれを手にする。

それは、鎖が通った輪状の、金色の卵型の塊がぶら下がったネット・クレスであった。

「わあ~~~~、キレイ~~~~」

「あら、エステル。どうしたの？」

「おかあさん！」

エステルが關心した声を上げると、扉の向こうからレナがやってきた。

「どうやら様子を見に来たらしい。」

エステルが手に持っている物をみて尋ねた。

「この中に入ってたんだけど、これってなに？」

「これは……ネックレスね」

「ねつくれす？」

首を傾げるエステル。

「そう。首から提げるものでね、アクセサリーの一種なのよ？」

「へ〜〜〜」

「女性は綺麗に見せたりするのに使うことが多いわ。でもこの子は……」

「おかあさん。この子女の子みたいだけど、男の子だよ？」

「そうね。だからきつとこれは、アクセサリーとかじゃなくて、思い出の品なのよ」

「へえ〜」

「これは？」

エステルが袋の中から取り出したのは、1つの小さな箱のようなもの。

「これは……開閉式の手鏡、ではないわね。中にクリスタルが入ってるわ」

「わ〜〜〜綺麗〜〜〜」

「でも大分古いわ。きつとこれも思い出の品なのよ」

「そっかあ」

「さあ、まだ寝ているのに、近くで騒いだりしたら問題ね。静かに寝かせてあげましょ？ きっと明日には目を覚ますわ」

「うん！」

そう言っつて、袋にネックレスとクリスタルを片付け、レナと一緒に部屋を出た。

後にエステルは、このネックレスとクリスタルの意味と重要性を知る事になる。

だがそれは予想できるものではなかった。ただ今は、おもちゃの1つとしてしか捉えてなかったという。

レナの予想に反してルシアは3日間、目を覚ます事は無かった。ひたすら昏睡状態が続き、傍から見たら死んだように眠っていた。

「今帰ったぞ〜〜」

夕方時間、レナが夕飯の支度をし、エステルが絵を描いて遊んでいると、カシウスが遊撃士としての仕事から帰って来た。

「おかえりなさい、あなた」

「おとうさん、おかえり〜！」

「ああ、ただいま」

娘の頭を撫でてレナに微笑み、カシウスは疲れた体を休めるように椅子に座った。

ふう、と珍しく溜息を吐いたカシウスに、レナは紅茶を煎れて目の前に座った。

エステルは再びお絵描きタイムに戻っている。

「どうかしたのですか？」

「ああ。例の件でな」

「……どうなりました？」

「被害者の身元が割れていたから、全ギルドに情報を回して裏付けをとってもらった。内容が内容だけに迂闊に情報を漏らす訳にもいかないからな。信頼できるA級からB級遊撃士のみに限定した。すると……」

「あのリストにあつた被害者の子供はやはり？」

「ああ。行方不明になっていた子供たちの一部だった」

シーンと静まり返り、エステルは鼻歌とぐつぐつと煮込む鍋の音だけが、不釣り合いなくらいに響いた。

レナは表情を暗くして呟く。

「そう……家族はとても悲しんだでしょうね」

「ああ。正直、今回の件に絡んだ遊撃士たちは皆、遣る瀬無い気持ちでいっぱいだ」

「辛いですね……」

カシウスもそれに肯き、リストを取り出してそれを見ながら云う。

「これは俺の勘だが……まだきつと、他にも似たような施設はあるはずだ」

「そんなっ！ まだ犠牲になってる子がいると？」

「ああ。このリストには書かれてないが、その予感しかしない」

「……………」

「クロスベルのギルドに、ここの調査にすぐさま向かってもらったが、遺跡内部は崩壊していたらしい」

「崩壊、ですか？」

「ああ。大人の遺体から子供の遺体まであちこちに転がっていて、中心部では激しい爆発跡があったようだな。主だった書類などは全て灰になっていたようだ」

「何があったのかしら……………」

「さて……それはあの子に聞けば全て分かりそうだな。あの子は？」

「まだ目を覚ましません。お医者様も既に目を覚ましていてもおかしくはないはずと首を傾げてたわ」

「そうか。精神的なものかもしれんな」

「そうですね……………」

レナはカシウスから聞かされた内容から想像し、まだ6歳程度の子供には辛すぎると思う。

カシウスは現状を知っているからこそ、あの気が狂いそうな空間にいたなら、子供は発狂・壊れてもおかしくないと判断する。

「今回の事から、遊撃士協会は秘密裏にこの事件を追う事になった。まだ各国上層部も動かせていないが、いずれ証拠を集めて確認も得られれば、3国と自治州共同でこの事件を追うつもりだ」

「そこまで規模が大きいのですか？」

カシウスの言葉にレナは目を丸くして驚く。

現在は百日戦争が終わったとはいえ、リベールと帝国の仲は悪い

し、帝国と共和国は言うまでもない。  
そんな3国と、クロスベル自治州が協力するかもしれないと言われれば驚くのも当然だった。

「ああ。恐らく敵は巨大で強大だ。数もきつと多いだろう。それには各国が結束して挑まねばならない」

カシウスは鋭い眼光を発してレナを見やり、大きく肯く。

既に彼の中ではこの事件対する意気込み、解決する為の決意があり、意地でも敵を壊滅させるつもりだった。

「頑張ってくださいね、あなた」

「ああ。任せろ」

全力で応援します、とレナが言った直後だった。

階段の方で、カタンと音がしたのは。

その音はレナもエステルも気付いたようで、顔をそちらへ向けていた。

ゆっくりとした感覚で足音が聞こえる。

コツン、コツンと階段を下りる音がする。

そして階段の暗闇から現れたのは、レナが着換えさせた寝巻ではなく、いつも来ていたこちらで購入した服でもなく、『青き星のルシア』としての服装。

黒いエナメル質の上下を着こみ、黒のブーツと黒の手袋を着用。  
青い髪がさらさらと腰まで伸びて、今まで寝ていたはずなのに痛んですらない真つすくな毛先。

赤いマントで全身を覆い隠し、赤い烏帽子を被った姿。



首周りに包帯を巻いていて痛々しいが、その姿にはやはり神聖さと寒気を感じさせる。

その姿に、レナとエステルは出会ったときの事を思い出した。

その姿に、カシウスは思わず目を見張った。

ひとりひとりに視線を向け、そしてようやくルシアは口を開いた。

「……………手当て、感謝します」

小さくお辞儀する、そんな彼の目は。

「……………まだ挨拶をしていませんでしたね」

子供の純粋な輝くような瞳ではなく。

「私の名は、青き星のルシアと申します」

澄んだ深緑の瞳ではない、暗く濁った瞳だった。

## 第11話 プライト家（後書き）

友人に言われました。ギャグが無くね？ と。

私は無理にギャグは入れません。それをすると話が崩れると思います。

エロも入れません。青春っぽいエロはいれるかもしれませんが。

次回はエステルとのふれ合いになります。

## 第12話 ひとつの選択

ルシアが目覚めて翌日から、エステルとルシアは自然と一緒にいる事が多くなった。

実際には挨拶をした直後、すぐに出て行こうとしたのだ。

だがルシアを背後から抱え上げたレナにより、強制的に寝室へ連行されてしまった。

子供が無理をしちゃ駄目という言葉に、レナに対して負い目があったルシアは大人しくその日は仮眠を取り、翌日の朝から怪我の療養の意味でブライト家に厄介になっていた。

もともと、腕や肩の全快には2〜3週間はかかると言われたので、ルシアは大人しくしているつもりだった。

何故、魔法で一気に回復させないのか。

それは今回の事で力を一気に解放した事による、弱体化した頃に戻ってしまった事が原因だった。

アルテナの力がちよつとずつだが回復してきた所に、感情の発露から破壊力のみに力を注いだ魔法攻撃。その後の転移魔法。

自業自得とはいえ事態を深刻に考えたルシアは、自然治癒による治療を選び、ゆっくりと療養する事にしたのだ。

また、自分の中の訳の解らない感情に戸惑いを理解できなかった事がその決断に拍車をかけたのだが、彼自身は気付いていない。

そして。

ゾファアの行方が皆目見当付かないのも原因の一つであった。

アルテナと対を成す存在故に、ただの生命には行方は察知できない。

なんと歯がゆい状況ではあるが、アルテナに会い、ゾファーを打倒するという事が優先順位であった事が、お互いが同列同位に來ただけのことだ。

尤もそんな事を知る由もないレナやカシウスは、ルシアがレナを助けた時のように不思議な力で一足飛びに回復しない事に不思議に思っていたが、少しは自分たちを気に入ってくれた、警戒を解いてくれたのだらうと思っていた。

さて、微妙に勘違いが起こっている中、住人が1人増えたブライト家では、レナがちよつといつもより多い洗濯物を庭で干していた。パンツと小気味よい音を立てながら気持ちよい日差しの中洗濯物を干すのは、晴れやかな気分になる。

そんなレナを更に嬉しくさせているのは、家の前にある池で釣りを楽しむ子供たちであった。

「ほら、先が動いてる！ 竿を上げて！」

「……………こつ、でしょうか？」

「それじゃ遅すぎる〜〜〜！」

釣りを嬉々として教えるエステルだったが、ルシアの遅さに地団太を踏んでいた。

そんな娘の様子に思わず笑いが零れた。

怪我をしている身に釣りをさせるなんて、と一瞬思ったが、特に本人も辛そうにはしていないようだ。

娘のいつもより遥かに高いテンションに微笑ましく思いながら、ルシアを見る。

(本当に不思議な子……親もないようだし、クロスベルで世話になっていくという教会にも、積極的に帰ろうとしている訳でもないみたい。まるで、そう。感情というものをどこかへ置き去りにしたような……)

いろいろと、辛い思いをしてきたのだろう。

レナはそう考え、悲しそうに目を伏せる。自分は彼に間違いなく助けられた。だから今度は自分が助けられないだろうか。

「……難しい問題ね」

「何がだ？」

「あら、あなた」

何時の間にか帰って来ていたカシウスが、レナの隣にやってくる。レナが思っていた事を話すと、カシウスは険しい顔をしてそれに同意した。

2人の視線がエステルとルシアたちへ向かう。

「こんな事を言っては親として、いや大人として駄目なのかもしれないが……」

「ええ」

「あの娘がルシア君に関わるのは、個人的に推奨できない」

「……何故です？」

「彼と接して感じたのだが、彼は普通ではない。彼は我々が想像つかない程の何かを背負っているように思える」

「……」

「普通の範囲内の異常ならば、遊撃士の身である自分としても積極的に関わり力を貸し、助ける事を推奨するだろう」

だが、とカシウスは続ける。

「彼は違う。そう、それこそ彼は人ではなく」

その先を言おうとして、止めた。

レナはジッと旦那を真剣な瞳で見つめていた。

「そんな彼と関わると、エステルは確実に辛い目に会うだろう」

親としては賛成できない、そうカシウスは独白するように言った。  
レナはその言葉に肯かず、されど否定せずに目を伏せた。

「ん？ 何をしてるんだ、あの娘は」

「あら？」

ふと見てみると、娘が急に立ち上がり、頭を下げたではないか。  
何事だろうと、レナとカシウスは2人の子供の様子を窺った。

「ねえ、ルシア」

「……………」  
「ルシアは何で怪我したの？」

「……………」  
「いろいろ、ありました」

「ふーん。あ、そうそう。そんなにタニンギョウギじゃなくていい

「んだよ！」

「……………何がです？」

「ことば！ もっと砕けた感じでいいのに」

「……………これが私ですので……………たぶん」

記憶が欠如しているからか、自分の言葉遣いが本来のものかは分からない。

そしてエステルはそんな答えに首を傾げながらも、淡々と池を見詰めるルシアに嬉しそうに笑う。

「でもよかった〜」

「？」

「あのね、ルシアが普通の男の子でよかったって思ったの」

「……………」

「こうしてお友達になれてよかった〜」

普通、とルシアは口の中で呟く。

そつと目を伏せた。

「あのね、おかあさんが怪我した時、助けてくれたよね？」

「……………ええ、まあ」

「あれから言いたい事があったの」

エステルが釣り竿を脇に置いて立ち上がった。

そしてペコリと腰を曲げて頭を下げた。

その様子に、ルシアは何事かと目を向けた。

「あのとき、おかあさんを助けてくれてホントーにありがとう！」

「！」

「ルシアのおかげなの！ こうしておかあさんとおとうさんと3人で暮らせてるのは！」

幸せと嬉しさでいっぱいという、満面の笑みで無表情の彼の目が、大きく見開かれた。

（私のおかげ……わたしが助けたことが？）

その言葉に、胸の中が掻きまわられるような衝動に駆られた。何かが込み上げて来て、でも不愉快ではない。

その瞬間、あの死んでしまった赤ん坊の姿が思い浮かんだ。ひよっとしたら、自分の力があれば助けられたのではないか？

そんな今となっては不毛な問い。

そしてもう、あの子は戻ってこない。自分の手に抱く事は無い。温もりを感じることはない。

「エステルー！ ルシア君ー！」

「2人とも、釣れてるか？」

こちらへと何か察したように笑いながら歩いてくる、エステルという目の前の少女の親。

男性と女性、その女性の方。

優しい笑顔を浮かべる、エステルの将来を彷彿とさせる女性。

「どっかしたの？ ルシア君」

お日様の香りがする手が、ルシアの頭を撫でる。



呆然と見詰めるルシアの様子に首を傾げながら、優しく何度も撫でた。

膝を曲げて同じ視線の高さまで屈み、微笑む。

その手は、暖かった。

「……いえ、何でも」

思わず小さく俯いた。

なんだか堪らなくなり、釣り竿を持って腰を畔に下ろす。

レナとカシウスは首を傾げ、エステルはドーンと飛びついた。

「！……危ないですよ」

「エへへ。だいじょぶだいじょぶ。ルシアが助けてくれるもん」  
「……」

スリスリと頬を擦りつけてくるエステルに、ルシアは気にせず  
竿を見ていた。

（やれやれ。人懐っこいというか無邪気というか。まだ幼いとはい  
え女の子なのにこの明け透けっぷりは誰に似たんだか）

（ん〜、やっぱりエステルはルシア君を気に入ってるようね。まあ  
憧れてた存在が、身近に感じた喜びの反動だろうでしょうけど）

思わず苦笑した。

「さあ2人とも。おやつの時間よ。手を洗ってきなさい」

「は〜い」

「……わかりました」

エステルに引つ張られて引きずられながらルシアは家の中へと入って行った。

ちなみに、本日のお菓子はドーナツであった。

「さてルシア君。君はこれからどうするのか？」

「……………どう、とは？」

夕飯が終わり、一息吐いて紅茶を飲んでいるとカシウスが唐突に切り出してきた。

「君の目的、それが何かは分らんが、遺跡巡りの為に各地を回るのが。それとも先の一件のような連中を捕まえる為に探すのか？」

「……………」

「あの件は既に遊撃士協会に連絡済みだ。現在A級遊撃士とB級の信頼を置ける者のみで情報収集、搜索に回る為に作戦を練っている最中だ。資料から察するに、金銭の規模、研究施設、動員数を鑑みると、相当に大きな組織が相手だと分かる。故に遊撃士協会も各国上層部に慎重に接触し、協力を要請する。時間はかかるだろうが、いずれ大きな戦いが起こるだろう。」

カシウスの言葉にレナは悲しそうにし、エステルは難しい話に頭を捻った。

「この件において、君が関わらなくてもいずれ解決するつもりだ。それを前提とした上で、君はどうしたい？」

「……………」

「ちなみにこの件について、遊撃士よりも真つ先に見つけて潰した君の功績を、遊撃士協会は大きく評価している。教会内部には君を現在の年齢で遊撃士にするべきだという声すら上がっている程だ」

「まあ」

「うわああああ、凄い！」

今度は話を理解できたのか、エステルが声をあげて驚いた。

「正直云って、この決定は異例であり異常だ。少なからずこれが洩れたら各国や市民から批判の声が上がるだろう。だが、それを許容するほどこの事件を遊撃士協会は重く見ている。当然といえば当然だな。遊撃士の存在意義であり価値である『一般市民を守る』という理念に真つ向から反している事件なのだから」

カシウスはそう続け、

「だからこそあえて批判覚悟で、君程の若さにおける異例の遊撃士推薦の話があるのだ。これは遊撃士協会からの情報共有と早期発見してくれた事による感謝と誠意と捉えてもらって構わない」

カシウスは真剣な瞳で説くが、その言葉にルシアは即座に首を振った。

「……………申し訳ありませんが、それはお断りします。その身は時に役

立つかもしれないませんが、時間も膨大に取られます。それは私にとつて有益ではない」

「……そうか。まあ、仕方ないだろうな」

「そして私はまた近い内にクロスベルに戻ります」

その言葉に、エステルがガンとショックを受けたような、寂しそうな顔をする。

レナはその言葉を予想できていたようで、あまりショックを受けてはいなかった。

「……私は、私の使命を果たします」

「君の使命とは？」

「青き星の再生を見届ける事。そして……アルテナに会う事。それだけです」

「……」

妙に饒舌になったルシアに、カシウスは目を細めた。

レナは眉を顰め、その言葉を吟味する。

「……そのついでに、答えを探します」

「そうか。それが何かについては聞かないでおこう」

どうも、と頭を下げたルシアは自分の部屋へと戻り、彼の部屋へエステルが突撃していった。

騒がしい居間が静かになると、レナがポツリと呟いた。

「あなた……」

「何だ？」

「青き星、とはなんでしよう？ アルテナって知ってます？」

「いや……知らないな。だが再生を見届ける、か。それではまるで、

現在は滅んでいる、壊れているかのような意味になるが」

情報が少なすぎて答えが出そうにない、とレナに答えた。

そんなカシウスにレナはそうですねと返し、消えていった階段の方へと視線を向けた。

確かに旦那の言う通りなんだろう。

恐らく想像もつかないものを背負っていて、迂闊に踏み込めば大変な事になるかもしれない。

ここで賢い選択は、傍観者として過ごすのが、一番正しい答えなんだろう。

でも。

(でも、それでもあの子を助けたいって。“息子”として迎えたいって思うのは、いけない事なのかしら)

レナは手元のホットミルクを飲みながら、切実に願った。

翌日、仕事に出かけたカシウスを除く3人でロレントの街へ買出しに出かけた。

復興作業が続く街並み。

順調に作業進み、人口も再び増え始め、かつての賑わいが復調の兆しを見せ始めていた。

「これは……何です？」

「りんごよ？ フルーツの1つでね、とっても美味しいわ」

「……………これは？」

「梨ね」

「……………同じに見えるんですが」

「フフ。まあ、部類は一緒ね」

「とっても美味しいの！」

食品店前で買い物をするレナたち。ルシアは果物売り場前でジツと見ては何かを尋ねていた。

何も知らないルシアに丁寧に教えるレナと得意げに語るエステル。

(ルシアって何も知らないんだ。なら私が教えてあげよつと！)

そう決意するエステルであった。ここで他人を馬鹿にしない所が彼女の良い所であり、母のレナとカシウスによる教育の賜物であった。

「これ知ってる？」

「いえ」

「これはイチゴって言って、甘いの！」

「そうですか」

分かっているのか分かっていないのか解らない表情で肯くルシア。なんとも微笑ましい会話が続き、レナはニコニコしながら聞いていた。

結局買い物が終わったのはそれから1時間ほど後の話で、外に出ると主婦が多くみられるようになっていた。

通りを歩いてみると、見えてくるのは時計台跡地。  
未だ更地のままだった。

レナが後に知った事だが、時計台の中に避難していた住民がたくさんいたらしく、崩落の際に全員死亡したのだった。

死体の片付け、元々の時計台の文化的価値と機材の値段など、諸々の問題から未だ再建の目処は経っていない。

ロレントの街で一部だけ復興が進んでいないのは、少し異様な光景だった。

そこを通りかかった時、自然と3人の足が止まった。

レナがエステルとルシアに語りかける。

「懐かしいわね。ここが私たちが初めて会った場所……覚えてる？」

「もちろん！」

「……………ええ」

「君が居てくれたから、私たち親子が助かったの。ありがとう」

そつと背後からルシアを抱きしめる。

すつぽりと腰元までに収まる小ささに改めて驚き、己の決断を實行しようと思いを固めた。

レナの言葉に顔を背ける仕草を見せるルシア。それを見つつレナは屈んで同じ目線の高さに合わせ、手を重ね合わせる。

「実はね、貴方に提案があるの」

「……………」

「ねえ、ルシア君」

あなた、と続ける。

既にレナから聞いていたのか、エステルが目を輝かせて次ぐ言葉

を待つ。

「ウチの子に

私の息子に、ならない？」

「……………え？」

風が、心を突き抜けた錯覚を感じた。

言霊。言魂だ。

身体の芯に浸透してくる優しい声。まるで桜の花のような、観る者の心を洗うような願い。

『さすが　と　の子だね。まだ幼いのに聡明な子だよ』

『ねえねえルシア君？　ヴェーンに入会しない？　え？　お金はいらないから！』

『いいか、ルシア。人生は博打だ。最後の最後には絶対に勝つ勝負をしるよ』

『正義の心を忘れるな。己の魂に誓う正義を。それが大事なことになるのだ』

『なあルシア。この剣はなお前の親父も使ったんだぞ。当然、お袋さんもこの剣に助けられた。その剣をくれてやる』

『いい？　悪い人にはついていっては駄目だよ？　危なくなったら私を呼びなさい？　いいわね！』

『そう。そうだ。そうして私を滅ぼすがいい！　ルナの人間の所為で、ふたたび青き星を死の星へと変えるが良い！』

「……………申し訳ありません」

「……………そう」

「え……………」



心底悲しそうにするレナに対し、ルシアは言葉を続ける。

「……私には、その資格はありません」

「？」

俯いて、そう言う。

レナもエステルも、その意味する所が理解できなかった。

「……………帰りましょう」

レナから逃げるように、ルシアは歩き出した。

エステルは露骨に残念そうにして足元の石を蹴ったりしている。

「やっぱり駄目だったか……………」

レナも寂しそうに呟き、彼の後を追った。

諦めないけど、と呟いたのをルシアは当然聞こえていなかった。

「……………依頼が貯まっているかもしれないね」

家に戻ると、教会からルシア宛てに手紙が来ていた。

カシウスが連絡していたようで、マールからであった。

お世話になっている件の感謝の言葉がレナ達宛てにあり、怪我は大丈夫なのかといった言葉も書かれていた。

そこでクロスベルから随分と長い間リベールに滞在している事に  
気付き、『何でも屋』

の仕事が溜まっているかもしれないと、ようやく思い出すに至った。

「……レナさん。ありがとう」

2階から出れるベランダの扉を開け、バルコニーに出る。  
そこで振り返って、レナに感謝のことばを述べる。  
昼間の件について、ずっと引つかかっていた。

「エステル。貴方は温かかった」

あの何の邪気も感じない真つすくな笑顔には驚いた。  
貴方は確かに、レナの娘だと実感した。

「カシウスさん。怪しい私を見逃してくれた。配慮感謝します」

警戒していた自分を攻撃しなかった。  
妻と娘の為に見逃してくれた。

そんな人間もいるんだと、知る事ができた。

「……また、顔を出しにきます」

そう言って仮面とマントを纏い、いつもの仕事着に着替える。

もう一度振り返り、小さくお辞儀をする。

そして深夜の月が辺りを照らす夜の闇の中へと消えていった。

「……………」

資材置き場の裏で、カシウスが目を瞑りながら腕を組み、何かを  
考えていた。

「……………なるほど。最近噂の人物が彼だったか」

納得出来た事と、余計に納得できない事もあったが。

とりあえずは明日、妻と娘にどう説明したものかと頭を悩ます事  
になった。

## 第12話 ひとつの選択（後書き）

モンハンで更新が遅くなりました（笑）  
すいません。

次回は3年後。ついに物語はあの事件に入ります。

### 第13話 事件の始まり

春の新芽が芽吹き始めた頃、リベール王国ロレント地方のとある民家の窓から、間延びした溜息が響いた。

「はあ~~~~。春ね~~~~」

出窓から顔を出し、トローンと蕩けているのはエステルであった。春の日差しと朗らかな風が、人を陽気な気分させる。

七耀歴1196年に入った今年、エステルは10歳になった。

そう。

「あれからもう3年か~~~~」

「何が3年？」

「きゃああああ！」

突如背後から掛けられた声に、ビククリして悲鳴を上げた。

「な、何よ失礼ね。化け物に遭遇したみたいな……」

「シエ、シエラ姉！」

「ハア〜イ。エステル」

飄々として背後で手を振っていたのは、銀髪の日焼けした肌が特徴の女性。

大胆にも肌を晒した衣装に身を纏った女性は、ブライト家と昔から親交があった人物。

若干15歳にして、幼いころからサーカス団『ハーヴェイ一座』に身を寄せ一員としての修行を積んだ女性。

更にその一団が解散してからは、カシウス家に身を寄せ懇意にし、カシウスに修行をつけて貰いながら遊撃士になる為の訓練を受けている。

シエラザード・ハーヴェイ。15歳の女性であった。

「もうビツクリさせないでよ、シエラ姉」

「普通に入って来たわよ。溶けてたあんたが悪いのよ」

「ブーーーーー」

「はいはい。不貞腐れないの。というか曲がりなりにも遊撃士を目指してるんでしょ？ 隙だらけなんて失格よ」

「は~~~~い」

頬を膨らませて不満げな顔をしながらも、渋々肯くエステル。

シエラザードとは姉妹のような関係の為、エステルはシエラザードに頭が上がらないのだ。

「で、何が3年なのよ」

「ああ……うん。ルシアの事」

「ルシアっていうと、確かレナさんの命の恩人にして息子にしたいって言った男の子の事？」

「うん！ 大事な友達なの！ でもここ1年位は来てくれなくて……前は極稀に来てくれたんだ。まあ、それでも1日くらいしか居てくれないんだけど」

「ふ〜ん。会ってみたいわね、姉として」

「シエラ姉もきつと気にいると思う！ まあ……ちょっと変わって

る、っていつかズレてるっていつか……人形のように表情を変えない無愛想な子だけだ」

「……………酷い事言うわね」

シエラザードが冷や汗を流しながら言うと、エステルは何かを思いつくかのように憤慨し始めた。

「だってさ、聞いてよシエラ姉！」

「何よ」

「ルシアったら、街で目の前で困った人がいても無視！ 転んだ子供がいてもスルー！ 泣いてる人がいても目すら向けないんだよ！」

「そ、それはまた……なんとも」

「ちよっと見損なっただっていつか、幻滅したんだけどね。でも気付いたの。そうしないんじゃないかって、できないだけなんだって」

後から気付いたのだ。

どうにも感情の機微に疎い人だから。どうにも鈍感な人だから。

そうするべきとか、そうしなくてはならないとか、そう言った判断基準がないのだと。

「それにね。怪我した子がいたら、気付かれないように不思議な力でこっそり治したりしててね。とっても優しい男の子なの！」

「へえ」

能天気すぎる子だが、人を見る目が確かなのは知っている。まあ単純すぎて心配な時もあるのだが、人を惹き付け人を変える天性の才能がある子だ。

悪い子ではないのだろう。

レナさんやカシウス先生が家族として迎えたがっている子なのだ。

「近い内に会えるかしら」

「会えるに決まってるじゃない！」

「なら楽しみにしましょうか。そうそう、エステル。レナさんが掃除の手伝いしてくれって」

「は～～～い！」

慌てて1階へと駆けていったエステルを笑いながらシエエラザードも追った。

「お母さん、今日父さんは？」

「遅くなるって言ってたわ」

「また〜？」

「エステル、先生は最近忙しいのよ」

庭の掃除をしながらふと父の事を思い出し、エステルは口にした。最近は何に帰ってくるのが遅い。

しかも疲れているようでもある。エステルとしては少し心配だった。

そんなエステルの気持ちが解っているのか、少し困ったようにしていうレナとシエエラザード。



「危ない事してるのかなあ」

「そうねえ……難しい事件を追っているらしいけど」

本当の事は言えないわ、と心の中で呟くレナ。

現在カシウス・ブライトが追っている事件は、仮称『連続多発誘拐事件』。

一般的には家出をするもの、行方不明になるものが続出するという偽りの情報が世間に流れているが、実際は違う。

3年前にとある人物により齎された『人体実験のレポート』により、明らかになった、誘拐による実験、非人道的な行為。

遊撃士協会のA級とB級の中でも更に選抜された者がこの事件に関わり、現在は拠点の捜索に当たっている。

（あの人の話だといくつか発見できたみたいだけど、こういった大規模な拉致、誘拐事件においては人質を確実に助け出す為に、全ての拠点を調べ上げ、同時に叩かないと意味がないらしいし）

レナは少し難しい顔をしながら洗濯物を干す。

表情の変化にエステルとシェラザードは気付き訝しむが、レナは気付かない。

（それにあの人が言っていた……まったく知らない未知の結界術が張られていて、凄く気付き難くなってるって）

遊撃士の中でも凄腕の実力者たちであるA級の称号を持つ人物たちですら、結界に触れてようやく気付ける程の隠遁された結界らしい。

そして結界を潜り抜けるにも容易ではなく、破壊するのも難しい

という事だ。

更に問題がある。

それは国家間との遣り取り。この件は各国王と親衛隊隊長にしか知らされていないらしく、軍との協力が出来ない状態だった。それは当然、内通者がいる可能性があるから。

そして情報が洩れないようにするため、精鋭中の精鋭しか知らない事で、何をするにも行動は遅くなるジレンマ。

誰もが自分の本業がある為、この件ばかり時間をかける余裕はない。

クロスベル警察の中でも一部署も独自で動いているようで、遊撃士協会としても頼もしい限りだと言っていたが、それでも進展は遅い。

(こうしてる間にも、どれほどの子供たちが苦しめられてるのかしら。どれほどの子供が亡くなってるのか……)

無力な自分が悔しくなる。

自分は戦う術など知らない。そもそも全く素質がない事も知っている。

だけど、それでも思ってしまう。

「レナさん、どうかしたんですか？」

「お母さん？」

「ん、いいえ、何でもないわ」

「そうですか……」

「？」

(でも、きっと私に出来る何かがあるわ、きっと。それを見逃さな

いようにしなくちゃ)

「さあ、庭掃除ももう一息ね。がんばりましょ！」

「はい」

「わかりました」

(ね、そうでしょ？ あなた……………ルシア君)

クロスベル自治州。

その自治州の中に、市民を守る正義の組織がある。

その名も『クロスベル警察』。

警察とは市民を守る組織であり、市民と密着が理想の形だ。

だがクロスベル警察の実態は、お世辞にも良いとは言えない。

いろいろと問題があつて挙げる点はいくつもあるが、どんな警察かといえば市民の一言に尽きる。

『警察なんかよりも、遊撃士協会の方がずっと頼りになる』

全てはこれが語っていると見えよう。

だがそんな警察の中でも、優秀な者はいる。

『捜査一課』

その部署が、超が着くエリート集団の部署だ。  
まさに知と武を兼ねそろえた実力者の集団。

だがこの部署に所属する者たちは例外に洩れず皆プライドが高く、  
高慢であった。

故に市民にも人気はない。

そんな警察の実態だが、およそ1年前よりとある部署が注目を集  
めている。

エリート部署でも何でも無い部署。  
所属する警察官は若干3名。

だが破竹の勢いと解決速度、そして市民の為の捜査。  
クロスベル警察唯一の信頼がある部署といってもおかしくない部  
署。

その部署に所属するメンバーは何とも個性的な面子だった。

警察の中で上層部に煙たがれている、寡黙な男『セルゲイ・ロウ』

。寡黙だが剣技だけならかの剣聖に匹敵すると称される『アリオス・  
マクレイン』。

無鉄砲かつ独断専行が多い、だが優しさと懐の広さとリーダーシ  
ップを持つ青年『ガイ・バニングス』。

この部署はそんな3人が集められたメンバーだった。

そして今日も3人は事件の為に奔走し、今は宿酒場『龍老飯店』  
で遅い昼食を食べていた。

運ばれてくる激辛炒飯だの麻婆豆腐だのと、よくもまあここまで食べると云わんばかりの量だが、それも次々と無くなっていく。

「美味しい！ 人仕事後の飯は美味いぜ。なあアリオス」

「ああ。そうだな」

「解ったから、お前はもう少し大人しく食え」

口の中に入ったまま話すガイに、セルゲイが即座に突っ込む。敢えてはつきり言った。汚いと。

「ビールを飲めれば最高なんだがなあ！」

「まだ職務中だぞ、ガイ」

「夜にしるそれは。流石に飲んでたらマズイからな」

「はいはい。あゝゝ、いずれはロイドと飲み明かしたいもんだぜ」

「ロイド……ああ、弟だったな」

「ああ。アリオス、いずれ紹介するからよ！ 自慢の弟なんだぜ、俺の愛しのロイド君は」

「楽しみにしとく」

ガイの言葉に付き合わず、あえてスルーして肯いた。

若干不満そうにするガイだが気にせず、弟自慢を続けた。

「いや、でも身内贔屓なしで、あいつは捜査官に向いていると思ってる」

「ほう」

「セルゲイさん。まだ解りませんが、もし弟がこの警察に、捜査官になったとしたら、あいつは力になりますよ」

「そこまでなのか？」

「ええ。俺自身、自慢する訳じゃないツスが優秀だと思います。勿

論アリオスも優秀だ」

「ああ。お前たちは真正銘の優秀な捜査官だよ」

「へへ、あんがと。だけどあいつも、捜査する事に関しては俺より上だと思っんすよ」

「ほほう。それは楽しみだな」

「いずれあいつが入ってくる事になったら、セルゲイさんがピシバシ鍛えてやってください」

「そうだな。楽しみにするか」

何やら恐ろしい会話を繰り広げているが、的に上がっている少年は、某所で盛大なくしゃみをして寒気を感じ、近所のお姉さんを心配させていたのだった。

すると、近くからセルゲイの耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……………一番安いものをひとつ」

「それなら炒飯になりますかよろしいですか？」

「ええ……………それで」

横に目を向けると、カウンター席に座っている一人の少年がいた。自然とセルゲイの頬が緩む。

「ふふ……………あいつ」

「セルゲイさん？」

「どうかしたのですか？」

不気味な声を漏らしたセルゲイに、ぎよつとするガイとアリオス。そんな失礼な2人を無視して、セルゲイは席を立って近寄った。

「久しぶりだな、ルシア」

「……………セルゲイさんですか……………お久しぶりです」

どうも、という青髪の少年・ルシアにセルゲイは親しそうに話しかけた。

「久しぶりだな。大体……………1年ぶりか？」

「……………」

コクンと頷く。

相変わらず無口だなお前、と苦笑しつつ自分たちの席に誘う。特に断る理由も無いのでルシアもそれに従う。

目の前の不気味な暗いに無口で落ち着いた少年に戸惑っていたがいやアリオスを尻目に運ばれてきた炒飯を頬張る。

それに笑ってセルゲイが紹介した。

「ルシア。こいつらが俺の部下のガイ・バニングスとアリオス・マクレインだ」

「よ、よろしくな。ガイってんだ」

「アリオスだ。よろしく頼む」

「……………どうも。ルシアです」

小さく頭を下げて挨拶をする。

そして黙々と食べ始めた。

「お前は本当に変わらん」

「……………」

「無口なところも、感情を読ませにくいところも、こうやって一人でいるところもって意味だ」

「……当たり前です」

ガイは眉を潜め、アリオスは目を細めた。

「まだ遺跡巡りしてんのか？」

「……ええ」

「目的はまだ達成できないって事か」

「……」

「友達はできたか？」

「……」

「そうか。まあいずれ出来るさ」

セルゲイは黙々と炒飯を食べるルシアをチラリと横目で眺めて、溜息を吐いた。

(チツ。もう3年近く経つてのにまだ目が淀んでやがる。一体こいつに何があったんてんだ)

出会った時にあった、ソーニヤと共に再開した時にあった目の輝きがない。

迷いに溢れた、数多の感情の奔流でおぼれているかのような、濁った瞳。

何とかしてやりたいが、今一步彼に踏み込めない。

そんな時だった。今まで様子を見ていたガイが急にルシアへと話しかけ始めた。

「なあルシア君。いや、もうルシアって呼ばせてもらっぞー！」

「……」

「君の髪、本当に綺麗な青髪だけど手入れしてるのか？」





「さて……では本題の例の事件についてだ」

警察に戻って来たガイたち。

自分たちが所属する部署に戻って来て、それぞれの椅子に座る。

セルゲイの言葉に、ガイとアリオスは視線を鋭くし、警察手帳を開いて聞き入った。

「現在の拠点発見数は8。主にエレボニア・カルバート・リベール・クロスベルの4つの国を中心に存在している」

これまで各国や遊撃士が調べた『敵』の拠点情報。それが事細かに調べられ、手帳に記載されてある。

その中には、自分たちクロスベル警察の成果もあった。

「昨日、遊撃士協会から連絡が入り新たな情報がもたらされた」

「くそつ。また遊撃士か」

「そう悔しがるなガイ。事件を少しでも早く終わらせる為、被害に合う子供も一人でも少なくなる為だ」

「分かってるさ、アリオス。だがこうも向こうばかりだと悔しいだろ」

「俺たちは警察の仕事がある。本業を疎かにするわけにもいかん。その憤りは調査でぶつけろ」

「……分かったよ、セルゲイさん。俺だって子供の犠牲をこれ以上出すのは嫌だしな」

渋々、という表情で頷くガイ。

アリオスだって内心では悔しがっている。だがそれが表に出にくいだけだ。

セルゲイは苦笑して頷いて続けた。

「今回の情報提供者はあの『カシウス・ブライト』だ」

「剣聖か……」

「あの人か」

「ああ。アリオスにとっては先輩だったな。確か同じ流派の剣術だったか」

「ええ」

八葉一刀流という流派に所属するアリオスにとって、カシウス・ブライトは同門の先輩にあたる。

余談であるし、本人は認めないが、カシウスとアリオスの2名が、同門を出た人材の中で最も才能があると言われた過去を持っていた。

「そのカシウス・ブライトがリベールの拠点を一つ見つけた際に、関係者の会話を盗み聞いて得た情報だ」

「……………」

ゴクリと唾を飲む。

「今回の星、一連の事件を起こしている連中の組織名が分かった。  
その名も

D・G教団

」

「D・G……」

「教団……」

確認するように繰り返す言葉。

その言葉に、怒りと憎しみが込められていた。

「目的、関係者、指導者は未だに分かっていない。拠点も我々が知  
つての通り巧妙に隠蔽されているようで捜査は難航している」

「だろうな。あの妙な、何ていうか……結界？ とでもいうべきか。  
あれの所為でさっぱり分からねえ」

「ああ。お陰で気配も感じない。それどころか意識誘導の効果でも  
あるのか見逃しがちだ。問題はアレが何の技術なのかだが」

「その通りだ。導力機では無いということは、ラッセル博士やライ  
ンフォルト社が保証している。従ってアーツでもない」

「くそつ。不気味な奴らだぜ」

つまり、拠点数が把握できていないという事。

拠点数が把握できない以上、踏み込む事はできない。

拉致された子供たちが人質である以上、万が一取り逃がした拠  
点があつた場合に子供たちの身が危ない。

最悪、皆殺しに合う。それは看過できない。

なんとかしないと、そうガイが呟いた時だった。アリオスは急に  
手帳を置いてセルゲイに訪ねた。

「セルゲイさん。前から聞きたい事があつたんですが」

「何だ、アリオス」

「この事件、情報を掴んだ最初の件ですが、誰が拠点を発見・破壊したんです？　ずっと気になっていました」

「ああ、それは俺もだ。俺たちは教団の存在を知ったからあの訳の分らん結界にもどうにか気づける。それでも厳しいくらいだ。だが最初の奴は訳が違う」

最初は裏切り者や内通者だろうと思っていた。

だが事件を追うにつれ、この組織の異常さや隠蔽能力に気づき、その線は消さざるを得なかった。

そうなると、誰かが発見したということ。

「ああ、その人物だな。数年前から巷を騒がせてる『仮面』だよ」

「仮面!？」

「……………」

さすがに予想外だったのか、アリオスも驚いた表情をしていた。

義賊を気取った行動、警察や遊撃士のような行為に、両組織に所属している者にとっては好い感情はない。

「まあ、そうは言ってもその『仮面』も、その一件で負傷したらしい。一月くらい形を潜めた時はあっただろ？　どうやらそれが原因らしい」

「……………なるほど」

「む……………。大丈夫だったのか、アイツは」

怪我をしたと知って、心配そうにするガイ。好きでは無いとはいえ怪我したと知れば心配のようだ。

「とにかく、俺たちはこれ以上このクロスベルから拉致被害者を出さないように全力を尽くすぞ」

「了解」

セルゲイの号令で席を立ち、バツと敬礼を返した。

3人が頷きそれぞれがD・G教団の調査に向かうため、外へと飛び出した。

「だから、どうしてそこであの人を放っておくのよ！」

「……貴方からの依頼は旦那の浮気調査です。故に事実確認を行い報告しましたが」

「相手の女も一緒にいたんでしょ！ どうしてあの人を連れて帰ってこないのよ！ 今あの方は浮気してるって事でしょ！」

「……それは頼まれてません。それに何故連れて帰らなくてはいけないのでしょうか？」

「ふざけないで！ 信じらんない！」

怒り爆発した女性は仮面の主へ鞆を叩きつけると、涙を流しながらどこかへ走って行った。

ルシアは首をかしげる。

（何がいけないのでしょうか……あの方は既に夫の行為を知ってい

ました。だから私に依頼してきたはず。それなのに何故？)

頼まれた仕事を完璧にこなした。それなのに文句を言われた。

(やはり人間は勝手です。傲慢で欲深くて醜い。やはりアルテナと再会したら、私はルナの人々よりも青き星の再生を優先させるべきですね)

この3年で、人を観察して得た結論。

人は温かいが、それ以上に薄汚い生き物だと。

青き星の再生を優先してもらい、人々なぞ2の次に回すべきだと改めて思う。

一瞬、エステルやレナ、カシウス、セルゲイやガイやアリオス、ノエルやフランたちが脳裏を過る。

それを振り払うようにルシアは女性が去った方向へ背を向け、歩き出す。

代金を踏み倒されたが、それもいいだろう。

所詮それが人間だ。

(ああ、そういえばガイさんに次の休みに呼ばれていました。弟と幼馴染を紹介すると言っていました)

半年前に出会ったガイ・バニングスと交流を深めた結果、彼が別れ際に言っていた事を思い出した。

彼は人間にしては中々優秀だ。

自分が片手間に追っている事件にも本格的に追いかけているよう

で、次々と拠点を発見している。

(カシウスさんが言っていましたね……そろそろ潰したいが、敵の拠点数が分からないと)

国や軍の説得も終わり、後は尻尾を掴むだけらしい。  
だがそこが難航しているとの事。

まあ、そこはゾファアの結界に隠されている以上、ただの人間に発見する事は難しいだろう。

(……………放っておきましょう。これ以上深追いすると、迷ってしまふ。私はアルテナに会わなくてはならないのだから)

これでいいのだと、頭がそう言っている。  
だがこれでいいのかと、心が叫んでいる。

この数年、ずっと探してきた元の世界へと戻る方法。  
それがまったく見つからない。いや、そもそも帰る方法など無い  
のでは、と考えてしまふ。

ルシアは教会に続く階段を上って行き、夕陽で赤く染まった教会  
へと近づく。

「？」

何やら教会が騒がしい。

シスターたちが集まり、顔を真っ青にしながら相談していて、神父が警察関係者と思しき男性に何かを必死に話している。



ルシアは「ま、いいか」と思いつつ横を通り過ぎようとした。

その瞬間だった。

「ルシア！ 戻ったのですか！」

「……………どうかしたのですか、マーブル」

「それが、それが……………！」

マーブルはいつもと違い、激しく取り乱していた。

瞳からは涙が溢れ、顔色を真っ青に染め、肩や手を小刻みに震わせている。

そしてマーブルから告げられた言葉。

その言葉に、ルシアは凍りついた。

「皆が、ノエルやフランたちが！」

これが、悪夢の始まり。

始まりにして、一つの終わり。

「誘拐されたのです……！」

この言葉が、後に続く長い1日の始まりの瞬間だった。

### 第13話 事件の始まり（後書き）

あけましておめでとういっせいです。

新年のあいさつとさせていただきます。

## 第14話 愚かなのは誰

「夕方時間帯で、我々も参拝客への対応で一杯一杯だったので。もちろんそれも言い訳にしかありませんが」

その隙を突かれ、ノエルやフランを始め、ルシアが一番関わりが深い時間帯にお世話になっている日曜学校の生徒たちだった。

大勢いた生徒たちが一斉にいなくなった事に、只ならぬ予感を感じたシスターたちは警察に通報。

捜査した警察官によると、あまりにも不自然な展開から拉致されたと断定したらしい。

一人のシスターが事情を話してくれる。

「マールブルやセレナの動揺が酷く、とてもじゃないが話せる様子ではない。」

「……………ノエルが……………フランが」

どこか焦点が定まっていないうるシアの様子に、何とか気づくことができたマールブルが、自身の不安を打ち消すかのように背後から抱き締めてくる。

「信じましょう……………あの子たちは無事だと。必ず、必ず帰ってくる」と

「……………」

「あんなに良い子たちを、女神エイドスは決して見捨てたりはしないでしょう」

「エイ……ドス……？」

その言葉に、ルシアはマーブルの腕の中から離れ、一歩ずつ後ずさる。

「ルシア？ あなたも信じましょう。きっとあの子たちは、エイドス様がお救いくださると」

「……………」  
「絶対に、見捨てたりはしないわ」

『見捨てる』

『これ以上深入りするのはやめよう』

そう思っていた。だからここで見捨てるのも筋。無視して明日に備えて体力とアルテナの力を溜めなくてはならないのだから。見捨てる。

女神エイドスとやらが、助けると言っているのだ。

自分には無関係。

警察もいるじゃないか。遊撃士もいるじゃないか。

そう。だから。

「っ！」

「ルシア！？ あなたまでどこに行くのです!？」

戻れ、止まりなさい、そんな声が背後から投げかけられるのを無視。

青髪の長い髪を宙へと翻して、紅い外套を宙へと靡かせて。

恐るべき速度であつたという間に階段を飛び降り、駆けていった。

発見するのは簡単だつた。

ノエルやフランたちの魔力を辿ればいいだけなのだから。

一番長く接してきたから、人によって微妙に違う魔力派を辿るのは難しいが簡単だ。

自分が転移魔法をできるのも、土地という龍脈からこぼれる魔力を辿っているからだ。土地によって魔力は全く違うため、人間より遙かに探りやすい。

人間の元への転移は不可能でも、それを辿るのは容易だ。

「ようやく君も観念しましたか」

目の前にいる、妙な服を纏った男たち。その数10人。

「私を、教会から連れ去つた子たちの元へと連れて行きなさい。そうすれば、貴方達に協力しましょう」

こちらに来てから4年。襲われ続けて3年。幾度となく退け続けた。

「クククク。まあ良いだろう。その変わり、貴様が所持しているオ―ブメント関連は全てこちらに預けてもらう。武器もな」

文字通りの、丸腰。

これから先に何が待っているのか。

「なに、心配することはない。君はこれから我々の崇高な目的に貢献することになるのだから」

「……無駄話は結構。早く連れて行きなさい」

森の中を、歩いていく。

険しい顔で。

ただ今は、自分の目的からどんどん遠ざかっているとしか感じ取れぬまま。

男たちに連行されていった。

「それを許したのか!？」

「し、しかし、止める間もなく!」

「ふざけんな! 子供ひとり止められなくて、何が警察官だ!」

鬼のような形相のセルゲイが、一人の警察官に詰め寄った。

怒られている警察官は教会にいた警察官で、教会で起こった誘拐事件に駆け付けたセルゲイたちと、捜査一課の連中は事の顛末を聞いた。

その中で聞いた一人の少年の事。間違いなく後を追いかけたのだと、シスターたちが口を揃えて言う。

それを聞いた瞬間、普段は寡黙で怠けているようにしか見えないセルゲイの怒りが爆発した。

「セルゲイさん、落ち着いて!」

「落ち着いてください、セルゲイさん」

怒っていたガイやアリオスが慌てて押し留めるほど、セルゲイは怒り狂った。

その怒りは、その場にいる誰もが震えあがり、ガイやアリオスですら硬直してしまっただった。

襟を掴まれた警察官は涙目になり、握り拳をガイが必死に押さえつける。

セルゲイは荒れる息を整え、何度も深呼吸をする。

「……………とりあえず、今回の事は遊撃士教会、各国連絡班に連絡をとれ。彼らの力も借りるぞ」

「セルゲイ捜査官待ちたまえ。今回の事はクロスベル警察上層部から内密に捜査しるとの命令が出ている」

「できる限り情報も隠蔽しるとの事だ。今回の誘拐された中にクロスベル政府関係者や帝国や共和国のご息がいなかった事は幸いだ  
が、これ以上恥の上塗りは避けたいそうだ」

セルゲイの言葉に、捜査一課の者達が会話に割り込んでくる。

「なっ、と激口するガイを今度はセルゲイが押し留め、なるほどね  
と言わんばかりに頷き、

「お前の上司に言ってこい」

「は？」

「既に我々に、守るべき誇りもプライドもないだろうが！ あるのは貴様らの腐った性根だけだとな！！」

馬鹿にされたと思ったエリート捜査官の顔が羞恥に染まるが、セルゲイは無視して歩き出す。

その後ろにガイとアリオスが続いた。

そこへ、一人のシスターが駆け寄ってくる。

そのシスターは、ルシアと一番親しかった女性、マーブルであった。  
た。

「あ、あの。あの子を、ルシアを宜しくお願いしますっ！」

「貴方は……」

「私がいけなかつたんです。あの子が分不相応にしつかりしてたから、勝手にそう思い込んでたからっ！ そう思わないようになって日頃から接してきたはずなのに……っ！」

要領を得ない言葉に周りは首をかしげたが、3人は違った。



彼らは半年は、ルシアと交流をもった人物であり、少なからずソレを感じていたのだから。

「あいつは……馬鹿じゃない。きっと何かしらのアクションを起こす筈です。その時を見逃さないように我々は最善を尽くしますっ！」  
「お願いしますっ！」

たくましいセルゲイの言葉に、マーブルは涙を浮かべて何度も頭を下げた。

何度も、何度も。

（ルシア……お前を心配する人はいるんだ。だから、決して無茶するんじゃないぞ）

まずはクロスベル全域に検問を設置しローラー作戦だ、と心の中でガイは己に喝を入れなおしたのだった。

「なに？」

「それが、クロスベル支部からの緊急連絡で、クロスベル教会日曜学校に通っていた子供たち25名が、一斉に拉致されたと」

「25だと！」

「そしてさらに、その捕まった子供たちを追いかけて、一人の少年が後を追いかけて、行方不明だと」

「っ！？」

その情報に騒然となるリベール王国王都グランセル支部に在中する上級遊撃士たち。

全員がD・G教団対策班に所属しており、その腕前も一級品だ。

あまりの拉致数の多さに全員が顔色を変えて今後の動きを怒声を上げながら相談しあう中、遊撃士の中でも中心人物であり、最強の人物が階段を下りてきた。

皆がカシウスの登場に静まり返る中、カシウスはこう言った。

「その後を追ったという少年。その人物の特徴を教えてくださいか」

「あ、は、はい。少々お待ちください」

クロスベル、七耀教会、日曜学校。

それ全てに関係している子を、カシウスは知っている。

そして後を追えるほどの、子供ながらの実力者。

電話を切り、受付の人物が教えてくれた。

「件の子供の名は、ルシア。青い髪に黒い服と紅い羽織が特徴で、緑色の瞳をしているそうです」

「……………そうか……………ありがとう」

天を仰ぎ、顔を片手で覆う行為に、皆が怪訝そうにする。  
あのカシウス・ブライトが動揺している。その一点において皆は驚く。

「あ、あの。カシウスさん。その少年が何か？」  
「……………」

皆が答えを待つ。

「その少年は、私の知り合いだ……………そして、妻の命の恩人でもある。私にとっても恩人だ」  
「……………!!」「……………」

剣聖の恩人、と呟く声があちこちからした。  
その衝撃はどれほどだったのか。  
皆がポカーンと口を開けているのだから、どれだけ驚いてるかは推してしかるべきだろう。

「……………」  
「で、では急いで救出作戦を」  
「いや。それは早い」  
「し、しかし！」

一刻も早く助けたいだろうと踏んだ皆の気遣いを、カシウスは断った。

「助けに入るなら、全拠点を把握してからだ……………そうしないと、他の子供たちは」  
「っ！ そ、そう、ですね」  
「くそっ!!!!」

カシウスの無念さ、悔しさを代弁するように、若い遊撃士の一人が地面を蹴った。

その顔は、悔しさのあまり泣きそうな程だ。

(すまない……ルシア君。すまない。すまない……っ！)

遊撃士の身分故に、迂闊に身動きが取れない。  
軍隊でも同じ事。

ふと、気がついた。

これを嫌っていたから、ルシアが遊撃士にならなかったのではないだろうか。

身分に縛られて動けないのが嫌だから、断ったのではないかと。  
「軍隊にいても、遊撃士でも、大切なものが守れない時は守れないのだと。」

「待つんだ。チャンスを。絶好の機会を」

遊撃士たちは、己の無力さを思い知らされた。

「お姉ちゃん……どこにお？」

「大丈夫だよ！ お姉ちゃんが守ってあげるからっ！」

目を覚ませば、見たこともない建物の部屋に入れられていた。

周りに同じように眠らされていた子供たちは一斉に起きて、お母さんどころ、パパあ、と助けを求めて声を上げていた。

涙を流す者、恐怖からガタガタと震える者、反応はそれぞれだが、誰もが恐怖を感じていた。

その中で、ノエルとフランの姉妹はお互いに体を抱き締め合い、お姉さんでしつかり者のノエルが気丈にもフランを宥めていた。

唯一泣かずにいるだけで、ノエルは本当に類稀なしつかり者だと分かるが、それでもノエル自身に現状を打開する手はない。

（これ……きつと今話題になった、子供の失踪事件ってやつだよね。それに巻き込まれちゃったのかも）

誘拐されたと理解する。

自分自身、頭の回転は早い方だと思っていが、今は自分の冷静さに感謝する。

（どうしよう……助けを呼ぼうにもどうすれば……）

窓も無く、通気口らしきものもない。

脱出のための案を練ろうとした時であった。

ガチャンと、扉の鍵が開く音が。

皆が硬直し、扉の先を見つめる。

そこから現れたのは、不気味な服に包まれた男たちと、もう一人、フランと同年齢にして、幼馴染の男の子。

妹は少し苦手に行っているようだが、自分はとても好感を持っている大親友。

「ルシア!？」

自分が上げた大声に、咄嗟に銃を向けられる。

うっとうめき声を上げて萎縮するノエルに、ルシアは無表情な顔から険しくなる。

「……お止めなさい。貴方方が欲しがっていた私がわざわざ捕まっ  
てあげたのです」

「ふん。武器もないお前になにを気後れする必要がある」

「……………」

「こっして連れてきてやった。約束は律義にも守ってやったんだ。  
むしろ感謝しろ」

「……………そう来ると思っていました。人間は欲深い、救えない存在です  
からね」

ルシアの言葉に、男たちは武器を向ける。

「ルシアっ」

「ルシアくんっ」

小さな声があちこち上がり、ノエルとフランは幼馴染を心配そうにする。

刃物を四方から突き付けられ、首元などは少し刺さったのは血す

ら流れ落ちる。

心配する彼女たちへ視線を向け、周りにいる顔見知りの子たちへ顔を向ける。

どの子も3年前より知っている。

誰もが、自分の歌を喜んでくれた。

皆の視線が、自分を気遣っているのが分かる。

「……本当は、来るつもりはなかったんです」

「え……」

「人間は最低だと分かりましたから。見捨てるつもりでした」

まったく何でこんなところにいるのか、と心底自分に呆れているようだ。

目を瞑り、溜息。

そしてゆっくりと目を開け、彼女たちに視線を向ける。

「ノエル。フラン」

その淀みない優しい声に、ドキリとした。

「セルゲイに伝えてください。しばし待て、と」

「え？」

「さすがに、ここにいる全員を動かすほど、私は力が戻ってません」  
「何を……」

フランが呆然と声を漏らした。

彼女は嫌な予感がしたのだ。この瞬間、自分の予感が当たってしまふという。

「逃げるのです

」

手を彼女たちへ向ける。

「何をっ!」

「やめろ! 殺すな!」

不審な動きを見せたルシアに斬りかかろうと男たちだが、リーダーらしき男に制止される。

その一瞬の隙を、見逃さない。

『逃げて……逃げて……ヒイロお!!』

(今の記憶は……)

どこかに座っていた。何かを持っていた。

そして誰かと見ていて、それを誰かと誰かが優しく教えてくれた、そんな記憶。

奇しくも、その行為も動作も、全てが重なった。

「……もう、あの子のように死なせないっ!」

手のひらに集まった収束光は、青。

光はどんどん凝縮され、そして一瞬全てが消える。

ノエルが、フランが叫ぼうとした瞬間。

光は放射状に放たれ、子供たちは次々に消えていく。



ノエルが最後に見たルシアの顔は、無表情ではなく、笑っていた。自分に対して、周りに対して、そして、ノエルたちが助かったことに対して。

「ルシ  
」

その声が聞こえる事は無かった。

ルシアは己の魔力が空っぽになったのを悟り、意識がなくなっていく。

男たちの怒声が遠くの方で聞こえる中、ルシアは思った。

（何で私は……こんなところにいるのか……本当に、愚か……）

本当に、愚かだ。

人間の身にまで落ちた、自分が。

## 第14話 愚かなのは誰（後書き）

転移の魔法は莫大な魔力を消費します。当たり前ですよね。  
ルーラとは違いますよw

それを25人分。

昔のルシアならいざしらず、弱って人間になったルシアにはこれが限界です。

## 第15話 記憶

白い光。

淡く、眩しい光が照射されている。

何処かに寝かされている？

解らない。

自分の今の大勢？ 解らない。

自分とは何だ？

自分？

解らない。

今はどこ。

何がどうなっているのか。

解らない。

身体が熱い。

浮遊しているような、地面に刺しつけられているような。

ここはどこ？

永遠と続く自問。

苦痛と空白の中で、意識が朦朧としつつもどこかでそれを考えて

いた。

(……わからない)

まどろみの中で、彼は諦めるように目を閉じた。

「凄まじい！ 凄いぞ！ 何だこのデータは！！」

「これほどとは……」

「もっと薬品を投入しましょう。これまでの遅れを取り戻せます」

「おいおい、殺すなよ。ギリギリの所ではしっかり生かしておけ。」

「まだ使うんだからな」

狂喜乱舞。まさにその言葉が相応しい。

ある者震えあがり、ある者は狂ったように笑い、ある者は嬉々として次のデータを取るために走り回る。

これまでの被験者が塵に思える程の数値。

実験用マウスではデータが取れない、だが人間に投与すればどうなるか予測がつかない薬品を次々と投与していく。

そして投与した結果を見て、更なる改良を加えて投与。

薬品の進化。

医療の進化。

目の前の『実験体』には、何の遠慮もいらぬ。

とにかく投与し、データを撰れ。

通常ならどんな人間でも廃人になる筈の薬品を投与しても、痙攣や呼吸不全を起こすだけで死には至らない。

まさに。

まさに最高のテストボディ。

「どうだい、件の少年は？」

「最高の素体です。どの実験に対してもこれまでのデータを大幅に覆す結果を叩きだしているようで、化学者たちは大喜びです」

白い部屋だった。

その白い部屋にいる、白衣を着た男。そして付き添いの男たち。

白衣を着た男は口元に笑みを浮かべ、その言葉に心底満足そうに肯いた。

「それは素晴らしい事だ。それでこそこれまで幾度となく刺客を差し向けた甲斐があったというものだ」

「全くですな。これで例の計画も順調に進める事ができる」

「分かっているな、」

「もちろん。ああ、そういえば例のグループはどうなってます？」

「ああ、あそこか。あそこは独自に進めているようだ。だが一度く  
らいはこのモルモットを貸してやった方がいいだろう。あそこにい  
る連中もこのモルモットを欲しがっているそうだ」  
「ふむ……勝手に暴走しているのに勝手な。まあ、だがいいだろう。  
それはそれで面白い」

ニヤニヤと白衣の男は笑う。  
いろいろなコミュニティが、あの実験体の少年を欲しがっている。  
最高の素体を。

自分たちはついに手に入れたのだ。  
人間の中から誕生した突然変異種を。

「そういえば、外の対応はどうなっている？」  
「はっ。あの実験体がどうやって逃がしたかはまだ分かっておりま  
せんが、どうやら遊撃士協会が保護したようで」  
「ふむ。それなら手出しは無用だね。しかしどうやって……」  
「そんな事よりここの居場所が知られたらどうする!？」

周囲の男たちの怒声に、白衣の男は冷静に答えた。

「それは大丈夫でしょう。全てのコミュニティは結界によって守ら  
れている。そしてコミュニティの存在箇所は洩れようがない」  
「何故そのような事が!？」

男の妙に落ち着いた言葉に、1人の男が苛立った。  
男の言っている言葉には何の根拠もない。そもそも結界の事もあ  
る日突然に彼が施したもので、詳しくは知らないのだ。

説明を求めた男だが、白衣の男は卑下た笑みを浮かべて全員に云

い放った。

「唯一、唯一突破口を開けた鍵が、我々の手に落ちた。それで十分なんでね。ククク」

「くっ……」

「誰もコミュニケーションを探る事はできない。そして時期尚早に捕まった彼にも、何も出来やしないさ。ククククク」

その笑い声は、邪気に充ち溢れていた。

不気味なほど響き、周囲の部下や同等の地位にいる者ですら、彼の気配に鳥肌が立ち怖気立った。

（全ての鍵がこんなにも早く僕の元に来るなんて……ああ、やはり世界は僕を後押ししているということか！）

既にキーパーソンを入手している今、もはや何も怖いものはない。彼も気を失い続けていて、既に半壊状態だ。

理性があつたならまた別だが……今となつては薬漬けの為、その心配もない。

（フッフ……全てが計算通りだ……）

白衣の眼鏡をかけた男性は、眼下で眠り続ける少年を見下ろし、不気味に笑い続けた。

「それで、保護した子供たちの容態は？」

「皆、心身共に安定しております。実験に入る前だったのが幸いだったようです」

「そうですね……それは良かったです」

「もちろん精神的にショックを受けている子はいませんが、両親に再会したら驚くほど安定しているようですし、今後とも精神科などのケアも行っていく予定です」

リベール王国、王宮・女王の間。

女王の私室にて、カシウス・ブライト、リベール王国軍トップのモルガン将軍、そしてクロスベル代表としてセルゲイ・ロウ、エレボニア帝国中将ゼクス・ヴァンダール、カルバート共和国大使エルザの5名が集まっていた。

女王を上座に全員が円形に座り、誰もが難しい顔で資料を読んでいる。

ここに集っているのは、各国の重鎮。信頼が厚い代表者だ。

そして今回の事件『D・G教団事件』における窓口、各国の代表者でもある。

それぞれの勢力が一同に介し、恨みや怒りや思惑をぐっと堪えて



今回の事件を収束させる為に極秘裏に集まった。

リベール王国女王アリシアの問いに、子供たちが保護された際に真っ先に駆けつけたセルゲイが答えた。

女王はその答えに安堵し、そしてすぐに表情を暗くする。

ゼクスが眉間に皺を寄せたまま、セルゲイに問うた。

「それで、保護された子供たちから何も新しい情報は得られなかったのか？」

「ええ。誰もが気を失っていたようで、目を覚ませばどこかの部屋に閉じ込められていたそうです。場所を特定しようにも窓も何もなかったそうです」

「それで特定しろというのは難しいですね」

エルザがセルゲイの言葉に同意し、小さく溜息を吐いた。

捕まった子供が無事に奪還できたのは嬉しいが、それでも事件事態に進展はない

のだから。

すると、今まで黙っていたカシウスが口を開いた。

「セルゲイ殿。一つ聞きたい」

「何でしょう」

「子供たちを取り返したのは……やはり？」

「……………捕らわれた子供たちを追いかけた少年だそうです。子供たちが皆証言しています」

「……………」

その言葉に、カシウスは机に肘をつき両手を握りしめで頂垂れた。その様子に驚いたのはモルガン將軍であつた。

元々、モルガン將軍はカシウスを手塩にかけて面倒みていた。自分の後継者にと思つていた程で、カシウスが軍人時代にはとても仲が良かった。

だがカシウスが遊撃士になつた為に彼に裏切られたと思い、彼と遊撃士という存在に激しく怒つていたので。

しかしそれもこの場ではグツと堪えていた。彼の過去にとある出来事があつてから『子供たちが犠牲になる』というこの事件に対して並々ならぬ意気込みがあつたからだ。

そして今、カシウスのその様子に驚いている。今の彼は妻が戦争で重傷を負つたと聞かされた時に匹敵していると思つたから。

「どうしたカシウス。その少年の事を知っているのか？」

「ええ……」

「ふむ。しかし大した少年だな。深追ひした事は褒められたものではないが、未知の転送技術はさておき全員を助け出した手腕。軍に欲しいくらいだ」

「そつという問題では無いでしょうモルガン將軍。その結果、彼の命は危うくなつた。1人と25人。比べるまでもない数字計算ですが、共和国としてはそれを敢えて同じ重さとして捉えているのです。故に少年の事は共和国としても救出には力を貸すつもりです」

「ふんっ！ そんな事は分かつておるわ！」

「ならいいのですが……その発言は不謹慎というものです」

「双方落ちつけい。ここで言い争つても仕様があるまい。それより帝国としてはその子供たちを『送つた』という方法を聞きたいのだが」

「それは……誰にも分かつておりません」

セルゲイの言葉に「むゝ」と唸るゼクス。

転送系のアーツなど存在しない今、どうなったか気になるというのがゼクスの意見であった。

それに反応したのは、近年まで戦争していた共和国であった。

「あら。そんな事を調べてどうしようというのかしら帝国は」  
「なに？」

エルザは髪を弄りながら侮蔑の視線でゼクスを見た。

「転送手段を調べて実用化し、今度はそれを使って戦争でもするつもりかしら？」

「なんだと!？」

「貴方たちは本当に好戦的ですからね。本当に、油断ならないハイエナだこと」

「きさま!」

「やめんか2人とも!」

「お、おいおい。そんな言い合いしている場合じゃないだろ」

犬猿の仲である帝国と共和国の代表の2人が喧嘩を始めた事で、慌てて仲介に入るモルガンとセルゲイ。

しかし2人の罵倒は止まらない。

女王も困ったように眉を顰め、どうやって諫めようか考えた時であった。

ドン、と机を叩く音がした。

「……………」

視線が集まった先にいたのは、拳を振りおろした大勢でいたカシ

ウス・ブライトであった。

彼は鋭い眼光でゼクスやエルザを見詰めていて、静まり返った室内でゆっくりと席から立ち上がる。

「……図体でかいだけの大人が」

ポツリとポツリと呟くカシウス。

その声が、不自然なほど室内に響く。

その場にいる全員が、カシウスの言葉ひとつで鳥肌が立ち、毛穴から汗を噴き出した。

これだと、モルガンは思う。

これが自分が見出した、カシウス・ブライトのカリスマ性だと。

「この場で醜く言い争う」

カッと頬を赤くしたのは、ゼクス。

「そんな間抜けな大人たちより、ずっと身体も小さい、幼い、非力な子供がずっと役に立ち、そして今もなお苦しめられているだろう」

エルザはその言葉に目を伏せた。

カシウスの言葉に痛い所をつつかれ、己を恥じた。

セルゲイも悔しそうに顔を歪め、勢いよく椅子に座る。

「我々に出来ることは、ただ一つ」

女王アリシアが、カシウスと視線を交わしてコクンと頷く。

「今こそ、1つに集う時。協力を、お願いしたい」  
頭を下げるカシウス。

そして席を立ったのは、セルゲイだった。

「クロスベル警察特別捜査2課、セルゲイ・ロウ以下2名。喜んで傘下に加わらせて頂きたい」

「ありがとうございます」

「もちろん、リベール王国軍も参加する。宜しいですね、陛下」

「勿論です」

「ありがとうございます」

エレボニア帝国大使・エルザがゆつくりと立ち上がった。

「我々も、力なき子供たちが犠牲になるのは容認できません。絶対にその卑劣な行為は許してはならない」

「……」

「だから我々共和国も、参加させてください」

そして最後となった、エレボニア帝国。

「我々がこれまでやってきた事は、如何なる理由があろうが釈明できない。好戦的国家と言われても、蛮国と揶揄されても否定できない」

それだけの事を、エレボニア帝国はやって来た。  
戦争を。破壊工作を。

「だが、それでも子供を持つ親としてこの事態は容認できない」

席を立つ。

「この同盟、カシウス・ブライトが陣頭指揮を執りたまえ。そうすれば、安心して我々も同盟に参加できる」  
「私が？」

その言葉に驚いたのはカシウスだった。  
だが驚いたのもカシウスだけ。

見ればセルゲイも、エルザも、モルガンも、そしてアリシア女王までもが肯いていた。

「……分かりました。その大役、拝命します」

全員の手が差し出される。

5つの勢力が、1つに重なった。

これは夢だ。  
それが分かった。

だって目の前に、自分がいるのだから。

（あれは……私……私って何故分かるの？ でも、でも分かる……  
あれは私だと）

満面の笑みを浮かべていた。  
笑顔で走り回っていた。

走った先にいたのは、2人の人物。  
青い髪の女性。茶髪の男性。

2人が振り返る。

その姿に、心臓が激しく脈打った。

（あの人たちは……）

走って行った私が、2人の元へ飛び込む。  
青い髪の女性にぎゅーっと抱きしめられ、嬉しそうにする私。

『ねえ、！ 私ね、ついに使えたの！』

私が使ったのは、攻撃魔法。  
アルテナの力の加護を受けた、強力無比の力。

その力を見たとき、2人の人物の顔が強張った。  
そして2人は肯き合い、私の元へとやってくる。





夢が、弾けた。

「……………」

重たい目を開けた。

身体は動かない。

でもそれは今となっては些細な問題だ。

「……………」

水分を長い間取ってなかったからだろうか。  
声が出にくい。

本来の自分なら、こんな事になることもないのだ。  
たかが人間のものです、こんな風に身体が動かなくなる事もない。

でも今のこの身は人間。

だから動かない。

されどそれも今となっては些細な問題だ。

なんて大事な事を忘れていたのだろうか。

まあそれも仕方ないことだ。幼い身でありながら休眠状態になりクリスタルの中で1000年ほど眠り続けていたのだから。

おかげで、『いろいろと間違った思い込み』がいくつもあった。もちろんまだ思い出せない事が多数あるけれど。

だが、まだ取り返しが着く。

邪魔なものは全て破壊しよう。  
障害物は全て排除しよう。

この瞬間、この時のみ、ルシアは己の使命以外の事を完全に忘れていた。

それは幸いな事なのか。

それとも不幸なのか。

「私は、青き星のルシア。

女神アルテナの半身として生まれた、青き星のルーシアの息子にして、アルテナに限りなく近い存在」

さて、力を取り戻そう。

力が入らない手を、必死に支えながら頭上へと振り上げる。

集え。

「アルテナの光」

この世界の魔力が、全ての魔力がルシアの元へと

。

「……だれ？」

小さな声が、それを止めた。

近隣の牢屋に、同じように捕まった子供がいるのだろうと、ルシ  
アは即座に察する。

「ええ。居ますよ。貴方は？」

“はきはきと喋る”ルシアの言葉に、その声の主は反応する。

その声は、何の抑揚もなかった。

何の感情も宿っていなかった。

「……わたし……ティオ」

これが、後に長い付き合いとなる1人。

「ティオ……プラト……」

ティオ・プラトーとの出会いであった。

## 第16話 ティオ・プラトー

「ティオ。大丈夫ですか？」  
「……うん」

何度か呼びかけてようやく帰ってくる反応。  
その声は衰弱しているというか、全く覇気がない。

仕方ないといえば仕方ないのだが、ルシアは彼女に定期的に語りかけた。

（危なかった……アルテナの力を集めていたら、ここを全て吹き飛ばすところでした）

今ルシアを動かしているのは、蘇った記憶による原因が大きい。  
アルテナの使命だけではない。

それは父と母の友人たちであり、自分にとっても師である人たちの教えが大きい。

例えばあの施設で戦った青年。その際に無意識に振るった拳の師。

『私に拳法を？ それは早くないかい？』

『いえ、教えてほしいんです』

『うーん、まあいいんだけど。でも一つだけ理解すること。ルーシアとヒイロの子供だから理解できるって信じて、先に言っとく』

父の仲間たちの中で父との付き合いも長く、長い時間背中合わせ

に前線で戦ってきた、ジーンさん。

『私の拳は、人々を蹂躪し暗殺する、血塗れの拳・魔竜拳。そして人々を助けて活かし守る活人拳である青竜拳。この二つが宿った拳法だという事を。あんたがこれを覚えるなら、必ず弱き人々を守る事。いいかい？』

『はい。私の使命は青き星の人々を守る事にあるんですから。望むところですよ』

そう言っただけで教えてもらった昔があった。

『ヴェーンの魔法？ うーん、それは殆ど研究の為になっちゃってるけど……でもね、ひとつ言える事は、魔法は自分の大切なモノを守る為にあるんだってことかな』

最大の魔法都市の党首であるレミーナさんから教えてもらった魔法の数々。

『自分の剣か。いいだろう。それがルシア、君の正義を守れるのなら、私が教えよう』

父も実力を上げる為に鍛えてもらったという、白竜の騎士・レオさん。

『俺の治療知識を？ 別に構わないが……ちょっと早くないか？ お前はまだ4歳にもなってないだろうに。ま、早いに越したこともないか』

治療の専門家のロンファさん。奥さんには頭が上がってなかった。ちなみに奥さんはレオさんの妹さんであった。

『この剣はな、お前の親父・ヒロも使った剣なんだ。そして最後のドラゴンマスター・アレスが使ったアルテナの剣でもある。その意味、分かるな?』

最後のドラゴンマスターの相棒であり白竜が人間の身に化けた人物、ナル。

誰もが可愛がってくれた。

誰もが教えてくれた。真剣な瞳で。

やっぱり話に記憶の欠損があるけれど、それでも教えられたところは覚えている。

だからここを破壊しなくて良かった。

だからここからは逃げられない。

そして何より、自分は1人の子を守れなかった。初めて温もりを教えてくれた子を。

何より守れなかった。青き星の命たちを。

(力が無くなった……か。確かに今もカラッポだけど……強制的に集めようとすれば集めれる)

『アルテナの力』。

誤解され易いがそれは魔法の力ではない。

端的に述べれば『破壊と創造の力』である。

万物に宿る全ての魔素、エネルギー、それらは全てアルテナの力。

無から有を生み出すのも、無に帰すのも、全てアルテナの力。

だから世界が変わろうが、そこに命がある限り、それはアルテナの名の下に命令すれば集めることは可能なのだ。

自分だけの魔力量だけで今まで戦ってきたのだから、なんとも間抜けな話である。

（さて……今はすべての拠点を探る事が至上命題。そしてゾファアの気配を徹底的に探り、この連中を隠れ蓑にしていなかどうかを探らないと）

やる事は、たくさんだ。

「起きているのだろうか？」

「……………」

何時も通り実験室に連れ込まれ、体中に薬という薬を投与された。その薬品は全てが劇薬。



人間の身に落ちたとはいえ、自分でさえ全身の苦痛と不快感に悲鳴をあげそうになるのだ。

普通の少年少女に耐えられる訳がない。

視界や手足を拘束されて何も身動きが取れず、何も見えない。

その中、誰かが話しかけてきた。

若い声だと、思う。

「……………何の用です？」

「おやおや、素直だね」

「……………」

「気分はどうだい？ 君は明後日、他部署へ移送されるんだ。明日の実験は更に厳しいものになるだろう。少し労っておこうかと思つてね」

「……………好きになさい。ただ1つだけお願いがあります」

「ふむ。お願いとは面白い……………いいだろう。普通なら無視する所だが可能な限り聞こうじゃないか」

男が何やら考え込む仕草を見せ、口元を歪ませて興味深そうに了承する。

尤も、視界を塞がれているルシアにそれは見えない。だが漂ってくる空気が、それを感じさせた。

「だが分かっているね？ 君が下手な事をすれば捕まっている子供たちは皆殺しだ。そして新たに実験体を捕まえてこよう」

「……………分かっています」

「最近君ばかりで他を放置していたが、君がいなくなった後は再び彼らの実験を再開する予定だ。今生の別れとなる可能性もある。それを踏まえた上で、精々考えたまえ」

「……………どういっつもりです？ そんな事を教えたら……………」

無茶をしても何かをやらかそうと考えてしまっただろ、と言外に含める。

だが男はそれは分かっていると肯き、続けた。

「だからこそ、だよ」

そう。

男にとってそれは悦楽だった。

「逃がそうとする。だが他の実験体の事を考えるとそれはできない。君はその現実には板挟みに遭い、悩み、苦しむ」

それを客観的に見るのは、どれだけ面白いだろう。楽しいだろうか。

「精神的に追い詰められた君を、我々が更に研究する。徹底的に。いたぶりながら。最高じゃないか！ どれだけ素晴らしい結果が出るだろうか！」

「……………」

そういうことか、と心の中で毒吐くルシア。

しかし決してそれを表には出さない。それはこの男を喜ばすだけだと思ったから。

「ふむ。まあ楽しみたまえ……………この状況を。そしてこれからをね」

男は笑いながら、扉を開けて出て行った。

ルシアは変わらず拘束されながら化学者たちに取り囲まれ、辛く

苦しい実験が再開された。

(今日は、なにも聞こえてこない……よかった……)

自然と、安堵の溜息を吐いた。

そつと両耳に当てていた手を離し、ベッドの中で寝返りを打つ。

よく耳を澄ましてみると、あちこちから身動きがする音がしたり、溜息やすすり泣く声がする事から、皆が自分と同じ気持ちなんだと分かった。

水色の髪の子は辺りを窺いながら毛布に包まっていた隙間から顔を出した。

その少女の名は、ティオ・プラトー。

彼女はこの数日の施設内の動きに不気味がり不安に思っていた。

(でも、また明日から……ひよつとしたら、また始まるのかも……)  
訪れる未来に絶望する。

嫌な考えは止めようとするが、全くといっていいほど止まらない。

しかしそれも仕方なかった。

ティオを始めとし、この施設にいる子供たちは皆、生まれて初めて『断末魔』という叫びを耳にしたのだ。

身体中に流される高圧電流。猛毒のような薬。身体に埋め込まれる何か。

全てが痛みとして自分たちに襲いかかり、悲鳴が上がる。

泣き叫ぶ声。

痛みを訴えた悲痛な叫び。

そして命の灯火が消える寸前に上がる、人の断末魔の叫び声。

そしてボロ屑のようになってしまった『元子供』のソレ。

運び出されてゴミのように廃棄されたソレをみたティオたちは、本気で怯えた。

子供ながらにそれが何なのかを理解し、心の底から恐怖した。

次は自分なのかと。

明日は自分なのかと。

毎日毎日、痛みと痺れと不快感に苛まれながら、ずっと怯えていた。

だがそんな日常は一変した。

ある日から、毎日続いていた実験が行われなくなったのだ。興奮したかのような研究医たちがバタバタと走り回っていたあの日。まるでおもちゃを与えられた子供のようににはしゃいでいた。その姿をティオは昨日の事のようにはっきりと覚えている。

胸の中に湧き上がる怒りを堪えながら、およそ1週間、放置された。

そこまで考えて、ふと思い出す。

(そういえば……隣の部屋にいる男の子……ルシアって言ったっけ。どうなったんだろう?)

ティオは昨日から隣の部屋にいる事を知った男の子のことを思い出した。

何やら声が聞こえてきたから問いかけてみたらそこにいて。そして少し会話をし、お互いの名前を知った。

その子だけ今日も連れて行かれたようで、どうなったかとても心配だった。

すると、突如部屋の扉が開かれた。

ビクッと震えて、そっと毛布の隙間から様子を窺うと、武装した兵隊と研究者に連れられて入って来た1人の男の子が目飛び込んできた。

その子は身体中に包帯のようなものを巻かれていて、腕に注射を打たれた痕が見えた。

皆がベッドの中で蹲り警戒している中、少年をティオの近くのベッドに放り込んだ兵隊たちはすぐに出て行く。

しばらくしてティオや同室の子たちは恐る恐る様子を窺うと、1週間前に空き部屋になってしまったベッドに、その少年は倒れ伏していた。

筋肉が痙攣を起こしているようで、腕や足がビクビクと動く。その症状は、自分たちもよく知っている症状だった。

皆が心配そうにその少年に近づく。ティオも身体を起こして、隣のベッドの少年を窺うと、少年の瞳と視線が合った。

「あ……」

「……もしかして、起こしてしまいましたか？」

「う、ううん……大丈夫……です」

自分の方が、今は大変な目に遭っているはずなのに、少年は自分へと気遣ってきた。

そんな少年に、ティオは驚きと共にその声で思い出した。

「もしかして……昨日の、ルシアさん、ですか？」

「ええ……そういう貴方は、ティオさん、ですね」

「は、はい。あの、大丈夫ですか？」

心配そうに近づいてくるティオや他の子に、ルシアは苦しそうにしながらも必死に笑みを浮かべて肯いた。

「ちょっと、起こして貰えますか？ 体が動かないもので……」

「あ、は、はい」

「うん」

皆が、ルシアの身体を起こしてくれた。

「じゃあ、明後日にはいなくなっちゃうの？」  
「……ええ。申し訳ありませんが」

室内にいた1人の女の子が不安そうに声を上げた。  
今日まで実験されなかった事について誰かが口にする、自分の  
所為でこれまで実験されなかったと説明する。  
そしてそれは明日まで。

明後日からは再び拷問という名の実験が始まる。

「本当は、この部屋にももつとたくさんいたの」  
「でもどんだんいなくなっちゃって」  
「血もたくさん出て……」  
「顔とかぐちゃぐちゃになってたのっ！」

過去のそれを思い出したのか、ぐしぐしと泣き始める一同。  
泣かない子も瞳が虚ろになり絶望の色しか映していない。

ルシアの横にティオが座る形になっていたが、ティオも後者に該  
当し、哀れな程目が死んでいる。

その様子に、ルシアは思った。

（私には、この子たちを今すぐにも助けられる術がある。けれどそれを行ったら……）

グツと下唇を噛みしめる。

そもそも何故ここに留まり続けているのかも、可笑しな話だ。

（この子は恐らく、私と同じ年齢……）

隣にいる、ティオという少女を見た。

この子のおかげで、この子たちを吹き飛ばさずに済んだのだ。

それは、きつと、この子に感謝しなくてはならない事なのだろう。

ふと、手が握られた。

見ると、ティオが自分の手を重ねていた。手は震え、それを必死に押し殺そうとしている。

温かいはずなのに、手が冷たい。

冷たくて、生が感じられない。

自分に出来る事は、ない。

そう思い、ふと思い出した。

心が、胸が温かくなる方法。

それを自分は知っている。

母様もよくソレを行っていた。自分に聴かせてくれた。それを聴いて、自分はとても安心し、嬉しかった記憶。



「ラ~~~~。ラ~~~~ラ~~~~ラ~~~~」

女神アルテナは、常にこの曲と共にあったという。

女神アルテナを守護した者は、常にこの曲に励まされたという。

人々は、この曲を歌ったらしい。アルテナへの祈りと共に。

「!..!」

突如歌い始めたルシアに、皆は驚いて泣くのを辞めた。

ティオは、その虚ろな瞳をゆつくりと上げてルシアを見た。その歌の何が、彼女の心に触れたのかは分からない。

「ララララ~~~~~~~~ラ~~~~ラララ~~~~~~~~」

それでも、確かに彼女の瞳は大きく見開かれ、その暗闇に一瞬とはいえ光が灯った気がした。

そしてそんなルシアの思惑など関係なく、聞く者全てが固まっていた。

素晴らしいとか、そういう言葉で表せるものではなかった。

恐怖や苦しみや悲しみ、それが吹き飛ばされる。

心の中に、温もりが染み込んでくる。

完全ではないとはいえ、記憶が蘇り母や父という存在を思い出したルシアの歌は、そこに温もりが籠る。

ティオの手をぎゅっと強く握る。

そこから彼女へ伝わるようにと。

悲しまないで。

泣かないで。

自分とは違い、貴方達には無限の可能性があるのだから。

部屋が不思議な色に照らされた気がした。

絶望しかなかった部屋が、歌という絆で1つになった気がした。

歌が終わると、子供たちは皆がルシアに飛びついた。

「すごい！　すごいよー！」

「なんでだろ。涙が出てきたっ」

悪い泣じゃなかった。どの子も、安心という名の涙が零れおちた。ルシアは全員の顔をみて肯き、痺れる手を必死にあげて頭を撫でる。

テイオの頭を撫で、頬を撫で、そして彼女へ。彼女と皆へ、言う。

「……希望を、捨てないで」

黄緑色の瞳を見詰めて伝えた。

私を止めてくれてありがとう、と。

「今を生きれば、必ず、助かりますから。アルテナは人々の味方ですから」

どう伝えればいいのか、言葉が出てこない。だから必死に言葉を紡いだ。

拙い言葉で、知っている単語で。

「助かった時、助かった後。それでももし困ったことがあれば、リベール王国のカシウス・ブライト邸を尋ねてください」

きつとレナさんなら、あの人たちなら助けてくれますから、と。ティオは呆然とした表情で、でも肯いた。

「苦しくなったら今の歌を歌って。辛くなったら歌って。この大地のどこにいても私たちはアルテナの歌によって繋がってるんですから」

「……………はい」

ティオが、皆が小さく、でも力強く肯いた。

きつとこの中でも亡くなる子が出るんだろう。

自分がこの場で助けた方が、結果的には多くを助けることができるのかもしれない。

カシウスやセルゲイが言っていた通り、全ての拠点を見つけてからという今のやり方が最善かもしれない。

でも。

全てを助けることはできない。

それはアルテナでさえ、同じ。

だから今まで出会った、ちっぽけで限らない命の、人間の言葉を信じてみようと、そう思った。

ルシアが明後日護送された翌日から実験は再開された。  
子供たちは激痛と悲鳴を上げながら、それでも諦めなかった。  
きつといつかお母さんに会えると。お父さんに会えると。

そして二ヶ月後。

ルシアは『楽園』と呼ばれるコミュニティに護送された。

第16話 ティオ・プラトー（後書き）

いくつか伏線を張りました。

その為、原作から乖離する現象が一部起こります。

第17話 欲望(前書き)

残酷な描写アリ。キツイ描写がありますので注意。

## 第17話 欲望

クロスベル自治州。行政区の警察署前。

現在、クロスベルは大混乱にあるといってもいい。

その中でも警察署前は混雑状況だ。だがそれも当然だった。

「コメントを！ 署長のコメントを！」

「今回の事件、解決の目処は立っているんですか！？」

「今までの被害者に対して、警察はどう釈明するのですか！」

罵詈雑言、まさにそれが相応しい。

新聞記者などのマスコミが詰めかけ、市民の野次馬が押し寄せた。

連日連夜『クロスベルタイムズ』に掲載される事件の記事。

### 連続幼児誘拐事件。

そのように一部マスコミによって名付けられた事件名は、ついに白日の下に晒された。

その第一報を晒したのは、クロスベルタイムズ新米記者グレイス・リン。

入社したての彼女が記事にした内容は、クロスベルに激震を与えた。

リベールやカルバート、エレボニアでも市民に不安が広がっているようで、今や大騒ぎだ。

その中でもクロスベルは行方不明者数が一番多い。またその特殊

な立場から追及の手も激しい。

今や子供だけで街中を歩く光景は無くなり、必ず親と一緒に、厳しいと外出を禁止する者もたくさんいた。

故に大人しか見かけない一種の異様な光景がクロスベルに広がっている。

そんな中、クロスベル警察署の中で子供たちが会議室に集められ、大勢の警察官相手に話していた。

話しているのは、捉えられた時の状況から脱出までの事。

幾度となく話してきた内容に子供たちはうんざりしていたが、それでも求められれば何度も話した。保護者は辛い記憶を子供たちに話させたくなかった為にしつこい事情聴取に反対気味だったのだが、子供たちが人体実験の前に救出された事が大きいのか特にトラウマはなく、元気に話していた。

その中で一番年長者であり、大人でも感心する程の賢い女の子、ノエル・シーカーに警察官たちの多くが詰め寄り、話を窺う。

「という事は今まで通り……」

「はい。場所を特定できる要素はないと思います。ですが場所は洞窟や地下、遺跡、そういった場所だと思います」

「なるほど……」

地面が岩や砂だったのでそう思う、と続けた。

すると彼女の前に1人の青年がやって来て屈んだ。

「久しぶりだな、ノエルちゃん」

「ガイさん……」

「大丈夫か？」

「はい……私なんかより、今も捕まってる……うっ！」



今まで気丈に振舞っていたノエルが、ジワリと涙を滲ませた。その反応に、周りの警察官が慌てる。

「な、泣かないで〜!」

「お、おい婦警を呼んでこい!」

てんやわんやになった状況で、アリオスやソーニヤが2人を見守った。隣で妹のフランも姉につられたのか半泣き状態だ。ガイは頭を撫でて小さく肯いた。

「ああ。あのバカ……ルシアは必ず助け出してくる」

「お願いしますっ。だってあいつ、笑ってて! 捕まっちゃったって言ってたから!」

あの時。

ノエルたちが転移した先は、七耀教会だった。

セルゲイが各国代表と話し合う為に奔走する中、ガイやアリオスはクロスベルを捜査していたのだが、定期的に教会を訪れていた。そして訪れた際に、突如転送されて来たのが捕らわれたノエルたちであった。

捕まったとはいえ僅か一日で戻って来た子供たちに皆驚き、涙を流し喜んだ。マールブルやセレナなどシスターたちは子供たちを抱きしめ大泣きして喜んだ。

保護者たちも駆けつけて喜ぶ中、ガイたちが慌てて事情を聴いてルシアの一件を聞いたのだった。

「ルシア君が、ルシア君があ!」

「ルシアが、セルゲイって人に伝えてくれて……しばらく待て、

つて』

フランが泣き、ノエルが悔しそうに唇を噛みしめながら言った光景を、ガイは忘れられない。

(よっぽど傷ついたんだろうな……誘拐されたって事よりも、怖い思いをした事よりも、友達に助けられて結果的に身代わりにしちまった事の方が)

ガイはこの話題を出して揺れるノエルを見る度に気の毒に思う。綺麗な茶髪を撫でて、ガイはルシアに対して思っていた事を口にした。

「俺達が必ず助ける。それでな、一発ぶん殴る」

「……………へ？」

ガイの言葉に、ノエルやフラン、周りの警官やソーニヤの目が点になった。

「大人を全く信じていない行動、女の子を泣かせた、これだけで殴る理由は十分だ！」

「え、いや、あの」

「俺に任せておけ！ 君の分までぶん殴っておくから！」

「いや、誰もそんなことは言っていない」

冷や汗を流しながら暴走して走り去っていくガイに、ボソッと突っ込むノエル。

誰もが汗をかきながらガイをポカーンと見詰める中、アリオスやソーニヤが溜息を吐きつつ、でも苦笑しながら後を追ったのだった。

「あなた……あの子はまだ？」

「ああ。まだだ……」

家に帰って来たカシウスは、席に座ると疲れたように溜息を吐いた。

そんなカシウスに、この2カ月ずっと心配し続け、心労で少しやつれてしまったレナが問いかけた。

カシウスはそんな妻に申し訳なく思う。

息子同然に、いや『息子として愛していた』子供を捉えられ、事の顛末を聞いて泣き崩れた姿を見た時、カシウスは己の力不足を嘆き苦しんだ。

エステルは意味が分からない状況に首を傾げ、だが母親の苦しみを感じ取った娘は泣いて抱きついた。

シエラザードは顔を青褪め、自分もと捜査協力を申し出た。そしてカシウスに首を横に振られて憤り、己の力不足に憤怒した。

「だがもう少し。もう少しだ。あと最後の確証を得られれば、決定的な証言・証拠を取れば……！」

「そうすれば人質全員を助けれる、ですね」

「ああ」

「でも、でもそれでも私は私たちの息子を優先して欲しい、そう思ってたわ」

「……すまない」

「わかってます。貴方は指揮官で、他国も絡み、何よりも“遊撃士

だから”こそ一人を優先する訳にはいかないって”  
「!!!」

それは、軍人から遊撃士に変わった時と同じ言葉。同じ想い。それをレナから指摘され、改めてカシウスは歯噛みする。

でもそれでも思ってしまうのは、仕方ない事ではないだろうか。

「どんな目に会っているか。考えるだけで胸が張り裂けそう」

「ああ、そうだな。少なくとも……致死量に近い薬品が投与され、人体実験を受けていると……思う」

「っ!」

「あの子が耐えられればいいが……いや、耐えられる事は不幸かもしれない。しかし、決定打を持っているの彼なんだ」

自分たちが想像しているよりも、ずっとつらい目に遭っているのだろう。

彼の為を思えば、早く楽になった方がとも思う。

しかし、口にはできないが一つだけ確信していた。

きっと彼は、生き続けているだろう。

そしてその今の立場故に生きなければならないと自覚しているだろう、と。

「父さん?」

「おお、エステル。ただいま」

「うん。おかえりなさい」

話し声が聞こえたのか、自分の部屋から起きてきたエステルが目をこすりながら階段を下りてきた。

どうやら起こしてしまっただけらしい。

パジャマ姿が我が娘ながらキュートだな、と親馬鹿全開で思いつつエステルを抱え上げて膝に座らせる。

(絶対にこの子に知らせてはならないな……どれだけショックを受けるか)

(エステル……貴方がこれを知った時、何を思い、どう感じるのか……)

何かあったとは気付いているだろうが、具体的な事は何も知らない。

ずっと先の未来でこの事を知った時、娘は隠した自分たちを恨むだろうと、レナは思う。

「エステル、お前はなんで遊撃士になりたいんだ？」

「ん、なに？ とつぜんどうしたの？」

「いや……ちよつと聞きたくなってな」

「ん~~~~」

腕を組んでムムムと唸るエステル。

正義感が強い娘の事だ。きっと自分と同じジレンマに合うに違いない。

今その事を言っても意味がないし、きっと通じないだろう。けどそれでも問うてしまう。

「特にない、かな」

「ない？」

「お母さんがあの時ゲカして、わたしすつごく怖くて、だからたぶん守りたいから、だと思っ」

「……………」  
「それできつと、ルシアの傍にいたいから、かなあ。だってすつとく強いんだもん。私も強くなきゃ！」

守りたいから、傍にいたいから。

エステルはそう言っただけで恥ずかしそうに笑った。

遠くない将来、きつとこの子も自分と同じ苦境に立たされる時が来るのだらう。

その時、この子は『どちら』を選択するのか。

その時は、自分はできるだけ力になろうと、そう思った。

「あなた」

「ああ」

レナの声に、カシウスは大きく頷いた。

答えは貰ってないが、背は押ししてもらえた。そんな気がする。

「もう、待たない。準備が整い次第突入する！」

その瞬間だった。

突如、ブライト家を強烈な光が襲った。

「なっ!?!」

「あなた！」

「父さん!? お母さん!?!」

あまりの閃光に、家族3人は悲鳴を上げて

。

話は数日前にさかのぼる。

「クツ……………」

部屋に放り込まれたルシアは呻き声をあげて床に転がった。  
その姿は、一糸纏わぬ姿。  
そう、全裸であった。

『楽園』と呼ばれる施設に収容されて、1日。  
早々に『楽園』と呼ばれる施設の『特徴』を味あわされた。

この2カ月ですっかり体は薬で麻痺を起し、碌に体を動かせなくなってしまう身体。

更に耳と舌が鋭敏になり、異常聴覚と味覚を有してしまった。

この時ほど人間の脆弱な体を煩わしく思った時は無い。

そして身体が動かない故に、楽園の行為に抵抗はできなかった。

「……………人間の身で、この女神アルテナの半身の私を汚すとは」

身体にこびり付いた体液を床に擦りつけて拭う。

人間が次世代に命を紡ぐ為に、異性同士が生殖行為を行う事は知識として知っている。

その知識も、青き星を司る者として初めから持っていた恩恵なのだが、今回はかりはその知識は要らなかったかもしれない。

男が、年端もいかない少年であるルシアを犯し、その身を穢す。

下賤な目と口元を歪ませ、大きな手でその身を押さえつけてやりたい放題の行為に及んできた。

胸元がムカムカする。

温かな気持ちとは真逆の気持ち。冷たいものが胸を充満する。

きっとこれが、悔しいという気持ち。

それに気付いた時だった。

「……………だれ？」

甲高い声が、ルシアに投げかけられた。



「……だれか、いるのですか？」  
「うん、いるよ。ここに」

薄暗い部屋の先にいたのは、1人の少女。

「僕の名前はクロス。よろしくね」

「……ルシアです」

「まだ仲間がいるんだ。レンっていう子だよ」  
「？」

周囲を視線で見回すが、他には誰もいない。  
その少女の瞳が、姿がはつきりと見えてきた。

「よろしくね、ルシア。私はレンっていうの」  
「……」

「クロスはここで私の面倒をみてくれるの。それでね“お仕事”  
を一手に引き受けてくれてるんだ」

「……そう、ですか」

「そうそう。君もこれからここで生活するんだ。だから仲良くしよ  
うじゃないか」

「……ええ」

赤紫色の髪をした、全裸の少女。

自分と同じように体液で身体を汚しつつも、部屋の真ん中で絵を  
描いていた。

こうして、奇妙な生活が始まった。

2人の男の子と女の子との、3人の生活が。

全てが、“クロスとロシア”に限定された。

毎日毎日。ただ男や女たちがここに通い詰め、2人を凌辱した。

鞭や器具で傷をつける嗜好の男。ひたすら快樂だけを追求する男や女。

富裕層や政府関係者、または犯罪組織の関係者は度々利用した。その度にロシアとクロスは駆り出され、その身を侵された。

身体の云う事が効かないロシアは、ただひたすらチャンスを待ち敢えて汚辱を被った。

クロスは相手が喜ぶように“演じて”いた。

そんな日々が、3人が会ってから3日過ぎた頃の事だった。

「レン。身体を拭いてあげる。今日は酷く汚れてしまったからね」

「いつもありがとう。クロスは優しいのね」

「……レン」

ロシアが身体を机に寄りかからせ見守る中、“クロス”は言った。

「ごめんね、レン。僕が上手くないばかりに。君を守るって決めたのに」

「クロス？ どうしたの？ 顔色が悪いわ」

レンは鏡を覗き込みながら、そう言った。

「何でもない。何でもないよ」

「……………クロス？」

「っ！」

「クロス？」

「何でもないって言ってるだろ！」

突如“クロス”はそう叫んだ。

ルシアは目を細くし、その様子を窺う。

「君が悪いんだ。君が悪いんだよ」

「……………クロス」

「君が悪いんだよ。なにもかも君が悪いんだ」

「クロス、もう止めなさい」

さすがにマズイと感じたのか、ルシアはそう声をかけるが“クロス”は止まらなかった。

「他のみんなはすぐに殺しちゃったくせに、どうして僕だけ生かしておくんだけだ」

その言葉が決定打になったのか、レンはガクガクと震え始めた。赤紫の髪“クロス”が、何度も何度も罵詈雑言を吐き続けた。

他のみんなはすぐに殺しちゃったくせに、どうして僕だけ生かし

ておくんだ

他のみんなはすぐに殺しちゃったくせに、どうして僕だけ生かしておくんだ

他のみんなはすぐに殺しちゃったくせに、どうして僕だけ生かしておくんだ

まるで呪いの言葉のように、何度も何度もそう呟く。

（ああ、きつと“クロス”は限界だから……）

ルシアはその様子に、そう思った。

だからクロスはもう弱っていたのだ。クロスはレンを仲間だといいつつも、そう言ったんだ。

だって“クロス”にとって“レン”は守るべく居るのだから。

ルシアはもたれ掛かっていた身体をずらし、床に這いつくばる。そしてゆっくりと地面を這いずり、レンまでたどり着いた。

「レン」

「……………ルシア？」

レンは泣いていた。目を赤くし、身体はがくがくと震えていた。ルシアは顔だけをレンへ向け、言った。

「“クロス”の気持ちは私には分かりません……残念ながら」

「……………」

「ですが、レン。貴方は1人になる訳じゃない」  
「嘘っ！ー！」

ルシアの言葉にレンは大声を上げて立ちあがった。

「クロスも、みんな、みんないなくなっちゃった！ どうせルシア、あんたも居なくなるんでしょ!？」

「……そうかも、しれません」  
「っ!」

やはり説得はできない、そう思った。

そもそもこの子に何の言葉をかければいいのかも、まったく判断つかない。

でも。

それでもルシアは何かを言わなければならない気がした。

そうしないと、きっと後悔する。怪我したレナを見捨てようとした、その行為を思い出した時のように。

「でも“今”は、私が傍にいるでしょう?」

「ルシア……」

レンはその言葉に呆然となり、おずおずと座り込んでルシアの頭を膝の上においた。

「……ルシアの身体、あちこち変色してるじゃない。私の心配してる場合?」

「まあ、でしょうね。ここ2カ月以上、薬品投与の為に散々傷つけられましたから。というか貴方の身体も傷だらけでしょう」

「……レディの前で裸でいるものじゃないわ」

「許して下さい。身体が動かないもので」

「……あんたの事、信じないわ。どうせパパとママと同じよ。レンを捨てるんだわ」

「それが本当かどうか、今を生きて未来を見てください」  
「っ！」

その言葉に、ポイッとルシアを投げ捨て、レンは浴室に飛び込んだ。

出てきたレンは地面に放置されたままのルシアを一瞥し、ベッドへと潜り込んだのだった。

『僕はもう、とっくに死んでいるのに』

ルシアは確かにその言葉が聞こえた。

「今日、初めての仕事に出るわ」  
「レンが、ですか？」  
「ええ」

翌日、レンはそう言った。

ルシアは赤紫の髪の少女に、そう問いかける。

「では、レン。このこと同じような場所があと何個あるのか。この運営者たちが手掛ける施設は合計で何個あるのか、どうにかして聴きだして下さい。私もずっと探ってますが、如何せん警戒されていてガードが硬い」

「……よく分からないわ」

「いいえ、分かっているはずです。貴方は聡明です。私の言葉の意味するところを」

「……………」

レンの様子はおかしかった。

人形のように感情が欠落している。まるで封印したかのように。

レンはルシアの言葉を無視して『支配人』と呼ばれる男がやってくると一緒に行ってしまった。

（急がなくては……レンはもう限界……これ以上やられると、私も限界か）

自分の身体が限界に近付いているのが分かる。精神的にももうギリギリだ。

服を剥かれて好き放題にされるのも、もう限界だ。

人間を『多少』は理解できたとはいえ、この身を穢されるのは我慢ならない。

（おそらくレンの“変わり”に誰も出なかったのは、他の子供たちがいなくなってしまったから。レンの中には既に誰もいない………だとしたら、もう時間は残されていない）

ルシアは覚悟を決める。  
時は来たのだ。

「準備はできているか？」

別の支配人と呼ばれる男がやってきた。

男は自分を見下ろし、煌びやかな服を着せてくる。

「今日の『お客様』は我々にとっても大切なお客だ。失礼の無いように“もてなす”んだぞ」  
「……ええ」

そう言つと抱え上げられ、いつもの部屋へと連れて行かれた。

今日もまた、あの狂演があるのだ。

そう考えてしまい、意識が遠のいた。

意識が、浮上してきた。

黒い渦の中から、真っ白な世界へと浮かび上がる。



視線の先の焦点が合うと、そこに映ったのは豪華なソファー。  
次に感じたのは、違和感を感じる臀部。

「はあ……はあ……はあ。この人形のような表情がたまらねえっ！」  
汚い吐息を聞こえ、その度に衝撃が己を奔る。

(意識が……無くなっていた?)

いや、確かにあった。

あったが、ここには無かった。  
そういうことだと、察する。

すると耳に聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「私じゃ、ない……私じゃ、ない……」

レンだった。

レンは耳をふさぎ、ぶんぶんとう首を振っていた。

「おい、話と違うじゃないか！」

「おかしいですね、いつもはとても良い子なんです」

「わたしじゃない！ わたしじゃない！」

「どうにかしろ！ 高い金を払ってるんだぞ！」

「それはわたしじゃない！」

レンは“いつものように”耳をふさぎ、目を閉じて何度も喚いて  
いた。

支配人が何をいっても、怒鳴りつけても、レンはひたすら首を振  
り続けた。

いつものように。

わたしはいつものように。

わたしはいつものように。

そうした結果、レンは口を開かされ、無理やりに『ある液体』を流しこまれた。

吐き出さないように押さえつけられ、組み伏された。

服をびりびりに斬り裂かれ、レンは次第に抵抗をしなくなった。

それを見たルシアは、自分の心に激しい怒りと悲しみが灯ったのを感じた。

この感情こそ、自分の天敵であるゾファアの源なのだ。

ついに自分の中に灯った感情を自覚したルシアは、それを知った故に力を得る。

無気力から、抵抗へと。

そして抵抗はすなわち、計画の実行へ。

「ねえ」

「はあ……はあ……ん？ どうしたんだい？ 良い声で啼いてくれるのか？」

「ん……その変わり教えて？」

「良いとも。俺に分かる事ならな」

目を潤ませ、紅潮させる。

分かったのは、そうすると人間は喜ぶということ。まったくもって理解不能だが。

言葉にならない言葉を上げれば、人間は喜ぶ。  
警戒心を解き、自分に近づく。

身体は動かないから、男から近づいてもらう。

そして云うのは一言だけだ。

そう。

「ここ以外にも、どれだけの楽園があるの？」

ここに連れてこられる前と後では実験内容に差がありすぎる。  
すなわちそれは、そういう事。

だから質問はこれで十分。

「なんだ、嫉妬してるのかな？」

「だっておじさん、パパみたいなんだもん」

媚びた声を上げればいい。

そうすれば人間は喜ぶ。

「ハハハハ。子供ながらの独占欲か」

「だってえ」

「よしよし。安心なさい。パパは君だけだから」

「本当？」

「ああ、本当さ。それにここ以外にはこんな楽園は無いからね。パ  
パはずっとここに居る事になるさ」

「……………」

視線が、急に鋭くなった。

男は勘違いをしたまま、再び腰の動きを速めた。

臀部から連続した衝撃に体は激痛を覚えつつ、ルシアはチラツとレンを見た。

レンは全裸で、身体中に無数の傷をつけたまま、男に押し掛かれ自分と同じ状況にあった。

唯一違う所は、泣いているか、そうでないかの違いだけ。

「はあ！ はあ！ はあ！ 最高だよ、ルシアちゃん！」

「……私には最低ですよ、この下郎が」

「……………え」

その言葉が、最後だった。

強烈な光がルシアの手から放出され、押し掛かっていた男は弾け飛び、肉のシャワーを降らせた。

それは世界を止めるには十分な光景。

直後、悲鳴と怒号が飛び交う。

ルシアは地面に倒れ伏したまま、部屋中に攻撃を振りまく。簡単だ。

指先だけ、向ければいい。

魔力を部屋の大気中から集め、放出。

プラズマエネルギーを帯びた一撃は最弱の『スパークショット』しか成りえなかったが、それだけで十分だった。

阿鼻叫喚となった部屋に、度々飛び込んでくる兵士たち。

その度に死体は増えていった。

次第に数はなくなり、ルシアは文字通りの血肉の水溜りを這いずり、レンへと貼って近寄る。

「……………」

レンの目は大きく見開かれ、目は光を宿さず、大粒の涙を零していた。

「レン……………」

ルシアはレンを何度も呼ぶ。だが彼女は特に応えない。

仕方なくルシアは近くにあったテーブルクロスを歯で噛みついて引っっこ抜き、手を必死に動かして地面に貯まる血に指を漬け、血文字でそこに大きく数字を書き込んだ。

『12』

あとは布の下側に、自分の名前を刻むだけ。

これでよし、と大きく肯き。

レンから小さく声が洩れた。

「パパ……ママ……」

ズキンと、胸が痛んだ。

(母さま……父さま……)

だが、今はそんな事をしている場合じゃない。

ルシアはレンの身体にそのメッセージとなる布を被せる。

紡ぐは、大転移魔法。

(くっ……聴覚・味覚だけじゃない。神経系までブレが生じてる……これじゃあ魔法は使えても術式構成が上手く定まらない)

対象はレンだけでいい。

それだけなのに、何故か所構わず転移させてしまいそうな、それくらいにコントロールが定まらなかった。

それに転移場所を設定する事もできない。

地脈を探る暇もなければ感覚コントロールが効かないのだ。

ならば、後は覚えている場所か、行った事のある場所。

街か、遺跡か。

あるいは民家か、林の中か。

『射殺しろ!』

『逃がすな!』

遠くから大勢の足音が聞こえてくる。

時間はない。

歯を食いしばり、渾身の力で振りおろす。

「くっ！ アルテナの加護よ！」

運任せにするしかなかった。

僅かにしか回復できなかった魔力と大気の魔力を総動員させ、ルシアはテレポートを使った。

その場から、レンとルシアはいなくなった。

「なっ！？」

「あなた！」

「父さん！？ お母さん！？」

何かの襲撃かと勘違いしたカシウスは咄嗟に家族を飛びついて抱きしめ、家の壁際へと後退する。

火薬を使った爆弾か何かかと思ったカシウスだったが、特に被害を出す事もなく光は次第に収束し始めた。

「一体なにが……」

ポツリと呟くカシウスと、怖がったエステルはレナに抱き付いて

いた。

光がどんどん弱まっていき、ようやく目を凝らして先を見れるようになって……

光の先にいたのは、1人の少女だった。

布で隠されているが、全く隠し切れていない全裸の状態。

隙間から見える身体は、おびただしい程の数の十字傷。

身体中が真っ赤な血で染まり、強烈な血の匂いが部屋を充満する。身体のおちこちに血ではない何か妙な物体まで付着している。

それを見て、レナは凍りついた。

それを見て、カシウスは驚愕の表情を浮かべた。

それを見たエステルは、ショックで気絶してしまった。

「あなた！」

「レナ、エステルをベッドへ寝かせたら手伝ってくれ！」

「はい！」

カシウスは慌てて少女へと近寄り、呼吸がある事を確認してホッと安心する。

レナはその間に自分たちの部屋へとエステルを運んでベッドへ寝かせると、慌てて戻って来た。

すると旦那であるカシウスが少女の上にかけられていた布をジッと見ていた。

その態度に少しイラつきながら、レナはカシウスへ叫んだ。



「何をしてるんですか、あなた！ 早く手当てを！」

「分かってる。だがそれは、レナ。お前に頼みたい」

「？ 何を……………！！！」

レナは訝しみながら近寄り、そしてその布に描かれた血文字を読み取った。

「あなたっ！」

「ああ…………… もはや一刻の猶予もない！」

カシウスのその時の表情は、まさに鬼。

己の武器を手に飛び出していく。

レナはポロポロと涙を零しながら、傷ついたレンの身体を手当てする為に、消毒箱を手にした。

日が暮れたロレントの遊撃士協会に飛び込んだカシウスは、全ギルドに発令をかける。

時間帯とか、個々の都合とか、まったく気にしなかった。

「こちら、カシウス・ブライト」

怒りに染まった声を、全遊撃士は初めて聞いた。

怒りに震えるカシウスを、ロレントの新米受付アイナは初めて見た。

「教団の拠点数が判明した。その数は12。我々が掴んでいる拠点数の裏付けが取れた」

遊撃士たちは雄たけびを上げる。やっとぶちのめせると。  
軍人たちは敬礼をする。誇りを胸に、出陣する為に。

「配置は以前から言っていた通りだ。作戦通り、各々の場所の攻撃に移る！！」

クロスベル警察内の、ガイヤアリオス、そしてセルゲイは事態を察し、大きく肯いた。

「始めよう」

D・G教団殲滅作戦！！」

剣聖カシウス・ブライトの号令と共に、ついに大陸全土に怒号が響き渡った。

第17話 欲望（後書き）

ダメだ……力尽きた。

再編集は明日やります。すいません。

第18話 惨劇（前書き）

遅くなりました。

理由は手術等により長期入院。

……痛かった（涙）

## 第18話 惨劇

走る。  
疾る。

闇の中を、林の中を、ただひたすら走り続ける。

駆け抜ける影はいくつもある。

風を切る音、葉の擦れる音。

影はどんどん速度を上げていく。

4国合計12の地点を目指し、トップスピードで迫る。

全ては、この時の為に。

全ては、弱者を虐げ外道を成す悪魔を捕まえる為。

一刻も早く捕まっていた子供たちを助けたい、その思いが動かす。

カシウス・ブライトの号令から10分。

僅かな時間から、遊撃士と警察、そして軍人が現場へと迫る。

リベール王国のラッセル博士、IBC、エプスタイン財団、錚々たる顔ぶれの企業が協力した、今回の施設を覆う結果

探知・破壊を目的に制作した、特殊導力探知機を手に施設へと到着した。

時間があつたとはいえ、まさに人々の知恵の勝利。  
結界を壊すための知識。

迅速に行動を起こすための念入りな作戦。

命令系統から指揮系統までの組織図の徹底化。

そして責任者でありトップの『剣聖』の統率能力。

本来なら実現しない今回の異色の組み合わせのタッグは、あり得ない力を発揮し、予想外の力となった。

それは、今回の敵の指導者の予想を上回る。

七曜暦1198年。

D G教団殲滅作戦が、静かに幕を開けた。

後に、この事件はこう記される。  
あまりにも多くの犠牲者を出した、非人道的観点における人類史上類を見ない最低最悪の事件、と。

突如、施設を襲った衝撃。  
破砕音と崩落音が響き渡り、施設内の人間達に一瞬でただ事ではない事を教える。

「何事だ!？」

「遊撃士が! 遊撃士が外を取り囲んでいます!」

「何だと!? ここはバレないはずじゃ……!？」

事前情報から絶対の安心感を持って研究していた人間たちは動揺が酷い。

慌てて戦闘要員の投入を指示し、研究成果を鞆に詰め込み逃走を図ろうとしている。

だが。

「ダメです！ 逃走経路がありません！」

「囲まれています！」

悲鳴のような声が続々と入り、研究員たちは絶望の顔色を浮かべた。

1人の職員が、手元のモニターを操作し、入口付近を映した。それは、逃げ出そうという気持ちから来た無意識の行動だった。

しかし映しだされたそれは、彼らの希望を打ち砕いた。

『遊撃士協会だ！ おとなしくしろ！』

巨体の男が中央に陣取り、周囲を様々な恰好と武器を手にした人物たちが取り囲む。

中央の男はあまりにもデカい。

そしてその体躯から発する圧迫感は、モニター越しでもひしひしと感じる。

『何で俺たち遊撃士がここに来たかは……分かってるな？』

『くっ……！』

『お、おい。あいつ最近噂の……』

『あ、ああ。カルバートの遊撃士、不動のジンだ』

『馬鹿野郎！ こっちは銃装備だろうが！ 数もこっちが上だ！  
八千の巢にしてやれ！』

無数の銃口を向けられたジンは険しい顔を向けた。



決して油断できるものではないのだ。数、敵兵の実力、組織所属から窺える連携、そして地形。侮って良いものではなかった。

『準備はいいな?』

『問題なしです、ジンさん!』

『こっちもだ!』

『よし……』

ジンは肯き、大きく息を吸い込む。

『全員……捕縛しろ! 鼠一匹逃がすな!』

ジンの怒声と銃撃音はほぼ同時に鳴り響いた。

「將軍! 突入準備完了しました!」

「よし。上空からの監視はやっているな?」

「第3師団が上空から照会中です!」

「うむ。では……」

ゴホンと咳払いをし姿勢を整える、リベール王国將軍モルガン。歴戦の勇士であり、その風貌も合い間って信頼が厚い。相棒の大斧ハルバートを片手に、モルガンは視線の先にいる武装兵士たちを見た。

自然と、モルガンの口から言葉が紡がれる。

「医学の進歩？ 人類の夢？ 進化の為には犠牲は付き物………  
だと？」

長つたらしい口上を述べた場の責任者らしき連中の言葉に、モルガンは鼻で笑った。

「そんな進歩など………犬の糞だ。のう、リシャール」  
「はい」

心底馬鹿にした目を浮かべて言った。

傍に控える新人ながらも見どころのある部下も、その言葉に頷いた。

「例え価値があろうとも………未来を生きる子供の屍を礎に未来へ進むなど、本末転倒も甚だしいわ愚か者があー！！」

ある遺跡に響き渡ったモルガンの怒声を皮切りに、親衛隊を含めたリベール王国軍精鋭部隊は内部へと突入した。

「おらあ！」

「フツ！」

スタンガン付き警棒で殴打する2人の警察官。

短髪で快活な印象を受ける人物はトンファーで武装兵士を殴り飛ばし、木製の机を破壊して気絶させた。

長い髪の男性は片手剣を優雅に振るい、恐るべき斬撃速度で気絶させていく。

この2人が、クロスベル警察最強といわれる捜査チームの若手エース。

背中合わせに戦う2人に、敵兵は思わずたじろぐ。

敵う訳ない、そう誰かの呟く声がした。

そう。

何故ならこのチームはこの2人だけではないのだから。

「殺すなよ、2人とも。1人残らず捕まえるんだ」

2人の後ろから、銃を持つ男性が1人、歩いてくる。

男性の背後から敵兵が襲いかかるが、男性は見向きもせず銃を向けて撃ち落とす。

弾丸はシヨック性の弾なのか、撃ち込まれた兵は面白いように気

絶して崩れ落ちた。

「分かってますって、セルゲイさん」

「承知しました、セルゲイさん」

あくまで2人は彼、セルゲイの部下。

司令塔は、セルゲイ・ロウなのだから。

セルゲイはその言葉に不敵に笑って肯き、近くに倒れこんだ兵士の1人をつかみ起こした。

「おい、起きろ」

「う……うう……」

「俺の質問に答えてもらおうか」

セルゲイは顔を近づけ、チンピラのごとくガン垂れながら掴み上げた。

「貴様らが攫った子供たちはどこだ？」

「うう……地下、地下に……」

「よし」

「答えたんだ……は、はなせ……」

「もう1つ答えるや」

銃口を敵の眉間へと近づける。

その光景に、周囲を掃討していたガイとアリオスは息を呑んだ。

「貴様らが攫った子供の中に、赤い外套に黒い服、青い髪の男の子がいた筈だ」

「青い……髪……」

「知ってるな？ その子はどこにいる？」

「……ああ……傑作品のことか」

「……どういう意味だ」

ククク、と笑う兵士にセルゲイの顔が険しくなった。

ガイとアリオスの眼光も鋭くなり、紡がれる言葉に耳を傾けた。

「あの子供……最高のモルモットだった……」

「なんだと？」

「致死量とされる薬品……本来なら人体への投与などもつての外の毒薬……ありとあらゆる薬品を……浴びせるように投与した」

「……」

「ククク……あれは化け物だ。文字通りの、な。樽一杯分の薬品を投与しても死なない……最高のモルモット……ある意味、実験体として完成されてる。だから……傑作品って訳だ」

「きつさまあつ……」

「全ての施設をたらい回しにされてるらしいが……流石に身体にガタが来ているらしいな。噂ではもう身体を起こす事もできなくなってるらしいからな……ククク」

「っ……」

「おかげで、我々の目的は格段と進んだのだ!!」

その言葉にセルゲイは我慢出来なかったのか、拳で男を殴りつけた。

怒りでブルブルと拳を振るわせ、鬼の形相で睨んでいた。

が。

その瞬間、アリオスが大きく目を見開いて叫んだ。

「下がって、セルゲイさん!!」  
「!!」

アリオスは確かに見た。

兵士の口元が笑みで歪み、懐からボタン付きの何かを取り出されたのを。

だからこれは直感。

ボタンを押す事で何かが起こるといふ直感から、アリオスは叫んだのだ。

セルゲイはアリオスの指示に反射的に飛び退いた。

直後に起こったのは

男から発した閃光。爆発。

「ぐっ

」

「ば、馬鹿な」

「なんてこった」

呆気にとられる一同の前で起こったのは。

自殺。

「そこまで、狂ってやがるのかっ」

クロスベル近郊の遺跡を急襲するクロスベル警察部隊から、敵の自殺行動の連絡が入って10分。

カシウスブライトの元に次々と情報が入ってくる、敵兵の自殺行為。

全ての遺跡にて、勝ち目が無いと悟った者が自爆行為、毒服用に走っているとのこと。

研究者は須らく毒を飲んでいるとの事から、カシウスは事件の切っ掛けとなった時とは別のベクトル意味で険しい顔をしている。

「カシウスさん！」

「クルツ。どうだった？」

「……駄目です」

新米遊撃士だが実力に光るモノがあり、将来的にはA級になるだろうとカシウスが踏んでいるクルツ・ナルダン。

緑の髪が特徴的で方術とよばれるアーツとは違う気功術を使う珍しい人物だが、その人柄は実に誠実であり、新米ながらも遊撃士たちから注目されている人物だ。

そんなクルツが、厳しい顔をして奥の部屋から戻って来た。

目の前で自殺に走った兵士を検分していたカシウスに、クルツは無念と言わざるを得ない報告しかできなかった。

「そうか……」

「はい。研究者も全て……あとその奥にあった牢、その中に拉致されたと思われる子供たちがいました」

「……生存者は？」

カシウスの声は硬く、そして重い。

いや、暗い。

クルツは目を伏せ、下唇を噛みしめて言った。

「肉眼だけで確認できたのが」

「気を遣わなくてもいい。結論は？」

「……生存者は……1名だけ、です」

シーンと、静まり返った。

聞こえてくるのは遊撃士たちの足音だけ。

そうか、とそれだけ返してカシウスはその部屋へと向かった。

(恐らく……どこの研究所も同じ結果の可能性が高い)

一歩一歩の足取りが重い。カシウスは自分はその牢に行きたくないのだと、知らずに悟る。

研究者たちの遺体を通り過ぎ、数々の薬品や道具を尻目に最後の角を曲がりその部屋へと到達した。

カシウス・ブライトの視界に飛び込んできたのは

本来なら人間だった筈のモノや、皮膚が爛れたり、身体の一部が欠損した子供のモノ。



「　　」

言葉になどならなかった。

だが、事態はさらに急変する。

ついにソレは現れる。

絶句している2人の前、部屋の片隅にソレは現れた。

「驚いたな……ほぼ全滅じゃないか」

とある洞窟内を訪れたある2人組みは、驚きの声を上げていた。  
その場所は、12個目拠点にして『楽園』と呼ばれる場所。

そしてその2人は、遊撃士が訪れる前にそこに来ていた。

「レーヴェ。何故『教授』はここを？」

レーヴェと呼ばれた男。

銀髪を靡かせ片手には剣を携えている。

彼は過去とある遺跡を襲撃し、偶然にも同じ組織を相手に大量殺戮を行った事のある実績があった。

彼はその後、ある組織に所属し確固たる地位に昇りつめ、確かな信頼を首領から得た。

その隣にいるのは、少年。

黒髪で両の手に刃を携え、鋭い眼光で辺りを見回している。

「……組織にとって迷惑な存在だからだ」

「ここが？」

少年は妙に破壊された施設を指し、表情を変えずに言った。

あたりに転がる破壊された遺体を尻目に青年は答えた。

「そうだ。だが我々よりも先にここを破壊した者がいたようだ」

青年は部屋の扉を次々に蹴破り、転がる遺体を蹴り飛ばして資料を漁った。

次々に出てくる犠牲者となった子供たちの事。

子供たちに行われた行為。

購買者リスト。

そしてその利用者が行った性的虐待行為、つまりサービス内容。

そして、子供たちの末路。

「これは……」

銀髪の青年・レーヴェはそれを見て目を細めた。

「……下種どもが」  
「……………」

レーヴェの呟きに、黒髪の少年は特に何も思っていないかのように無表情にレーヴェを見上げていた。

「生存者の子供が逃げ出したか？ それで……………抵抗して殺害を……いや、だが子供が敵うとは思えない」

「……………」  
「それにこんな目に遭って、生きていられるものなのか？」

幼い身でありながら、大人に肉体を凌辱され、体液を身体の中に流し込まれる。

激しい凌辱を繰り返して、肉体に傷をつける事を悦楽とする者さえいるのだ。

その身は傷だらけで、肉体のみならず心も既に死んでいるだろう。

大人でさえも耐えるのは難しい心身の凌辱行為に、子供で耐えられる筈がない。

耐えられる耐えられないの話ではなく、不可能に近いのだ。

だから、それでも耐えたとしたら、それは異常であり不幸だとレーヴェは思う。

「……………生存者がいたら」

初めて黒髪の少年がまともに口を開く。レーヴェは僅かに驚き、少年へと顔を向けた。

「生存者がいたら……『結社』で引き取りたかったな」  
「……そうか」

生きた人間を見たかったと、少年は呟いた。  
レーヴェはその言葉に目を瞑り、そうだな、と返して紙を捨てた。

「……行くぞ、  
。遊撃士がそろそろ到着する筈だ」  
「わかった」

レーヴェと黒髪の少年は、自分たちの存在を見られる前に脱出する為に現場を後にした。

扉の先をレーヴェは一度振り返り、狂った宴が繰り広げた先を見た。

(武装兵すらも皆殺しに出来る程の人物……大人ならまだ分かるが……事件の被害者となった子供となると……)

1人だけ心当たりがあった。  
数年前、自分と互角に戦った青髪の少年。

だがあれほど戦えた少年が敵に捕まるとも思えず、レーヴェはその可能性を否定した。

まさかな。

そう何度も心の中で呟いていた。

カルバート共和国期待の遊撃士・ジンは大きく息を乱して前方を睨みつけていた。

開戦直後、銃撃戦を制した遊撃士部隊だったが、途中から完全に乱戦状態に突入した。

相手は妙な薬で身体強化でもしているのか、恐るべき身体能力を所有し、然るべき戦闘訓練を積んだ遊撃士たちに引けを取らなかつた。

お陰で被害は甚大。

遊撃士の犠牲者は、死亡者数12名。重軽症者は23名にも及んだ。

それに対し、敵側は『全滅』。

気絶させた敵兵士を含め、白衣を着た研究者らしき人物たちも、全員が自爆という自決行為に走ったのだ。

その所為で研究資料は手に入らず、何をしていたのか等が分からなくなってしまうた。

「一体なんだってんだ……こいつらは」

自爆しバラバラになった死体の一部が地面に散乱している。

もう狂つてるとしか言いようが無い景色に、ジンは表情を歪めて悪態を吐いた。

生き残った遊撃士たちも惨状に眉を顰める者、思わず吐く者、激

しい戦闘に立てないほど疲れ切った者など、反応は様々だった。

「ジンさん！」

「おう。生存者は？」

周囲の捜索に向かっていた遊撃士たちが戻ってきたので、ジンは気を取り直して尋ねた。

若い遊撃士は悲しそうに目を伏せ、躊躇いがちに口を開いた。

「あの……生存者なんですが……」

「どうした？」

「……………2名です」

「……………」

そうか、とも言えなかった。

あまりにも少ない。

何故ならジンの前を担架が運ばれており、布で隠されているが所々から子供の手などが見え、その数が20を超えていたからだ。

「酷過ぎるっ……………こんなの！」

堪らなくなったのか、若い遊撃士が嗚咽を漏らし始めた。

そうだな、と掠れる声で小さく肯き、ジンは包囲完了を終え現場検分を行っている建物を仰ぎ見た。

この地獄のような光景にそぐわぬ程、穏やかで歴史を感じさせる遺跡。

そんな不釣り合い差がジンを苛立たせる。

すると、建物から遊撃士の2人が何かを抱えて出てきた。

布で包まれた何かを抱え、慌てて出てくる。

ソレは、生存者の子供であった。

ジンは思わず駆け寄り、子供の顔色を窺う。

子供の顔色は真っ青で四肢が不自然に痙攣している。

目は虚ろで身体は薬品やら何やらの異臭がする。

「よく、よく生き残ったっ」

ジンは目頭が熱くなるのを抑え、子供の背を摩る。

1人は男の子、もう1人は女の子のようだ。

2人はジンの言葉に何も返さない。いや、返せないが正しいだろうか。

聞こえていないかのように無反応で、何かをぶつぶつと呟いていた。

(? 何を……?)

両親を求めているのだろうか、と耳を傾ける。

周囲の遊撃士たちも耳を澄まして2人の言葉を聞き取ろうとし、だが何を言っているのか、いまいち分からない。

「ら  
ら」

しかし、一番近くにいたジンは気付いた。

「……………歌？」

「え？」

聴いた事のない唄だった。

ジンの言葉に皆が耳を近づける。掠れて何を言っているかいまいち聞き取れないが、確かに言葉にリズムと音階が聞き取れた。

「……歌を唄って生きる支えにしたというのか？」

その場にいる者は、誰も知らない。

その歌は、とある男の子が捕まり絶望する自分たちに歌ってくれた歌だという事を。

どんな時でもその歌を糧に生き延びる意志を失わなかった事を。

「大したもんだ……」

そんな事は知らないジン達だが、不思議とその曲は頭の中に残った。



その闇に対峙するカシウスとクルツ。

武器を手に距離を取り、何が出てくるのかと警戒した。

そして、ついにソレは出てきた。

最初は頭が出てきた

金の髪。

彫刻かと思えるほど美しい

顔。

妖艶な服装

女性の肉体。

手にはおぞましい気配の

大きな黒い鎌。

「きさま……何者だ!?!」

クルツは堪らなくなり叫ぶ。

この女は危険だ、そう脳が危険信号を発していた。

身体中が鳥肌が立ち、持っている武器がガチガチと震えて音を立てていた。

カシウスも険しい表情を崩さずにソレを睨みつけていた。

そして、女の目が開かれる。

綺麗な金髪を頂点で一纏めにし、腰元まで伸ばした美しい髪。

真っ赤な深紅の眼。

真っ赤な唇。

異様なほど白い肉体。

その肉体に施された、全身に描かれた模様。

絶世の肉体を覆うのは黒く薄いシルクのワンピース。

「これはこれは、初めましてというべきだね」

「……………」

「私の名は、魔族の長ゼノビア。全ての魔族の頂点に立つ存在さ」  
「魔族、だと？」

カシウスは警戒しながらゼノビアに返した。

「そうさ。あんた達がここを潰してくれたお陰で再び隠れなくちゃ  
なんなくなつたからね。御挨拶の為に出てきたのさ」

「………… お前たちは何が目的だ」

カシウスはそう問う。

女の言葉を真実とするなら、ここはただのカモフラージュに過ぎ  
なかつたということ。

まるで。

「目的、ねえ。それは秘密としておこうか」

「……………」

「ふざけるな、女！」

「フフフ」

クルツの罵声にもゼノビアは不気味な笑いを零すだけ。

するとゼノビアは急に動きを止め、そして肯く仕草を見せた。

「承知しましたゾファー様。フフフ………… 本当ならこの場でカ  
シウス・ブライト。あんたを殺しておこうかと思つただけだね」  
「？」

「あんた達人人間のお陰で、私たちの計画が大幅に勧めやすくなった  
からねえ。その功績にあんた達を見逃せ、とさ」

「……………」  
「私たちの天敵が衰弱状態に陥った。それだけで人間には感謝といったところかしら」

ゼノビアは髪をかきあげ、妖艶に笑う。

「フフフ……神子も弱れば人間となんら変わりない、ということか」  
「……！」

カシウスはその言葉にぴくりと反応した。  
その反応すら面白いというかのように、ゼノビアは小さく笑い、己の周りに炎を発生させる。

「覚えておきなさい？ 近い将来、人間は滅ぶ。全てが無に帰すのよ」

「そんな事させるか……！」  
「……………」

クルツがそう言い返すが、ゼノビアは小さく笑うだけで炎に完全に包まれた。

炎が一瞬で鎮火すると、その場には誰もいなかった。

（ゾファア、そしてゼノビア。……………真の黒幕、といったところか）

カシウスはついに、ゾファアの存在を知る。  
だが気付いていた。

今の己の実力では、ゼノビアにすら敵わないという事を。

そして、D・G教団殲滅作戦は終結した。

教団死亡者数は500人を超え、生存者は0。

遊撃士・リベール・カルバート・エレボニア連合軍。

戦死者は90名を超え、重軽症者は200人を超えた。

第18話 惨劇（後書き）

やっと復活できました。

お待たせしました。

次回は教団編後日談。およそ2話。  
そしてついにFCに入ります。

## 第19話 事件発生後

D・G教団殲滅作戦発動、そして終結から3時間後。  
各遊撃士たちが事件処理をしている真夜中の深夜2時。

リベール王国ロレント地方、カシウス・ブライト邸にて事件の被害者の子供が目を覚ました。

「……………」

紫色の髪が特徴のその子は女の子であり、愛らしい笑顔の容姿の少女がベッドの上で目を覚ました。

温かな木の天井が真っ先に飛び込んできて、柔らかな明かりを発するライトが部屋を照らしていた。

ふかふかのベッド。なんだかお日様の香りがする。

室内を見回すと生活感漂う雑貨や本が置かれていて、僅かに食事の香りがする。

少女はポーツとする視線を窓際へ向けると、そこには一人の見たことのない女性が座っていて本を読んでいた。

女性の手元や周囲には医薬品が散乱し、少し女性は疲れているように思えた。

少女がジツとその女性を見ていると、その視線に気がついたのか、女性は本を置いて穏やかな頬笑みを浮かべて話しかけてきた。

「あら、気がついたかしら？」

「……………ええ」

少女は周囲を忙しく見渡し、ここが『さっきまで』いた場所じやない事に気が付いた。

「ここは……どこ？」

「ここはね、リベール王国ロレント地方ロレント郊外にある、遊撃士カシウス・ブライトの自宅よ」

「リベール……………」

少女はその言葉に一瞬唖然とし、何か考え込むように沈黙した。今までずっと看病していた女性・レナは水に濡れたおしぼりを交換し、少女の額に置く。

「貴方の名前を教えてもらってもいいかしら？ ああ、私はレナ・ブライトっていうの。よろしくね」

「……………レン」

「そう。良い名前ね。私と似てるわ」

「……………」

「何か聞きたいこと、あるかしら？」

「私を……………どうやってここに？ あそこから連れだせるとは思えないわ」

レンの言葉に、レナは答えるべきかどうか逡巡し、小さく目を瞑って答えた。

「詳しい事は分からないわ。ただ、貴方は突然この家に現れたの……………いえ、送られてきたわ」

「……………」

レナの言葉にレンは、正気？　とでも言わんばかりの視線を向ける。

だがレナは知っている。

あの現象、あり得ない技術、証拠となった血文字の布。それを行ったのは誰なのか、知っている。

なぜなら過去に、自分も同じ体験をしているのだから。

「貴方は確かに送られてきた……………怪我をしていたから、手当をさせてもらったわ」

「！！」

レナは確かにボカしたつもりだった。

レンの気がしつかりすれば、嫌でも自分の身体に巻かれた包帯に気がつく。だから自分から告げる。

そうすれば、自分の誠意を見せれるし、信頼も得れると判断したからだ。

レナの判断は誰もが同意するものだった。

まずレンが送られてきた当初。

レンの身体は無数の傷が身体に刻まれており、血だらけであった。そしてその上に夥しい程の返り血が浴びていた。

レナはレンの身体についた血を清潔な水で洗い流し、無数の傷を消毒して包帯を巻いた。

だがその過程で気がついた。

太股の付け根から腰回り、臀部付近にこびり付く男性の体液。それに気がついたレナは唇を血が出る程噛みしめ、涙を流し申し訳ないと思いつながら洗い流した。



文字通り指で全て搔きだして、レンを手当てした。

その行為も、レナを大きく傷つけた。  
当たり前だ。誰だって7歳の少女の暴行された姿を見たい筈がない。

だがレンはそんなレナの気遣いを余所に、完璧に自分に起こった事態を把握してしまった。

「はあ……っ！ はあっ！ はあっ！」

「っ！ 大丈夫よ！ もう大丈夫だから！」

がばつと身体を起こして腕で身体を抱きしめるように抱えてガクガクと震え始めたのだ。

目を大きく見開き、半ばパニック状態といってもいい。

レナはそんな彼女を抱きしめ、必死に呼びかけた。

「私じゃない……私じゃない……」

「大丈夫よ。ここにいれば、何もされないわ」

背中を摩り、自分の温もりを相手に与えるように。

その温もりは、確かにレンに伝わったのだろう。  
時間をかけてゆっくりとパニックが収まる。

レンはゆっくりと空気を吸い込む。太陽の香りともいうべきか、落ちつく香りがレナからした。

「……………あり……………」

レナに抱きしめながら、再びレンは眠りについた。

『レン』として、穏やかな眠りにつけたのは、彼女にとって幸運な事でもあり驚きでもあった。

翌日、レンはスズメの鳴き声と共に入って来た朝日で目を覚ました。

少しの間だけ呆けていたレンだが、すぐに何があったかを思い出して、ゆっくりとベッドから降りる。

木目の床がひんやりと冷たく、少し驚く。

次に襲ってきた身体中の切り傷から来る痛みを顔を顰め、そして気がついた。

「……いい匂い」

目玉焼きの匂いだろうか。ベーコンもありそうだ。

こんがりとした香りと卵のなんともいえない旨そうな香りが漂ってきて、思わずお腹が鳴ってしまおう。

思えば、こんな香りを嗅ぐのも久しぶりだ。

楽園にいた時はもちろんの事、その前にいた親戚の家でも嗅いだことなどなかった。

その家は確かに一般家庭に違いなかったが、どこか空気がギスギスしていたし、自分に対する暴行等の扱いからどうでもよかった。

そう、この香りは両親が自分の手を握ってくれていた頃の。

「……………」

堪らなくなり、レンは扉を開け放った。

そこにいたのは、エプロンを付けたレナと、テーブルで美味しそうにご飯を食べている自分よりも年上の女の子がいた。

レナはレンに気が付くと、「あら、起きた？」と笑顔で言いながらレンに近寄ってくる。

なにやら奥の女の子が目を輝かせながらこちらを見ているが……レンはスルーした。

「おはよう、レナ」

「おはよう、レンちゃん」

ちょっとおしゃまな口調のレンに、レナは不快感など微塵も見せずに笑って頭を撫でた。

すると、ドドドと激しい足音と共に2人の間に何かが飛び込んできた。

「お母さん！ この子だよね!？」

「ええ、そうよ」

「うわあ~~~~~!」

「……え？ え？」

レンの脳裏に暴走列車という単語が一瞬浮かんだ。

飛び込んできたのは先ほどの目を輝かせていた女の子。頬を紅潮させてレンの手を握り、ぶんぶん上下に振る。

「あたし、エステル。よろしくね！」

「レンちゃん。この子は私の娘よ。仲良くしてね？」

「……ええ。よろしくね、エステル」

「む~~~~、あたしの方が年上なんだけど」

微妙な顔をするエステルに、レンはクスツと微笑む。

おちよくられていると感じたエステルは唸ったが、すぐに「ま、いつか」と言っただけで気にしなくなり、レンの手をひっぱり洗面所へ連れて行く。

「ここで顔を洗うの。やり方は分かる？」

「当然でしょ。私を馬鹿にしてる？」

なんだかお姉さん風を吹かせ始めたエステルに、レンはジト目を

向けた。

うつと唸るエステルだが、それも仕方ない。

レンはエステルから見れば体格も非常に小柄であり、年下の存在だ。

そして何より。

年下の、妹や弟が欲しかったのだ。

「はい。この箸使ってね」

テーブルに着くと朝食が用意されていて、レンはエステルから箸を受け取る。

白米を摘み、口に運ぶ。

スープを取り、一口飲む。

「美味しい……………」

「でしょ！ お母さんのご飯は世界一なんだから！」

「あらあら」

フフーンと得意気に胸を張るエステルに、テレたように笑うレナ。

「口に、合うかしら？」

「ええ。とつても美味しいわ」

「そう、よかったわ」

レナはそう答えて、一番気になっていたことを尋ねる決意をする。  
それは。。。

「でも、貴方のお母さんの味には敵わないでしょうけど、ね？」

その言葉で、レンは硬直した。

(やっぱり……この子は……)

そもそも初めからおかしかった。

この子は自分の義息子であるルシアと同様に、恐ろしい程に賢く聡明な子だ。

自分がどういう目に遭ったのか、理解している筈だ。

だがそれと同様に“ルシアは違う”が、この子は年齢通りの幼い精神面も有していると見受けた。

だから辛い目に遭い、安全な所へ、しかし見知らぬ他人に囲まれれば誰だって心細い筈だ。

しかし目の前の子は『両親』の話題すら出さず、求めなかった。どちらかと言えば、両親を避けている節すらある。

が。

両親を心底毛嫌いしている訳ではなさそうだ。

そうでなければ、そこまで傷ついた表情はしない。

あまりにも一瞬すぎて、とても気付き難いけれど。

「……………そうかもしれないわね」

自分を嘲笑するかのような笑みを浮かべて言うレン。

幼い子供が自分を傷つける素振りを出来てしまい、またそうせざるを得ない状況に育たざるを得なかった状況に憤りを覚えるレナ。

レナはレンの隣に座ると、彼女を膝の上に抱え上げた。  
レンは不思議そうに顔を見上げた。

「体調が治ったら……」

「？」

「会いにいきましょう」

「っ！？」

レンは驚愕の表情を浮かべる。

エステルは「折角妹ができたと思ったのになあ。でもレンちゃん  
の為だもんね」と言っている。

そうね、とエステルに返し、レナはぎゅっと怯えるレンを抱きし  
める。

「大丈夫よ。だって、こんなに可愛い、いい子なんだもの」

「でも、パパとママはレンの事を……」

「焦っちゃダメ。レンちゃんは“その事”を確認したのかしら？」

「……してないけど……でも、分かるんだもん」

「その通りなのかもしれない。でもね」

「？」

「私はレンちゃんを娘に欲しい程なのよ？ だからきつと大丈夫」

「……ふふ」

その笑いは、少しだけ自嘲を含んだ声。

「あら、ホントよ？」

「ふふ……気遣いありがとう、レナ」

「もっ」

むう、と拗ねるレナの腕にそつと自分の手を重ねた。

結局、その日はレンとエステルはゆっくりと過ごした。

レンの怪我が治ってない事もあり、家の中でゆっくりとお絵描きなどをして過ごした。

事あるごとにエステルがお姉さんとして振舞い、逆にレンに年下扱いされていた。

それでもどこか息の合う2人は、すぐに仲良くなった。

レナはそんな2人を見守りつつ、未だ帰宅せぬ夫と愛する義息子を待っていた。

空が夕日で真っ赤に染まりカラスが鳴いている午後6時。  
ついに帰って来た。

「今帰った」



「おかえりなさい！」

「！！！」

（レナの夫が帰って来たのかしら？ 確か遊撃士のはずよね）

レンが玄関を見ると、そこには20代後半から30代前半と思しき男性がいた。

レナが優しく声をかけエステルが駆け寄り、男性はエステルを抱え上げて優しく微笑んでいる。

「あなた……お疲れさまでした」

「ああ……ありがとう」

その光景を、レンはジッと見ていた。

レナが何かを話したのか、男性はこちらを見てニンマリと笑顔を浮かべて近寄ってきた。

「こんばんわ、お嬢さん」

「どうも初めまして。今回、レンの事を助けてくれてとても感謝してるわ」

「ふむ……それは私じゃないんだがな」

「……………」

「君は、ソレを知ってるんじゃないか？」

ほんの数秒の沈黙。

その後、レンが小さく頷いた。

本当は覚えていた。

誰がレンを助けてくれたのか。

同じ場所において、同じ苦しみを味わって。

自分が真の絶望を味わい、心が死に絶える瞬間だった。

光景事態は逆さまに見えた、青い閃光と飛び散る血飛沫と肉塊。生まれて初めて見る凄惨な光景な筈なのに、その光景に見惚れた。

誰が行ったか、そんなの簡単だ。

自分はそれを見ていたのだから。

それを口にしようとして、

「だが、今はご飯にしよう」

「……？」

「怪我した身体にはご飯を食べて、ゆっくりと寝て、英気を養う。

これは大事なことさ」

なんともダンディーにウインクをするカシウスに、レンは小さく笑った。

深夜。

エステルがレンを引き連れて自分のベッドに引きずり込み、レンがブーブー文句を言いながらも2人が安らかに眠りについた頃。

そんな2人のやり取りを微笑ましく見ていたレナが寝付いたのを見届けて、部屋の電気を消してリビングへと戻りカシウスの前へと座った。

「本当に仲良い2人だわ」

「ああ、本当にな。昨日今日会って会話したと思えん仲だな」

「ええ。面白いんだけど、エステルったらお姉さんのようにう振る舞うのよ」

「……だが、レン君の方がお姉さんみたい、だろ？」

「そうなのよ！」

アハハハ、と笑う。

快活で明るい、真つすぐな自慢の娘だと胸を張って言えるが……如何せん『子供』っぽい子供なのだ。

それに比べてなんてレンは落ち着いているのだろうか。

もちろん今回の事件からという理由もあるだろう。

だがそれだけではない。なんとなく生来のもの、という方が強い気がした。

「でも今回はエステルに感謝ね。本当に」

「ああ。まっただくだな」

「あの子のおかげで、レンちゃんも辛いことをあまり考えずに済んでるみたいだし」

「ああ。だが……」

もちろんそれもあるだろうが、きっと耐えられる強さを持ってしまっていたんだろう、悲しいことにな、と。

ええ、とレナは小さく肯いた。

もちろんエステルの影響も大きい。それは認める。あの子のおかげでレンは呆れたり、構われて鬱陶しそうにしたり、騒いだり、喚

いたりしていた。それはきつと、レンにとって良い事。

「だけど本当にあの子の心が癒されるのは……」

「ああ。ずつとずつと、先だろう」

お互いに小さく溜息を吐き、

「そして、今回の生き延びた子供たちもまた、な」

「そうですね……何名か聴いてもいい？」

「名前は教える事はできないが、人数くらいならな」

カシウスはそう言っただけで答えた。

「全12ヶ所を叩いた結果、生き残りは……8名だ」

「8つ!？」

その少なさに、レナは絶句と共に涙を浮かべた。

聞いていた限りだと、誘拐された子供たちは100名は軽く超えていたはずだ。

それが、たったの8人。

分かっていた。分かっていた筈だが、それでも憤りと絶句しかない。

それしか生き残れなかったというべきか、そんなに助かってよかったというべきか。それは誰にも分からない。

けれど、大勢の子供が亡くなったことに、変わりはない。

「皆、それぞれの出身地方へ回され病院に収容された。しばらくの間は遊撃士、準遊撃士が護衛に着くことを遊撃士協会本部が決定し

たんだが……ようやく事態は収束、というところか」

そうは言いつつも、目を伏せるあたりはカシウスも遣り切れないようだ。

そのタイミングでシーンと居間に沈黙が漂い、家の周りの虫たちが夜の中で合唱を奏でる音だけが響いていた。

レナはそこでずっと聞きたかった事を尋ねる。

「えっと……」

「……………」

「あの……あなた？」

「……………彼のことだろ？」

「！ ええ」

ついに来たか、と声なき声で呟く。

カシウスは口元を覆い、小さく溜息を吐く。その態度を見てレナは嫌でも悟ってしまう。伊達に夫婦をやつてない。

「……………保護、できなかったんですね」

「……………ああ」

「亡くなっては、ないんですね」

「少なくとも遺体は確認できなかった」

ぐっと、拳を握りしめた。ぎゅーっと力を込めすぎた所為で、爪が手の平に食い込み血が出てしまう。

そんな事も気にせず、レナは何度か口を開こうとし、止まり、口を閉じ、再度開こうとする。

それを何度か繰り返した所で、

「あなた……ありがとうございます」

「すまない……」

席を立てて頭を下げ、レナは力なくトボトボと部屋へ戻って行った。

カシウスだつて分かっていた。

きつと責めたかったのだ。だから恩人であり訳ありだろう子供を、息子にしたがつている子を真つ先に助けてくれと言ったのに、と。

でも妻は自制心に長けた女性だった。

それが昔は美德であり、そこにも惚れた要素ではあったが……  
…今は責めてほしかった。

「すまない」

それは誰に対してだったのだろうか。

カシウスは、小さく呟いた。

その声は。

その声はとても弱々しかった。

裏町、という言葉がある。

それはどんな所にもある、闇であり影。

どんな都会だろうが、どんなに発展した街であろうが、必ず煌びやかな所には暗部がある。

それは治安が悪い所だったり、政務でいえば汚職であつたり。

ここ、クロスベル自治州にも、当然ながらそれはあつた。

裏通りと呼ばれるクロスベルの区画。

一見、帝国と共和国の中立国でありIBCという巨大グループの本社があるこの街はどこと比べても発展しているが、裏街はその真逆を示すように暗い。

その暗部さは地元住人ですら近寄らない、危険地帯。

地元ギャングやヤクザ、暴力団といった危険な人物たちが出入りする区画。

クロスベル自治州の裏街。

怪しげな建物やビル、商店や飲み屋が集い、怪しげな物が散乱している。

その樽や木の箱が散乱している家と家の隙間。  
人目もとても付き難い隙間。

そこに、子供が1人、倒れていた。

「……………」

夜空の下、少年は裸であった。

身体中は青く変色し、注射針の痕が多数みられる。

少年の体は不自然に震え、声も出ないようで、うつ伏せで倒れていた。

（ここは……？）

少年がゆっくりと目を覚ました。

動かない身体にしかたなく首だけをゆっくりと動かし、辺りを窺う。

（逃走は上手くいったようですが……………？　ここは……………クロスベ  
ル？）

地面から伝わる地脈の魔素、空気、臭い、辺りの景色に、少年ことルシアは自分がよく知る街に『飛んだ』のだと知った。

（運が良かった……………）

訳の解らない場所じゃなくて良かった、そう思う。

これが魔獣の近くとかだと、自分は間違いないやられていた。

だが未だ安全とはいえない。

助けを求めようにも声がでないのだから、楽観視はできなかった。

そして何よりルシアは知らないが、既にあの事件から丸1日経過



しているのだから。

倒れている場所が発見し辛い場所だというのも、ルシアの不運かもしれない。

(身体が……………言う事を……………効かない)

流石に不味い、そう思った時だった。

「? つ! ~~~~~!」

「~~~~~!」

ふと、女性の声がかすかに聞こえた。

もう一人、誰か男の人がいるようで、けれどどちらの顔もよく見えない。

「! !」

女性らしき主が、こちらへと近寄ってくる。

だんだんと、その姿の輪郭がはっきりと見え始める。

女性はルシアに気がついたようで、血相を変えて駆け寄って来た。いろいろと自分に声を掛けてくれているようだが、ルシアは答えることができなかった。

血塗れの、いろいろな液体が付着したルシアの身体を気にせず抱え起こしたその女性を、ルシアはゆっくりと目を開ける事で窺い、再び意識が落ちていく。

完全に闇に閉ざされる瞬間、確かにこう聞いた。

「もう大丈夫よ。安心して？ 私、『イリア・プラティエ』は貴方に危害を加えないわ」

## 第19話 事件発生後（後書き）

お久しぶりです。地震により知り合いが1人亡くなったので、投稿は自重してました。

また再び連載を行います。

アニメ、碧の軌跡と狂喜乱舞するニュースが多いですが、地震の所為で素直に喜べない、そんな感じですよ。

次回で終わると予告してましたが、少し難しい、かもですよ。

次はついにヘイワース夫妻との再会。そしてイリアとルシアの会話ですよ。

## 第20話 心

花の香りがした。

そして次に嗅いだ事のない匂い。なんだか鼻を突く匂い。

白いベッドの上で深く眠りについていた少年は、部屋に漂う香りで目を覚ました。

「……………」

ゆっくりと目を開け、ポーツと天井を眺めた。

記憶を辿る　　そうだ。自分はカシウスへメッセージを飛ばした後、レンと共に脱出したのだった。

レンはカシウス邸に飛ばした。正直ギリギリの力であったがあの人たちなら何とかしてくれる、そう不思議に思えた。

だが自分に関しては完全にコントロールは効かなかった。レンを逃がす事で力尽き、己自身は運任せのランダム転移となった。

そしてどうやら、ここは保護された場所のようだ。

(奇縁ですね……人間によってここまで陥ったというのに、同じ人間に助けられるなんて)

自然と心の中で嘲笑する。

嘲笑うなど、『遣り方』さえ知らなかったのに、それを自然と行い、そしてそれに気付かない。

「あら、気がついた？」

急に、声がかげられた。  
明るく陽気な声。声の通りが良く、部屋に響いている。

声がした先へ視線を向ける。  
身体が全く動かないので視線だけを声がした先へ向けると、そこにいたのは金髪の女性だった。

スラリとした長身に、細く長いカモシカのような手足。スタイル抜群の身体付きに、腰まで及ぶ金髪の髪は部屋の光に反射して光ってさえ見える。

「ああ、ここは私の部屋ね。それで私の名前はイリア・プラティエ」  
「……………」

「君が裏街で倒れていたのを見つけて、私が保護したの」

「……………」  
「ん〜、警察への通報は後回しにしたわ。それは勘だけどね」

「それは大丈夫よ。信用のできる医者に診せたから。私、アルカンシエルって劇団に所属してて、その劇団の専属医に診てもらったの。だから外に漏れる事はないし、妙な事をされる事もないわ」

「……………」  
「まあね〜」。勘という名の独断？ 迷惑だった？」

会話が成り立っていない。

いや、お前はエスパーか、と普通の人がいたら突っ込んでいただろうが、残念なことに誰もいなかった。

ルシアは声なき言葉で彼女へ尋ね、イリアがそれに答えていた。

イリアはコップに水を汲んで来て、そっとルシアの背中を支えつつ上体を起こして飲ませた。

程良く冷えた水が喉を潤して気持ち良い。

「……………どう……………も」

「ん。ゆっくり飲むのよ。急に飲むのは良くないから」

支える為の背に回されたイリアの腕に包まれながら、ルシアは水をゆっくりと飲む。

漂ってくる香りは、花の匂い。

久しぶりに嗅いだ、薬品の臭いではない落ち着く匂い。水を飲み終わると、ゆっくりと布団に寝かせてくれた。

「……………何故、なにも、聞か、ないの、ですか？」

話し難い。

思わず眉を顰めてしまうルシアであったが、イリアは気軽な態度で横に腰かけて話す。

ルシアはこの2か月の期間で学んだ。

人間は欲望に忠実だと。

己の知識、業績、学業の為なら、大仰な理由や大義名分を振りかざし正当性を主張し、その為なら青き星の御子である自分にさえ手を付けさえする。

この身を穢し、アルテナの使いにすら手を振り上げる悪行。

（私は知っている……………父様や母様の戦友たちを。あの人たちは決してこのような事はしない、と思う。この臍気は記憶が確かなら。だけど私は見て味わった。人間達の卑劣なところを。ならばこの女性も同じ可能性は高い）

そんなルシアの警戒心を感じているのかいないのか、イリアは肩

を疎めた。

「これでも女優を目指してるからね。ある程度は察することはできるわ。まあ、だから問い詰めもしないし聞きもしない。君が警察や病院は困るといふのなら通報もしない」

本当なら問答無用で病院に連れていくのが常識なんだけどね、とイリアは笑う。

医師も言っていたのだ。早く連れて行くべきだ、と。だがそれでも自分の勘が言っていた、連れていくのは駄目だと。

結果論でいえば、それはルシアにとっては正解だった。

（身体中についた暴行の痕、体液の付着、薬物や注射針の痕、そして“あの事件”の解決発表の翌日に発見された、全身裸で倒れていた子供）

事件の記事が発表されてから、クロスベルのみならず大陸に激震が走った。

その残虐性から、死傷者の数まで、全てが異常ともいえる程で、普段はそういったものに感心が無いイリアが記事を読んだ程だ。

だが、1つだけ問題となる点がある。行方不明となった子供たちの親類一同の確認が取れたという発表があった事。

被害者の家族は全て集められて事件概要を説明され、犠牲者リストとの照合が行われているとの事。

つまり この子には親はいない、又は警察・遊撃士・各国軍部はこの子の存在を隠したい可能性が高い。

だから……………イリアはルシアを守ろうと思った。

「さ、もう一眠りするといいわ  
……………」

2人の視線が絡み合う。その視線の会話に何があったのか、それは分からない。

だが、ルシアはそっと瞼を落として眠りについたことから、少しは目の前の女性を信じたのではないだろうか。



イリア・プラティエに保護されて、1週間が過ぎた。

その間、ルシアは数日に渡って眠り続け、朝早く出かけて夜に帰ってくるイリアと一緒に暮らした。

食事を共に食べ、お風呂にも入った。

薬漬けにされたのが余程身体に影響したのか、ルシアはイリアが居ない時は殆ど眠っていた。起きたらイリアに介護されつつ会話を交わし、そしてまた眠るといふサイクル。

イリア・プラティエという女性は強かった。

介護に弱音1つ吐かない精神。

お世辞でも、ルシアの傷だらけの身体を見て綺麗とはいえない、そんな痕を見ても眉1つ歪めない心。

何も喋らないルシアに対し、まるで自分の弟のように接し、自分の心を完全に開いた態度。

そんな『あり得ない』のが『普通』である彼女だが、それは実にルシアに戸惑いを与えた。

父のような、母のような、両親の戦友たちのような。

人間など皆が劣悪種であり、両親たちが例外であると思っていた。エステルたちが例外的、ある意味で普通の人間ではないと括っていた。

だが、こんなところにもいたのだ。

その事実が、彼を戸惑わせ、困惑させる。

だからルシアは観察し続けた。イリアという1人の女性を。

そんな日が1週間続いた朝、ルシアとイリアは朝食を食べていた。

「でね、今日は久しぶりのお休みって訳。どこか行きたいところある?」

「……まだ身体が動き難いので……遠出は」

「そうよね。じゃあ、私たちの劇場に行く? この前出来たばかりなんだけど。ずっと部屋に籠ってたら身体に悪いし」

「……ええ」

ルシアは笑う彼女を見て彼女の髪の色から向日葵を連想しつつ肯く。

(性格は全く違うけれど……この明るさはエステルに似ています)

思わず口元が緩む。

レナは、エステルは元気だろうか。

彼女たちの事を思うと、自然と笑みを浮かべてしまう。

「ん? なに急に笑ってるのよ。というかルシア、貴方笑えたのね。安心したわ」

「……」

「さあ、ご飯食べ終わったら行きましょう」

そう言つとガツガツと勢いよく食べ、食器を適当にキッチンに放り込むと、ルシアを抱き上げて家を出た。

傷痕や注射痕が見えないように、自分の子供の頃に使っていた服のジーンズにセーターを着させる。

いろいろと悩んだが、黒のタートルネックのセーターが一番似合うとイリアは思った。

クロスベルの街へ出ると、車の行き交いが激しく、以前ルシアが見た時よりも人々が活気づいている気がする。

そんなルシアの考えに気付いたのか、イリアが正面で抱っこする体勢で教えてくれた。

「驚いた？ 事件が解決してから以前のように街も戻ったわ。今まで怯えて大人しくしてた鬱憤を晴らすように、ね」

「……………」  
「今までの分を取り戻すように頑張るのよ。ほら、みんなイイ顔してるでしょ？」

「いい、顔……………」

視線の先にいるのは、遊んでいる子供たち。

汗水流しながら商売をする人。

そこには、確かに明日へ生きようとする人々の力があつた。

それをルシアは、確かに感じた。

「さ、こつちよ」

イリアはルシアを抱きかかえながら劇場がある歓楽街へと歩く。

ルシアは知らない事だが、裏街を中継しなかった事はイリアの氣遣いであつた。

住宅街を通り抜け、カジノを通り過ぎると大きな建物が見えてきた。

その建物はこれまでとは違い、デザイン重視のもの。

建築様式も近代風ではなくどこか昔を匂わせるモダンなものが多い。

中へ入ると装飾絢爛な飾りが多く、人工的な物であるが故に目を引く光景にルシアは魅入った。

エントランスの傍らにある受付に、初老の男性がいた。

その男性は2人に気付くと慌てて駆け寄って来た。

「これはイリア君、どうした　と君は……」

「今日はオフでしょ？　ちょっとこの子に見せてあげようかと思つて」

「なるほど。しかしイリア君。早く病院に連れて行けとあれほど

「はいはい。わかつてるわかつてるって」

老人がなにかを言おうとするが、イリアは碌に聞いていない様子で奥のホールへと歩いて行った。

劇場のメインホールに入り、数多の客席を抜けていく。

その席は、数ある中では一番安い席のエリア。

そこから上の階へ上がるほど、VIP専用となり席料も高くなつていく。

木造のステージ、その前の特等席にルシアを座らせると、イリアは軽快な足取りでステージに乗る。

そしてバツと両手を広げ、満面の笑みで振り返った。

「どう？　ここで私たちは全身全霊をかけて演じるの。自分とは別人の、その人の生き様や人生という名の物語を。その瞬間のその人の想いを」

「……………」  
「私たち役者は、その瞬間は自己を脱ぎ捨てて、別人に成りきる」

「……………」  
「それが成し遂げられれば……観客は皆が感動し、引き込まれるわ」

それが出来なければ見るに堪えない舞台の出来上がりって訳、と肩を竦める。

ルシアがほほうと小さく肯くの笑い、イリアは小さく飛び上がる。

小さな跳躍にも関わらず、イリアは着地までに2回転もし、間髪いれずに宙返り。

細かなステップで後退し両腕で扇情的な動きを見せる。腕の振りは大きく、そして時には小さく繊細に。

その場で何回も回転を始める。回転の速度は速くなり、遅くなり。回転しながら飛び始めた。

ルシアは確かに見た。彼女の動きから、身体から光が零れているのを。

「……………綺麗です」

「あら、そう？ 嬉しいわ！」

ルシアの素直な称賛に、イリアは少し照れたようにはにかんで笑う。

「驚きました。己を輝かせる事ができるなど、貴方で2人目です」

「輝く？ ん……………よく分からないけど悪い意味じゃなさそうね。」

「光栄だわ。でも1人目は？」

「昔の……………本当に昔に会った、知り合いの方です」

「昔って。あなたはまだ子供じゃない。昔なんて表現は相応しくないわよ？」

「……………そうですね」

小さく口元を緩めて笑う。

失った記憶を必死に掘り起こせば、ジーンという女性は踊り子でありながら武道家でもあった。

武道を教えられた最中の休息の時に幾度となく舞ってくれた。

それを自分は、素直に喜んで観賞していた。

両親も、ロンさんも、レオさんも、“父様に好意を持っていた”レミーナさんも。

「あの頃は……私の歌をあの人に、皆に褒めてもらって、嬉しかったのを覚えています」

「そう………会ってみたいわ」

全ては、過去。

もうジーンさんはいない。レミーナさんも。レオさんも。ロンさんも。そして、両親も。

ルシアの無表情の中に、微かな悲しみや孤独をイリアは垣間見る。なんだか堪らなくなり、思わず口にしていた。

「ねえ。私にも聴かせてもらえないかしら？ 君の歌を」

「……………声が出難いので、聴き辛いかもしれませんよ」「いいのよ」

では、と肯き、ルシアは小さく息を吸い込み、動かない身体を椅子に預けながらその場で歌った。

小さく、だけど掠れた声で。

劇場というのは、その構造事態が優れている。

音は良く聞こえるように、響くように作られている為、自然と“

良い音”が聞こえる。

その為だろうか。

小さな声にも関わらず、その声は劇場に確かに響き渡った。

(うわ……何、この子。才能ってレベルじゃないわコレ。そう、これは奇跡よ)

空間が輝いている、確かにイリアはそう見えた。

キラキラと小さな光がいくつも宙を舞っている。

声の主を祝福しているんじゃない、歌声に祝福されて喜んでいる。意味が分からないが、その例えが一番しっくりきた。

数分間だが、その歌にイリア・プラティエは酔い痴れた。

歌が終わると、まずイリアが行ったのは拍手でもなければ称賛の声を上げることもなかった。

それは。

「はあ~~~~~」

盛大な溜息である。

顔を俯け溜息を吐くその姿は、なんだかとってもオヤジ臭く、そして次にとった行動は、

「もっ……………最高」

ブルブルと震えてゆっくりと顔を上げると　　眼を輝かせるイ

リアが。

ピョーンと勢いよく舞台から飛び降りると、ルシアを抱え上げ、スリスリと頬を擦り合わせる。

「ルシア！ あんたはこれから私の劇団に入りなさい！ 私の専属歌手として！」

「いえ、それはちよつと」

「もう決定！ あ~~~~~、もう最高！ あんたの歌と私の踊り。合わせれば天下無敵よ！ これでもう一人、私と対極の踊り方をする子が入れば私たちは勝てる！」

「？ 何にです？」

イリアの暴走は止まらない。

抱きしめる力は更に強まるし、年頃の女の子が子供とはいえ男の子のルシアに対して頬を擦りつけるほどの愛情表現。

ルシアも自分の言葉が見事にスルーされているにも関わらず、どこか憎めず、そしてなんだか面映い。

「くすぐったいです……………もう」

「え~~~~、いいじゃない。ブウブウ」

「子供ですかあなたは」

そう言いながらも。

無意識に、ルシアの両手がイリアの首元に回されようとしていた。その瞬間だった。

バタン！

という大きな扉を開けると共に入ってきて来る、大勢の足音。

「誰！？」

イリアはハツとなり、ルシアを守るように背に隠す。



彼女の声を無視するように、無言で次々と突入してくるのは警察。

「な、何故クロスベル警察がつ!?」

突然入って来た警察官たちに動揺する。

訳がわからない彼女に答えたのは、最後に入って来た男性だった。

「私ですよ、イリア君」

「支配人！」

その人は、ホールに入って来た時にいた男性だった。

「なんで勝手に!」

「君はこの劇団の宝なのだ! それなのに、そんな訳のわからない子供にカマけておる! しかも医者の見立てではクスリをやっているとか。そんな危ない、身元不明の子は警察に通報するのが筋というものだろう!」

「そ、それはっ」

そう。誰がどう見ても、ルシアは危ない子である。

そしてその場合は警察に通報するのが筋であった。なによりイリアは近い将来にスターになる存在。

そう確信している支配人であり初老の男性は、イリアが犯罪者になる前に防ぎたかった。

誘拐という疑いをかけられる前に。

「まあ、それに関しては大丈夫でしょう。彼の身元は私が保証しますよ」

だがそれは、すぐに解決した。

男性のさらに後ろからやってきた男三人組み。

その中央の男性が云ったのだが、その男性にルシアは見覚えがあったのだ。

「……………セルゲイ」

「探したぞ、ルシア」

「全くだぜ。どんだけ心配かければ気が済むんだお前は！」

「……………ガイさん」

「無事で安心した」

「……………アリオスさんまで」

近寄って来た3人は、穏やかな顔でルシアの前まで来る。

イリアは知り合いだと分かったのか、ひとまず安心して、そして気がついた。

「あら？ あなたセシルの……………」

「ん？ おいおい、あんたはセシルの親友の」

どうやらこちらも知り合いだったようだ。

何やら怒りたいような嬉しいような、といった複雑な顔をしているセルゲイやアリオスを尻目に、ガイはそつだそつだ言っつて両手をポンつと叩いて、ルシアへと近寄ってくる。

「おい、ルシア」

「……………何でしょう」

「お前への伝言、というかお願いされた事だ」

「？」

歯をくいしばれ、という言葉と共に振りおろされたのは拳骨。

ゴチン、という音と共にルシアの脳天に振りおろされたのだった。

「ノエルからお前にだ」

「嘘をつくな嘘を。あの子はお前にやってくれなどといつとらん」

「その通りだガイ」

即座に突っ込みされたガイは、うつと苦しそうにうめき声を上げる。

だがルシアはその行為を敢えて受け入れた。

ド突かれた頭をひと撫でし、小さく頭を下げる。そんな態度に、ガイは気まずそうに言った。

「あゝ、いや、まあ。今回の一連の騒動。お前のやった事は類を見ない功績だとか言われてるし、実際にそうなんだが……あゝ、女を泣かせた時点で男が悪い！ これは常識だ！」

「……………そうなんですか」

「いや、納得するな」

本気でふむふむと肯くルシアに、セルゲイは思いつきり突っ込みを入れる。

「まずは、イリア・プラティエ殿。この子を保護して頂いたようで、心から感謝します」

「ん？ ああ。いいのいいの。私が好きでしたんだから」

「そうか」

年上に対してもぎつくばらんな態度だが、セルゲイはそれを不快に感じなかった。

軽い態度に助かりつつも、ルシアへと振り返り、改めて身を正す。セルゲイの態度に、周囲を警戒・囲んでいた警官達も一時的に姿

勢を崩し、そしてルシアへと向く。

バシっという音。

イリアはひゅうつと口笛を鳴らし、支配人の男性は息を呑んだ。

一斉に脚を踏みならし、姿勢を正し、敬礼。

その光景は 壮観の一言に尽きる。

「 多くの子供を拉致犯の魔の手から救い出し、己が囚われてもその強靱の精神から屈さず、冷静且つ狡猾に推理し敵の狙いを見抜き、事件の早期解決に尽力してくださった功績に、心から感謝します!」

「敬礼~~~~~!!」

ガイの合図と共に同時に敬礼する警察官たちは、眼の前の『子供』に対する態度ではない。

敬意を払うべき『一般人』に対する、心からの感謝の気持ち。

(これは……………)

確かに伝わってくる、人間たちの心。

身勝手な欲に塗れた人間。

清々しさを感じさせる人間たち。

一体、いったいどちらが本当の人間の姿なのだろうか。

「 私からも礼を言わせてくれないだろうか」

その自然と響く声に、誰もが入口へと振り返る。

新たな来訪者の姿を確認した者は、自然と息を呑んだ。

そこに居たのは、今回の事件の最大の功労者にして指導者。元々有名だった名が、不動のモノとして大陸全土に根強く芽生えたその名。

「カシウスさん」

「会いたかったぞ……ルシア」

そこにいたのは、若干目が潤んでいたが穏やかに微笑む、カシウス・ブライトの姿だった。

ここクロスベルに居るのは家族旅行という事らしい。今回の事件で家族を放置気味だったことに対するお詫びと、新しく加わった家族との懇親旅行との事。

列車で訪れたは良いが、家族をホテルに預けて一旦クロスベルの遊撃士協会に挨拶に行った時だった。警察に不審な子供がいるとの情報が入ったと、遊撃士協会も掴んだのだ。

そして遊撃士協会が問題視したのは、事件の件の子供の情報と一致したからだった。

カシウスは一瞬、家族たちにこの事を伝えるか迷った。

だがやはり、ルシアが『どうなっているか』が分からない以上、会わせてはならないと決断したらしい。

父親として、そして旦那としての判断だった。

「とまあそういう訳で、エステルやレナと一緒にじゃなくてもまなかつたな？」

「……………」

「ハハハハ。冗談だ冗談」

少し抗議がましい眼で見ってくるルシアにカシウスは苦笑する。  
こんな薬漬けの状態の自分を、誰が見せたいと思うだろうか。  
もちろんカシウスもそう思ったからこそ、1人で来て正解だと思  
ったのだが。

「そうでした」

「ん？」

「レンは……無事でしたか？」

「もちろんだ。あの子は今は私たちの娘さ」

「そう、ですか」

ホッと一安心。

魔法のコントロールが効き難い中、正直いつて自信がなかったの  
だ。

「それで……………身体は大丈夫なのか？」

カシウスは心配そうな声で、屈んで頭を撫でながら問う。

その言葉にセルゲイやガイ、アリオスも近寄って来て様子を窺う。  
ルシアは目を伏せ躊躇いがちに、だが正直に言う事にした。

「身体は……良いとは言えません。まったく動かない状態ですし、  
体内に粗悪なモノが溜まり過ぎているようです」

「……………急いで病院を手配しよう。信頼のおける、軍の病院をな」  
「それがいい。信頼のおけるモノを交代制でガードさせながらな」  
「そうだな」  
「ああ」

各々がそう勧めてくる。イリアもなんだか安心したような、けど少し寂しそうな、そんな顔をしながら後ろで肯いている。

その勢いに押されて、ルシアも肯こうとした、そんな時だった。

「そうそう。そういえば各施設を叩いた時にな、俺たち遊撃士の前に妙な女が現れたんだ」

「女？ 研究員とかツスか？」

「いや、ガイくん。そいつは事件の黒幕の協力者のような事を臭わせた後、姿を消したんだが……問題はその前だ」

「何があつたんです」

アリオスはカシウスの言葉に不穏な気配を感じたのか、珍しく焦れたように聞いてくる。

そしてその言葉を聞いたルシアは 凍りついた。

「魔族の長・ゼノビアと名乗った女が、不明の方法で現れ、そして姿を消した。正直いって、勝てる気がしなかったよ……………ゼノビアという女の背後には、ゾファーというボスがいるようだった」

「剣聖である貴方が勝てないって……………」

「魔族って、なんだ？」

「D・G教団以外にも外道な奴らがいるのか」

カシウスの言葉に驚愕するセルゲイ・ガイ・アリオス達。

魔族については知らないが、それでも犯人が別にもいると知り、拳を叩いて悔しそうにするガイ。

周囲の警察官や捜査一課の者たちも表情を険しくするが、それは自然と収まっていく。

イリアはそれを怪訝に思った。

何の話かはすぐに分かった。生来の直感の良さから、最近の大きな事件の事だと当たりを付け、それ故に皆の動揺や怒りも当たり前だと思っ。

だが、それなのに収まりを見せる様子にイリアは眉を顰め、周囲を見渡し、ソレについて気がついた。

「ゼノビア……………ゾ、ファー……………!？」

小さな変化は見せたとはいえ、殆どのその表情に変化など無かった、小さな男の子・ルシア。

人形のように空虚な目をして、感情を失ったんじゃないかと思うほど変化がない彼。

-  
だが。

そんな彼が、目を大きく見開き唇を震わせ、動かない筈の身体を大きく震わせたその反応に、誰もが驚いていたのだ。

「お、おい、どうした？」

「ちょ、ちよつと、どうしたのよそんなに驚いて」

「……………やはり、心当たりがあるのだな？」

セルゲイは初めてみるその姿に慌てて話しかけて来て、イリアは



少しもつてしまい、そしてカシウスは『直感』が『確信』へと変わる。

「教えてほしい……あの者たちは、何者なのか」  
「……………」

ルシアは俯いて答えない。

いや、実際は『聞こえていなかった』。

（魔女ゼノビア……覚えがあります……魔族の中でも頂点に立つ存在であり、その魔力はゾファーに及ばないまでもアルテナを守護する四竜すら超えると云われた筈。けれどあの者はその昔、ドラゴンマスターに滅ぼされたと知識に。いえ、そんな事はどうでも良いのです。問題は、ゾファーが自由に動き出しつつあること、そして魔族たちを配下に加えたということ）

今のままでは

勝てない。そう確信する。

魔女ゼノビア、そして暗黒の破壊神ゾファー。

彼らに対抗する為には、自分の力の全てを取り戻す事。そしてその為には

「……………っ!!」

イリアを、セルゲイを、ガイを、アリオスを、そしてカシウスを見て、思わず硬直する。

ソレをすれば。

ソレをしてしまえば。

「……………事情が変わりました」

「なに？」

その絞り出すような声が、辛そうなほど震えていた。

ルシアの纏う雰囲気急変する。

薬で弱り切った、儂い雰囲気があった彼から、ピリピリした攻撃的な意思を、他者の拒絶の意思を纏った雰囲気へと変わった。

そして彼の身体が、徐々にゆっくりと浮き上がる。

魔法の行使が苦しく、呆れる程の微量な魔力しか出せない。だが、確かに皆は見たのだ。

人が浮くのを。

「ルシア、おまえ……」

ガイが呆然と呟いた。その声は皆の声を代弁している。尚も詰め寄ろうとした瞬間だった。

「……私は人間の為に、大幅に使命を果たす予定を狂わされた。故にもう、貴方達を信じることはできません。これ以上余計な情報を貴方達に与えて、事態が拗れるのは避けなければならない」

「それはっ！　だが、だが！　ここで対策を練らなければ後々に事態が悪化するかもしれないだろう！」

「だとしても」

カシウスの言葉を遮って言う。

そう、これは歴然とした事実だから。

「人間の力で、ゼノビアにも、そしてゾファーにも勝てません」

宙に舞った高さは、ついに3メートルへと到達する。

「私は、この弱った肉体の再生作業に入り、この身を『封印』します。時間換算しておよそ数年。その間にあの者たちが完全に復活することが無い方に賭け、復活直後にあの者たちを滅ぼします」

ルシアの言葉に誰もが訳が分からず混乱する中、イリアだけは反応した。

彼女だけは気付くことができた。

「ちょっと待ってルシア！ 封印ってどういうこと！？ 肉体の再生って、何をするつもりなの！」

「……………分かりやすくいえば、私が作り出す特殊な結晶体の中に己を閉じ込め、造りかえるのです」

「!?!」

イリアはその言葉に絶句する。

そう、それはどこか『人』として許されざる発言だった。

思わず激情に駆られるままに怒鳴ろうとして、そして何も言う事はなにもできなくなった。

「……………カシウス」

その瞳は、人形なのではなく。

「セルゲイさん」

その口元はギュツと噛みしめられ。

「ガイさん、アリオスさん」

特徴的な青髪が魔力の奔流で靡き、そしてそれが幻想的で美しく。

「そして……イリア」

そこにいたのは、確かに『ルシア』という名の人形なんかじゃない、1人の『人』だったから。

「また、いつか、会いましょう」

そう呟いて、消えてしまった。

リベール王国軍、元大佐にして剣聖カシウス・ブライト。

A級遊撃士にして、その中でも最強と名高いカシウス・ブライト。

彼は一時間前に、もう一人の息子を救う事が出来ず、彼の苦しみを分かってあげる事ができず、己の無力さを痛感して心を痛めていた。

そんなショックを受けたカシウスは重い足取りで家族の元へと向かったのだが、クロスベルの街中で呆然と立ち止る家族に気付き、

思わず駆け寄った。

様子がおかしい。

そう思い近寄ったのだが、その原因に嫌でも気付かされる。

今回の旅行は、レンの本当の両親に会うのが一番の目的。

そして妻とその傍で妻にしがみ付き何かに耐えるような仕草の愛娘と、身体を震わせる新たな娘が。

3人が見詰める先にいたのは

。

レンと同じ髪色をした男性と、茶髪の女性だった。

その腕に、小さな赤ん坊を抱きしめて。

『可愛いね。お前にそっくりだよ。ほぐぐら、よしよし』

『ふふ。前の子はあんなことになってしまったけれど』

幸せそうに微笑み合う、夫婦の姿。

『でも良かった。女神さまは私たちのことをお見捨てにならなかったのね』

『おいおい。その話はしない約束だろう？』

思わずカシウスは、レンの耳を塞ぎたくなって、だがどうしていか分からなくなった。

『昔のことはもう忘れよう』

『ええ……哀しいけど、その方があの子のためよね』

分かっていた。レンは穢れた子。

あんなことになった、前の子。

分かってしまった。

。レンは、どうでもいい、忘れられるくらいにの

『それが本当かどうか、今を生きてください』

不意に思いだした『あいつ』の言葉。

『貴方は今、1人ではないでしょうっ?』

「もう……いいわ」

涙は、無かった。

ただ感情の全てがそぎ落とされてしまったような、まるで人形のような、そんな顔。

人はこんな顔が出来てしまうのか、レナはそう思ってしまう。

「~~~~~」

何か言わなくては、そう思うが言葉が出てこない。レナもカシウ

スもそんな自分に憤り、そして焦る。

掛ける言葉が見当たらず、レナは思わず手を握った。

必死に、必死に言葉を探る。

「本当に、いいのね？」

「……………」

「勘違い、というのもあるのよ？ レンちゃんが生きてるって言えば、ご両親だって」

「……………」

レナの言葉が苦しいのか、それとも痛いのだろうか。

ついにレンの瞳からポロポロと涙が零れ落ち、でも気にせずを横に振る。

「レンのパパとママは」

「

ふたりでしょ？ とそう言って、小さな手がレナの手を握りしめた。

頼りなく、小さく震えて。

まるで縋りつくように。

その行為に、カシウスは止めるべきかどうか迷った。

今のレンは明らかに自分たちを本当の両親と思いこむ事で自分を守ろうとしている。

それは良い事かもしれないが、カシウスにとっては長期的な目で見て決して最善とは思えなかったのだ。

だが。

だがどうして言えようか。

この小さな、幼い身体の子供に、現実を受け止めさせるなど。

「あんな人たちなんて、レン、知らないもの」

そう振り返って笑って言う、そんな彼女に。

レナもカシウスも、そして状況を察したエステルも、何も言えなかった。

ただ出来たのは。

「……………」

手を繋いで、一緒に歩いていくこと。

親子として、共に。

「んっ！」

レナの手と、反対の手を握ったエステルの手を、ぎゅつと握り。

笑うレンへの表情に、エステルとレナは目尻に涙を浮かべて笑いかけるしかなかった。

1人だった少女は、こうして家族を得た。

心に大きな、大きな傷の残して。

カシウス・ブライトはこの日、2人の子供の心を守ることはできなかった。

それは、彼を大きく、大きく傷つけた。



誰も傷つき、時に真実から目を背け。

滅びの未来か、それとも明るい未来へか。

運命は疾走する。

「ただいま〜。新しい家族ができたぞ〜」

「お父さん、その子は誰!? お母さんを裏切ったの?」

「……………」

「お前はそんなセリフをどこで覚えてくるんだ」

「シエラ姉」

時には出会いといふ縁を運命は運び。

「初めまして、ティオ・プラトーです」

「いらっしゃい。いや、おかえりなさい」

「…………… 本当に良いのですか? 赤の他人の私を……………」

「遠慮なんかするものじゃない。私たちは家族になるのだから」  
「そうそう！ 私、エステル！ よろしく！」

第三者の介入により、新たな出会いを運び。

「アニキ！ アニキいい！！」

「そんな……ガイさん………」

「ばかやろう！ こんなに早くに逝きやがって！」

唐突な悲劇と共に人の幸せを切り裂く。

『外』でそんな事が起こっているとも知らず。

とある場所の地下にて、最後の魔力を振り絞り造り出したクリスタルの中で。

青き星のルシアは眠り続ける。

(エステル……レン……ティオ……)

目覚めるその日まで。

裸になった彼は目を閉じたまま、漂い続けた。

青き星のルシアは、眠りにつく。

## 第20話 心（後書き）

大スランプでかけませんでした。

いや、本当に執筆が進まないものですね。

がんばります。

次回は、いつになるか分かりませんが、日曜日の夜か水曜日の夜になるかと。

## FC編 序盤設定

主人公 ルシア

年齢 ?歳

封印されてる為、詳細不明

Level ?  
 HP ?  
 EP ?

STR ?  
 DEF ?  
 ATS ?  
 ADF ?  
 SPD ?  
 DEX ?  
 AGL ?  
 MOV ?  
 RNG ?

### 【クラフト】

サテライトボム 20  
 スパークショット 40  
 ホーミングキャノン 10  
 カタストロフ 50  
 シールド 10  
 ヒーリング 10  
 グランドウェポン 10  
 剣舞 30

大円・攻撃・駆動中技・アーツ解除  
 単体・攻撃  
 直線・攻撃+遅延  
 大円・攻撃  
 2回被攻撃無効  
 単体・全回復  
 1人の味方のATS×2倍  
 自己・ATS・ADF以外全パラ

メーター + 90%

竜神掌

20

体力を10%消費して攻撃。敵を

仰け反らせ行動を遅らせる。

真・青龍烈波拳

30

全体・体術攻撃

聖光断

30

敵単体・攻撃。被ダメージ40%

回復

### 【スクラフト】

アルテナの光

星を破壊します

アルテナの加護

境界内は完全に守護され、内部の対象を回復

龍召喚

黒龍・青龍・白龍・赤龍を召喚します。

ドラゴンマスター

全てのステータスが3倍になります。

飛翔天舞斬

3回連続攻撃 + 気絶

評価：

能力値は現在不明。

過去を幾分か思い出した事により、師たちの技を思い出した。

ただし、再現性・威力は半分程度。

エステル・ブライト

年齢 16歳

準遊撃士

掛け声 20 中円 味方のSTR20%アップ

挑発 20 中円 一定時間、敵をひきつける

旋風輪 - 攻撃 30 中円 地点指定

捻系棍 - 攻撃 20 直線 貫通攻撃

金剛撃 - 攻撃 20 単体 技、アーツの駆動解除  
烈波無双撃 - 攻撃 S 単体攻撃

ティア 10 単体回復

エアストライク 10 攻撃

評価：

遊撃士としては新米中の新米。

子供の頃からルシアの魔法を見た為か、アーツの力は原作開始時より上。

恋愛感情などは自身の事ながら全く分かっていない。ただルシアに憧れ、感謝している。

その為か、頻繁に彼を思い出しては会話に出している。家族は耳にタコができている程である。

ヨシユア・ブライト

年齢 16歳

準遊撃士

評価：

エステルが頭を使うのが苦手な為、ヨシユアは参謀・サポートに徹することが多い。

家族として迎えてくれたレナやカシウスを、本当の両親のように愛している。

それはやはり、レナの功績が大きく、彼は頻繁に母親を優先するところがある事からマザコンとエステルに言われている。

だが冷静な判断や武の実力は、新人としては破格のものがある。

レン・ブライト  
年齢 12歳  
工学士

評価：

頭脳の高さは他の追隨を許さず、特に工学・機械系に強い。  
パパとママ、つまりレナとカシウスが大好きで、レナの守護の為に  
パテル「マテルを造り上げた。

但し、機体のサイズや性能は原作より小さいし、劣る。

またエステルやヨシユアの訓練に付き合っていた為、その実力は遊  
撃士に匹敵する。

生来の身体能力と才能からか、戦闘能力は実はケタ違いに高い。  
エステルが話す『ルシア』の事を聞く度に、複雑な気持ちでいる。

テイオ・P・ブライト  
年齢 13歳  
情報工学博士

評価：

レンと同様、コンピューターの分野においては有数の才能を保持す  
る。

とある事件の後遺症から、ある特殊能力を所有しているがそれを必  
死に隠している。

ルシアが行方不明と聞きずっと情報を集めているが芳しくない。

自分専用の武器をレンと共同合作で造り出しており、身体能力は高  
くはないが、その武器の攻撃力は破格のものである。



## 第21話 準遊撃士エステル

春。

それは旅立ちの季節であり、再出発の時期でもある。

百日戦役と呼ばれる戦争の爪痕も無くなり、人々の活気や治安も完全に回復したころ。

リベール王国地方都市・ロレント。

麗らかな日がロレントを差し込んでいる中、その声は響いていた。

「くら〜〜！ 待ちなさい！」

「ニヤ〜！」

路地裏を駆ける猫を追いかけていく、1人の少女。

その少女の名は、エステル・ブライト。現在は16歳。

幼い身体付きから、瑞々しい健康的な身体へと成長し、昔の明るさと元気を少しも損なわずに成長した、エステルがそこにいた。

「さあア Ril、大人しく捕まりなさい！ じっくりわよ〜！」

機能的に造られた武器用の棒、その端に籠網を取り付けられたモノを振りあげた、のだが。「がんばれエステルお姉ちゃん！」という近所の悪ガキ小僧のルックとパットの声に余所見をしてしまう。

その瞬間、猫はキラーンと目を光らせて飛びかかり……。

「きゃー！！ つて、あー！！！」

と、猫が顔面に飛びかかって来た為に尻もちをついてしまい、拳句に猫に逃げられてしまった。

「なにやってんだよエステル」

「かつこ悪〜い」

「なんですってえ！？ あたし達はねえ」

「遊撃士協会からの仕事でね。迷子の子猫の保護にあ  
たっているんだよ」

「ヨシユアお兄ちゃん！」

そこにやってきたのは、ヨシユアというエステルと同年齢と見え  
る男の子。

彼の名はヨシユア・ブライト。現在は16歳。

ブライト家に5年前、カシウスが連れてきた養子で、エステルの  
弟だ。

……………弟というのはエステル言い分であり、どちらかとい  
うとヨシユアの方がしつかりしている為に、周囲の人はエステルを妹  
と捉えているのは内緒の話だ。

「ほら、大丈夫かい？ エステル」

「う〜〜。あ、そうだ！ アリルは！？」

「ああ、それは大丈夫。念の為と思って、ちょうど通りかかった

「この通り。本当に世話のやけるお姉ちゃんだこと」

フフフと笑って現れたのは、紫色の髪が特徴的な、フリルが多い  
ゴシックロリータの服装が好きな少女、レンであった。

腕の中にはエステルが追い詰めていた猫がすっぽり収まっており、  
レンはわざとらしく溜息をついて、芝居がかった仕草を見せた。

どうやらレンが通路を塞いで待ち伏せしていたらしい。

「レンー！」

「はい、お姉ちゃん」

「助かったわ。やっぱり持つべきは妹よね！」

「はいはい。姉の役に立って嬉しいわって、苦しい！」

ムギユーツと抱きしめてくるエステルに、レンは笑いながら押し  
のけた。

「あ、あつと、ひ、久しぶり、レン」

「ええ、ルックとパットも元気そうで何よりね」

「~~~~~」

2人の顔が真っ赤になるところを見ると、どうやら年齢が近いこ  
とやレンの容姿が優れている所から、どうやらテレしているらしいが。

こうして、とりあえず捕まえた猫のアリルを連れて依頼人のとこ  
ろまで向かう。ルックとパットも、そして最後まで付き合うという  
事でレンも付いてきている。

エステルとヨシユアは依頼人に猫を届けると、依頼人はとても嬉  
しそうに喜び、エステルたちに何度もお礼を言いながら家へと帰っ  
て行った。

(今日も一仕事終えたわね~~~~)

うんと伸びをするエステル。

そんな彼女に、ルックは肩を竦めながら言った。

「あゝあ、幻滅だなー。遊撃士ってあんまりかっこいいもんじゃな  
いんだな」

「……………そうかもね」

子供の癖に妙に達者な口調のルックに、エステルは苦笑しながらもそれを肯定した。

「遊撃士 『ブレイサー』 。リベールの平和と民間人の安全を守るために働く戦闘の専門家ってことだけど、実際の仕事は魔獣退治だけじゃないもんね」

それが、一見華やかでかつこよく見える遊撃士の実態。

エステルは遊撃士見習い、準遊撃士になってそれを知った。

レンはエステルの言葉に口元を緩ませながら、近くのベンチに座って持っていた本を開いて読んでいた。

「でもね」

エステルは素直に、自分の気持ちを話した。ヨシユアもそれを穏やかな表情で聞いている。

「あたしは遊撃士になれてよかったと思ってるわ」

だって……ほら、と示す先。

皆がその方を見てみると、その先にいたのは、猫のアリルを抱きかかえて幸せそうに微笑む依頼人の姿があった。

「ね!」

よしよし、と頭を撫でて笑う。

頭を撫でられたルックは、顔を真っ赤にしてドンッと突き飛ばした。

「え、えらそうに言うなよな! まだ見習いのくせに! それに見

てるよな！ おまえなんかすぐに追い越してやるから！ あばよっ、バカエステル！」

「あ、あんですって……!?」

べーつとあかんべーをしたルックは、パットを引つ張ってどこかへ走っていつてしまった。

そんな2人を見送ったエステルは、シュンつと眉を垂れさせた。

「あたし……嫌われてるのかなあ」

「いや、むしろ逆でしょ」

落ち込むエステルに、ヨシユアは少し呆れたように溜息を吐いてそれを否定した。

「え？ 逆？」

「男の子の気持ち、わからないかなあ」

「それがエステルたる所以じゃない、ヨシユア兄」

「それもそっか。エステルはそういうところ、ほんつと鈍感だよね」

「そ、そうかなあ……？」

何やら分かりきってますとでも言いたげなヨシユアとレンに、自分だけ分からないエステルは少々不満気だ。

そこに、急に声がかげられた。

「何をやってるのです？」

「ティオ！」

片手に変な形の杖を手に、野菜を入れた鞆を持った、最後の姉妹であるティオがいた。

「テイオは母さんのお手伝いかい？」

「そのとおりです、ヨシユア兄さん。お母さんから頼まれたので、造ったこの杖の実験テストを兼ねてますが」

「ほえ〜。相変わらずあんたも難しそうな本を読んでいるんだ」

「エステルだけでもんね、勉強嫌いなもの」

「うっ」

レンの突っ込みにグサリと鋭い刃が突き刺さる。

「じゃ、早く帰ろうか」

ブライト家の4兄弟は、今日も元気で仲良しであった。

「母さん、手伝うよ」

「そう？ じゃあお願いね、ヨシユア」

夕飯の支度。

本日は海の幸の盛り合わせに、魚の煮つけといったメニュー。

忙しそうにしている中、レンとテイオは本を開いて何やら黙々と難しそうな数式を書いており、エステルは武器の手入れやお気に入りのストレガー社の靴磨きで忙しい。

忙しそうに食事の支度をしている母を見て、毎日の日課となったヨシユアが手伝いをする、それがブライト家の光景であった。ヨシユアは本当にレナという母を大事にしている。

母が大変な作業をすれば率先して手伝っている。そんな姿を見てエステルはマザコンと言っただけからかっていたのだが、その意見にはレンやティオも肯いていた。

「ママ。エステルったらね」

「まあ、そうなの？」

「ちよ、ちよつとレン！ そんな事言わないでよ。恥ずかしいなあ……いずれバレると思いますか」

「そういう冷静な突っ込みも受け付けてないの！」

ティオにビシッと突っ込みを入れるエステル。

レナはクスクスと笑ってレンを膝の上に乗せ、箸でおかずを掴んで食べさせている。

少し甘えん坊なのだが、レンはこれをするとても喜ぶのだから、レナとしても悪い気はしない。

「ただいま」

そこへ帰って来たのは、この家の家長であり父親のカシウスであった。

「お父さん！」

「パパ！」

「お帰り、父さん」

「おかえりなさい、お父さん」

「おかえりなさいあなた」

わあっと群がる子供たちを順番に頭を撫でるカシウス。  
今日も一仕事して疲れた、と漏らして風呂にでも入るかと言う。  
遊撃士として飛び回っている彼は、本当に多忙を極めている。

レンに「じゃあ風呂にでも入るか」と声をかけていこうとすると、  
レナが尋ねてきた。

「あなた、今回は……？」  
「……………」

静かに首を振る。

その様子にレナはがっかりした様子を見せ、ご苦労様でした、と言った。

カシウスも例えようのない表情で淡く笑い、レンと一緒に風呂場へと入っていった。

「お母さん、今のって何？」

「え？」

「……………」

「……………」

「ん、ちょっと前から探し物をしてて、それをあの人を外に出るた  
びに探してもらってるの」

「もしかして食べ物とか？」

「ん、そんなところかな」

エステルとレナのやりとりを、ヨシユアとティオはジッと見詰めて  
聞いていた。

レナの表情の裏にある隠した感情を、見抜こうとするかのように。

「さ、早くご飯食べ終わっちゃいましょ」



「はい」

「はい」

「そうだね」

深く考えても分かる訳が無い、そう考えたヨシユアやティオも気にせずにご飯を再開したのだった。

エステル・ブライト。16歳。

毎日、元気に楽しく過ごしています！

## 第21話 準遊撃士エステル（後書き）

ちよつと短め。

速く書き終わったので、予定を繰り上げて更新します。

## 第22話 遊撃士とは

「おはようございます！ アイナさん！」

「おはようございます」

「おはよう、アイナ。今日も綺麗ね」

翌日、エステルとヨシユア、そして暇だからという理由で付いてきたレンは遊撃士協会ロレント支部を訪れていた。

ちなみに父・カシウスは朝から仕事で定期船に乗って別の街へと出かけており、レナは家で家事をやりつつ趣味の園芸を、ティオは自宅で何やら勉強中だ。

ツァイスという都市は、リベール王国という小国の中にある一番の学問が進んだ研究都市だ。

その中央工房は特に有名であり、中でも一番の権威を誇るのがラッセル博士という老人。

カシウスはティオの才能と知能の高さに気が付くとラッセル博士と引き合わせた。結果は博士がティオの事を気に入り、研究員の一人として迎え入れる事になったのだ。

そこから芋蔓式でレンの事が知られ、彼女も一員となる。

今日の勉強も、現在の研究から来たレポートだ。

……………ぶっちゃけレン以外は何をしているのかさっぱり分かっていなかったりする。

「あら、おはよう2人とも。レンちゃんもおはよう」

受付にいる女性はアイナ。エステルたちの『姉』となる人物と非常に仲が良く、とても優秀な受付嬢である。

金髪が綺麗で美人であり、プロポーションも良い良妻賢母を体現

する体格なのだが、何故か男の噂がない謎な人だ。

「今日の依頼を受けに来ました！」

「はい。え〜っと、今日来てる依頼は……今の所ないわね」

「え〜」

「ほら、エステル。むくれない。依頼が無いって事は良い事なんだから」

「そうよ、お姉ちゃん」

「む〜」

ブーっと膨れるエステルに、アイナはクスクスと笑った。

「でも貴方達が近くに住んでくれているから助かるわ」

「何故です？」

「今日は他の遊撃士の方は皆外に出ているのよ。だから貴方達だけって訳。そしてそんな貴方達はロレント期待の有望新人遊撃士。安心してられるわ」

「そんな、テレルわね……」

「アイナはお世辞が上手ね」

「あ、あんですって〜〜レン！」

レンを後ろから抱きしめてぶんぶん振りまわす。止めなさいよと言いながらもちよつと嬉しそうにしてるレンはとても可愛らしく、ヨシユアも微笑ましく見ている。

「でも本当よ？ もうちよつと経験を積みばロレントの推薦状を渡せる。あとは他の都市を回れば晴れて正遊撃士。あなた達は新人なのにかなり早いよ。こんな事って滅多にないわよ」

「へ〜〜、あたしたちやるじゃん！」

「エステル。調子にのらないようにね。君ってすぐに浮かれるんだ

から」

「そうね。ヨシユアお兄ちゃんがいなかったらそうはいかなかったでしょうね」

「うぐっ」

少しは自覚があるらしい。

若干猪突猛進などところがあるエステルは、ヨシユアのフォロワーをちよくちよく受けている。

「それにしても……異例の遊撃士、期待の遊撃士かあ」

アイナは窓に歩み寄り、少し目を細めて天気の良い青空を眺めた。その表情は何かを思い出しているようで、ヨシユアは尋ねてみることにした。

「アイナさん。何かあったんですか？」

「え、ええ。ごめんなさい。少し昔のことをね……」

「昔って何のこと？」

「……貴方達を期待の遊撃士って言ったけど、ここ数年では期待の遊撃士っていう程の評価を上げられてる人って、そこまでいないの。数年前の時点では期待の新人だった、現在はA級遊撃士の『不動のジン』。クロスベルのA級遊撃士『風の剣聖アリオス・マクレイン』とかは、期待の新人という風評から、文字通りあつという間にA級になって、遊撃士協会の看板になった。貴方達のお父さんである力シウスさんも同じ」

「へ〜。お父さんって有名だったんだ」

「エステル……勉強の時も、シエラ姉さんの講義でも言っていたじゃないか」

「うっ」

「ほんと駄目ね、お姉ちゃんってば」

「ぐっ」

兄弟の言葉が鋭いメス過ぎて、エステルは痛そうに胸をおさえて苦しんでいた。

そんなエステルは放置して、レンは続きを促す。

「それで？」

「だいぶ前にね……………凄い子がいたのよ。遊撃士協会も規則を破ってまでその子に遊撃士になってもらおうとしたし、事実その子は当時起こったある事件、遊撃士協会や各国軍部が手を焼いていた事件の解決に多大な貢献をしたわ」

「ほえ〜〜〜。それって凄いわね」

「うん…………それは僕も初めて聞いたよ」

「……………」

「だけどその子はその直後に消息不明になったわ…………元気にしてる」と良いんだけど」

（消息不明？　もしかしてその人って……………って考え過ぎか）

エステルの脳裏にふとある人物が通り、だが自分の希望的観測が強すぎる事から否定する。

アイナは小さく溜息を吐いて気分を入れ替えようとした時だった。扉がバタンと大きな音を立て、恰幅の良い女性が飛び込んだ。きたのだ。

「大変よ！　ルックとパットが『翡翠の塔』へ向かったらしいの！」

「『『翡翠の塔！？』』」

エステルとヨシユアとアイナが揃って焦ったように声を荒げる。

レンは少し俯いていた状態からハッと顔を上げ、若干目を大きく開けて驚いていた。

それもその筈。

翡翠の塔とは、ロレントの北の郊外にあり、魔獣の巣窟になっている文化遺産の塔なのだ。

遊撃士ですら気を引き締めていなくては危ない所に、子供たち2人だけでなどと聞いたら焦るのも仕方ないだろう。

「あたし達が2人を連れ戻してくるわ！」

「エステル！ 待ちなさい！」

「アイナさん！ 皆の帰りを待っている暇はないとおもいます！」

準遊撃士、エステル・ヨシユア。ただちに子供たちの保護に向かいます！」

「……わかりました。2人とも、また魔獣との戦いは経験は浅いんから、気を付けていくこと。いいわね？」

「もちろんです！ レンは家に帰っていてくれ！」

ヨシユアはそう言うと、エステルの後を慌てて追いかけて行った。アイナは心配そうにしながらも、2人を信じることにし、とりあえず傍にいるはずの一番下の妹に家に帰るように言おうとした、のだが。

「あら？ どこにいったのかしら、レンちゃん」

気付けば、そこにはいなかったという。

「で、なんでレンがここにいるのよ」

「レン……………」

「フフフ。面白そうだから付いてきちゃった。大丈夫よ？ 自分の身くらい自分で守れるし、いざとなれば『アレ』を呼ぶから」

「アレって……………あれの事!？」

ぎよつとした声を出すエステル。だがそれも当然の反応だった。

ある日、ツアイスの工房から帰って来たレンは、家に誰もいない時の母の事が心配だ、そんな理由でカシウス家とレナの護衛の為にパテル・マテルという人2人分大きいサイズのロボットを造って持って帰って来たのだから。

それを見た皆は当然の事ながら啞然呆然。

レナは娘の愛を嬉しく思いながらも苦笑。

父は「ふむ……………かなり強いな。俺も苦戦しそうだ」などと呟いて感心。

レンはニコニコしながら、これでママも安全ね、と言っていたのを、エステルは昨日の事のように覚えている。

「ええ、そうよ。それにレン、お姉ちゃんたちに負けない実力なのは知ってるでしょ?」

「まあ……………確かにね。そんな小さい身体なのにどこからそんな力がつていうか、姉としての面子がというか」

「それは置いといて。今は一秒でも時間が惜しい。レンを送り返している時間はない。レンの実力は知ってるから僕らが守りながら先を急ごう」

「そ、そうね」

「フフフ。じゃあ行きましょう」



そういつと、レンは腰元をござごと動かすと1つの棒を取り出す。

それを取り出して大きく一振りすると棒の側面から勢いよく刃が飛び出し、大鎌の形へと変えた。

身の丈以上の大きさにもなる大鎌を手に、クルクルと大きく振りまわして見事な手さばきを見せる。

翡翠の塔に入ると、まさに魔獣の山。

「ルック！ パット！ どこにいるの！」

返事がない。更にその声に反応して、魔獣たちは一斉にこちらを向いてくる。

「来るよ！ 構えて！」

ヨシユアの声がきっかけに、一斉に襲いかかる魔獣。

先頭の蟹のような身形の棘だらけの魔獣が群れをなして襲いかかってくる。

「ヨッ」

と、いう掛け声と共に前へレンが躍り出て、身体を捻りながら鎌を投擲。

小さな身体から繰り出されたと思えないほどの速度で回転しながら飛んでいく。回転する刃は魔獣たちを真っ二つに引き裂き、旋回しながら戻ってくる。

魔獣たちがその攻撃に怯んだ瞬間、エステルが飛び込み、鋭い突きの一撃を叩きこむ。

「ヨシユア！」

部屋の隅にいつの間にかいたヨシユアが、二刀の小刀を構えて腰を落としていた。

突きにより吹き飛ばされた魔獣が他の魔獣たちを巻き込み体勢を崩す中、ヨシユアは爆発的な加速をみせ、敵を一瞬にして切り刻む。

これがヨシユアの得意技、絶影。

その動きの特性上、限界まで速度を出す為に途中で方向転換できず、直線状の敵しか対応できないが、圧倒的な早さを持って敵を切り刻む必殺技だ。

「よっし！ すぐに行くわよ！」

「そうだね」

「わかったわ。このフロアにはいないみたいだしね」

フロアの魔獣の死骸を跡に、エステルたちは『翡翠の塔』をかけた上がっていく。

次々に襲いかかる魔獣たちを倒しながら進んでいく。

すると屋上付近のフロアにたどり着くと、ヨシユアが急に立ち止まった。

（な、なんだこの感じ……）

ヨシユアだけが感じ取っているようで、背筋を針で突き刺されるような、寒気がする圧迫感。

思わず立ち止まったヨシユアに訝しむエステルとレンは、彼に声をかけた。

「ヨシユア？」

「ヨシユアお兄ちゃん、どうかしたの？」

「……………エステル、レン。気を付けて……………何かがいる！」

その言葉と同時に、階段を何者かが降りてくる足音が。

エステルとヨシユアが構え、レンが目を細めて見詰める中、暗闇の中から現れたのは……………、

「おや……………？ 君たちは」

「へ？」

1人の中年の、難しそうな本を持った眼鏡の男性だった。

「私は考古学者のアルバといます。宜しくお願ひします」

「あ、私は遊撃士の　　って違う！　　なんで魔獣が徘徊する建物に一般人の貴方が入ってるのよ！」

「あ、それは　　」

「そうだ！　おじさん！　ここで小さな男の子見なかった！？」

「お、おじ！？　私はまだ37　　って、人捜しですか？」

微妙にシヨックを受けているアルバ。

黒髪をオールバックで纏め、眼鏡をかけて落ち着いた洋服を着ているのは、いかにも学者風だ。

「そうなのよ。で、見たの？」

「いえ、見てはいませんが」

じゃあもつと上か、と呟くエステル。レンもそれに肯ぐが、ヨシ

ユアはその男性をジッと見ていた。

「あ、あの!」

「はい?」

「貴方達、もしか上に行くのですか?」

「そうだけど……」

「それでは、私も付いて行って良いですか?」

「貴方が?」

レンやエステルは驚いてアルバを見る。

「私、この塔で独りで古代文明の調査をしているんです。だからね

……」

真剣な表情を見せるアルバ。

自然と、エステルもヨシユアもレンも息を呑み、次の言葉を待つ。

「遊撃士さんが傍にいてくれると頼もしいなあ……なぐんて」

ガクつと力が抜けてしまったのだった。

「でも、こんな塔の何を調べているの?」

塔に上がりながらエステルは傍で歩くアルバへ問いかける。

するとアルバ、いやアルバ教授は得意気に眼鏡をツイッと上げて語り始めた。

「まだ仮説ですが……リベール王国最古の遺跡『四輪の塔』のひとつ、ロレント地方の翡翠の塔には、ある秘密を解く鍵があるといわれているのです」

「ある秘密？」

「それは　　あ！　　あれは頂上のようですよ！」

示した先にあるのは、屋上への階段。

ここまでは子供達の姿は無かった。

エステルとヨシユアとレンは互いに顔を見合わせて肯き、駆け上がっていく。

翡翠の塔の屋上には、奥に円形上の妙な機械の祭壇のような外装のものが残されており、その他をポロポロの壁が覆っている。模様もどこか昔を連想させ、これぞ文化遺産が漂っている。

だがエステルはそれをじっくり見ている気は無く、必死な様子で叫んでいた。

「ルック！　パット！　どこにいるの！？」

「居るのなら早く出てきなさい」

「2人とも、居るのなら返事をしてくれ！」

ヨシユアもレンも辺りを見回す。アルバも一緒に周りを見回すと、柱の影から声が聞こえた。

「エステル……レン……ヨシユアお兄ちゃん？」

「ルック！　パット！」

柱の影から飛び出してきた、ルックとパット。

2人は涙を目に浮かべて飛び出してきた、エステルに抱きついて

くる。

ルックとパットを抱きしめて喜ぶエステルは、何度も良かったと言っている。

すると、パットが突然頭を上げ、飛びのいて得意気に言い放った。

「バツカだなあ、エステルは！ 心配なんかいらぬのに！ 俺たちはここで遊撃士になる特訓してるんだ！ スゲーだろ」

へへんと胸を張るパット。

勿論隣のルックがいまだに泣いている事や、パットのわざとらしい様子から強がりだと分かる。

ただ、その内容は、彼らがここにいる理由としては真実なのだろう。

レンはそう捉えたようで、やれやれと大きく溜息を吐いて呆れていた。

ヨシユアは少し眉を顰め、彼らを嗜めようとしたが……エステルの様子に留まった。

「あ、あんたたち……」

エステルのぶるぶる震える拳から、いや、背後からメラメラと燃え上がる炎に、ルックもパットもヨシユアもレンもドン引きだ。かなり怖い。

アルバ教授も顔を引き攣っている事から、この場から逃げ出したいのだろう。

「いったいどれだけ心配してるか分かってんの!？」

「だ、だからエステルには関係」

「何言ってるのよ!」

ドカーンと爆発したエステルに対して「ひいひい!」とルックが悲鳴を上げるが、それほど怖いのだろう。哀れなほど震えていたが。

「みんな、みんな今もまだ捜してるのよ! あんた達を心配してるのよ!」

エステルの瞳から、ポロッと涙が零れ落ちた事で、誰もがハッとさせられた。

「……………あのね、遊撃士はね、みんなの笑顔を守るのが仕事なの。それなのに」

エステルは思い出す。

自分が本当に遊撃士になろうと志した時の事を。

「一番大切な人を悲しませるなんて、遊撃士失格なんだからね?」

エステルの潤んだ声はその場にいた皆の心を打つ。

その言葉によつぽど堪えたのだろう。

ルックもパットも、素直にごめんなさいと謝ったのだった。

そしてレンは口元に笑みを浮かべてそれを聞いていた。

『レンのパパとママはふたりでしょ?』

涙を零しながら必死に笑みを浮かべ、傷ついた心を隠したレンの、あの一件のとき。

『そんなっ！？　じゃ、じゃあ、あの子は！　あの子は行方不明だっというの！？』

レンの一件の後の宿泊施設で、夜中に父に言い詰め叫ぶ母の泣き崩れた姿を見た時に。

そんな母を見て、父が拳を握りしめて血を滲ませ、何度も「すまない」と言い続ける父の姿を見た時に。

あたしは大切な人を悲しませたくない、そう強く思ったのだ。

エステルは皆と帰る為に翡翠の塔を下りる直前、空を見上げ見詰めた。

（ねえ……ルシア。あなたは今どこにいるの？　何かの事件に巻き込まれたの？）

きっと遊撃士の父が絡んでいたあの時点で、何か危険なことがあったのだろう。

そしてルシアは巻き込まれた。

けれど、なんとなく胸騒ぎはしなかった。  
薄情なのかな、と何度も思った。悩んだ。

だが……どうしても彼がそうなってしまうなど信じられないのだ。



脳裏に彼が思い浮かぶ。

真つ赤な服を翻し、能面な表情で喋るルシア。包帯だらけで眠るルシア。釣りを一緒にして魚をモノ珍しそうに見るルシア。青くて長い髪を梳かしてあげるとくすぐったそうに首を竦めるルシア。

エステル、と自分の名を呼んでくれたルシア。  
どれもが色褪せず覚えている。

（大丈夫だよね………そして待っててね。私が、私が今度は助ける。見つけてみせるから）

コクリと大きく肯くエステルに、ヨシユアは少し悲しそうな瞳で見ている、レンは2人の様子を見てニヤニヤするのだった。

## 第22話 遊撃士とは（後書き）

エステルが遊撃士を目指すきっかけを今回は開示。

レンはヨシユアの気持ちに気付いていて、でも本人すら気付いていないエステルのお気持ちにも勘付いていて、それを敢えて知らせずに面白がっている。そんな感じですよ。

アルバ教授は次回も少しだけ出てきて、彼はまたしばらく出ません。今回はティオもメインでいきます。

## 第23話 廻り始める齒車

ロレント市内北部。

ロレント航に到着する1つの飛空艇。

物々しい雰囲気の飛空艇とは別に、搭乗口から出てくるのは、一人の少女。

小柄で華奢、薄水色の髪がふわふわと風に靡き、少女から漂う花の香りは近くににいる者をハッとさせる。

大きな鞆をキャスターでひっぱりながら歩くと、ロレント内の街をゆっくりと歩くと復旧された時計塔が見えてくる。

(確かここが、お母さんとエステル姉さんが襲われたところ………  
…そして『あの』ルシアとお母さんたちの出会いの場所)

何度も聞かされたので正直飽きた内容だが、よくよく考えるとんでもない内容だと分かる。

その出会い方、その顛末、時計塔跡地近辺の惨状。

昔は深く考えることができなかったが、成長した今となってはその事件の異常性がよく分かる。

数年前、自分はブライト家に預けられ、養子になった。

自分に取って人生で一番の忌まわしい出来事となるであろうあの事件が解決した後の事だ。

自分は親戚の家へと帰れた。だが結局、自分は一家に馴染むことはできなかつた。その家の人たちが自分を腫れもののように扱ってきたというのも理由のひとつ。自分に備わってしまった、あの事件の副作用となつた『とある力』の事も理由のひとつ。

とにかく、自分はその家から飛び出した。

結果、救出された時に自分を助けてくれたガイ・バニングスという人をお願いをし、自分達みんなを支えてくれたルシアの助言の通り、クロスベルのカシウス邸に行きたいと提案した。

ガイはすぐさま連絡を取り、ルシアからカシウスを頼れと言われたと伝えた所、カシウスは笑みを浮かべて自分を受け入れてくれたのだ。

結果的に、自分は                    テイオ・プラトーは家族を手に入れた。

カシウスお父さんも、レナお母さんもとても大好きだ。温かくてすぐに好きになった。

初めての妹もできた。姉や兄もできた。

誰もがとても良い人達で、自分はこの人達と家族になれて本当に幸せだと思った。

彼がこの場にいれば。

唯一、彼だけがいなかった。

あの事件の折に死んでしまったのではないか。そう思ったが、手に入れた力のおかげで入手した情報では、『ルシア』と呼ばれた少年は生存しているものの行方不明だと知った。

思えば、そこから自分の心には彼のその一件がずっとしこりとして残っていたのだろう。

それからは、私はツァイスで研究をしながらルシアの情報を集め続けた。

そして毎年、事件の解決日に犠牲者となった子供たち全てへ花を手向けている。

結果は、何も分からなかった。

お父さんやお母さんにこの事を相談すると、お父さんは「いずれ姿を現すだろう。そう本人も言っていた……いつかは分からないが」と教えてくれた。

お母さんは私と一緒にルシアに恩義を感じているらしい。そしてそれ故にルシアが1人ぼっちでいる事に心を痛めているらしく、最善が『家族として迎え入れる』、最悪でも『彼が明るく人生を送ることを願っているらしい』。

実にお母さんらしいと思った。

優しくて陽だまりのように温かく、私のような者でも、そして何かがあった妹のレンに対しても、その心の傷を癒してくれた。

そんなレナの才能というべき気質を惜しみなく受け継いでいるのが、姉であるエステルだろう。

テイオはそんな事を考えながらロレントの街から出る。

(ガイさんが亡くなって……もう2年、ですか)

あの時は衝撃を受けたものだ。

ガイはルシアとは別の意味で自分に大きく影響を与えた人だ。奔放で明るく、短い間ながら様々なことを教えてもらった気がする。

いつかはクロスベルにあるお墓へ、挨拶にいかねればと思っ  
ている。

森の中を抜けていくと、我が家が見えてくる。

良い香りが漂ってくることから、どうやら食事の準備をしているようだ。

今日はなんだろうか、そんな事を考えて口元が緩みつつ、ティオは足早に家の扉を開けた。

夕飯の支度をしていたレナが帰宅したティオにかけて言葉は、

「ご飯の前にお風呂に入ってらっしゃい」

であった。とりあえず荷物を片付けたティオはお風呂に入ると、そこに乱入者が。

「えへへ……私も入るね」

「あ、姉さん。どうぞ」

「こうして一緒に入るのも久しぶりよね」

「そうですね」

いつもは二つに別けてツインテールにしてある髪を降ろしているエステルは本当にレナに似ている。

健康的な肢体に長い髪は、同性の自分でも魅力的で綺麗だなあと思ってしまう。

(私は……………)

「ハア」

自分の『絶壁』を見て大きな溜息を吐いてしまっ。

「ん？ どうかした？」

「いえ……なんでも」

「？」

この姉は、シエラザード姉さんなどに色気がないと言われて、よく憤慨しているが、もっと自分の事を知るべきだとティオは思う。

「……姉さんは、本当にスタイルいいですよね」

「へ？ そうかなあ。私なんか遊撃士の訓練で筋肉ばかり付いてるから、嫌なんだけどなあ」

「……………」

なるほど、個人特有の悩みなんだなあと思う。個人的にはその肉体は豹のようにしなやかで色気あると思うのだが……これも見解の違いか、と納得する。

「ティオは女の子らしい身体してるから、羨ましいけど」

そこに嫌味はなく、純粹にそう思っているらしい。

（……………将来に期待ですね）

少なくとも、今のこの身体では姉に負けてはいるが……自分の気持ちは理解しているだけ、まだリードしているだろう。

(私は……そう、やはりルシアの事が……)

好きなのだ、そう確信していた。

きつと絶望した状況の中で支えてくれた、希望を教えしてくれた人だから、そういった吊り橋効果もあるのだろう、そうティオは冷静に分析する。

けれど、数年経っても消えないこの気持ちは、きつと嘘なんかじゃない。

そして……自分の気持ちに気付いていない強敵に、敢えて教えることもない。

(卑怯なのでしょうけど……体型の事を考えると、これくらいのハズレは貰っておきます)

ティオはコクコクと肯き、湯船から出て身体を洗う。

真っ白な肌は少し不健康かもしれない、そう思いつつ、スポンジでゴシゴシと洗う。

(?)

エステルはティオの身体を磨く時間がいつもより長いことに首をかしげつつ、まいつかと身体を洗い流して湯船に入った。

我が妹ながら本当に可愛いなあと、髪の毛を洗うティオを見て思った。自分とは大違いだと溜息を吐きたくなる。

そう、例えるならレンと一緒に『お人形』みたいなのだ。

「ま、それが自慢でもあるんだけど」

「え？ 何です？」



「うっん、なんでもな〜い」

エステルの呟きに、ティオは目にシャンプーが入らないように、ぎゅーっと目を瞑りながら首だけエステルへと向けたが、エステルははぐらかした。

やってる事は実に似たもの姉妹であった。

「？」

「どうかした？」

「誰か来た……いえ、アイナさんが来たようです」

「え？ アイナさんが？」

いつもの事ながら気配に敏感なティオに感心しつつ、エステルは遊撃士の自分達に用があるのかな、と思い、急いで風呂から出る。またアイナの気配やレナの気配の乱れ具合から、嫌な予感がいてティオも一緒に出る。

服を着て風呂場から出て、居間へと行くと、そこには取り乱したアイナと、顔を真っ青にするレナ、そしてそんなレナに抱きついてるレン、目を大きく見開き動揺しているヨシユアの姿があった。

その様子に、ただ事ではない事態を感じ取ったエステルは叫んだ。

「アイナさん！ 何があつたの!？」

「エステル！ 大変なの!!」

アイナの動揺は酷い。

取り乱しようは、エステルも初めてみる姿だった。

だが、そんなエステルも、アイナの言葉で凍りついてしまったの

だった。

「ボース地方で定期飛行船が消息を絶つたの！ 乗客の安否も不明だ！ まだ何も分からない。ただその乗客の中に、カシウスさんが乗っていたらしいのよ！！」

ついに、リベールを揺るがす事件は幕を開ける。

この時、エステルやヨシユア、レン、ティオ、レナは想像もしなかった。

この事がきっかけに、自分たち家族の絆が試されることを。

そして、絶望のどん底まで叩き落とされる事を、エステルとティオは知らなかった。

第23話 廻り始める歯車（後書き）

今回はかなり短め。

サービスシーンにならないサービスシーンWWW

申し訳ありません。

次回からまた長くなります。

## 第24話 出発の前。

父さん、何やってるの？

『あ、いや、ちょっと酒のつまみを……母さんには言わないでくれよ。』

パパ、今日はいつ帰ってくるの？

『そつだな……夕飯までに帰ってくる！ 帰ったらパパと遊ぶか！』

何故、どうして僕を……

『家族になれると信じているからだ……失った事があるのなら、尚更その尊さを知っているだろう？』

お父さんは、私の事を知っているんですね……ならどうして。

『おまえは私の娘だ。もし父さんの事が嫌いじゃないなら……かつこ悪い父親にさせないでくれ』

父はいつもそうやって、家族を支えてくれていたのだ。

ロレントの街は、街灯以外はすべて電気が消えた暗闇に包まれていた。

時計もすでに深夜の3時を回っており、月明かりと虫たちの鳴き声しか聞こえない。

あんな事があつたというのに変わらない世界に、少し苛立ちを覚えてしまうアイナ。

カラン、と遊撃士協会の扉が開き、親友にしてC級遊撃士として活躍する女性が入ってきた。

彼女の名はシェラザード・ハーヴェイ。

ブライト家と懇意にしている間柄であり、カシウスを師として慕い、遊撃士の中でも信頼されている実力者にして、『銀閃のシェラザード』と二つ名すら持つ若手でもトップを争う23歳の女性だ。

アイナとは呑み仲間にして親友だが……お互いの表情は優れず、とてもそんな気分ではない。

分かり切ってる事とはいえ……思わず尋ねてしまった。

「みんなの様子はどう……？」

「さすがにだいぶ落ち込んでるわ……特にレンの動揺が酷いわね」「無理ないわ……仲のいい親子なものね」

「ええ、本当に。見ているこっちが幸せな気持ちになるくらい……」

疲労の色が隠せないシェラザードは、大きく溜息を吐いて席に腰をかけた。

アイナはカップに紅茶を注ぐとシエラザードへ渡し、向かいの席へと座る。

シエラザードは紅茶を一口呑んで呟くように語り出した。

「やっぱり信じられないわ……先生ほどの遊撃士がこんな事件に巻き込まれるなんて……何かの間違いなんじゃないのかって思うわ」  
「……今分かっているのは、カシウスさんが乗せた飛行船が消息不明なのと、未だにそのカシウスさんから連絡がないということだけよ」

「はがゆいわね……待つ事しかできないなんて」

無暗に探し回っても駄目だという事をシエラザードは知っている。そしてシエラザード本人もC級遊撃士としての立場がある。勝手に動き回ることもできない。

軍人と違って遊撃士は自由に動けると思われがちだが、実際は様々な事情に振り回されているのだ。

「夜明けまで………長いわね」

窓から眺めた夜空は、いくつもの星が輝いていて、少し不快だった。

「……………」

ヨシユアは自宅のベランダでハーモニカを吹いていた。

彼がいつも奏でる曲。真夜中にも関わらず吹いているのは、ヨシユア自身が己の心を落ち着かせる為だった。

それほど、いつも冷静なヨシユアにとっても今回の件は衝撃的だったのだ。

「……………」

妹のレンを思い出した。

あの件の直後、呼吸不全になるほど恐慌状態に陥り、我に返ったレンが安心させるのに、今もずっとレンを抱きしめているのだろう。

レンは両親のことが大好きだから。

それは自分だって負けないつもり、そうヨシユアも思う。だが曲がりなりにも『体験した過去』の事があるので、自分はどうやっていられているのだ、そう思った。

すると背後から扉が開き、家の中からエステルとティオが出てきた。

「うん。今日も素敵な音色ね」

「はい。ヨシユア兄さんのハーモニカ、とても上手いです」

「……………エステル。ティオ」

2人も今まで起きていたのだろう。少し目の周りに隈ができている。

「レンは？」

「うん……………だいぶ落ち着いたみたい。今もお母さんと一緒にいる」

「ひとまずは安心かと」  
「そう……良かった」

ヨシユアはホツと安堵し、2人へと向き直った。

「さっきまでシエラ姉さんが来てたんだけど、知ってた？」

「うん、知ってる」

「さっき遊撃士協会の方へ行きましたが……」

「そう。何か情報が入ってるかもしれないからって」

「！ そっか！」

ヨシユアの言葉にエステル表情が少し明るくなる。

ティオもその言葉に頷き「私たちも行きましょう」と言う。

「そうね！」

「ああ、僕とエステルは仮にも遊撃士なんだ。ここでこうやって黙って過ごしている訳にもいかないよ」

「あら、それじゃあ家族みんなで行きましょうか」

突然背後から聞こえた声に驚いて振り返るエステルとティオ。

後ろにいたのは、レンを抱きかかえながら僅かに顔色を取り戻したレナであった。

レンの目は赤くなり腫れていた。どうやら泣いてしまったようだが、今は平気なようだ。

「もちろんレンも行くわ。いいでしょママ？」

「ええ、もちろん。皆で行って、皆で確かめて、今後の方針を決めましょう」

レナは伊達にカシウスの妻を務めていない。危険な仕事である以



上、この事態は覚悟はしていた。

もちろん、動揺するしないは別にして、ある程度の気構えはしていたのだ。

だからレナは笑える。彼女には子供たちが残っているのだから。

そんなレナの言葉にエステルもヨシユアもティオも、笑みを浮かべて大きく肯いたのだった。

こうして、ロレント郊外のブライト邸からロレントに入り、遊撃士協会に向かう中、レナは不意に足を止めた。

奇しくも、エステルも同時に足を止めた為、ティオとレンとヨシユアは怪訝な表情をした。

その場所は、ロレントの象徴でもある『時計台』であった。

「ちょっと、ここに寄ってもいいかしら？」

レナの言葉に皆が不思議そうにしながらも肯き、エステルはレナを見ながらアイコンタクトで何かを話して小さく肯いている。

不思議と、同じことを考えていることが感じられたのだ。エステルとレナは。

内部の決して大きくは無い階段を昇っていくと、頂上に出る。頂上からはロレントが一望でき、遠くの山も見えるのだが、夜中なので全く見えない。

見えるのは寝静まったロレントの街中だけだ。

頂上の端の手摺りに寄りかかり街を見るレナとエステル。

「母さん、珍しいね？ ここには絶対に登ろうとしなかったのに」

「そういえばそうね……ここに登った事って一回もないかも。ママ？」

「確かに。家族で登った事はないです」

ヨシユアの言葉にレンとティオは今気付いたようで彼に同意する。そんな兄弟の言葉に苦笑するエステルと、少し困った顔で肯くレナ。

「ごめんね、みんな。ごめんね、レンも」

「ううん。レンは大丈夫よ。でも何で今のこのときに……」

「それは……ねえ？ エステル」

「うん……この場所はあるにあまり気軽に登れる場所じゃないんだ」

「やっぱりそうだったんですか。なんとなくエステル姉さんもお母さんも避けてる気はしてましたが」

「あ、やっぱりティオにはバレバレだったんだ」

「はい」

実際には街の人などに噂で何があつたか聞いたというのが真実なのだが、そんな無粋な発言はしない。

エステルは少し切なそうな目で街を見ながら過去へ思いを馳せた。

「ここは、お母さんが大怪我を負った場所、だから」  
「！？」

エステルという言葉にレンとヨシユアはぎよつとなりレナへ振り返る。それを知っていたティオは表情を変えずに黙って聞いていた。

レナは子供たちの視線に、少しだけ困ったように笑って肯く。

「ええ。そうね……10年前、エレボニアとの戦争の時、この時計台は攻撃を受けて崩壊したわ」

「その時に、あたしとお母さんはこの時計台の下にいたの」

「私がエステルを咄嗟に突き飛ばしたから、エステルは助かったけど……私は生き埋めになった」

「お母さんがあたしを守ってくれたんだ……でもお母さんはそれが原因で大けがをした」

「正直、助かる怪我ではなかったでしょうね」

「そんな！？」

レナの言葉にレンは慌てる。

普段は呆れるくらいに聡明で冷静なのに、両親のことになると崩れるレンに、レナは嬉しいような困ったような、複雑な気持ちになる。

レンの頭を撫でながら、レナは言葉を繋ぐ。

「その時だったわ……彼が現れたのは」

「彼、というと……」

「皆には何度が言った事あったわね？ 養子に迎えたい子がいるって。その子のことよ」

「……ルシア、ですね」

「そう。あの時、ルシアがお母さんを押しつぶしてた瓦礫を退かし

て、お母さんとあたしを助けてくれたの」  
「そんな事が……」

ヨシユアは絶句した。母がそんな怪我を負った事と、そんな怪我が『どこにも見られないこと』に。

「あの時の……私たち家族を助けてくれたのは、彼だった。でも今現在は、あの子はいない」  
「……………うん」

きつと己に言い聞かせているのだ母は。  
そうエステルは、ティオは感じた。

「へえ……………あいつがねえ」  
「「!？」」

レンの呟きに、エステルとティオは驚いて振り返る。

「レ、レン。あんた……………知ってたの？」  
「レン……………知り合いましたのですか？」  
「え、知り合い？」  
「……………」

レナだけは、皆と反応が違った。  
知っていて当然だ。『彼女を送った』のは彼なんだから。

彼女の瞳は「言っの？」と訴えていて、レンはそれに小さく肯く。  
レナは正直なところ、話すのは止めたかった。  
でもそれが彼女の意思ならば……………それを尊重しよう、そう思った。

「まあね。あいつとはレンがここに来る前の場所で知り合ったの」  
「へえ〜〜〜、ルシアとレンがねえ」  
「……………」

レンはそこで肩を竦め、

「ああ、それでどうしていきなり言いだしたかっていうと、エステ  
ルお姉ちゃんもヨシユアお兄ちゃんも、パパを探しに行くつもりな  
んでしょ？」

「……………」

その言葉に2人は驚く。特に話し合っただけなのに、なんとなく  
そうなる事はお互いに察していたからだ。

2人の驚愕を余所に、レンは続ける。

「レンはママを家で独りすることはできないから、レンは残るわ。  
ただ、ティオお姉ちゃんは一緒に連れて行ってあげてね？」

「へ？ ティオを？」

「どうしてだい？」

「……………レン、貴方は」

「どうしてって、ティオお姉ちゃんはこの機会にパパと一緒にルシ  
アも捜したいでしょ？ 何か手掛かりを見つけられるかもしれない  
し」

「ああ、そっか……………って、ティオもなの！？」  
「……………」

ヨシユアは姉妹全員の繋がりに作為的な不自然さを感じ訝しみ、  
また自分だけ知らない事に少し不満に思う。

ティオはレンの言葉に意外にも驚いていなかった。

「やはり……レンは知ってたのですか」

「ええ。お姉ちゃんが常日頃から調べていたこともね。でも『何時知り合ったか』は知らないわ」

「……………」

「ちょ、ちよつとテイオ。あんた顔が怖いわよ。どうしたの？」

「い、いえ。ちよつと昔を思い出しまして……………」

「で、テイオは僕達に教えてくれないのかい？ どこで知り合ったかとか」

「……………それは、言いたくありません」

「……………そつか。言いたくなければいいんだ。僕だって母さんやエステルが辛い過去を話してくれたのに、自分のことは隠してるんだから」

ヨシユアは5年前、カシウスが突然連れてきた子だった。

毛布に包まれて、その身体は切り傷だらけで怪我をしていた。

最初は心を開かず口も利かなかったヨシユアを、家族の皆がゆっくりと変えたのだ。

そしてヨシユアは、自分がどこの誰で、どういった経緯でこの家にやって来たのか、明かしていない。

言いたくても言えない、そんな表情のヨシユアに、レンやテイオは何かを言おうとして、

「いいのよ、そんな無理して言わなくたって！」

エステルの声が響いた。

嫌な空気、淀み、そんな嫌なものを全てを吹き飛ばすような、そんな清涼さがあった。

「そりゃ、過去が気にならないって嘘になるけど……………でもね！ 父

さんがヨシユアを連れて来てからは、今のヨシユアは『私たち』が一番知ってるんだから！」

「……知られちゃってるんだ？」

「そうよ！ えっへん！」

胸を張って威張るエステルに、ヨシユアは思わず苦笑した。

少し元気を取り戻したかな、そう思ったエステルは、ふんっ、と鼻を鳴らして拳を突き上げた。

「あたし、強くなる！ 皆が嫌な思いをしないように、苦しまないように、辛い思いをしないように！ お母さんやヨシユア、レン、テイオが守ってくれたように、あたしも皆を守れるようになる！」

「……ルシア君がかつてエステルを守ったように？」

母の問いかけ。

「うん！ あたしの目標なの、ルシアは。きつとわだかまりもなくなれば、ヨシユアだって苦しい思いをしなくて済むでしょ？ ルシアならきつとパパつと片付けそうだもの」

「……………」

それは、エステルのルシアに対するイメージであった。

そしてそれは、正しいのか間違っているのか……だれにも分からない。

「きつとここに来たのも、あたし、本能でルシアに助けを求めちゃたのよきつと。今度も助けてって」

「そうね……お母さんもそれは否定できないかも」

「うん。それくらいルシアは凄かったから。でも頼ってばかりだと私の目的も達成できないし、だからあたし、強くなるの！」

「……なら、お姉ちゃんはもう少し勉強がんばって賢くならないとね。脳筋では強くなれないわよ?」

「うぐつ。レンったら生意気なのよ!」

「フフフ」

「大丈夫。エステル姉さんの頭脳のなサポートは私が行いますから」  
「ん? ん〜、なんか納得いかないけど、まあティオがルシアの知り合いだっていうなら、付いてきてもいいか。どうかなヨシユア?」

「そうだね……ある程度の戦闘はこなせるようになってもらわないと困るけど、まあ僕たちが守ればいいだけか。実際にはかなり問題あるけど」

「心配いりません。自分の身は自分で守ります。その為に以前から戦えるように準備はしてきました」

「い、いつのまに……我が妹ながら羨ましいくらい頭良いのね」

そうやって話が纏まりつつある中、レナがティオの前へ歩み出て彼女の視線の高さまで屈み、両手を握って話しかけた。

「ティオ」

「……はい」

「……お母さんは、正直賛成はできない」

「貴方は、戦闘の訓練を積んでいない。それはかなり大きな問題だと思っ」

「……はい」

「それは、きつと戦闘訓練を積んでる人からしたら、なめるなよって話だと思っわ」

「そうだと思います」

ティオとレナの話に、エステルたちは声を挟めない。



それはまぎれもなく、母と娘の会話だった。

「……あなたに闘う才能があったとしても、それは遊撃士の方たちの足を引く張ることになるかもしれないわ」

「……………はい」

「それでも、それでも一緒に行きたいのね？」

「行きたいです。例え……………怪我を負う事になったとしても」

「そう……………本来なら、親としては止めなくてはいけないんだろうけど……………だからと言って親のエゴで子供の気持ちを無視する訳にはいかないわね。正直、判断に迷うところではあるのだけど」

ふう、と小さく溜息を吐いて、

「とにかく……………無事で帰ってくることを。これは約束よ？」

「はい……………」

ジワっと、ティオの瞳に涙が浮かぶ。

母の想いが伝わって来て、心が温まるほど嬉しい。

「そして、あの人……………お父さんと、ルシア君を、宜しくね？」

「任せて下さい。必ず、見つけて帰ってきます」

「よし！ それならお母さんは応援しちゃう！ っと、そうだ」

ガッツポーズをとって握りこぶしをみせるレナだが、何かを思い出したようにポンっと手を叩いた。

そして持ってきていた手さげカバンをぐそぐそと漁り始めた。

「持ってきておいて良かったわ。私の勘も捨てたものじゃないわね」

「？」

母の言葉に首を傾げるエステルやティオだが、レナが取り出した『モノ』を見て、エステルは思わず大声をあげてしまった。

「!?!? ええええええええええ!?!? お母さん、そ、それって!?!?」  
「……? 何でそんなに驚いているんです、エステル姉さん」

レナの手にあるのは……金色の卵型のネックレスと、空色のオカリナ、そしてコンパクトな折り畳み式のケースで、中にはクリスタルが収められている物があった。

「そのネックレス……もしかして……」

ブルブル震えながら指さすエステル。

エステルにはそのネックレスは覚えがあった。

金色の卵型で、黒い円状の淵があるデザイン。光沢はどこか不思議な雰囲気を持っており、そのネックレスは材質がさっぱり分らない。

そして空色のオカリナ。

かなり古ぼけていて、擦り傷も目立つ。

ティオにはその三つが何か解らなかった。

だが。

だが、エステルの頬を紅潮させてふらふら近寄るその姿を見て、ピンと来た。

「もしや、それは……」

ティオ、そしてエステルを見て、微笑みながら肯く。

「そう……これは、ルシア君の私物よ」

「な、なんでお母さんがそれを持つてるの!？」

「!?!」

思わずそのネックレスをひったくり、ジッと見詰める。

ティオはゆっくりとオカリナを預かり、それを見詰める。

(このオカリナで、彼はあの曲を歌って、いえ、吹いていたのでしようか……アルテナの歌を)

「これをお母さんが持つてる訳は……お父さんが、彼が失踪する直前に会っていたから、彼の私物を受け取っていたのよ」

「へ〜〜〜」

「そう、なんですか」

「そのルシアという人は、おしゃれな人物のようだね、母さん」

( 成程。あの事件の直後に『最低な場所』の現場検証で見つけた、ってところかしら )

実際には、レンの予想が当たっていた。

『楽園』の現場検証でルシアやレン、そして今までの子供たちが『連れてこられる前』に着ていた服や私物を発見。それを関係者、親類縁者に引き渡されたのだ。

故に今まで管理していた。いつの日か、彼に直接渡せる日が来ると信じて。

「お母さん、それは？」

エステルが指さしたのは、三つ目の折り畳み式の小物。

「これ？ これは……お母さんにも解らないけど、ただの小物だと

思っわ  
「へえ」

少しの嘘を含ませる。  
それらを、今、渡す。  
自分から、娘たちへ。

「持って行きなさい」

「……ありがとう!!」

「ありがとうっ」

(きつとこれから先。彼を助けられるのは私じゃない。

あの子は、ルシア君はきつと数奇な運命を辿る子よ。あの人はあの子の運命を見抜いていた。愛娘にはルシアから離れて欲しいと。

でもそれは、きつと無理な事。

エステルと、ティオ。ヨシユアとレン。4人は嫌でもあの子に関わる。

おかしな話だけど、それを確信してる。

そして何よりも。

何よりも。

あの映像を見てしまったからには、放っておく事はできない)

レナは子供たちを連れながら、塔から降りて遊撃士協会までの道を歩く。

敢えて娘に教えなかった、ある秘密。

自分はその中の1つしか見る事はできなかったが、きっと娘達は見る事になるのだろう。

そして、あの残酷な真実を見る事になるのだ。

その時、皆が、みんなが無事である事を、願っただけだ。

レナは『その為に前から動いてきた夫』の今に想いを馳せ、そして夫を、娘達を信じた。

これから先の未来に、幸多からん事を。

第24話 出発の前に。(後書き)

レナは『クリスタル』が何を意味するのか、それを知っています。もちろんカシウスも。

そして彼女が見たのは何の、いえどこのシーンなのか。

LUNARを知ってる人なら予想つくかもしれませんが、知らない人はお楽しみに！

かなり衝撃的な内容ですので。

第25話 ボース（前書き）

仕事で死にそう……

## 第25話 ボース

「先生を捜しに行くですって!？ って、レナさんがいるって事は、レナさんも認めたって事ですよね」

シエラザードは溜息を吐いて少し苦笑した。

「……でも今は定期飛行船が運休しているから、ボースへは徒歩で行くことになるわよ?」

「わかってる!」

「では当面の路銀とボース地方の地図です。あとこれはヴェルテ橋関所の通行許可証の申請書類よ。ボースに着いたら遊撃士協会のルグラン老人を訪ねてちょうだい。ボース支部には連絡を入れておいたから」

「っ!」

既に準備は整っていた。次々と提示される品にエステルたちは感動した。

アイナは自分達が言い出す前に、既に察してくれていたのだ。

どれだけこの人は、自分達を理解してくれていたのだろうか。

「あたしは仕事ですぐには動けないのよ。でも後で追い着いておしいところかさらつてあげるわ。だから心配しないでふたりで、いや3人でやれるところまでやってみなさい」

「がんばってね」



シエラザードの激励とアイナの応援に励まされて、エステル・ヨシア・ティオの一行はボースへと向かったのだった。

ロレントを出てミルヒ街道を沿って行くと、ヴェルデ橋が見えてくる。

ヴェルデ橋までの道は森を抜けていかねばならないが、それまでに魔獣や手配魔獣など危険な目に遭う可能性が大きい。

故に人はほとんど歩いておらず、行商の人や軍人や遊撃士、偶に一般人が歩いているがそれにしても救いない。

エステルとティオが並んで歩き、その後ろをヨシアが歩く形でミルヒ街道を歩いていた。

「ん〜！ 良い天気ね！」

「ほんと。お昼寝をしたくなります」

ぐ〜っと伸びをして気持ちよさそうな声を出すエステル。

「だよね！ こう、おにぎり片手にのんびりしたいなあ」

「エステルらしいや。ミルヒ街道の景色より食い気の方が強いなん

て

「なによヨシユア。悪い？」

「いや、良い意味で言っただよ」

「……なんか納得できないような」

腕を組んで傾げるエステルに、ティオはクスツと笑った。

そして先刻に母からもらったオカリナを取り出し、見詰めながら歩く。

（不思議です……普通の楽器の筈なのに、なんだか心がぼかぼかするような）

どこか温かな感じがする。

「しかしティオがルシアと知り合いだったとはね〜。前からルシアの話をしてたときに教えてくれればよかったのに」

「そういえばそうだね……それも言いたくなかったのかい、ティオ」

「いえ、言いたくないというのは不適切な表現です。どちらかと言えば、言い辛かった、が正しいと思います」

「？ ふ〜ん？ なんか複雑なんだ」

「ええ……それに実のところ、彼も私を覚えているかどうか……」

ティオは少し悲しそうに言う。

あの施設内には自分以外にもたくさんいた。少しの期間しかいなかった。

だから、自分など大勢の中の1人でしかないかもしれない。

（これで覚えてなかったら……とても滑稽です）

彼から教えられた歌を歌い、彼から教わった指示通りに頼って力

シウス邸に赴き家族を得て、彼を捜し続け、拳句の果てに彼の私物まで受け取ったのにも関わらず彼は覚えていなかった、なんて間抜けにもほどがあるだろう。

いや、

「……正直かなりショックかもです」

「へ？」

「ん？」

「……………いえ、なんでも」

ズーンと暗くなり落ち込んだ妹に、おろおろとエステルとヨシユアはうつろたえたのだった。

「え、えつと……あ！ ヴエルデ橋よ！」

「ほ、ホントだ！ ほらティオ、早く観に行こう！」

「……………ええ」

トボトボと歩みが遅くなったティオの手を引っ張ってエステルと共に小走りにヴェルデ橋へ行くが、ヨシユアが見る限りは、ティオは散歩を嫌がる犬が引き摺られているようにしか見えなかったという。

ヴェルデ橋は、ロレント地方とボース地方の掛け橋であり、防衛

の際の要塞でもある。

簡素な造りながらも通り道は一本の為、非常に攻め難い構造をしている。

周囲は湖で囲まれており、意外と深さもかなりのものがある。

しかしその周りは森林や花など植物で囲まれており、通り抜ける人々を楽しませた。

エステルと落ち込むティオ、苦笑するヨシユアは関所員に通行許可書を見せて無事にヴェルデ橋を通過。そのまま東ボース街道へと入った。

ちなみに一般人などがヴェルデ橋を通る為には、身分証と通行許可が降りるまでの滞在、諸々の書類への記入など、非常に面倒臭い事務手続きが待っている為、どれだけ通行許可書が便利か解るだろう。

東ボース街道はこれまた林の中を抜けなければならない。

視界が悪く、いつ魔獣が出てくるか分からない為に気を抜けない……が、今回は運が良いのか、全く出てこず、エステルやティオを肩すかしさせた。

が、そんな2人を待っていたのは、ロレントのような田舎町とは違う、都会。

そう。

そこはリベール王国王都グランセルに次ぐ最大の都市であり、商業都市と国外にも名高い街。

その名は『商業都市ボース』。

街の中央に巨大なマーケットがある、若者たちから老人まで幅広い世代に人気があり、集まってくる。

「大きい〜〜」

「そうですね。ロレントとは違います」

「あれは何かな？」

「きつと噂のマーケットだと思います、エステル姉さん」

「よく知ってるわね、ティオ」

「……………何言ってるのさエステル。シエラ姉さんの講義でも教えてくれたじゃないか。それと日曜学校でも」

「うっ！　ちよ、ちよつと最近突っ込みが多くなってきたわね……………復習でもしようかな」

「ハハハ」

「エステル姉さんらしいです」

姉としての威厳が、と呟くエステルに、ティオもヨシユアも苦笑する。

一応兄弟姉妹の中で最年長と豪語するエステルにとっては看過できない問題らしい。まあ、自業自得ではあるのだが。

「そつよ！　早くボースの遊撃士協会へ行かなくちゃ！」

「誤魔化したね」

「誤魔化しましたね」

2人の突っ込みを無視して冷や汗をかきながらエステルは駆け出した。

ちなみに…………エステルが向かった方向は遊撃士協会が在る方角ではなかったという。

「……こんにちは」

ボースの遊撃士協会は初めてな為、そーっと扉を開けて入ると、室内はロレントとそこまで違いは無かった。だが受付にいたのは、アイナのように若く美人の女性ではなく、老人の男性。

「ほほう……よう来たのお、カシウスの子供たち」  
「「「！」「」」

老人の言葉にびっくりして中に入る。

眼の前まで歩み寄ると、老人　ルグランは髭を撫でるとにっこりと笑った。

「アイナから話は窺っておる。ようこそ、ボースへ」  
「よろしくね！　ルグラン爺さん！」  
「よろしく願います、ルグランさん」  
「……どうも」

ルグランはなにやら満足そうに肯く。

（ふむ。この子たちがカシウスとレナの子か………成程、どの子も面白い）

ルグランの老年の瞳には、とても面白い子たちだと映る。

どの子も何かを抱えつつも、両親と同じでどこか同じ匂いを感じる。

ルグランはそんな事を考えつつも、資料を出した。その資料に3人は食いつく。

「ルグランお爺さん。この資料は……」

「こちらでも独自に調べたのじゃよ、ティオちゃん。そして残念じやが……例の船の乗客名簿にもカシウス・ブライトの名は確認された。お前さんたちの親父さんが飛行船に乗っておったのは間違いなさそうじゃの」

「ねえルグラン爺さん。飛行船の行方は分かっているの？」

「うむ。ボース港を出発してからの足取りは未だにさっぱりじゃ」

「そんな……と落胆する3名。」

しゅん、と落ち込む3人に伝え辛そうに、ルグランは続ける。

「というのも厄介な事に、この件では王国軍も出動して搜索がなされておるんじやがな、どうやら指揮をとっておるのが、あのモルガン將軍らしいんじやよ」

「「えっ!?!」」

ヨシユアとティオの顔色が変わる。

その名は有名であった。そしてその意味するところも。

尚追いつき打ちをかけられた2人であったが、そこへ脱力するまさかの言葉が。

「……………だれ？」

エステルである。

ずるっと転ぶヨシユアやルグラン、額を覆い天を仰ぐティオ。リベール王国に住んでいながら、まさかの言葉であった。

「10年まえの戦争で帝国軍を撃退した英雄だよ！ 教科書にも載  
つてたでしょ！」

「そーだっけ？」

「エステル……」

ひそひそと声を静めて言うヨシユアだが、残念だがルブランにも  
丸聞こえであった。

「で、なんでその將軍が厄介なの？」

「エステル姉さん。猛将と唄われるモルガン將軍ですが、実は有名  
な話もあるのです」

「そうじゃ。実はな、モルガン將軍は大の遊撃士嫌いで知られとっ  
てな。その所為か軍からちーっとも情報が入ってこんのじゃよ」

「そんなあ！」

ガクーンと机に突っ伏すエステル。ようやくヨシユアやティオの  
反応の意味が分かったのだ。

だが。

「なあに！ わしらは軍とは違う切り口で解決策を見出せばいいん  
じゃ。実際、そうして欲しいとボース市長からも依頼が来とるでな」

「え……」

「期待しとるぞ、カシウスの子供たち！」

ルグランは、エステルたちからすれば不自然に映るくらいに落ち  
着いていた。

不敵に笑う仕草から、カシウスの安否に関しても全く心配してな  
いように。

ルグランから激励の言葉を貰い、意気揚々と出て行こうとした時、



テイオはルグランへと話しかけた。

「あの」

「ん？ 他にも何かあるのかの？ ティオちゃん」

「はい。あの、ルシアという名前の、私と同じ年齢が少し上くらいの青髪の男の子を知りませんか？」

その言葉に、エステルもヨシユアも驚いて振り返った。

まさか遊撃士協会の受付の人にその件について聞くとは思ってなかったようだ。

だが、ルグランの反応は少し大きく目を見開き、手元にあったコ―ヒ―を呑む、そんなわざとらしい仕草であった。

「何か知ってるのですね！？」

テイオは詰め寄る。パソコンを使った情報では掴む事ができなかった情報を、この人は持っているのだ。

「わしも深くは知らん……だがその子に関して、遊撃士協会本部の通達により、全遊撃士支部へと勅命が下っており。もちろん、正式なモノではない為に公開はされとらんがのお」

「教えて下さい！」

「ふむ……………」

「ルグラン爺さん！ あたしにも教えて！」

「僕も知りたいです」

エステルとヨシユアも詰め寄ると、ルグランは隠すことではないから構わんが、と前置きして話した。

「彼に関しては、搜索・保護命令が出ておる」

「遊撃士協会自ら、ですか？ さすがにそれは妙な話ですよね」

ヨシユアは眉を顰めて疑問を呈す。

いかに民間人を守る遊撃士協会とはいえ、たかが1人の一般人を本部が全支部へと命令するほどの事はしないのだ。行ったとして、該当する地方、支部へのみが可能だ。

「……まあ、それはヨシユア君の言うとおりじゃが……彼も訳ありじゃからのお」

「訳？」

「これ以上は言えん。お主たちが知りたければ、一刻も早く正遊撃士になり、A級かB級になる事じゃ」

「そんな……」

「行こうエステル、ティオ。これ以上は情報の秘匿度から僕らには話せないんだよ」

「……でも！」

「悔しいですが……行きましょう」

「……分かったわよ」

どの件も、先行きは真っ暗であった。

「さて、と。これからどうしようか」

ボースマーケット内で昼食を摂っていた3人。少し落ち込み気味だったので、エステルは気持ち切り替える為に元気な声を出す。売っていたホットドッグを頬張りつつ、ティオは言う。

「ボース市長に会ってみませんか？ ルグランお爺さんも言っていましたし」

「そうだね。正式な依頼もあつたことだし、話を聞いた方がいいかも」

「うん、りょーかい！ 依頼者への挨拶は遊撃士としての礼儀だもんね」

「そうだね」

ヨシユアはサンドウィッチを手に周囲を見まわしつつ肯く。するとエステルが感心するように言った。

「しっかし、にぎやかだね、ボースマーケットって。こんな人混み初めてかも」

「うん……………」

「あつ、ほらヨシユア、ティオ。見て見て！」

「え、何ですか？」

「……………」

「ほら、ヨシユアも見なさいよって……………ヨシユア？」

ヨシユアの反応が無い事に気がついたエステルとティオは怪訝そうに窺うと、ヨシユアはとある方向をじっと見ていた。

その視線の先を見ると、買い物区画の一角。

そこにいたのは、清楚な服で着飾った水色の髪の可愛い女の子で

あつた。

「あらあら？ ヨシユア君ってば、ああいう子が好みなんだ〜」

「確かに可愛い顔をした人です。それにあの胸元の飾りは  
「はい？」

目を輝かせてニタニタ笑って頬を突いてくるエステルと、妙に分  
析するティオ。

ヨシユアは少し頬を赤らめて否定するのだが、

「そっかそっか。いや〜、お姉さん知らなかったな〜」  
「妹として情けなかったです。ごめんなさい、ヨシユア兄さん」  
「なーに言っただか……」

全くもって梨のつぶてであつた。

「違うの？ じゃあ、ああいう美人さんはどう？ って、本当に美人ね」

「ハイハイ」

ヨシユアはどうでもよさそうに聞き流す。

確かにエステルが指定して女性は美人であつた。

金髪の女性で、髪はカールして長く腰まであり、ふわふわしたその髪はとても柔らかかそうだ。そして顔の造りも美人であり、雰囲気  
が年上のお姉さんというオーラを發揮している。

その女性に付き添うのもこれまた美人の女性であつた。メイド服を着ているところから付き添いの侍従の立場らしかった。

その女性たちは、どこか違う、そんな雰囲気を感じていたのだ。

エステルは続けて美人ねえ、とティオに振るうとしたが、ティオ

は背後を凝視していた。

何かとエステルが振り返ると、そこにいたのは自分たちが座っているベンチに隠れてこそこそと蠢く何か。

「……………ジー」

ササつと俊敏な動きをみせ、こそこそと物陰へと移動しつつ、先ほどの金髪の女性の後を追う2人組み。

「なるほどー。そうやって人気のないところで一気に！ なんです  
ねー！！」

「シー！ バカ！ 声が大きい！」

30代の細身の男性と、20代前半の赤髪の女の子というなんだか似つかわしくない組み合わせの2人が、こそこそと怪しい動きをしていた。

怪しい、とエステルが呟き、ヨシユアへと振る。

「ヨシユア。あれは……………どう？」

「ある意味女の子より気になるけど……………」

「ヨシユア兄さんの好みからするとあの女の子も十分狙い目かと」

「そこから離れてよ！？」

「だよね！ 後を追うわよ！」

「はい。あの方にヨシユア兄さんを売り込みます」

「話しが合ってるようでもちやくちゃだよ！ それにさっき決めた事を早速忘れちゃうんだ」

ヨシユアの突っ込みすも当然スルーし、エステルとティオは2人の後を追いかけた。

さて、そんな噂の2人は、金髪の美人の女性の後方の物陰で、ジ  
ーツと彼女たちを窺っていた。

「やっと人混みから出てきたか……おい、ドロシー。いつでも撮れ  
るようにしとけ」

「はい」

「何を撮るって?」

「もちろん! あの綺麗な女の人のあーんなところやこーんなとこ  
ろですう〜」

「あ、あんですつてええ〜〜〜!?!」

「うお!? 誰だお前!?!」

いつもの帰ってくる声が違ふことに男は振り返ると、そこにいた  
のは見知らぬ女。

それも怒髪天を突く、といわんばかりに怒りに燃えていた。

もつとも、そこに油を注いだのが傍らにいる相棒なのだ。

「あなたたちね! 白昼堂々、美人のお尻を追いかけまわすなんて、  
破廉恥にも程があるわよ!」

「?」

「はい?」

「申し開きがあるなら言ってみなさい!」

エステルは棒を自分達へと突き付け、そう宣言する。  
面倒臭そうに溜息を吐いた男に、ドロシーと呼ばれた女の子が囁く。

「だそうですよ、ナイアル先輩」

「ああ？ あーめんどくせえな。ドロシー説明しといてくれ」

「はい！」

くるつとエステルへと振り返る。テイオはドロシーを観察し、ヨシユアは困ったように窺っているが、ドロシーと呼ばれる女の子はどうやって説明しようかと悩む。

「え、えーと、私たちは、え　　つと……………あ！」

ポンつと手を叩き、そして　　。

どこかへと走り去って行った。

「……………」  
「……………」

ひゅーと風が間に吹き抜け、呆然と見送るエステルたち3名と、

男　　ナイアル。

「……………逃げたわね」

「はい！？　ちょ、ちょっと待て！　俺は怪しい者じゃ　　」

「何事ですか？」

そこへやってきたのは、先ほどの金髪の女性と、メイド服を纏っ

た女性。

その場にいる全員が、あ、と声を上げると、メイド服の女性がかに気付いたようで、ナイアルへと話しかけた。

「あら、また貴方たちですか」

「おねーさん、こいつの事知ってるの？」

「存じております」

エステル疑問に即座に肯き、そして女性は『真実』を告げた。

「先日からお嬢様につきまとう不届き者です」

な、なんだって……、と全員の間には雷が落ちた気がした。

ギギギギ、と擬音が聞こえるほどゆっくりとエステルがナイアルへと振り返り、そして。

「ちっ！」

「待ちなさい！ このストーカー男！」

「だれがストーカーだよ！」

「ヨシユア兄さんには悪いですが、ストーカーとお付き合いは妹として認められないです」

「はあ！？」

と、喚き合いながら走って行ってしまった。

その場に残ったヨシユアと金髪の女性とメイドさん。ヨシユアは苦笑しながら彼女たちへ告げる。

「……心配なく。僕らは遊撃士のものですから、あとは任せてください」

「……そうでしたか。では、どうかよろしくお願いしますわ」



ふわりと優しい笑顔を浮かべる女性に、ヨシユアは少しテレてエステルたちへ追いかけたのだった。

一方、追いかけていったエステルとティオだが、

「逃げ足速いわね〜。どこいったのかしら」

「そうですね……って、エステル姉さん、あれ」

「ん？」

意外とすぐに見つけた。

何故なら近くの公園へと続く階段のところで、大きく肩を上下させて息切れしていたのだから。

「……体力ないわね、ストーカーさん」

汗でグツシヨリとなったナイアルだが、エステルの言葉にブチッとキレて言い返した。

「……っるせえ！！ それ以上言ったら正義のペンで訴えるぞ！」

「ペン？」

「そうだ！ 俺はナイアル・バーンズ。リベール通信社の記者だ。覚えとけ！」

「リベール通信って、あの情報雑誌の？」

それには驚いた。

エステル自身、その情報誌は知っている。何故なら。

「それ、お父さんもお母さんも楽しみにしてるわ！ あたしが毎号  
買いに行ってたのよ！」

「お！ 感心じゃねえかお嬢ちゃん」

「いえ、実は姉さんはそのお釣りが目当てなだけです。お小遣いに  
できますから」

「オイ」

「あはははは」

その理由に、1人の記者として突っ込まざるを得なかった。

「あれ？ ってことはもしかして取材？」

「やつと解ったか。ボースで噂の美人市長に完全密着！ っていう  
我ながら情けない記事だな」

「……………市長？」

「え？」

エステルとテイオはお互いに顔を見合わせて、その言葉の意味を  
理解し、それが指し示す人物を思い出し、

「市長~~~~~!？」

エステルの絶叫が響き渡った。

だが、さらにエステルとテイオを驚かす事が続いた。

「あら、呼びましたか？」

「へ？」

エステルが振り返ると、そこにいたのはヨシユアが護衛するよう  
にしてやってきた、1人の女性。

先ほどの金髪の女性で、隣にはメイドの女性。

「初めましてですね。わたくし、ボースの市長を務めていますメイベルと申します。以後お見知り置き下さいね」

これが、長い付き合いになる人物たちとの出会い。

リベール通信社の記者ナイアル。

そしてボース市長メイベル。付き人のリラ。

そんな皆との出会いは、ナイアルストーカー疑惑という、少し情けないものであった。

## 第25話 ボース（後書き）

辛い日々が続いております。更新遅くなりました。感想の返信は後日行います。申し訳ありません。もう眠くて仕方なくて……………

戦闘はまだありません。少々お待ち下さい。

## 第26話 噂と人物像

これが驚天動地というものなのか、そうエステルは感じずにはいられなかった。

市長や政治家といえば、むさ苦しい中年や年配の老人、そういうイメージしかなかった。無駄にプライドが高く頑固で怒りやすい、脂ぎった太った体型。

少し悪いイメージが凝り固まっているが、いかんせん庶民のイメージもそれであった。

だがそれを真つ向から否定するのが、眼の前にいる市長。

ボース市長であり、今話題の敏腕市長。

ボースにマーケットを開き、ただでさえ商業都市として有名であったボースを、更に巨大都市にし、商品の流通を活性化させボースを潤わせ、その上で治安も向上させた、まさに敏腕凄腕市長。

それが、ボース市長『メイベル』である。

「まあ、それで私の特集記事を？」

「おおつ。とはいうものの、やつつけ記事だから我ながら情けねえ限りだがな」

「へ〜」

ナイアルは煙草を啜えて髪をガシガシ掻きながら言う。

煙草の煙が輪を造っているところから、体力は無いモノの意外と余裕はあるらしい。

「ではナイアル様は本来、何の記事を書くつもりだったのでしょうか？」

「様って……まあ、いいか」

メイベルの付き人であり、メイド服恰好の女性  
抑揚のない声で淡々と聞く。

リラは、

ナイアルはリラの言葉に痒そうにしたが、諦めたように脱力した。  
記者の勘から言っても無駄と感じたらしい。

「そう。書く記事だが……大ニュースだよ！」  
「っ！」

突然立ち上がり、大きな声を上げたナイアルにティオはビクツと  
した。

「だがな！ それもこれも飛行船失踪っていう大事件が起きてるっ  
ていうのに、これっぽっちの情報も掴めねえのが悪いんだ！！ 何  
が軍の情報規制だ！ おかしいだろ！？」

地団太を踏むナイアルに、メイベルはあら、と何やら感心した  
声を上げていた。

「俺たち民衆にも知る権利がある！ 行方知れずの家族の安否を心  
配する気持ちを、軍が、国が裏切ってい良い訳ないだろうが！ ……  
………は！？」

と、熱く語っていたナイアルであったが、自分を見詰める目に気  
付いて思わず硬直した。

メイベルを含めたエステル、ヨシユア、ティオの4名が、おお、  
と感心した声を上げて拍手していたのだから。

……ちなみにリラは変化なかったので、何を考えているのかさっ  
ぱり分からなかった。

「あんだ、ただのストーカーじゃなくて、意外と良い人なのね」

「そこから離れるよ！ 頼むから！」

「エステル姉さん。さすがに可哀想ですからその辺で」

テイオが苦笑しながらエステルを嗜める。

「冗談よ、と言ってからエステルはメイベルを一度見て、ナイアルに向き直った。」

「えっと、ナイアルって言ったっけ？ あたしたちの父さんも例の

飛行船に乗ってるんだけど」

「なに？」

「まあ」

エステルの言葉にナイアルは表情を険しくし、メイベルも心配そうに眉を寄せた。

だが、次のエステルの言葉で2人は大きく驚くことになった。

「だから何か知ってることがあったら教えてくれない？ あたし、

エステル・ブライト。事件を担当している遊撃士なの」

「……ブライト？ 父親？ 遊撃士？ おいおい、まさか例の飛行

船にあのカシウス・ブライトが乗っていたってことかよ！？ いや、その前にお前たちはあの『剣聖』の子供なのか！？」

「驚いたわ……」

「？ 父さんを知ってるの？」

「知らねえわけねえだろうが！？ なに言ってるんだおまえ！？」

「エステル……」

「エステル姉さん……」

バシバシ唾を飛ばしたナイアルと、ヨシユアとテイオは呆れて溜

息を吐く。

メイベルも、そして今まで無表情を決め込んでいたリラですら隠せないほど驚きを見せていた。

ヨシユアもテイオも姉の良いところはよく知っているが、さすがにここまで鈍感、というかおとぼけ状態はさすがにどうかと思わざるを得ない。やはりもっと勉強させるべきだったと考えが一致していた。

「どういつこった……剣聖カシウスが乗っていないながら……？」

「……少し気になることが」

「え、メイベル市長？」

何やら考える仕草を見せるメイベル。

「本日、わたくしがマーケットを周っていたのは、最近頻発している事件の為なのです」

「事件？」

「ああ、それは俺も知ってる。最近では強盗事件が頻発しているんだ」

「ですがそれも妙な話なのです。自慢するつもりはないのですが、商業都市にも関わらず犯罪発生率の少なさが、ボースの自慢でもあったのですが、最近が多すぎます」

「……なるほど、話は読めたぜ。メイベル市長、問題はその日時だな？」

「何の話です？」

テイオは問題の核が掴めない為に眉を寄せて続きを問う。  
ナイアルはテイオに目を向け、煙草を啜え直して答えた。



「その強盗事件ってのはな……飛行船失踪事件の日から連続して発生してるのさ」

「!?!」

「それって!?!」

「……なるほど。それは貴重な情報です」

ティオ、エステル、ヨシユアがそれぞれナイアルの言葉を聞き、直感で何かあると悟る。

全く関係のない話しだが……そんなに都合よく同じ日に起こるとは思えない。

ならば……そこには何かしかの関連がある。そう信じたかった。

「ありがとう! ナイアル」

「ま、良いつてことよ。俺も完全に掴んでる訳じゃないから胸を張れないがな」

「それでも十分よ! よ〜し、これでお父さんの件は一步前進ね。ね? ティオ」

「はい。とても大きな情報かと。もうひとつの件は何一つ進んでいませんが」

「うっ。まあ、そうね」

2人は複雑そうな顔をしてやれやれと肩を竦める。

父親の件は事件に関係していると思われるので、必然的に事件を追えば父にも追いつく。

だが、ルシアの件は雲を掴む話した、そう2人は感じていた。

この広い大陸、あるいは大陸外にいるかもしれない人物1人を捜そうというのだから、なんとも無茶な話である。

「エステルさん達は他にも事件を追っているのですか?」

「あ、違いますメイベル市長。私たちはお父さん以外にも1人、人

を捜しているのです」

「人だと？」

「そうなの。あたし達の……幼なじみ？　のような関係の男の子で、現在は行方不明になってるの」

「行方不明とは穏やかではありませんね」

みればメイベルの表情は真剣な顔になっており、詳しく話して下さいと続ける。

ひよっとしたら力になれるかも、と。

「その男の子の名前はルシアっていうんです。蒼い髪が特徴的で、ものすつごく美人な」

「おいおいテイオちゃんよ。男に対して美人って」

「でもそれが適切な表現なのです。神秘的、ともいえるかもしれませんが。あと、ものすごく歌が上手いのです。下手したら、この大陸の歌い手の誰もが敵わないくらい」

「ほほう……それは凄いな。えっと名前はルシア、ね……………」

「……………」

不意にメイベルもナイアルも黙り込んだ。

何かを思い出すような仕草。

その態度にエステルも思わず詰め寄る。

「もしかして知ってるの!？」

「……いや、どこかで聞き覚えがあるような……………」

「……………」同一人物かは解りませんが、その名前の人物には心当たりが」

「!？」

メイベルの言葉にエステルとテイオは大きく目を見開き、思わず詰め寄ろうとする。

そんな2人の仕草に、ヨシユアは待ったを掛け、一步前に出て冷静な態度で尋ねた。

「メイベル市長。教えて頂いても構いませんか？」

「ええ。最初にお断りしますが、先ほども申し上げた通り、まず同一人物かは解りませんので、そこは理解して聞いて下さい」  
「もちろんです」

「……これは前市長である私の父が市長だった頃、近くの洞窟で落盤事故があったのです。その事故では幸い死者は出ませんでしたが一ひとりだけ洞窟作業員の方が足を骨折する重傷を負いました。その方の証言から、大きな手配魔獣が洞窟に出現し、その魔獣を蒼い髪の幼い少年がアーツで一撃で撃破し、その余波で落盤が起きたと。その際に瓦礫で足を骨折したそうです」

「……………」

「……………」

「……まるで、その男の子の所為で怪我人が出た、と言いたげですね、メイベル市長」

「私は起こった事実を並べて述べただけです。そこから真実を汲み取るのも遊撃士の仕事ではなくて？」

「そうですね。その通りだと思います。ですがその男の子について、蒼い髪というだけで僕達の探し人だと関連付けるのは些か強引すぎるのでは？」

「勿論それだけではありません。その事故が時期、ボース近辺の農家で魔獣による被害がいくつかありました。父がその件に手を打とうとした際、既にその件は終わっていたのです。終わらせたのは1人の子供だったと住民の方から証言が取れ、その子はルシアと名乗ったそうです。その子はアーツを使い、一撃で魔獣を退治したと。そのような件がいくつか上がって来て、当時父が頭を悩ませていた

のを覚えています」

「成程な……いかにアーツといえど、ベテランの軍人や遊撃士だってアーツ一発で魔獣を退治するなんて馬鹿げた事が出来ない。それも子供。証拠は無いが……その落盤事故と他の件を関連付けも仕方ないな」

「そんな……」

「……………」

シヨックで言葉が出ないエステルとティオ。ヨシユアは険しい顔で考え込む。

そう、事実だけを上げれば、件の少年の対応はあり得ない。

落盤事故に関しては魔獣を倒す為とはいえ、間違いなく人ひとりを怪我を負わせた。そして他に関しても、本来なら遊撃士協会や軍に要請する討伐要請を、無視して1人で片付けてしまった。

別に悪いことだとは言わないし、言えない。

だが。

だが間違いなく、常識を無視したやり方であり、とても褒められた方法とはいえないのだ。

悪い言い方をすれば、それは非常識な子供。

今間違いなく、この2人の中の彼に対する人物像は崩れた、そうヨシユアは確信する。

良くも悪くも姉と妹の2人は、幼なじみという男の子に対して、どこか神聖視すらしている気がしていた。過去に何かをしたらしいその男の子。

その事に対して、子供ながらに当時はヒーローのように感じたのだろう。

羨望は時間が経つにつれ大きくなったのだろう。それは過大評価へと繋がる。思い出が美化されるように。ヨシユアは2人の思いも

それに属するだろうと思っただ。

(そう……昔からエステルは彼のことばかりだった。それもどこか違和感があった)

最初は好意だと思っていたのだ。それを寂しくも思っていた。

だが、どこか彼女の想いが恋だとも思えなかった。憧れや羨望、英雄視、それが肥大化した想いだったのだろう。それは母を助けたという逸話から決定だと思う。

「ナイアルさん。貴方は？」

「ああ、俺もメイベル市長と同じだ。奇妙な子供がいる、くらいだな」

(……………いや、それ以外にもどこかで聞いた気がするんだが………どこだったか)

ナイアルは煙草を吹かして考えるが、やはり思い出せない。

思い出せない以上は迂闊に言葉にするべきではないとジャーナリスト精神から言葉を濁した。

「貴重な情報ありがとうございます。ああ、そういえば、お連れの女性の方は？」

「ドロシー？ ああ、あいつの事なら放っておけば戻ってくるさ」

「では僕達も付き合います。強盗もいるそうですし、護衛も兼ねます」

「ああ、ありがとよ」

「ではお嬢様と私はここで」

「よいお時間でしたわ。また会いたいものです」

「ええ、こちらこそ」

「………… エステルさん、テイオさん。そんなに気を落とさないで。申し上げた通り、同一人物とは限らないのですから。それに、それがその人の全てとは限らないでしょう？」

「うん……………」

「そう…………… ですね」

「ええ。そうですね。それではまたどこかで」

そう言つて、メイベルとリラはボースの街中へと消えていった。

ナイアルを含めた4人はドロシーを待つためにその場でとどまり続け、何か考え込むエステルとテイオ、そしてヨシユアとナイアルはひたすら待ち続け、なんと深夜にまで突入し、その時間にドロシーは戻つて来た。

ドロシーが戻つて来た際に持つてたのは、自分達が記者である事を証明する雑誌。

しかし雑誌が『リベール通信』ではなく全くの關係ない雑誌であった為に、ナイラルから「さんざん待たせた癖にこれかよ!？」と突っ込みをくらつたという。

そんなコントのようなやり取りに、力なかつたエステルやテイオを苦笑させ、ヨシユアを笑わせた。

元氣溢れるドロシーと突っ込み疲れしたナイアルと別れると、自分達もそろそろ宿へ戻らない時間だと気付き、ヨシユアは2人へ提案した。

「じゃあ、僕らも宿へ行こうか」

「…………… うん」

「はい…………… そうですね」

未だに元氣がない2人を連れてボース中心街へと戻り、宿へと向かう。

そんな時だった。

「きゃ~~~~~!!!」  
「「「!?!」」」

真夜中のボースの街に、悲鳴が響き渡った。

「エステル!!」

「うん! ティオ、行くわよ!」  
「はい!」

3人が慌てて悲鳴が上がった方へと走りだした。  
夜中故に明かりが少ないが、それでも見えない訳ではないボースの街。

悲鳴があつたと思われる位置、その手前の角を曲がると、そこには街の警備隊の人の姿があつた。

だがおかしな事に、悲鳴を上げたと思われる女性もおらず、なんの争った形跡も、何かが起こった様子も見受けられない。

直後、再び悲鳴があつた。

警備隊の人とエステルたちは慌てて駆け出すが、悲鳴があつた方向へ走つても、やはり誰も、何も無い。

そしてまた悲鳴が上がる。

それが何度も起こり、それぞれいくつかのチームに分かれ、違うルートで駆けつけるが、やはり何も発見できなかった。

誰もが焦りが募る中、ヨシユアはおかしいと眉を顰める。  
あまりにも発見できなさすぎるのだ。

するといきなり、ティオの足が止まる。それに驚いたエステルも足を止め彼女へ振り返り、ヨシユアも驚いて足を止める。

「どうしたのティオ!?!」

「……上手く逃げられすぎです。このままだと女性の身に取り返し

「がつかなくなるかもしれません」

「だったら速くいかないと！」

「いえ、待って下さい……………この……………私が造った導力杖を使います」

一瞬の躊躇いと言葉の詰まり。

若干の間と共に取り出したのは、彼女が制作した魔導杖。内部に特殊な導力戦術オーブメントが組み込まれており、彼女の『とある力』を大幅に補助する為の、彼女だけの武器である。

「……………これをつかって、この辺りで警備隊の人以外の気配を探ります」

「そ、そんな事ができるの!？」

「それは……………すごいね」

気配を読む、それはエステルやヨシユアにだってできなくはない。だが、ここはボース。商業都市であり、その広さは広大な敷地である。

そんな中で探ろうと言うのだから、テイオが造った杖は凄い、そうエステルもヨシユアも讚えた。

だがそんな2人の言葉も、テイオは少し苦しそうな、そんな苦笑いを返すだけだった。

「いきます……………アクセス！」

その言葉と共に足元から広がる、意味が分からない紋章。

その紋章はグルグル周り、何やら様々な記号を書きだしていく。

紋章から風が噴き出しているのか、テイオの髪がふわふわと風で靡き、青白い紋章が彼女を神秘的に魅せる。



「……………見つけました！　ここより南西に200メートル！」

「よっし！　行くわよ！」

「ナイスだよ、テイオ！」

結局、テイオは言えなかった。

この探った力は、導力杖の力ではなく、自分の『能力』なのだ。未だ家族にすら言えていない、その力。

テイオは家族の為にその力が使えて少し嬉しくなったと共に、隠している事に心を痛めながら2人に続いて駆け出していった。

「見つけた！」

闇に紛れた先にいた、怪しい人影の集団。

その数、およそ8人。

その中央には、水色の髪の女の子がいて、周囲を怪しい恰好の男たちが囲んでいる。

「わたしは遊撃士エステル！　やっぱり賊の仕業だったのね！」

「な、なに！？」

「げっ！　遊撃士だなんて聞いてないぞっ！」

「やべっ。早く逃げろ！」

……賊の割には妙な反応をする男たちだったが、エステルはそんな関係ない、と言わんばかりに武器を取り出して襲いかかってくる男たちに向き合う。

「もう逃がさないわよ！ その娘を解放して大人しくしなさい！」  
「くそっ！」

1人の賊の男がナイフを取り出し、エステルへと振りかざしてくる。

エステルは落ち着いて切っ先を避け、棒を腕に叩きつけナイフを落とさせる。そして身体を一捻りして男の腹部へと強烈な一撃を叩きこんだ。

男は弾き飛ばされ、仲間を巻き添えにして倒れこむ。

「ふふん、動きはほとんど素人ね！ よゝし、待っててね、その人！ すぐに全員倒して助けてあげるから！」

「まったく、君は1人で先走らないでよ」

「まったくです」

そんなエステルの後ろから、ヨシユアとティオもやってきて、それぞれ両手剣と杖を構える。

「うっ」

男たちは3人の威圧感に押されてジリジリと後退する。

やべーとか、逃げないとか、妙に素人臭い発言をする男達だが、構わずにそのまま追い詰めようとした、そのときだった。

「何やってるんだバカ野郎！」

そんな罵声と共にエステルたちの下へ缶が転がってくる。  
民家の上から聞こえたソレは、男達と同じ格好をした、だが体格はガツシリとしたリーダーらしき男から出されたものだった。

「逃げるぞ！」

「お、おっす」

そしてその缶は、ボンッと、いう激しい音と共に煙を巻き上げ、辺り一帯を煙で覆う事で完全に目くらましとなった。

「もう、なんなのよ〜〜！」

「エステル！ 無事！？」

「大丈夫！ テイオは？」

「問題ないです。それより、逃げられたみたいですね」

「え！？」

煙が晴れた先。

そこには賊の姿などなく、男達に捕らわれていた女の子だけであつた。

「大丈夫ですか？」

ヨシユアが女の子に駆け寄り、その身を案じる。

女の子はよほど怖かったのか、目を潤ませて答えた。

「は、はい。ありがとうございます」

「よかったです、無事で」

「はい。あの私ブースに来るのは初めてで、夜中までつい出歩いてしまつて。そしたらあの人たちが……本当にありがとうございます」

水色の髪を揺らして何度も謝る彼女。

可愛らしいスカートを履き、しつこすぎない白の服はとても清楚なイメージを彷彿させる。

ぷりつとした唇はとても小粒で目元はくりつとして、とても可愛い。

「あれ？ あなた確か昼間にマーケットにいた……」  
「……ああ、ヨシユア兄さんが見ていた」

エステルとティオは思い出した。昼間にヨシユアが見ていた女の子だ。

確か真剣に買い物をしていて、いろいろと商品の品定めをしていた子だ。

「やだ、恥ずかしいです。見られてたなんて……私、つい夢中になっちゃうと周りが見えなくなっちゃうものですから」

「ハハハ」

カーッと真っ赤になる女の子。

思わずヨシユアも微笑ましそうに笑い、そんなヨシユアに再び照れてしまう女の子。

「あ、そうでした。まだ名乗っていませんでしたね」

そう言って女の子は立ち上がり、ペコリと頭を下げた名乗った。

「わたくしは、ジヨゼット・ハールと申します。助けて頂いてありがとうございます」

素敵な笑顔でヨシユアの手をとり、ぎゅっと感謝の気持ちを表したのであった。

## 第26話 噂と人物像（後書き）

全然話しが進まない……。

けれど焦って勧めても仕方ないので、ゆっくり確実に書いていきます。

今回も少し伏線を貼ってます。

………きちんと物語の先で回収できるといいけどwww

## 第27話 誠と真実

（ヨシユアの奴〜）。ひとり浮かれて話なんかしちゃって。あ〜〜  
〜、なんだかなあ〜）

街の女の子に目もくれず、母ばかりに構っていた弟のヨシユアが、積極的に相手に話しかけているのだからとても珍しい。だが、そんな事態にも関わらず、エステルのは心は重い。

突然知らされた、ルシアが起こした事件。彼の所為で傷ついた人がいるという事実。

それは、信じられない、という割合が大きく、けれどどこか彼だと確信しているところがあって、動揺も隠せない。

見ればテイオも同じような顔をしていた。妹はまた自分とは別の、ルシアとの思い出があるようで、また違う何かがあるのだろう。

「大丈夫でしたか？ 怪我は？」

「はい。大丈夫です。あ、あの……優しいんですね」

「いや、そんな。あ、もしかして学生の方ですか？ その鞆は確か……」

「あ、はい。わたくしジェニス王立学園の生徒なんです」

とりあえず今は目の前の事に集中しようと気を入れ直し、エステルとテイオは前方を見る。

前にはヨシユアとジョゼットがいて、なんだか二人だけの空間を作っているような……、とエステルにはそう見えた。

なんだかジョゼットも満更ではないような表情ではないだろうか。

「ねえ、ティオ。なんだか二人、いい感じじゃない？」

「はい。二人の世界、とでもいうような、そんな感じですよ」

「だよー！」

「というか、私たちが忘れられてる気がします」

なんだか無視されてるのは癪に触るが、弟の恋の為だ、と納得する。

「では夜も遅いですし送りますよ。宿泊場所は市内のフリーデンホテルですよ」

「え、ええっと」

「僕たちもそこに泊まってるんです。一緒に戻りましょう」

「えっ」

何故かそこで言葉に詰まるジヨゼット。

「い、いえ。わたくし市内のホテルには泊まってませんの」

「え？ じゃあどちらに？」

「か、川蝉亭……でしたかしら。で、ではそろそろ戻りますので……」

……

「川蝉亭ってヴァレリア湖畔の宿じゃないですか。今からじゃ到着が夜明けになりますよー！」

「え、ええ。ですから早く帰りますわ」

「じゃあ僕たちもお供しますよ」

「いいえ、おかまいなく……」

そこまで気を使ってもらう訳には、とジヨゼットが断ろうとするが、ヨシユアは引かない。



（おおお！？ ヨシユアがこんなに積極的に！ やっぱりジヨゼツトの事が気になってるのね！ やっぱりここは姉として一肌脱がなくては！）

と、妙な決心をするエステルと、

（珍しく兄さんが積極的です。ここは妹として、兄の恋路を応援するべきでしょう）

とコクコクと頷き決意するティオがいた。

「ねえ、ジヨゼツトさん！ 今夜はあたしたちと一緒に泊まらない！？」

「そうですね、それがいいです。親睦を深めましょう」

「そんな、見ず知らずの方と……」

「大丈夫よ！ あたしたち4人。絶対仲良くなれるよ思うわ。だから、ね！」

「長い付き合いになるかもです。姉さんの案に賛成です」

「だよね！」

「は、はあ」

と、エステルとティオのゴリ押しに負けたジヨゼツトがいたという。

ヨシユアはそんな2人を見て、半目になって誤解してるみたいだな、と言いたげだったらしい。

誰の視点でもない、これは第三者の目だ。  
辺りは真っ白で、雲の中にいるのか、真っ白な室内にいるのか、  
濃霧の中にいるのか。

ふと、声が聞こえてきた。

その瞬間、辺りの景色は一変する。

『ゾファー、貴方の復活はこの青き星の〇〇〇が許しません。このアルテナの力をもって封印する、おまえを！』

『フフフフ……青き星の〇〇〇、人間とは愚かなものだ。懲りずに幾度となく我を復活させるのだから』

天より現れた巨大な物体。

その物体に相対する青い髪の毛の小さな子供。

その物体から生える触手のようなものから、巨大なエネルギーの塊、レーザーのような攻撃が放たれ、山を砕き、着弾地点は大地を砕き溶岩が天へと吹き荒れる。

青い髪の子供は手を振るっただけでその攻撃を青い球体で己を包むことで防ぎ回避する。

スツと手を翳し、瞬間、一縷の光が天へと昇り大地へと数十キロの広範囲に降り注いだ。その破壊光線は大地を削り、物体の表皮を削り、だが、有効なダメージには程遠い。

その二つの戦いは、まさに神々の戦いと呼ぶに相応しかった。

見るもの全てを圧倒し、周囲を破壊し、緑あふれる大地は物体に

より荒廃し、命無き不毛の大地へと化した。

だが戦いは決着がつかず、けれど物体は『数』で勝るように次々と従え生み出していく。

青い髪の子供はその長い髪を風で靡かせ、真っ赤な外套を翻し、能面のような表情で『ソレ』を見つめた。

青い髪の子供の周囲は、無数の生ける屍となった『何か』が取り囲み、正に四面楚歌。

誰一人、味方はいなかった。

一人の少年と一人の少女。

最初に目に飛び込んだのは、見知らぬ2人の男女だった。

その2人はいずも湖の畔で歌を歌っていた。

女の子は歌を、男の子はオカリナで演奏していた。

2人はいつも、いつもそこにいた。

歌が、聞こえてくる。

知ってる歌だ、すぐにそれが分かった。

祈りを捧げる時、勇気が欲しい時、寂しい時、嬉しかった時、常にこの歌を歌ってきたのだから。

でも自分の歌とはどこか違う、それもすぐに感じた。

決定的に何かが足りない、決定的に欠けている。

女の子が歌う『ソレ』は、自分の『ソレ』とは全く違った。

それだけの事が羨ましくて、憧れで。

どうしたら『そのようになれるのか』を、どうしても聞きたかった。

「……………あれ？」

「……………んん」

朝日がカーテンから差し込み、外からスズメの鳴き声が聞こえてきた頃、エステルもテイオが同時に目を覚ました。

見事に同じタイミングで体を起こし、同じタイミングで寝ぼけた声を上げた。

2人はボーっとした様子でしばらく停止し、顔を見合わせ、ジト

「……と無言の視線を合わせた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……夢を見たわ」

「……私です」

言葉を交わさなくても、お互いに何を思っているか、何を考えているか、自然とわかる。

それくらいの時間は一緒に過ごしてきた。

「……すごい夢だった気がするけど……どんな内容だったか忘れた」

「……はい」

朝から締まらない2人であった。

朝食を食べ終わったエステルたち3名とジョゼットは、大変仲良くなつたまま別れた。

夜遅くまで話し込めば、女3人仲良くなるのも時間の問題だった。手を振り続けて別れを告げながら、エステルは隣のヨシユアに話しかけた。

「いい娘だったねジョゼット。もっと時間があればよかったのに」「そうだね……」

「彼女追いかけていないのですか？」

「そうしたいのは山々だけど……」

「「……！」」

「……あのさ2人とも……なんか勘違いしてない？」

ほほう、と目を輝かせてにやにやする姉と妹の2人に、ヨシユアは口元を引き攣らせながら釘を刺す。

「いいのよ照れなくても！」

「そうです。ヨシユア兄さんくらいの年齢では女性が気になっても当然なのですから」

「寝ぼけたこと言っていないで、飛行船の手掛かりを探しに行くよ、つて……」

ふと目を向けると、ボースマーケット周辺に人集りが出来ていて、なんだか雰囲気もおかしい。

困惑というか殺気立ってるというか、とにかく物々しい雰囲気が漂っていた。

エステルたちは何があったのかと駆け寄ると、近くに昨日出会ったナイアルとドロシーを発見した。

「ナイアル！ ドロシー！ 何かあったの？」

「よう、昨日ぶりだな。あれをしてみる。昨晚出たらしいぜ、例の食料窃盗団が」

「……本当ですね、見事にもってかれています」

「ああ。マーケットの警備が強化されたばかりだったんだがな。ほら、昨日はメイベル市長も視察に来てただろ？ あれは警備強化についてだったんだ」

「へ〜、それなのにどうして……」

「それがどうも深夜に街外れで騒ぎがあって警備員が持ち場を離れ

「たらしい。そのスキに、な。見事な手口だぜ」  
「「「!」「」」

ハツとなった3人は顔を合わせて目を見開いた。頭の中で昨夜起こった出来事が次々と過ぎり、それが一本線に繋がる。

「もしかして昨日の!」

「ああ、間違いない!」

「そうです。タイミングが良過ぎますから」

「追いかけてよう、エステル! ティオ!」

「え!?!」

「まだ間に合うかもしれない!」

そう言っ慌てて駆け出す3人。いや、エステルは少し戸惑いながら付いてくる事から、エステルは微妙に分かっていないようだ。

その3人に物凄いスピードで追いついてくる男性が一人。

ナイアルだ。

「ど、どういうことだ!? 話を聞かせてくれ!」

「ナイアル先輩~~~~目回る~~~~」

ドロシーの首根っこを掴んでズルズルと引き摺って並走してくるナイアル。まるでドロシーは猫か何かのようだ。

「昨日マーケットに気になる少女がいたんです。ジェニス王立学園の生徒なんです」

「ん? その時点で変だぜ。長期休暇中でもないのに全寮制のジェニスの生徒がボースにいるわけねえからな」

「ええ。彼女を最初に見かけたのは今回被害にあった在庫付近でし

た。窃盗を助けるように起きた昨晚の騒ぎも発端は彼女のあげた悲鳴なんです。もつと決定的な確証を得るために今朝方まで引き止めてはみたんですが」

「ええ！？ そういう事だったの！？」

「……ヨシユア兄さんのマザコン癖が直るきっかけになるかと思っただのですが残念です」

「だから僕はマザコンじゃないって……」

「……お母さんに昨日も手紙を送ってましたよね？」

「……そりゃまあ」

まさかヨシユアがジヨゼットを気にしていた理由がそんな理由だったとは、と衝撃を受けるエステル。そしてサラッと突っ込むテイオ。

すると少し熟考していたナイアルが口を開いた。

「……なるほど、その子が黒なら後を付ければ窃盗団の犯人を拝めるかもしれないってことだな！」

「ええ、その通りです。それに上手くいけば」

「もつと大きな事件の犯人に会えるかも、ってことか！？ きたきたきたぜ~~~~~！」

うお~~~~~！ と燃え上がったナイアルは、ドロシーを引き摺りながらボース郊外へと飛び出していった。

そうしてボース郊外に飛び出した後、地面に刻まれていた車輪の後を発見した。



車輪は盗んだ大量の食料を積んだ荷台のものだと推理、気高い丘を駆け上がり、獣道を進んでいく。

途中で体力の底が尽きたナイアル・ドロシーのペアを置き去りにし、急いで駆け付けた。

しばらく先へ進むと、通行禁止の札とロープで道が塞がれていて、その前にはリベール王国軍2名の軍人が立っている。

どうしてこんなところに軍が、と思いエステルが話しかけてみるが、ここから先は通行止めであり、許可があるものしか通れない、と言って通してくれない。

公道なのに通れないとはどういうことだ、とテイオが抗議するが、完全に梨の礫である。

「ダメだ！　ここから先は上層部の命令により通行禁止となってるって言っているだろう！」

「あたしたち急いでるの！　こうしてる間にも、って！」

と言い合いをしていると、急に突風が襲ってきた。

だがただの突風ではない。その風はずっと吹き続け、突風と共に断続的なプロペラ音が聞こえてくる。

ペラ音と微かに共に聞こえるのは、特徴的な重低音と擦れる音。導力機の駆動音。

「な、なに！？」

「姉さん、あれを！！」

エステルの疑問にテイオが指を差しつつ大声で答えた。

その先にいたのは飛行船。ただし、行方不明になった飛行船ではない。それよりもずっと小さく、速度重視のフォルムを取る『飛行艇』だ。

「あれって、父さんが乗ってた飛行船!?」

「いえ、あれは飛行艇と呼ばれるものです。行方不明になったリンデ号よりずっと小さいです」

「うん。そうだね」

エステルの疑問にティオが答え、ヨシユアが同意する。

道を封鎖していた軍人の2人も何事かと慌てていることから、軍関連の飛行艇では無いことは明らかであった。

皆がソレを睨みつけている中、飛行艇のデッキから人が現れた。

「た、大変だ。昨日の遊撃士が来てる！」

「あああ！ 昨日の誘拐犯！」

彼はエステルがぶちのめした男であり、エステルは思わず指さして叫んでしまった。

「やっぱりあんた達が窃盗事件の犯人だったのね！ おりてきなさいっ！」

「んなこと言われて降りてくる馬鹿がどこにいるっていうのさ」

その言葉と共に彼らがサツと道を開けて、中央から歩み出てきた一人の女性。

それは、昨日のジョゼットであった。

「ジョゼット!? ど、どうしてジョゼットが……ってまさか!? 捕まったの!?」

「あ、あの……実はあたし……あ、あ、あ」

その表情は俯いていて、前髪が邪魔して伺えない。ジョゼットは

賊に囲まれながら微かに震えている。

焦るエステルを尻目に、ティオとヨシユアは険しい表情を崩さず睨みつけている。

すると、ジョゼットは急に顔を上げて笑い始めた。

「あ~~~~ははははっ！ もうダメ、これ以上は無理！」

げらげらと笑い始めたジョゼットにエステルはぎよっとする中、彼女は纏っていた服をばつと脱ぎ捨てた。中から出てきたのは、周囲を固めていた賊達と同じ色合いの服装。

「ボクの招待はジョゼット・カプア！ 大空を駆ける無敵の空賊団『カプア一家』の紅一点なのさ！」

ジョゼットの宣言と共に、周囲の男たちは花びらを撒いて盛り上げる。

ファンファーレすら幻聴するような盛り上がりっぷりに、エステルはポカーンとしながらジョゼットを見つめた。

「あのねエステルさん。ボク嬉しかったんだ。昨日とても仲良くしてくれて。だって……」

「ジョゼット……」

「だって、ボクたちの敵がこんなおバカで能天気な奴だって分かったからさ！」

「なっ!?!」

「……否定はできないですね」

「ほーんと遊撃士って頭悪いよね!!」

「あ、あ、あんですって~~~~~!!」

「……姉さんと一緒にされると無性に否定したくなります」

「うん……さすがにエステルと同じにされるのは……」

「こらそこの2人！ 好き放題言ってるじゃないわよ！」

ガオーっと激しく猛るエステル。さすがにショックが重なりすぎたのか、友達ができたと思っていたのに裏切られたので怒りがこみ上げてきたのか、エステルは興奮状態だ。

「あんだだっで相当なもんじゃない！ 聞いてもないのに自分から空賊だなんてバラしちやって！」

「は!？」

「しっかり覚えたわよ！ 空賊団カプア一家！」

「るっさい！ るっさい！ こ、この能天気女！」

「なによボクっ子!!！」

「ボクっ子言うな!!！」

この時、ヨシユアとティオの心はひとつになったという。

( (五十歩百歩……) )

「能天気女、ティオ！ あんた達とはいずれ決着をつけてやるからな！ じゃあな！ あ、それからヨ、ヨシユア！ あんたも覚えとけよ!!！」

「……………なんで僕を名指し？」

「……………自分で考えてください」

ヨシユアがクエッションマークを浮かべながら、ほんのり頬を赤くしたジヨゼットを見つめる。

飛行艇が飛び去っていく中、ティオは溜息を吐きながら突っ込んでいたという。

カプア空賊団が飛び去っていったのを見届けたエステルは飛行艇を追うとしたが、ヨシユアとテイオにより止められた。さすがに足で追いかけるとかはないだろう。

すると飛行艇の風圧により道が封鎖してあったロープが飛ばされて無くなっており、軍人の2人が空賊団で混乱している隙に、先へ侵入することに成功した。

後ろから事態を嗅ぎつけ、息を荒くしながら走ってきたナイアル・ドロシーコンビを再び放置し、3人は先へ急ぐ。

飛行艇は間違いなくこの周辺に着陸させていたのだ。どこにあったのか、確認する必要がある、そう思ったのだ。そしてヨシユアとテイオはもう一つの可能性を考えていた。

エステルが気づいていないようだから言わないが……窃盗から繋がるもう一つの案件へと繋がり。

そんな事を考えつつ森の中を進んでいくと、山へと突き当たる。

その麓には鉄格子があり、洞窟を塞いでいた。

鉄格子は壊されており、洞窟の中へ入っていくと、クモの巣などは掛かっていない事から比較的最近に誰かが通った事が伺える。

真つ暗の洞窟内ははぐれると危険なので、エステルとテイオは手を繋いで歩いていった。

「でも空賊艇を降ろせるような場所がこんなところにあるのかなあ」「さすがに廃坑に飛行艇は無理かもしれない……」

「そうですね。どちらかといえば、この洞窟はあの空賊団のアジト、というとしっくりきますが」

「確かにそうね……っと、風ふいてない？」

急に前方から風が吹いてきた事に気づくエステル。そして前方を注意してみると僅かに光が溢れている。

洞窟内で風が吹き込んでくるということは、外と繋がっているという事である。

そこに何かがあるのか、と慌てて駆け出す。

光が差し込んでいた先へ行くと、そこには大きな更地へと繋がっていた。

上を見ると、そこは洞窟の天井ではなく、真っ青な空が広がっていた。

「まぶしい……空がみえるわ」

「こんな大きな縦穴があるなんて……」

「姉さん、兄さん。あそこに荷車が」

「そつか……ここで空賊艇に乗り換えたのね」

「さすがに驚きです。でもまさか廃坑に飛行艇を隠してたとは」

放置されていた荷車を前に、やや呆れたようにつぶやくティオ。

さすがに常識という名の穴を付く発送に、ティオも脱帽の思いであつた。

するとヨシユアが反応ない事に気付き、彼の方へ振り返る。

そこにはヨシユアが呆然として『あるモノ』を見つめているではないか。

だがそれも仕方がない事だった。

何故ならそこにあつたのは、

「リベール王国定期飛行船リンデ号……父さんが乗っていた船だ」

目の前に鎮座する巨大な飛行船。

ある程度は外観も観光用として考えられたデザインとなっており、外にも出れるようにデッキがある。

速度よりも収納力に視点を置いた船が、この洞窟内に停っていた。

その存在を確認した瞬間、エステルとティオは我武者羅に駆け出し、飛行船へと駆け出し、荷物出し入れ専用の出入口から飛び込む。

「父さん！ 父さんっ！」

「お父さん！ どこにいるのですか！？」

必死で船内を搜索するが、父親どころか乗客の姿もない。

薄暗い船内に埃すら積もっている様子を見るに、人がいるとは思えなかった。

では、どこにいったのだろうか。そうエステルは不安に思い、ティオは不安そうな姉に寄り添い手を握る。そうすることで自分の不安も扶植できれば、そう思ってたの行動だった。

すると船内を冷静に搜索していたヨシユアがポツリと呟きつつ推理する。

「うん……墜落事故の類じゃなさそうだ。外傷はないのに積み荷やエンジンがごっそりなくなってる。やっぱり何者かに襲われた可能性が高いな……」

「父さんや飛行船に乗ってた人たちはどうなったの！？」

「たぶん、どこかに連れ去られたんだと思う」

「兄さん。それは船内に戦闘などの争った形跡がないからですね？」

「うん。おそらく無抵抗で犯人に従ったんだ」

最強の遊撃士に送られる称号の『A級』。そして『剣聖』として名高い父親が無抵抗で、という事態にヨシユアとティオには不安が

広がる。

ありえないソレは、父が不意をつかれて暗殺、その可能性しか出てこない。

「あの父さんが何の手も出せないなんて……まさか、父さんは……」  
「そんな……まさか……」

父の死、最悪の未来が過ぎった2人は絶望に襲われる、その瞬間だった。

「……ああ、よかった！」

エステル、場に不釣り合いな嬉しそうな声。

その声色は、父の訃報を喜ぶものではない。

驚いた2人へ、エステルは安堵の笑顔で言った。

「だってそうでしょ？ 父さんが手を出さなかったのなら、そうする必要がなかったって事だもの。戦った跡がないってことは、誰もケガしてないって証拠よ」

太陽だ、そう思わずにはいられない。

闇を消す光。暗雲を吹き飛ばす清涼な風。

確かにその瞬間、彼女からソレが感じられた。

「だから大丈夫！ きつとみんな無事でいるわ！」

なんの証拠もない筈なのに、それが真実だと確信してしまう。

エステルの言葉にヨシユアも満面の笑みで頷く。その顔は、少し羨望の色が混じっていた。

テイオもその思いに思わず同意した。だが、それと同時に複雑な



思いが胸に込み上げる。

（やっぱり……こういう所は敵わないです。私はルシアの噂を聞いてから何を聞いてもマイナスなイメージしか浮かばないのに……どうして姉さんは……）

それはコンプレックスというもの。しかしティオはそれを自覚しつつも認めたくはなかった。

「そうすると、あとわかんないのは飛行船を襲った犯人の正体が……って、ねえ？　もしかしてこの飛行船事件の犯人って、ボースマ―ケット食料窃盗団と同一人物なんじゃないかな？」

それは、ティオとヨシユアが既に確信していた事。大量の食料を強奪し、大量の人質を輸送し管理するとはある程度の実行犯が必要になる。

そして今回起こった窃盗事件。それを踏まえると……。

「カプア一家ならあの空賊艇でたくさん人間や積み荷を運べるわ。ボースマ―ケットで窃盗事件を起こしたのは、拐った飛行船のみんなの為に食べ物が必要だったのよ！」

「うん。すごいよエステル。いい推理だね」

「でしょ！　そーよね！！」

「では、そうと分かれば追いかけてみましょうか」

「ええ！」

気を取り直したティオがそう言い、3人が飛行船の外へ出ようとした時だった。

「そこまでだ！！　この飛行船はリベール王国軍が包囲した！！」

武器を捨てて投降しろ空賊共！！」

飛行船を出た先に見えたのは、この飛行船を囲む大勢のリベール王国軍人たちの姿が。

銃剣を手にエステルたちを包囲していた。

「だから違うって言うてるでしょ！ あたしの話を聞いてってば！」  
「ふん。申し開きは將軍に直接するんだな」

囲まれた軍人たちに逮捕されたエステル・ティオ・ヨシユアの3名が連れてこられたのは、リベール王国内で重要な砦のひとつにして、エレボニア帝国との国境で唯一の玄関口である『ハーケン門』であった。

リベール王国といえば、軍事面といえばハーケン門。

昔から有名で他国に響きわたっている人物たちは3名。リベール王国女王、剣聖カシウス、そして、

「その者たちか？ 飛行船にいた怪しい者たちというのは」  
「は！ その通りです、モルガン將軍！」

そう。猛将と称えられている、モルガンである。  
熊のようにガツシリとした体格に、顔には白ひげが覆い、高齡にも関わらず鋭い眼光は歴戦の実力を感じさせる。

威圧感に押されながら、エステルは挨拶をしようとしたが……

「モ、モルガン將軍。初めまして。あたしは  
「ふんっ。空賊の名乗りなぞ聞きたくもない」

と。

切って捨てるように吐くモルガンに、エステルは一瞬で沸点に達する。

「ムカツ！ ちゃんと聞きなさいよ！ あたしはエステル・ブライ  
ト！ 遊撃士よ！」  
「遊撃士……だと」

ババーンと遊撃士証明書を掲げて見せつけるエステル。  
そんな彼女に、ヨシユアは慌てて止めさせようとし、ティオは思  
わず天を仰いでいる。

「遊撃士がわしに何のようだー！」  
「ひゃっ!？」

「エ、エステル！ 將軍は遊撃士が嫌いだったルグラン爺さんが言  
つてたじゃないか」

「さすがに迂闊です、姉さん」  
「そっ、そっ、そんなの関係ないわ！ 無理やり連れてきたのはそ  
っちじゃないの！」

皆が慌てて窘めようとしているが、エステルは少し怯みながらもモルガンに文句を言う。

連れてきた軍人が、モルガンに罵声を浴びせる少女に顔を青褪めて止めようとしていた。

これはエステルは知らない事だが、これはエステルだけだった。あの『猛将モルガン』に、直接面と向かって文句を言える人物は。

今のリベール王国において、モルガンへ直接文句や罵声を浴びせることができる人はいなかった。

敢えてできるとしたら、リベール王国女王だけである。

つまり……エステルは実はとんでもない事をしている、ということだった。

「だいたいどうしてあたし達の邪魔ばかりするのよ!! 情報規制したり道を封鎖したり!! いくら遊撃士が嫌いだからってやってる事はまるで子供じゃない!!」

「こっ、こっ、この小娘が!!」

お互いにヒートアップしてきた状況に、皆が慌てる中、ティオは徐ろにつぶやいた。

別に私は遊撃士ではないのですが、と。

なんだか一緒に纏められている気がすると思っただけ、思わず呟いてしまったのだ。

本当に独り言として呟いたかすかな声だったが、モルガンにはその声が聞こえた。

そして怒りがこみ上げてる最中に視線をエステルの肩越しに彼女に目を向けて、

「……………」

思わずモルガンは固まり、目を大きく見開いてテイオを見つめた。テイオは、いや周囲の者は皆がモルガンの突然の変化に驚き、2人の様子を伺おうとしたその時であった。

ぼろろん

「フツ。悲しいことだね……争いはただ不毛な荒野を生み出すのみさ」

ぼろろん

楽器をもった金髪の男が、資材の上に腰掛けて楽器を奏でながらこちらを見下ろしているではないか。

男はまるで戸惑う場の空気を読まずに楽器を奏でながら口を開いた。

「そんな君たちに、歌を贈るよ」

誰？ というエステルという言葉は、まさに皆が心の中で思ったことだった。

「オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人で演奏家さ。さあ聴いてくれ

『琥珀の愛』」

誰も聴いてもいないしリクエストもしていないのに曲を引き続ける男。

皆がタラーっと汗を流す中、オリビエという男は自分に酔ったように歌い続けた。

流れゆく、星の軌跡は、道しるべ、君へ続く

焦がれれば思い、胸を裂き、苦しさを月が笑う

「え、えーっと」

ヒートアップした熱が一気に冷めた反動からか、ポカーンと惚けるエステル。白目を向けるヨシユアと兵士たちにテリオ。そしてそんな場の空気を読まずに歌い続けるオリビエ。

叶うことなど~~~~ない~~~~

「ハッ!? つと、ンンン! お、お主らはどうやって飛行船を飛ばしたのだ!」

どうやら気を取り直す事にしたらしいモルガンがテリオから一旦は視線を戻し、エステルに問う。

「あ、あたし達、空賊の足跡を追ってきたのよ」「なに!?!」

せめて、ひとつ、きず~~~~を~~~~のこそ~~~~

「この事件の犯人はカプア一家という盗賊なんです。まさかモルガン將軍はご存知ないのですか?」

「わしが知らぬわけなからう! 恐れ多くも女王陛下に犯行声明を送りつけてきたのは、その空賊どもなのだからな!」

はじめてのくち~~~~づけ~~~~ さよならのくち~~~~

~~~~づけ~~~~

「しかし事件の情報は外部には伏せていたはず……」

きみの~~~~な~~~~みだ こはくに~~~~して~~~~

「おぬしら……どうやって」

えいえんの~~~~あい~~~~ とじこめて~~~~

「やかましいわー!!」

ついにブチつとキレたモルガン。

まあ、会話に歌をこれだけ被せてきたら、それは五月蠅いと怒鳴りたくもなるだろう。

ヨシユアもエステルも思わず苦笑する中、中断させられたオリビエは「やれやれ」と溜息を吐いて荷物から飛び降り、モルガン達の前に着地する。

「嘆かわしいね。見たまえ。感動に震える黒髪の君を」

「え？ 僕？」

「その潤んだアンバーの瞳を。君にはボクの歌が届いたんだね。これぞまさしく『琥珀の愛』」

ヨシユアに言い寄るオリビエの姿に、ティオの目にはなんだか薔薇が咲いた気がして目をコシコシと擦った。

もちろん薔薇などないのだが。

「なんなんだ貴様は!？」

「……ふう。比べて軍人はどこの国でもこうだ。美しい者だけが美しいものを理解できるというが」

チラッと横目で見て、髪をサラリと靡かせる仕草はまさにナルシスト。

「……貴殿には望めそうもないようだね」

はあやれやれ、と溜息を吐くオリビエに、モルガンの怒りはついに頂点へと達した。

「無礼者め！ 構わん、こやつらを纏めて牢にぶちこんどけ！！」

「ちよつ、あたし達は関係ないでしょ！？」

「おぬしらもまだ空賊の容疑が晴れた訳ではないぞ！ 軍の力を以つてしても発見できなかった飛行船。ただの民間人に見つけられる筈がないのだ！ 連れていけ！」

「うそ~~~~！！？」

やれやれとまだ溜息をつくオリビエに、エステルも「え〜！」と悲鳴を上げる。

モルガンはそう怒鳴った後、思い出したように話を続けた。

「ああ、だが待て」

「？」

「その水色の髪のお嬢さん。彼女には少し話がある。わしに付いてきてもらおう」

「ちよ、ちよつと！ あたしの妹に何する気！？」

モルガンの言葉にただならぬ予感を感じたのか、エステルは天才を抱き込み、ガルルルと睨みつける。

「何もせんわ！ その少女の身元についてはハッキリしておく。

わしはこの子に話があるだけだ」
「話……?」

ジトーっと訝しむエステルに、ティオは心当たりが無く困惑する。
ヨシユアも表情を険しくする中、埒が空かないと判断したモルガンは、ティオの前に屈み、こう言ったのだった。

「……………君とは『昔』に、会ったことがあるのでな」
「!?!」

大きく目を開くティオ。
びくつと体を震わせたその身に周囲より、ティオ自身よりもエステルが驚いてしまった。

(な、なに今の！ 今の、心臓の鼓動よね。そ、そんな訳ないよね。それより一気にティオの体温が下がったような……………)

まるで感電したかのように震え上がり、表情を青褪めた大切な妹に、なにかとんでもない事が起こるのでは、そう思ったエステルはヨシユアを見て、彼もそう思ったらしく共に頷き、彼女を庇う為に前へ出ようとすする。

が、そんな姉と兄の気持ちを止めたのも、またティオであった。

「……………話を、伺います」

「「ティオ!?!」」

「大丈夫です……………姉さんと兄さんに、手荒な事はしないでください」
「もちろんだ。普通の留置所に入れるだけ。約束しよう……………バニングスの戦友の名にかけて」

「!?!」

一瞬だけ浮かぶ、強烈な悲しみの顔。
その顔にエステルとヨシユアは驚愕し、思わず『知らない人』を
見てしまったように下がってしまう。

「では、行こうか」

こうして、エステル・ヨシユアと興味深そうに見ていたオリビエ
は牢にぶち込まれ。

ティオはモルガン將軍と共にハーケン門の正門から建物内に入っ
ていった。

「ふ〜ん……確かにあいつら、あの憎き『アイツ』の関係者みたい
だねえ」

「ええ。ですが。本当にあの子たちが障害になると?」

「そうあの方が仰ったんだ。ならば私たちはそれに従うまでさ。』

姉さん』も、今度は裏切るんじゃないよ」

「……ええ。分かっています」

「あっちからあの白チビと赤チビも来てるらしいし……計画も急ぐ
としようかねえ」

「そうですね」

その様子を見ていた2人のフードを被った人物2人は、ハーケン

門の内部に目的の人物たちが連れ込まれた光景を見届ける。

濃いグレーのフードから金髪を靡かせ、手には水晶を持ったその人物は霧のように姿が消えた。

残された人物、フードから溢れる白い髪がさらさらと揺れる中、その人物はしばらくハーケン門を見下ろし、そしてその身を影が被ったかと思えば、そこに誰もいなかった。

第27話 誠と真実（後書き）

次回はついに色々物語が動き出します。そしてあのキャラやらあのキャラ等がたくさん登場。

来週は碧の軌跡がついに発売！

物語の辻褃合せ等で忙しくなりそうです。

第28話 人は変わるもの

牢獄。

誰もがその単語を聞けば思い浮かぶイメージといえば、犯罪者や悪人や罪人だろう。

過去に国が定めた『法』を侵したり、窃盗、脅迫、そして殺人。人に迷惑をかけた者は例外なく幽閉される場所。そんな場所に、その3人はいた。

「あたし達は空賊を捕まえようとしてるのに……どうしてこんなところに捕まっちゃってるのよう」

「うーん」

「ホントだね。まったく原因がわからないな」

「あんたが余計なことしたからでしょ！ まさか牢屋にお世話になる日が来るなんて……」

ぶちつとキレて突っ込みを入れるエステル。

……遊撃士という正義の味方の立場にいる筈なのに、こんなところにぶち込まれていたら、それは御立腹になっても仕方ないというものだろう。

「いやいや、ボクはただ君達に贈り物をしただけさ。君の心の中にも一筋の光明が差しているのがわかるだろ？ それがあの時ボクの歌が届けた愛と平和なのだよ」

フサツと前髪を掻きあげてポーズを取るオリビエ。

バカっぽくみえるポーズもどこか彼に似合っている、のだがエステルもヨシユアもなんだかジト目を向けているので少し間抜けにも見える。

そんな2人の視線にも気付かず、大仰なポーズを更に取りオリビエ。

「そう！ 今風に言うよ……ラブ&ピース」

「誰もそんなこと聞いてないんだけど……」

「エステル、彼には聞こえてないみたいだよ」

「それにこんな所と君は言うが、牢はある意味最高の環境と言えるのだよ。薄暗い灯りせまい空間。そして二度と外へは出られない悲劇的状况……」

二度と出られないという言葉にエステルは「いやいやいや」と手を振って突っ込もうとするが、オリビエは止まらない。

ススッとヨシユアに近寄り、彼の手を両手でギュッと包み込むように握りしめ、顔を近づける。

「麗しの美少年とロマンスを育むのに絶好のシチュエーションだと思わないかい」

「え？」

「こら~~~~！！ あんたそういう趣味の人！？」

「美しいものに目がないだけさ」

「うっさい！ それ以上近づくな！」

なんだか薔薇が咲いた光景を幻視したオリビエ・ヨシユア空間に割って入り、弟の貞操や世間体を守るために彼を引き離すエステル。

「大丈夫、ヨシユア！？ なんだかボーっとしてるけど！」

「え、ああ。ごめんごめん。少し気になることがあって……」

「なに？」

「うん。気になる点は2点。1つは……王国最強の将軍がティオに何の用があるのか」

「あ……そうね。テイオ、少し震えてたっていうか、顔を青褪めたし……大丈夫かな」

「まあ酷い事はされていないだろうね。君達の妹君とは話をしたいと言っていたが」

オリビエもその点に同意し、エステルやヨシユアは妹に何の用なのか、この場にはいないテイオを心配しつつ、石造りの無骨な牢屋の天井を眺めた。

「そこに掛けて楽にしてくれ給え。おい、彼女に茶請けも」

「ハッ、了解しました！」

「……どうも」

妙に丁寧な軍人の対応に、テイオの戸惑いは大きい。

とりあえず案内のまま椅子に腰掛け、正面に座ったモルガン将軍の指示で部下の兵士がお茶と茶菓子を持ってきたので一息吐く。

部下の兵士が壁際に直立で立った所で、モルガンは佇まいを直して話しかけてきた。

「まずは、そうだな……私の事は知っているだろうか？」

「はい。リベール王国軍総司令官モルガン将軍。数々の武勇伝を残した猛将と謳われ、リベール王国の砦とも言われています」

「うむ……そして『あの』事件にも関わり、リベール王国側を担当、指揮した者でもある」

「……………」

「1つだけ、ずっと言いたかった事がある……………勿論、これは君の気持ちを蔑ろにしているのかもしれない。そうだ、これはただの自己満足でしかないのだろう。だが、それでも言わせてもらう」

そう言うと、モルガンは席から立ち上がった。窓際にいたモルガンの傍付きの兵士たちも傍へと駆け寄り整列する。

何を言われるのかと眉を顰めていたティオだが、その様子に思わず身構える。

そして行われたのは

敬礼。

「……………あの時、もっと早く助ける事ができず、すまなかった。そして助かって……………生き延びてくれてありがとう。我々はリベール王国軍を代表して、貴殿に感謝と謝罪の意をここに示させて頂く！！」

「敬礼……………！！」

ティオは知らない事だが、この敬礼しているモルガンと兵士6名は、あの作戦に参加していた古参の兵士であった。そしてあの子供たちの骸を直接その眼でみて、絶望し、慟哭し、悲しみ、そして悔んだ者たちだった。

きつと自分達の言葉はただの自己満足に過ぎない、それは分かっていた。軍人としてこんな事は私情を挟んだものであり、とても褒められたものではない。

だがそれでも言いたかったのだ。人として『助かってくれた子供』に。

助かった彼女ではなく、自分達が助けられたかのように嬉しかったのだ。

そしてティオは、

「いえ……………恨んではいません。感謝もしています。だから、気にしないでください」

小さく微笑んでいた。

「そうか……ありがとう」

「でもどうしてそこまで……」

「あの一件は過去に類を見ないほど酷かった。生存者も20名足らず……死者は子供たちを含めて500人以上だった」

「そんなに、だったのですか」

「ああ……生涯忘れることはないだろう」

ふう、と眉間を小さく揉むモルガン。再び席に腰を掛けて感慨深く呟く。

テイオはモルガンの態度に目を伏せてしみじみと語り出した。彼の姿勢に何かを感じたのだろうか。あの事件以来、初めて語ることだった。

「あの時……私を含めた皆が泣いていました」

「……………」

「何時終わるともしれない人体実験。毎日聞こえてくる絹を裂くような悲鳴や断末魔。ゆっくりと忍び寄り、でも確かに聞こえる自分の死期。あれは……昨日のように思い出せます」

「……むごいな」

「ええ。でもそんな時出会ったんです。希望に」

「希望？」

「ふふ……1人の男の子です」

「！」

もはや、とモルガン達は反応した。

テイオは少し照れ臭そうに頬を染めながら言葉を紡ぐ。

「その人は自分が人体実験でボロボロになっているのにも関わらず、捕まっていた私たちを励ましてくれたんです。彼が言った言葉の1つ1つがあの中の私たちの希望になり、支えになったんです」

「そうか……」

「だから、きつと生き残れたんだと思います……彼の、ルシアのおかげで生き残れた子もいると思います」

そこで、初めてテイオの顔が曇る。

その瞳に浮かぶのは悲しみであり、罪に苛まれるような孤独な目であった。

「でも、助けられた時こう思いました。私が助かってよかったのか、生きていて良いのかって」

「っ！ それは……」

「申し訳なささと薬でこうなった自分が汚く感じて……正直生きていたくなかった……」

ふふつと自嘲するテイオに、モルガンは目を見張る。

助けて終わり、ではなかったのだと思ひ知らされた。

「でも、そんな時に思い出したのがルシアの存在と、彼が教えてくれた歌でした。不思議なんです、歌っていると胸があつたかくなるのを感じました。生きる活力みたいなのが漲ってくるのを感じたんです」

「……………」

「それからです。せめて生きて彼に会うまでは頑張ろう。生きて会ってお礼を一言言おう、そう思えたのは」

「そうか……」

「はい。そしてブライト家に養子になって、家族の一員になって、生きていて良かったと、自然に思えるようになりました」

やっぱりルシアと家族のお陰です、と悲しみの表情から穏やかな表情へと変わる。

モルガンはそんな彼女にホツとして、そして彼女がいう『恩人』へと焦点を当てた。

「ルシア君か……カシウスがずっと捜している子だな？」

「はい……ガイさんもでした。とうかやはり知っていたのですか」

「それは当然だな。各国軍の上層部、部隊長クラスなら誰もが知っている。発見次第保護しろとの命令も下っているのでは」

「保護、ですか？」

確保ではなくて、と言外に匂わせる。

そんなテイオの意思を感じたのだろう。モルガンは苦笑してそれを否定した。

「少なくともリベールは保護だ。帝国の鉄血宰相は捕獲したいのだからがな」

「っ！」

「しかし依然として未だに発見できていない。君たちの父親であるカシウスも探しているようだが……結果は知っての通りだ」

「あ、あの、お父さんの件は……？」

「ああ、行方不明になっっている事だろう。こちらとしても探っているが事実確認は取れていない。だがあのカシウスが乗り合わせていながら易々と賊に奪われるはずがない」

「……ですよね、やっぱり」

「ああ。だがまあ、心配する必要もあるまい。あいつは滅多な事でやられるようなタマではないからな」

「そう……ですね」

実力に関しては疑っていない。おそらく実の娘であるエステルよりも知っているつもりだ。

あのガイよりも実力は上であり、遊撃士の中でも頂点に立つ実力者たちの一人。

おそらくだが、辺り一帯を爆弾が何かで吹き飛ばさない限り、父は死ぬことはないだろう。

いや、それで死ぬかも怪しい。それくらい父は強いのだ。

それでも心配するのが家族つてもので。理屈じゃないのだ。

「ところで君には家族がいたな。だがどうしてブライト家に養子に？」

「いえ、それは……」

「報告書で見たことがあるが……あの力のことが関係しているのか？」

「そ、それは……その……それもあつて……上手くいかなくなつて……いろいろあつて……」

「そうか。不躰なことを聞いたな。だが今の君はとても幸せそうだ。ブライト家とはよくやれているようだ。まあ、揃いもそろつて遊撃士なんかになるのが気に入らんが」

「ふふ」

「君と末娘のレン君の工房での実績も大したものだ」

「そんなことも知ってるのですか」

「言つただらう？ 君やレン君。いや事件関係者の君の事は心配していたと」

「……………」

モルガンの言葉に苦笑しつつ、だがある言葉に反応して思わず目を薄める。

敢えてそこには突っ込まず、前から気付いていた事に確信した。すると部下らしき兵士が飛び込んできた。

「モルガン將軍！ お話中失礼します」

「どうした？」

「遊撃士を名乗る女性が面会と拘留中の人物について話があると」

「なにい？ 遊撃士い？」

なにやら雲行きが怪しくなってきた、と怒りを漲らせるモルガンを笑いつつ、ティオは小さくため息をついた。

一方。

牢屋の中ではヨシユアがもう一つの考察を述べていた。

「そしてもう一つは『あの時』のモルガン將軍の言い方だとき、あの時軍はまだ廃坑にあった飛行船を知らなかったみたいだね」

「ああ、そういえばそうね。遊撃士が軍より早く見つけちゃうなんて、あたし達って天才！？」

「いや、それはおいといて」

エステルの自画自賛の言葉に苦笑しつつ、ヨシユアは横に置いておく仕草を見せ、

「そう………だったら、あの検問は何の意味があるのかな」

「え………軍があたし達遊撃士の邪魔をするためでしょ？」

「ふむ」

「うん、確かに飛行船と空艇を隠すために行われたと思う。でもそれなら封鎖の命令を出した軍の上層部が、この事件の指揮をとっているモルガン將軍が飛行船の存在を知らないなんてあり得ない筈

なのだ」

うーんと唸り考え込むヨシユアに、エステルは指摘されて初めて気づいたようにハツとなる。

確かにモルガンは、飛行船の存在を知らないようだった。だから自分たちが投獄されたといっても過言ではないのだ。

だが封鎖していたのにモルガンが知らないとはありえない。それはつまり。

「モルガン将軍が嘘をついている可能性と、あるいは……」

「将軍以外の何物かが軍を動かしている、か」

オリビエが物言いたげな笑みを浮かべつつ呟いた。

エステルはオリビエに驚き、そしてヨシユアがその可能性に気がついたオリビエを警戒する。

「あなたは一体……」

なんとなく流されていたが、よく考えるとこの人物は警戒しなくてはならなかった。

そうヨシユアは思い、オリビエを見つめる、のだが。

「ボクとデートしてくれたら教えてあげるよ！」

「結構です」

「ああ、つれない君も魅力的だ！」

「あんたはちよつとは黙ってなさい!!」

「まったくだ」

せっかく話の中で重要な点について気付きかけたのに、オリビエにめちやくちやにされたエステルは激しく突っ込む。

オリビエはヨシユアの手を握り頬を染め、ヨシユアはドン引きするというカオスな空間が出来上がった中、牢の外から3人に声がかかった。

「おぬしらのおしゃべりは聞き飽きた。さつさと出て行くがいい！」

「な、なによ突然……ってティオ！ 大丈夫だった！？ なにもされてない!？」

「姉さん……軍の人たちが何かするわけないです」

「そ、そうよね。よかった」

「全く。我々の前でそんな会話を……まあいい。さあ、釈放だ」
「はっい」

やったーと陽気に牢から出るエステルと苦笑しつつ姉を出迎えるティオ。

何気に失礼な事を言ったエステルの変わりに謝りながら出るヨシユアと、関係ないとばかりに優雅に出るオリビエ。

なんてフリーダムな連中なんだと付き添いの兵士が思いながら、4人は外へと出て行った。

「ヨシユア・ブライト。エステル・ブライト。ティオ・P・ブライト……カシウスの子供たち、か」

振り返り、ペこりとお辞儀をするティオ。

モルガンは4人の背を見ながら、感慨深そうに呟いた。

さて、急に釈放されたエステルとティオたちであるが、外に出ると待っていたのは意外な人物であった。

銀色の髪を靡かせ、肩を露出した大胆な服装を上手く着こなす女性性は、エステルたちにとって馴染みの女性。

「シエラ姉！」

「はあい。監禁生活は満足した？」

〔C級遊撃士にして『銀閃』の名を持つ有名な実力者、シエラザード・ハーヴェイであった。〕

シエラザードはくすくす笑いながら妹分達を迎えた。

「シエラ姉ってばどうしていつもあたし達のピンチに現れるの!？」

「すごいでしょ、って言いたいところだけど、事の次第を知らせてくれたのはリベール通信社の記者さんなの」

「ああ、そっか！ ナイアルとドロシーが、ってあの2人あたし達置いてきちゃったのに……あ、そっか。その時に」

「そういう事。まあ、その後、気になることがあるとか言っただけかへ行っちゃったわ。あたしだってあんた達に色々聞きたいのよ。たとえば……」

と言って指を差したのは、シエラザードの手をとって手の甲にキスをしようとしてるオリビエの姿が。

「コレ、あんた達のともだち？」

「ブンブンブン」

擬音まで口に出して否定するエステルとヨシユアとティオ。

余程そのように思われたくないらしい。というより、シエラザードの笑顔に嫌な予感を感じたのかもしれない。

そんな状況を無視するかのごとく、オリビエの暴走は止まらない。

「ああ、ボクはなんとという幸せ者なんだろう。暗き牢から出て最初に目にしたのが貴女のような美女だとは！」

「あらありがとう。でもあたし達これから仕事なの。席をはずしてもらえない？」

「シエラ姉気をつけて！ そいつ変人よ！ っていうかオリビエも早く言うとおりにした方が」

「これも女神のお導き。どうです？ 僕と今晚一晚の」
「聞こえなかったのかしら？」

ひい！ という奇声を上げて、オリビエは電光石火のごとく離れて行った。

どうやらシエラザードの視線と言葉がよほど怖かったのだろうか。オリビエが怯える子犬に見えたティオであった。

「さあ話して頂戴」

何事もなかったように話すシエラザードに、3人はさすがだなあと思わずにはいられなかったのであった。

その日の夜、シエラザード・エステル・ヨシユア・ティオ、そして何故か同行しているオリビエの5人がいる場所は、ヴァレリア湖畔のリゾード宿『川蝉亭』にいた。

まずヨシユア達から飛空艇の件やモルガン將軍たちの件を聞いたシエラザードは、軍部の妙な点について同意を示した。

そして自分が掴んでいた『間もなく王家から乗客たちの身代金が窃盗団に支払う』ことが照らし合わせ、時間がないことが発覚する。つまりそれまでに犯人を捕まえなくてはならないのだが、ボースの窃盗事件も急に無くなり、また搜索範囲も絞り込めずに打つ手なしの状況であった。

しかしそこで意外や意外。頭脳派とはいえないエステルが突発的な閃きにより、状況は打破されることとなった。

それは、ジヨゼットと出会った時の会話。

ヨシユアが宿について尋ねた時、咄嗟に出てきた地名や場所などは、実は焦りから関係した場所、そこに近いところを言ってしまうものではないだろうか、という事だった。

その意見に僅かながら光明を見出したシエラザードたちは、とりあえず賛成して川蝉亭へと向かった。

川蝉亭に着いた一行は、とりあえず聞き込みを開始。

宿の周辺を調べるのはエステル、ヨシユア、ティオの3名。

そして宿内を聞きこむのが、シエラザードとオリビエであった。

その際、オリビエが懲りずにシエラザードを、お酒を飲みながら食事でも、と誘い、シエラザードも「酔わせて何をするつもりなの」と言いながら誘いを受けていた。

少し『大人』な雰囲気か漂った両者の間に、エステルが頬を赤ら

めて過剰反応を示すが梨の飛礫。

2人は和気藹藹としながら宿へ入って行った。

エステルは「シエラ姉がオリビエの毒牙に」と心配したがヨシユアは大丈夫でしょ、と心配せず、テイオはハアと大きなため息と共に呆れながら一人スタスタと歩いて行ったのであった。

そうして始まった搜索活動だが、宿内で飲んだくれる2人は余所に、3人は宿周辺を回っていた。

怪しい人影、物などないか探していたのだが、これといって怪しいものなど無く、辺りは暗くなっていた。

「エステル。そろそろ暗くなってきたら戻ろうか」

「うん……」

「そうですね。シエラ姉さんたちも何か掴んでいるかもです」

自分が提案しただけに、エステルは何も成果がなかったことに意気消沈していた。

そんな彼女を気を使うように慰めるヨシユアとテイオはポンポンと背中を叩くのだが、ふと前方に建物が目に入った。

「ねえ、あれって……」

「あれは琥珀の塔というそうです」

「そう。四輪の塔の1つで、ロレントにも翡翠の塔があるね」

「へえ〜〜。そういえば、翡翠の塔であった変なおじさん。えつと……アルバ教授だっけ。あの人があの塔にもいたりして」

「まさか、そんな偶然が……」

「アルバ教授？」

会ったことがないテイオは首をかしげるが、次の瞬間、エステルがいた横の茂みから人が飛び出してきた。

その人物こそ、今まで話していた人である、

「アルバ教授!？」

「おや、君たちは翡翠の塔であった……」

アルバ教授であった。

彼は出会った時と同じように本を片手に何やら難しそうな書類を
持っていた。

「ん？ ああ、また懲りない人ね。琥珀の塔に入るなんて」

「いえいえ、そんな！ 皆さんにこつてり叱られましたからね」

「ふ〜ん。で、何かいいもの見つかった？」

「いえ、ここもダメでした。やはり四輪の塔は謎が多いです」

「ほら。やっぱり登ったんじゃないの」

「はっ!？」

エステルは誘導尋問にうっかり本音を零すアルバ。

テイオはそんな迂闊だが愉快的なアルバに笑みを零す。

「どうか私のことは見なかったことに！」

「はいはい。まあ、次は気をつけてね」

と、大らかにも見逃してあげるエステル。

するとアルバが何かを思い出したように、ポンと手を叩いた。

「そういえば、見つかると言えば妙なものがありましたよ」

「？」

「琥珀の塔の頂上から見えたのですが、あれはたぶん飛行船の一部
かと」

その言葉に、エステルとテイオとヨシユアはお互いの顔を見合わせて、コクンと大きく頷いたのであった。

「シエラ姉！ 空賊たちの場所がわかったわ！」

と、さっきまでの落ち込みが嘘のように元気良く宿の扉を開けるエステル。

ヨシユアとテイオも追っていた犯人達の有力な情報が手に入ったこともあり、頬が紅潮していることから少し興奮している事が分かる。

しかしそんな気分も上機嫌な3人とは余所に、宿の食事スペースではカオスな空間が広がっていた。

「おゝかえりなさ〜い」

「うゝん、うゝん……もう無理だ……」

机の上には所狭しと酒瓶が転がり、その数は常軌を逸した程の量が散乱していた。

それにも関らず上機嫌で未だに酒を煽るシエラザードと、対照的に真っ青になって突っ伏しているオリビエがいた。

（あゝ、やっぱり変人オリビエといえども、シエラ姉には勝てなかったか）

（ま、無理だよな）

（予想通りです。これでシエラ姉さんよりアイナさんの方が酒豪なんだから、人は見かけによらないというか……）

目の前の惨状に各々の感想を述べるティオたちであった。

「んもつ。またこんなに飲んで」

「なに言ってるのよ。まだ序の口よ」

「これで序の口ですか……」

「いやティオ。これは普通の感覚でいえば飲みすぎだから」

「ほら、オリビエ。まだ飲みなさい」

「ま、待ってくれシエラ君。君は何故天使のような笑顔でそんな悪魔のような所業をつ！」

「なによ、私の酒が飲めないっていうの？」

「……………」

ついに言葉すら発さず動かなくなったオリビエに、シエラザードは「だらしないわねえ」と言い、

「じゃあ、エステル。こっちへ来なさい！」

「ダメよ。あたし達、まだ未成年だもん」

「なによつまらないわね。なら、ヨシユア……。一緒に飲もつ！」

むぎゅーつと豊満な胸にヨシユアの顔を押し付け、ぎゅーつと抱き締めるシエラザード。

何気にテンションはハイになっているらしい。

「付き合ってくれたら、服を脱いであ・げ・るっ！」

「ぬっ!?!」

「あゝも〜」

「もう手はつけられません」

シエラザードの言葉に敏感に反応し復活を告げたオリビエと、呆れるエステル、もはや放置することに決めたティオ。

そして顔を真っ赤にしながらバタついているヨシユア。

誰にもこのカオスな空間は止められなかったのであった。

「なぐるほど。確かにあれは空賊艇に間違いなさそうね」

日も暮れた暗闇の林の中で、木々に隠れるように鎮座する飛行艇を前にして火を囲み食事を取っている空賊。

なんだか和気藹々とした雰囲気は賊というよりも、仲の良い友達のようにも見える。

「うん。お手柄よあんた達。ざっと見て空賊は7人ってところだけ
ど」

(す、すい……)

(もうシラフなのね……)

(シエラ姉さんの不可思議な人体をレポートに纏めたいです)

酔いつぶれたオリビエと違い、それ以上に飲んでいたシエラはすっかりいつも通りだ。

酔って赤くなつた顔も元通りで、一瞬でシラフになつたシエラザードの神秘に、ヨシユアもエステルもテイオも驚愕の顔をしていた。

「あ、でも違うわシエラ姉。ジョゼットが見えないもの」

「あの男、キールとかいう空賊もいないね」

「それに飛行船の中にも数名いるみたいです。気配を感じます」

「なるほど。ここにいる奴らが全員つて訳じゃないのね。あんた達ならどうする?」

「もちろん突撃あるのみよ! また飛行艇で逃げられたら元も子もないもの!」

「ふむ……その作戦はどうかかな?」

ふと聞こえてきた声。

声の主は、酔いつぶれて放置してきた、何故かずぶ濡れのオリビエであった。

「オ、オリビ　っ!??」

「エステル、静かに　!!」

「しー、ですよ、姉さん」

あんた潰れてたんじゃ、と叫びかけたエステルに、ヨシユアとテイオが2人がかりで口を塞ぐ。

こんな所で大声だして賊に見つかったらどうするんだと目力で語っていた。

「驚いたわ。あれだけ酔いつぶれてよく回復したわね」

「まあね。胃の中のものを全部吐き出して冷たい水を頭からかぶってきたのさ。ははっ。おかげで文字通り水もしたたるイイ男だよ」

濡れた髪を無理やりベチャッとかき上げ、良い男を演出するオリビエ。

しかしどうにも様になっていなかった。

そんな彼に、みんなはどん引きだ。それこそ正に「うわー……」という表現が正しい程に。

「それよりさっきの続きだが、こんな所で空賊の下っ端を制圧して終わりなのかい？」

「え？」

オリビエの言葉に思わず言葉が洩れるティオ。

そんな彼女に、オリビエはウインクをしながらこう言ったのだ。た。

「奥に潜む根悪に辿りつく為には、思い切って敵の懐に潜り込む事も必要ってことさ」

空賊団カプア一家の飛行艇は、頭領の兄弟であるジヨゼットとキ

ールが戻って来ると同時に移動開始した。飛行艇は真夜中から飛び立ち、明朝と同時にリベール国境の山脈地帯に入り、とある廃坑のように人の手が加わった洞窟の中に飛行艇は入って行った。

長い期間、管理すらされていないその洞窟内は、意外と広い。飛行艇すら一艇のみだが入りできる離着場。そして枝分かれした通路に無数の部屋。

だがそれらはすべて洞窟内にある為に、隠れ家としては最適だった。

飛行艇が到着すると中からカプア一家が出てくる。

中にはジョゼットと、そしてボースの中で脱出する際にエステル達から逃げきった男・キールの姿があった。

「じゃあボクたち、先にドルン兄に報告してくるね！」

「へーい」

「いってらっしゃーい」

ジョゼットとキールがにこやかに笑いながら駆けていくと、手下らしき男たちは談笑を始めた。

「しかし忙しいなあ、近頃は」

「もう少しの辛抱さ。身代金が入ればこんな生活ともオサラバできるさ」

「そうそう。その為に……お嬢や兄貴たちがあんなに頑張ってくれるんだぜ」

その語る彼らの顔はとても嬉しそうで、賊に似つかわしくない程ほのぼのとした雰囲気だ。

そして。

そんな彼らの背後に忍び寄る、人影。

ゴチンという強烈な殴打音と共に彼らは昏倒した。彼らを襲った人物たち。それは……。

「よっし。潜入成功！」

「フツ。上手くいったようだね」

「まさか空賊艇に密航しちゃおうなんてね」

「一見無謀のようにも見えますが、大胆で効果的かもしれませんね」
「うん。これで捜査状況は一気に進展したといっても良いよ」

空賊艇にこっそり密航したエステル達であった。

オリビエの閃きによりこっそり闇夜に紛れて飛行艇に潜り込んだのが上手くいき、アジトへの潜入に成功した。

シエラザードは妙案を思い付いたオリビエを褒める。

「オリビエには感謝しなくちゃね」

「だったらその感謝の気持ちを具体的に示して頂こう……シエラ君の魅惑の」

「いいわよ。帰ったら酒場でいっっぱい奢るわ」

「ひいひい……！ごめんなさい……！」

完全にトラウマになっているらしい。オリビエは目尻に涙を浮かべて怯えていた。

少し可哀想に思ったエステルは、どことなく昔の自分をオリビエに重ね見たのだった。

「さあ、一気にいくわよ……！」

「」「」「おっ！」

「…………おーけーだ！ シエラ君！」

復活も早いオリビエであった。

「どうおおりゃあああああ！！！」

凄まじい破壊音と共に女性らしからぬ掛け声で木製の重厚な扉を破壊して入って来る、見た事のない人。

部屋の中にいた大勢の人々は突然の音に驚いて扉から離れ、おっかなびつくりで様子を窺っていた。

「いた！」

「ビンゴですね」

一方で部屋に突入したエステルとティオたちは、部屋の中に閉じ込められていた乗客を発見した。

どこかにいる筈だと踏んで捜しまわっていたのだが、一層堅牢な扉があり怪しいと踏んだのが見事に大当たり。その中に乗客たちはいた。

「みなさん！ 遊撃士協会の者です。皆さんを救出に来ました！」

「おお」

シエラザードが乗客たちにそう告げると、皆が安堵と共に喜びの声を上げた。

こういう状況の鉄則を知っているシエラザードは、更なる安心感

を与えられる情報を明らかにした。

「見張りの空賊は片付けました。安心して頂戴」

「おおおっ」

そういつと皆に安堵の表情が浮かぶ。

見張りを縛り終わったオリビエが室内に入ってくると、エステルとテイオがきよろきよろと何かを捜していた。

オリビエは何をしているのか訪ねようとするが、その前に彼女たちが怪訝な表情を浮かべたではないか。だがそれにはオリビエもすぐに気付くことになった。乗客の様子が少しおかしいのだ。

何かを話しているようだ。

オリビエは耳を澄ます。

「やっぱり凄いよ。また当たった」

「日時も人数も当たるなんてな。今まで占いなんて馬鹿にしてたけど、今度からは信じるぜ」

「いや、それにしても凄過ぎ」

困惑と驚き、嬉しさと若干の恐怖を浮かべる乗客達がいたのだ。

その一団に気付いたエステルとテイオ、そしてオリビエとシエラザードは近づいて事情を聴く。

中の中年男性が応えてくれた。

「ふむ。興味深いことを言っているね。何のことが僕達にも聞かせてもらえるかい？」

「あ、ああ。あそこにいる女性、占い師らしいんだ」

「ふむ。占い師か」

「占いねえ……なんか胡散臭いわね」

「……ですね」

遠慮のないエステル言葉に、苦笑しながらもテイオも肯く。彼女にとって専門は電子系である。論理じゃない事はどうにも信じがたい。

中年男性は彼女たちの感想を笑い、それを否定した。

「俺たちも最初はそう思ってたんだ。けれど、最初は賊の見回り時間を占いで当てて、ここにいる連中の過去にあったプライベートの事を占いで当て、そしてあんた達遊撃士、救出隊が今日のこの時間に来る事を予想していたんだ。今のところは100発100中。もはや占いというよりも未来視や予言のレベルに感じたよ」

「ほえ〜〜〜」

「その占いをしたのが、あの人なのですか？」

テイオが中年男性が教えてくれた女性へと仰ぎ、皆がその人物を見る。

壁際の席に座り水晶を片手に持っていた女性。フードを被っているが顎まで伸ばした金髪の髪がフードから覗き、左頬には入れ墨らしき模様がある。肌の色が真っ白で瞳が赤く小さく微笑み、どこことなく『魔女』のようなイメージを彷彿させる女性だった。

(そつだ。そこまで凄い占い師なら、お父さんの事やルシアの事を聞けば何か解るかも)

と、そう思ったテイオが近づこうとした時だった。

「何の騒ぎだ！？ って、お前ら！」

「あつ！？」

「あいつら、あのときのっ！」

「ヨ、ヨシユアー！！」

物音を聞きつけた賊が駆けつけてきたらしく、拘束された仲間に驚き、そして室内の破壊された扉と遊撃士一同に驚き武器を向ける。先頭にいるリーダー格のキールと、周囲にいる子分連中。そしてヨシユアに反応しているジヨゼット。見事に見つかってしまったのだった。

シエラザードは思わず舌打ちをし、しかし見つかってしまったのだから仕方ないと開き直り、犯人へ宣告する。

この切り替えの早さと対応は、慌てるエステルやティオとは違い、やはり経験の差が出ていた。

……ヨシユアだけは刃物を取り出し、臨戦態勢であったが。

「空賊団カプア一家！ 遊撃士協会の規約に基づき貴方たちを逮捕するわ！」

「キ、キール兄貴！」

「いや、ここまです。一旦ひかねば。ここには」

キールが険しい顔をしてそう言うが、その瞬間に背後からエネルギー攻撃が襲いかかり、部屋の中の壁を破壊した。

「きゃっ！」

「うわっ！」

運が良かった。たまたま人がいない場所の壁に直撃し、壁は崩落。人的被害は0ではあった。

だが、当たれば間違いなくただではすまない攻撃に、全員が攻撃主へと睨みつける。

キールたちの背後からやって来たのは、クマのように体格が大きい

く、ジョゼットたちと同じく青髪に髭を生やし、大きな導力砲を手に周囲に威圧感をまき散らしながら入ってくる男。

「なーに言ってるんだキールよお。そんな奴ら、ここで殺しちまえばいいじゃねえか」

「ド、ドルン兄」

ジョゼットたちの反応と男の風格から、この男が親玉だと察する。そしてその言葉から発せられた内容から、慌てていたエステルやテイオも臨戦態勢になる。

「ほう。てめえらが例の遊撃士か。ふん、直接乗り込んでくるとはいい度胸だ。全員血祭りにかけてやるぜ」

「待てよ兄貴！ 場所を変えよう！ ここじゃ戦闘は無理だ！」

「なに？」

「そ、そうだよドルン兄！ ここには人質がいるんだよ！ こんなところで導力砲なんか使ったら人質のみんなまでケガしちゃうよ！」

キールとジョゼットがドルンに待ったを掛けた。

その表情は必至で、この場にいる乗客を含めたエステル達は、彼女たちは賊ではあるが人でなしではないのだと理解する。

しかし、そんなジョゼットたちの一番上の兄であるドルンは、顔を歪ませ残忍な顔で言った。

「それがどうした？」

「なっ………！」

「いいじゃねえか。身代金は手に入ることになったんだ。人質なんざお払い箱よ。丁度いい。みんなまとめてあの世に送ってやるぜ！」

「ドルン兄……！」

「よせ兄貴!!」

「うるせえ!! 俺のすることに文句言っんじやねえよ!!」

(チャンス!)

揉めてる所をチャンスだと判断したヨシユアは一息で懐に飛び込み、導力砲を刃で叩き上げる。

「なっ!?!」

衝撃で思わず撃ってしまったドルン。放たれた攻撃は天井に直撃し、追撃しようと一緒に飛び込んでいたシエラザードの背後に崩落した。

つまり、室内に閉じ込められたエステル・ティオと乗客、そしてジヨゼット達と。

ドルン・ヨシユア・シエラザード、そしてドルンの配下の連中に分断されてしまったのだ。

「エステル! ティオ! 大丈夫かい!? ……エステル!?!
ティオ!?!」

ヨシユアは崩落に巻き込まれたのではと心配し、珍しいほど取り乱してエステルとティオの心配をしていた。シエラザードはそんなヨシユアを初めて見たが、経験から即座に我に返り、ヨシユアを嗜めた。

「ヨシユア! まだ眼の前に敵がいるんだから、こっちに集中しなさい!!」

「は、はい!!」

「てめえらぁ……舐めやがって!! ぶっ殺す!!」

ドルンの目は血走り、怒りに震えている。
サツと構えたヨシユアとシェラザードに向かって、ドルンの導力
砲が火を噴いた。

一方。

閉じ込められたエステル・テイオ組みの方はというと、戦闘中の
ヨシユア達とは違い、間抜けな光景が広がっていた。

「能天気女！ どうしてお前がこんなところに！」

「な、なによボクっ子！ あんたたち空賊をやっつけに来たに決ま
ってるでしょ！！！」

「へーんだ。やれるもんならやってみなよ！」

「あ、あんですってー！ あんた自分が何やってんのかわかってん
の！？ 飛行船襲って街を騒がせて」

「だってボク空賊だもん」

「関係ない人を巻き込んで！ こんな所に閉じ込めて！ あたしが、
残された家族がどんな辛い思いしてたのかあんたにはわかんないの
！？」

エステルの怒気と指摘にジョゼットは怯み、何も言えなくなった。
場の空気もジョゼットたち空賊団に向けられ、敵意しかない。

「だ、だってドルン兄が……」

「ドルン！？ 全部あいつの仕業なの！？ そうよ、あいつが一番
めちゃくちゃよ。遊撃士であるあたし達どころか人質まで傷つけよ

うとするなんて！ どうしてそんな酷いことができるのよ！！」

そんなエステル言葉に、ジヨゼットは堪らなくなって、悲鳴のように大声で叫ぶ。

「うるさあい！！ ドルン兄を悪くいうな！ ドルン兄は、ドルン兄はとってもとっても優しいお兄ちゃんなんだから！！」

痛ましいといえるジヨゼットの言葉に今度はエステルが怯む。

そんなジヨゼットの頭をポンつと叩き、兄のキールが一步前に出る。

「事件はおれたちカプア一家が起こしたことだ。今更弁解する気はないさ。そして今は二対一……ここであんたとやりあってもいいんだぜ？」

「っ！」

その言葉にエステルはさつと相棒の武器を向け構える。

一気に緊迫した空気が流れる、が。彼らは忘れている。

一見、まったく戦闘者にみえない可愛らしい少女が、実はこの中で一番冷静かつ論理派な人間であることを。

ガチャリ、とキールの背中に機械らしき感触が。

ジヨゼットとキールはハツとなった。

「遊撃士ではありませんが……私を忘れられては困りますね」

「……………っ」

「キール兄！」

「ティオ！」

「ああ、動かない方がいいですよ。あなたに突き付けてるのは私が

ツアイス工房で造った護身用の10万ボルトスタンガンです。そしてもう一つが導力杖と呼ばれる武器です。基本はアーツ発動の補助機能ですが、近接戦闘用としてボーガンも搭載済みです」

「……おいおい。戦いすらできないお嬢ちゃんか、武器なんか危ないもの持ってんなよ」

キールはテイオが持つ凶悪な武器にギョツとする。エステルですら初めて聞いた妹の武器に仰天しているのだから、突き付けられるキールは溜まったものではないだろう。

しかしよく見れば大した年齢にも達していない少女ではないか。

虫すら殺せそうにない雰囲気に色白な肌。戦闘訓練すら積んでいないようにみえる身体付き。

迂闊に手を出せずにおろおろしているジヨゼットを視界に入れつつキールは手を上げながら、挑発半分でそう言った。彼としては隙を窺っているのだろうが、その言葉はテイオにとって、今の彼女には地雷であった。

「貴方たちこそ何を勘違いしてるんです？」

「……なに？」

「それでも私、この状況に怒ってるんです」

「……………」

「人質にすら手を出す犯罪者。それを兄の責任としてなすりつける手下……………ええ、貴方たちは本当に不愉快です……………人のトラウマを刺激する……………なんだか躊躇わずに引き金を引きそうです」

「テイ、テイオ、やめなさい！」

エステルは思わず妹へ待ったをかけた。理知的な妹ならば攻撃しない事は信じている。これは自分への援護だとも察せる。

だが、今の妹はどこがおかしい。焦燥感に駆られているというか、興奮気味というか、高ぶっているというか。とにかく危ないのだ。

それはキールやジョゼットも思ったのだろう。思わず武器を地面に下ろして降参していた。

「と、とりあえず降参する。だがその前に、この瓦礫の山をどうにかしないか？ 一時休戦というか」

発したキール自身、苦しい言葉だなあ、あり得ない提案だと思ったが、既に出てしまった言葉故に諦める。周りも「いや、それは」と思ったのだが。

そしてそれはティオでもある。何を言ってるんだと、ジト目で見ている。

だが。

ここでエステルという少女は斜め上をいくのが彼女たる所以である。

「……分かった！ じゃあこの瓦礫をなんとかしましょ！」

エステルは笑みを浮かべてそう言い、くるつと背を向けて瓦礫の前に立った。

その見事な無防備に晒すエステルに、ティオは「はあ……まあこれが姉さんです」と苦笑し、キールたちは逆に突っ込んでしまった。

「おいおい……いいのよ。そんな簡単に敵に背中を見せて」

「あ~~~~~確かに不味いかな」

今頃気付いたといわんばかりに目を泳がせるエステル。周囲も皆思ったのだった。おいおいと。

そしてその答えは実にエステルらしい理由であった。

「……うん。あたしはあんた達と自分の勘を信じるわ！」

「さすがはエステル君。それでこそラブアンドピースだよ！」
「うわっ！ オリビエいたんだ。完全に忘れてた」

今までどこにいたのか、突如オリビエがニョキッと出てきて薔薇を振りまく。

「ま、いいわ。早く手伝ってオリビエ。ティオも」

「了解です」

「まかせてくれ」

そう言って武器を仕舞い、エステルの下へ駆け寄るティオとオリビエ。

そんな彼女たちに触発されたのか、人質となっていた乗客たちまでが手伝うと言ってきた。

「よし、俺たちも手伝うぞ！」

「俺も！」

「私も！」

「あ、え、えといいの！ みんなは監禁で疲れてるから」

「それがそうでもないんだ。ドルンってやつはともかく、他の空賊には結構よくしてもらってたんだ」

「ああ。誘拐事態は悪いことだけど、待遇はそんなに悪くなかったよ」

「……そっか」

嬉しそうに笑うエステルと、ティオは少し気まずげに顔を反らす。理屈ではまったくティオに恥じることも間違ってることもないのだが、本来の彼女の優しい性格から、彼らを一緒にたに捉えた事が、少し気まずかったのだろう。

(あれ……でもあたしの父さんが……)

最初から気になっていたのだが、父親の姿が乗客の中に見えないのだ。

エステルはティオへ視線を向け、彼女もその意味を察してコクリと肯く。

そう、周囲の乗客へと父親について尋ねようとした。

だが。

「フ、フフフフフフフフ」

突如部屋に木霊する女の笑い声。

何事かと皆が声の発信源へと振り返り、自然とその主と遊撃士たちが向かいあえるように道が開かれた。

その声の主は、先ほどの占い師の女であった。

「フフフフ。なるほどなるほど」

「な、なに？」

その女性は壁にもたれ掛かっていたが、スツと離れ、エステルたちの下へと近づいてくる。

紺のローブがどこか不気味さを際立たせ、皆が後退りして道を開ける。

エステルが何かと尋ねると、女性は聞こえていないかのように何度も呟いた。

「面白いお嬢さん。興味深い余興を見せてくれたお礼に、お嬢さんの未来を占ってあげる。そしてついでにこの瓦礫も除けてあげるわ」

「へ？」

「このロウイスの占いは、なかなか当たるんですよ」

「え、えっと」

「……………」

勝手に始めた占い師ロウイスにエステルは困惑する。

それどころじゃないんだけど、と言いたいのだが、目の前の女性の妙な迫力が場を支配していて強く言い出せない。

(この女性は一体……この感覚……なんですこの気配)

逆にテイオは背筋が怖気立つ感覚を感じていた。背中から背骨を引きずり出されるような、強烈な悪寒と痛さ。

自分の能力が、この女性はおかしいと訴えている。

「……………出たわ。フッフッフ、なるほど。これは面白い」

水晶を取り出しみていたロウイスは、不気味に笑って何度も肯き、顔を上げた。

そこで初めてエステルと視線を合わせる。

思わず、ドキリとした。

その真っ赤な瞳が、まるで血のように見えたから。

「運がいいわ、お嬢さん。貴方は今この時点で未来を知ることができたのだから。この不幸の未来を」

「え。ふ……不幸？」

エステルはどもりながらそう返す。

先ほどの中年男性の言葉が脳裏に過った。まったく外さないという占いを。

そしてその内容は、お世辞でも良い結果ではなかった。

「お嬢さんはこれからある男に裏切られる。そして向かう先は絶望と破滅よ」

「絶望と破滅って……」

「どのような破滅かは分からないけど……男は何人か見えたわ。黒髪と青髪の2人ね」

「……！！」

その言葉に、エステルとティオは目を大きく見開いた。

「ふむ。もはや占いというより未来視みたいだね」

「そう取ってもらっても構わないわ。私には見えるのだから」

「いや、美人のお姉さん。そんな未来を占うことより、僕とのめくるめく熱烈な」

「そちらのお嬢さんも」

オリビエを無視し、今度はティオへ振り返る。

「！！」

「貴方はこれから先、一人ぼっちになるわ。あなたも青髪の男の子の所為で破滅に向かうみたい」

「ああ、なんて不吉な占いだ。でも美人のお姉さん。回避する方法もあるのだろうか？」

「ええ、もちろんよ」

今度はオリビエの言葉に反応し、顔色を悪くしたエステルとティオへ視線を向ける。

ジョゼットやキールは不吉な占いに眉を顰め、突如出てきた女に訝しむ。

しかしそれよりもエステルとテイオの顔色の悪さに、思わず心配してしまつ程、様子がおかしい。

ヨシユアがこの場にいれば思わずにはいられなかつただろう。幼なじみの男の子の知らなかつた一面を知つた時の反応とそっくりだ、と。

「回避する方法は1つ。関わらないことよ」

「ふむ」

ふふふ、と眩き色つばく囁く。

「悪いことは言わないわ、お嬢さんたち。止めときなさい、その子に関わるのは。貴方たちだつて不幸な目に遭いたくないでしょう？」

ロウイスはエステルやテイオたちへ語りかける。

ゆっくりと、伝わるように。

「私も貴方たちの不幸な未来を知つた以上、放つてはおけないわ。寝覚めも悪いしね。だからその子に関わるのはやめておきなさい。その子に関わらなければ貴方たちは平穩かつ幸福な生活を送れるでしょう」

既にエステルにも、そしてテイオにも分かつていた。

この占い師は本当に凄いのだろう。

誰も知らない筈の自分たちと青髪の彼との繋がりを占いで言い当てたのだ。きつとその占いも本当なのだろう。

迫る未来も、そして破滅も。

目を瞑ると、彼が犯したという、怪我をさせた事件が過つた。

彼は優しくも英雄でもなかつた。被害が周囲へ及ぼうが問答無用

で攻撃するし、人の機微も疎い。

世俗に疎い事から、彼といっても楽しい事など無いのかもしれない。彼といっても世話がかかることばかりで、実は面倒ばかりで疲れ果てるのかもしれない。

エステル、どうしたのですか？

大丈夫ですかテイオ

「「!!」」

耳を過る、過去の光景。

そして未来に待ちうける光景に思わず尻ごみをする。

ロウイスの言葉に、その通りだと思ふ。それが賢い生き方だ。きつと母も父もそれを望むだろう。

そう思い、占い師ロウイスの言葉に肯こうと

「「違う」」

「エステルくん？ ティオくん？」

全く違う、逆の言葉が口から突いて出ていた。

俯いていた顔が上がったその表情。閉じていた目は深い色を魅せ、そして光が灯る。

「あたし……知ってるから」

「元々……彼がいなければ私の未来は真っ暗でしたから」

そう、自分は知っていたはずなのに。

自分の未来は真っ暗だったと。そこから助かったのだ。彼が教えてくれた歌のおかげで。

だから自分には、それ以外に進むべき道はないのだ。

そうテイオが言うと、エステルはクスッと笑ってテイオの頭を撫で、ポツポツと口にした。

「ハハハ……あいつね、最初に出会ったあの時、お母さんが死にそうだった時、普通に素通りしようとしてた。興味なさそうに、まるで石ころと同じように」

クスッと笑い、過去を懐かしそうに振り返る。

「困っているお年寄りがいっても無視は当たり前。目の前で泣いてる子供がいても無視。だから……なんて嫌な奴なんだろって、子供ながらに思ったっけ」

苦笑しながらポリポリと頬を搔く。

「ふむ……エステル君にとってはさしずめ、嫌な知り合いってところかな？」
「うっん」

事情を知らないオリビエの言葉にも苦笑し、オリビエではなく口ウイス占い師と視線をぶつけ合う。

「でも、ルシアは徐々に、本当に徐々に変わった。怪我した子を見捨てても、影でこっそり治療してた。お母さんも結局は助けてくれた。だから今度は　あたしがルシアを助けたい！　ルシアが助けてくれなかったら、あたしは絶望していたと思うから。例え立ち直っていたとしても、今のあたしにとってはそんな例えの世界でも、真っ暗の地獄だから」

僅かな膨らみの胸元にそっと手を当てて、自分に言い聞かせるように言霊を紡ぐ。

そうだ。自分は旅に出るとき、そして旅立つ前からずっとそう思ってきたはずだ。

やっぱり初心を持ち続けるのは、そして貫き続けるのは難しい。それを、初めて実感した。

「たとえロウイスさんの占い通りの未来が待っていたとしても……あたしは、ルシアを見捨てたら後悔するから。だからあたしは、あたし達はルシアを探すわ!」

そうだ。

探そう。あたし達の家族の恩人を。助けてくれた、最高の幼馴染を。

(……きつとルシアだってあたし達と一緒にいることを願ってるはずよ。だって、一人は寂しいんだから……あたし達を待ってるはずよ!)

見捨てるなんてできない、一人は寂しいから。

一人でなんていられない、一人は寂しいから。

「……………そう。それならがんばりなさい」

ロウイスは目を伏せ、小さく俯く。

ローブで目が隠れ表情がうかがえなくなり、せつかく占ってもらったのに悪かったかな、とエステルは思うが、ロウイスから「ちょっとそこ退きなさい」と言われ、皆が瓦礫の山の前から離れる。

(あ、そういえば瓦礫を退かしてあげるって……)

ふと最初に言われたロウイスの言葉を思い出し、何をするのかと思つと、ロウイスは掌を瓦礫へ向ける。

ゴウツ、と炎が弾ける音がして、ぎよつとした表情をするエステル、ティオ、オリビエたち。

アーツか!と思つた瞬間であつた。

「
アークフレア」

その眩かれた言葉が耳に聞こえた瞬間、室内は眩しい閃光につつまれ、導力砲など歯牙にもかけないほどの破壊音が響き渡つた。

「っ!?!」

「なっ!?!」

恐る恐る目を開けると、瓦礫の山があつた場所は何もなくなつており、地面が焼け焦げている。

おそるべき破壊力をもつたアーツであつた。

「すごい! ロウイスさんって凄いなだ!」

「フフフ……これはサービスですわ。最初で最後の」

「ありがとう!」

「いえ。で、行かなくていいのですか?」

「! っとティオ、オリビエ、行くわよ! 皆さんはまだここに居て下さい!」

そう言ったエステルは慌ててヨシユアたちを援護する為に走りだし、その後をティオとオリビエが追う。もちろんキールとジョゼツトも慌てて追いかけていき、室内には乗客とロウイスが取り残された。

「……残念ねえ。ここで諦めてたら、あんたたちも死ななくても済むのに」

それまでの言葉遣いが一変し、まるで別人のような口調になったロウイスは、誰にも聞こえない声で独りポツリと呟いた。

真っ赤な瞳はエステルとティオの背をジツと捉えていた。

この数分後、まるで何かに操られていたように穏やかになったドルンを打倒し、王国軍の若手急上昇中の有名将校・リシャー・ル大佐により捕縛された。

第28話 人は変わるもの（後書き）

すいません、本当にお待たせしました。

ようやく仕事の合間に書き上げ、今度はコミケの原稿を書いています。

あ、冬コミでは30日に参加します。文庫出版で、内容は、

『LUNAR〜英雄伝説〜』の第1章を大幅に編集、加筆したものになります。

よければ読んでみて下さいね。

29話 絆とは共にいた長さ(前書き)

コミケ参加します！

場所は以下の通りです。是非来て下さいね！

12月30日 東 - 21b

29話 絆とは共にいた長さ

朱色の瞳がキラリと輝き、夕焼けで焼けた空と海が茜色が、その睨みを際立たせる。

一方で彼女に相對するのは、水色の綺麗な髪を風に靡かせ新芽を連想させる黄緑色の瞳が彼女を見詰めていた。

傍の川蝉亭では、シエラザードが酒をがぶ飲みして爆笑し、その前でオリビエが目を回して力尽きている。

そんな穏やかな空気の中、傍でヨシユアがオロオロしているのを尻目に、彼の姉と妹は緊迫した空気を醸し出していた。

「そう……テイオ、あんた……私の敵になるのね」

「言っただけでなかつたですね姉さん……これだけは譲れないんです……だからっ！」

仲が良かったはずなのに。

2人が姉妹になったあの日から、お互いに良き姉として、良き妹として。

だが、今この瞬間から2人は。

「テイオ　　！！」

「姉さん　　っ！！」

キツ、と激しい殺気と咆哮と共に、2人は激突した。

時間は数時間前に戻る。

特に何の問題もなくドルンを打倒したヨシユア・シエラザードのペア。何故か好戦的なドルンではなく、憑き物が落ちたかのように人が変わったドルンは、元に戻ったと喜ぶジョゼットたちに首を傾げつつ、とりあえず脱出しようと試みた。

人々を拉致した記憶もないようで、ドルンは部下やジョゼットやキールの説明に戸惑っていたが、元来の優秀さからか、すぐに行動に移行したが、そこにやってきたのはリベール王国軍であった。

リベール王国軍の軍用艇が発着場に鎮座しており、そこから大量の軍人が出てきてジョゼット達を取り囲み拘束した。

その軍を指揮していたのが、『王国軍情報部最高責任者』リシャール大佐である。

王国軍情報部とは聞き覚えがないエステルたちであったが、最近新設されたばかりのエリート組織であり、それらを率いているのが王国軍きつての若手将校、それがリシャールである。

驚いた事に、彼ら軍と一緒に同行していたのは、ナイアル・ドローシーのリベール通信コンビであり、こんな所になんではいるの!？と、テイオ達を戸惑わせたが、

「いや、実はどうも軍内部にモルガン將軍の意向とは違う動きがあるような気がしてよ。で、思い切って取材を申し入れたらこれからアジトに突入するってんでな。一緒に連れて来てもらったんだよ」

「……やっぱり鋭いな、ナイアルさん」

と、シレつととんでもない事をいうナイアルと。彼らの行動力に感心した様子のヨシユアであった。

そんなやりとりをしていた所で、皆の下へやって来たのが、噂の人物であった。

「どうかね、ナイアル君。いい記事は書けそうかな？」

「や。そりゃもうお陰さまで」

「そうか、それは良かったって、ん？ 君たちは……？」

「あ、彼らは例の……」

「……遊撃士、か。私は王国軍大佐リシャルだ」

金髪の髪と凛々しい顔、きちつとした軍服が重なり、思わず身体に力が入るエステルとテイオ。

この時、モルガンの時と同じように遊撃士だから、という理由で何を言われるかと警戒していたのだが、次の言葉で拍子抜けする事になった。

「今回、こうして空賊を逮捕できたのは我々王国軍の働きと、そして諸君ら遊撃士協会の協力があったからこそだ」

「へ？」

「君たちには心から感謝しているよ」

そう言って、手を差し出し握手を求めるリシャル。

その穏やかな表情のおかげか、エステルたちは身体の力が抜けていくのを感じた。

「軍の泣かんいは遊撃士を敵視する声も見られるが、本来なら軍と遊撃士協会は協力関係にある筈だ。これからもこうして互いに補える存在でありたいものだな」

「は、はい！ リシャール大佐」

「……そうですね。それが叶えば素敵です」

エステルは感動して手を握り返し、テイオは口元が緩みながらも現実問題がある事を知っているので声色は硬い。

そこでシエラザードがある事に気付いた。

「でもどうしてアジトの場所がわかったんです？」

「ああ、それは我が情報部のスタッフの分析が優秀でね。特に特務部隊のロランス少尉などが危険な任務を見事に遂行してくれたのである」

そう言って示した方向にるのが、看板に背を預けて腕を組んでいる男。

兜を被っていて顔が見えないが、引き締まった体躯や彼を包むオーラが只者ではなく感じる。

「あゝ！ あ、あんた軍の関係者だったの！？」

「くそっ！ そういうことだったのか！」

と、何故かロランス少尉をみてジョゼットやキールが喚いている。どうやら彼らへ接触をしていたらしく、雰囲気から察するに嵌められたようだ。

「いや、本当にご苦労だった。後の処理は我々軍に任せて欲しい。では」

そう言って隣にいる腹心の部下である女性を伴い去っていくリシヤールは、誰が見てもかっこよかった。その証明だろうか。オリビエは気持ちよさそうに笑いながらこう言ったのだ。

「いやはや、美味しいところを根こそぎ持って行かれた気分だね、ふふふ」

「いいじゃないの」

「そーよ、オリビエ。これで事件は一件落着なんだしね！」

「エステル君は無よくだねー」

「それが姉さんの良い所です。そしてオリビエさんは欲望が多すぎかと」

「な、なんと!? テイオ君の言葉が胸に痛いよ」

胸を押さえて苦しむ仕草を見せるオリビエに、更に追撃をかけるテイオ。笑っているエステルにヨシユア。ここでシエラザードは、再び何かに気付き、冷や汗をたらたら掻きながら頬をヒクつかせた。

「ねえ……そういうば、カシウス先生はどうしたのかしら？」

「あ~~~~~~~~っ!! さっきまで気になってたのに忘れてた!!」

「……っっかりです」

「うゝむ。この騒動ですっかり抜け落ちてたね」

シエラザードの指摘にエステルが素っ頓狂な声を上げ、テイオがポンッと手を叩き、オリビエが言葉とは裏腹にかっこよくポーズを決めつつ間抜けな事を口にする。

「……………」

その背後で、ヨシユアがロランス少尉を見て大きく目を見開き、何かに気付いたような、驚いているような顔をしていることに、誰も気が付かなかった。

「空賊が逮捕されて、人質も解放されて、世間を騒がせた飛行船失踪事件も無事解決したのに……」

ボースの遊撃士協会、その2階の休憩所にて、エステルは液体化するほど垂れていた。

そんな彼女の前でテイオは持ち運び式の端末に向かってカタカタと何かを打っていて、尋常じゃないタイピング速度に皆を感心させたが、流石に慣れる程見ていれば驚きも薄れるというものだ。エステルは顎をテーブルに乗せたまま、ギャオーっと叫ぶ。

「うちの父さんはどうなってるのよおお!!」

そう。結局、飛行船に載って拘束されている筈のカシウスの姿が、どこにも無かったのだ。

そして叫んだエステルに拳骨を落としたのが、シエラザードであった。

「うるさいわねエステル。まだ事件の事後処理でどこもバタバタしてるの。落ち着けば乗客だった先生のことには知らせに来てくれるわよ。これとかがね」

「リベール通信？」

シエラザードの言葉に首を傾げるエステルと、チラリと視線だけ

をシエラザードが持っている雑誌『リベール通信』に目を向けるテイオ。何かを纏める作業をしつつ窺うヨシユア。

……………そして何故か花の前でポーズをとって格好つけているオリビエ。

なに？ と雑誌を受け取り開いてみた。

最初のページを開いて、そこに組まれていたトップニュースは、今回の飛行船事件の記事だ。

「なになに……今回の事件ではモルガン將軍指揮の国境師団が犯人の足取りを追い、情報の分析をリシャル大佐率いる情報部が担当。新旧両世代の將軍のタッグが見事捜査を成功へと導いた。作戦には遊撃士も参加……って、これってあたし達のこと！？ わわわ！すごい！ ナイアルかな、この記事」

自分たちの事が書かれた記事に頬を蒸気させるエステル。

それも当然だ。今まで自分たちがやってきた事件といえば、ネコ捜しや落し物の捜索、大きいもので商人の護衛がいい所だ。それは記事にはなりえるものではない。

だが今回は載った。頭では大きな事件に関わっていることは分かっていたが、記事を見て改めて実感した。今までとは比べものにならないくらい大きな事件だったのだと。

「さあさあエステル君。遠慮せずに続きを声高々に朗読してくれたまえ。そこにはこのオリビエ・レントハイムの華麗な活躍を余すことなく書き記した特集記事があるだろう？」

「ないわよ」

「うっっん。シエラ君は策士だね。その冷たい物言いが逆にボクを燃え上がらせることにいつから気がついたんだい？ さあエステル君。言ってくれたまえ、真実を」

「無いって」

「~~~~~!?!」

エステルのぼっさりした言葉にガンとショックを受けるオリビエ。

「っていつか、どうしてあんたが遊撃士協会に入り浸ってるのよ」「ひどい言い草だな。事件に関わった者として顛末を知りたいと思うのは当然だろう? 君たちのお父上の安否は僕も気になるところなのでね」

ちよつと良い事を言い出したオリビエに、エステルは強く言い返せず、うゝ、と唸っていると、一階の受付から受付担当のルグラン爺さんがエステル達を呼んだ。

何事かとエステルとシエラザード、面白いことが起こったかと目を輝かせるオリビエ、端末を抱きかかえながらヨタヨタと重そうにしつつも降りるティオ。

一階に降りるとそこにいたのは、ナイアル・ドロシーの記者コンビであった。

「こんにちわ〜」

「よっ」

「ドロシー! ナイアルも!」

いつも通りタバコを吸うナイアルと、ホワワーンとした空気の下ロシー。

本当にデコボココンビな2人なのになあ、と実は息が揃っているコンビに笑顔を見せ手を振るエステル。

「よかったぜ、ロレントに帰ってなくて」

「あ、そうそう。ナイアル、リベ通見たわよ!」

「臨場感あふれる良い記事だったわ」

「だ、だろ!? さすがエステルに銀扇のシエラザード! なんて
つたつて今号は軍の全面協力が得られたからな! しかも!! な
んと今度あのリシャル大佐がインタビューに応じてくれることにな
ってな!! 信じられるか、あの軍がだぞ!? よっしゃあああ
ああああああ!」

唾をバシバシ飛ばしながら拳を突き上げ、ドロシーと一緒に喜ぶ
ナイアルに、一同は苦笑しか出ない。

そんな一同の視線を感じた彼は、恥ずかしそうにコホンと咳をし、
落ち着いた仕草を見せて続ける。

「まあ、正しくは軍の中の情報部だがな。あの組織はすごいぞ。リ
シャル大佐を筆頭に副官のカノーネ大尉、それにロランス少尉な
! とにかく若手のいい人材が揃ってる。特にあのリシャル大佐
な。古い慣習に縛られた軍の中に新しい風を起こした実力もいいん
がだ、なによりも一見冷静な彼の言動の奥にもリベール王国を愛す
る熱い心がチラつと見えたもんでな」

「へ〜」

「ナイアル先輩」

「ん? あ、ああ、そういえばそうだった」

「? なに?」

「すまん、本題はこつちなんだ。実は今朝例の飛行船の船長に会っ
てきたんだが、これを受け取った」

そういつて差し出してくるのは、一枚の手紙。

テイオがその手紙の文字をみてピクリと眉を動かしジツと見詰め
る中、エステルとヨシユアが手紙を受け取ってその送り主に顔を合
わせた。

「これ！」

「父さんの字だね。それも僕達宛ての手紙だ」

「先生の！？」

シエラザードも目を見開いて食いつく。

その字は間違いないく、剣聖カシウス・ブライトのもの。

一同が見詰める中、ナイアルは知っている内容を話した。

「カシウス・ブライト氏だが、乗船名簿の通り王都グランセルからあの飛行船に乗ってロレントに行こうとしていたのは間違いないぞうだ」

「え……でも」

「だがな、何故かボースを離陸する直前んい突然船を降りちまったんだと。お前たちにその手紙を残してな」

何のために。

皆が不安そうに顔を合わせ、コクリと肯く。

皆の不安も疑問も、全てがこの手紙の中にある。

エステルはそつと手紙を開いて読み上げた。

『エステル、ヨシユア。そして恐らくそこにいるであろうティオへ。

そろそろ遊撃士として慣れてきたところだろうか。

最初は躓くこともあるだろうが、一步一步確実にこなせばいい。

お前たちなら必ず出来るはずだ。

さて。

こちらの仕事の方だが、少々困った事が起こってな。どうやらしばらく家に帰ることができない。

そうだな……女王生誕祭が終了するまでは帰れないと考えてくれ。
俺が戻るまでの間、お前達がどう過ごすかはおまえたち自身が決めるといい。

ロレントで仕事を続けるもよし、正遊撃士の資格を得る為に旅に出るのもいいだろう。

16歳という実り多き季節を悔いなく過ごすといいだろう。

そして先にも書いたが、おそらくそこにテイオがいることだろう。何故いるかも何となく予想ができる。レンは母さんの傍にいるだろうしな。

テイオ、お前は賢い子だ。

そんなお前は一緒にエステルたちに同行する危険さも理解しているだろう。

だがそれでも同行するのだ。心配だが、それでも止めはしない。きっと母さんも同じ事を言っただろう。

だから、気を付けて旅をしなさい』

「父さん……」

「とりあえず無事のようにじゃな」

「女王生誕祭か」

「三か月は先になるわね」

エステルとヨシユアはじゅんと父の愛情に感動し、ルグラン爺さんはホッと一息つき、オリビエがクールに言いながらもどこか嬉しそうに言い、シエラザードも安心したような顔で言う。

そんな中で、テイオはホッと安堵した後、何かに気付いたように目元をスツと細くし、何かを睨みつける。そして手を伸ばし、『エステルが持っている手紙の封筒』をひったくった。

「テイオ？」

「……まだあるみたいです。2枚目が中に」

「ホントだ！読んで読んで！」

封筒の中に入っている紙。はみ出ていたから気がついたが、本当に申し訳程度のサイズの紙だ。

おそらく後から殴り書きで書いて入れたのだろう。

開いて読んでみると、それは1枚目の手紙と違って走り書きで書かれていた。

『エステル、ヨシユア、テイオ。

書くかどうか迷いに迷ったが、やはり最後に忠告をしておく事にする。

先に言った通り、お前たちが進む道は好きにするといい。父さんの事も心配いらぬ。

だが。

お前たちの幼なじみである彼の事だが。

お前たちは絶対に彼を捜そうとするな。

お前たちが考える以上に、遥かに危険なものになるだろう。

だから絶対に、絶対にお前たち自身で飛び込んでいかないように。

そして『魔族』には気を付けなさい』

「……………」

「……………」

「エステル……………テイオ……………」

「魔族？」

「…………ふむ」

シエラザードが首を傾げ、オリビエが何かを思索する。
手紙を手にしたまま動かなくなった2人に、ヨシユアが心配そうに声をかけるが、2人は反応がない。

「なあ、魔族って何だ？ それに彼って、エステルたちが捜しているって言ってた幼なじみの事か？」

「あら、それ知ってたの？」

「ああ。話しには聞いてた」

「そう。でも分からないわ。魔族ってのも聞いた事がないし…………魔獣とかの亜種かしら」

妙な空気になった事で、父親の行方が分かり歓喜する光景を期待していたナイアルは、焦りながらシエラザードに聞くが、彼女もよく分からず首を傾げた。

そんな空気を払拭するように、ルグラン爺さんが手を叩き、注目を集めた。

「ほれ。事件解決に導いたお前さん達も息抜きが必要じゃろう。ボース市長が君たちへのご褒美をくれておる。そこに行って英気を養い、気持ちの整理をつけるがよかろう」

「はい…………」

「…………そうですね」

ルグランの言葉にようやくエステルとティオが肯き返した事で皆もホッと一安心。

メイベル市長も太っ腹だな、とナイアルも感心する中、一行はシエラザードを先頭に、ご褒美の地、川蝉亭へと出発した。

ナイアルとドロシーはそんな彼女たちを見送り、自分たちも仕事に戻るかと気を入れ直し、宿へと戻ろうとしたのだが、彼の脳裏には先ほどの手紙の内容がどうしても抜けなかった。

(しかしあの剣聖カシウスの言い様……まるでC級の凄腕遊撃士シエラザードがいても敵わないかのようだったな……それにその例の幼なじみ君、ルシアと言ったか………やっぱりどこかで聞いた事があるんだが……どこだったか)

タバコを一息吐き、真っ青な空を眺めた。

出てきそうで出てこない、そんなモヤモヤした気分とは裏腹に、天気は見事な快晴であった。

メイベル市長の好意により、リベール王国のリゾート地、川蝉亭への1泊2日の宿泊というご褒美を貰った一行だったが、なんとも反応は両極端なものであった。

到着するや否や、シエラザードに対して発したオリビエの言葉、

「楽しみだよ。シエラ君。麗しの君と極上の一杯！」

「ええ、いっぱい飲みましょ！」

微妙に意味合いが違う両者の言い分を皮切りに宴会に突入し、やはりオリビエが撃沈。

エステルは父の言葉に怒ったり落ち込んだりと忙しく、ご立腹状態で魚釣りへ。

ヨシユアはエステルの魚釣りの誘いを断り、なんだか物思いに更けながら読書を。

テイオはやはり川の畔に座り、端末をガシガシ叩きながらやはり何かを悩んでいるようだ。

各々は事件解決のご褒美に、とりあえずは休暇を満喫していた。

そんな中、テイオは端末を叩きつつ、池を眺めて小さく溜息を吐いていた。

予想以上に父の言葉に対してダメージを受けたらしい。

訳の解らない父の制止の言葉は意味が分からずとも、これまで自分たちの行動や想いを無碍にするような言葉は言わなかった。

それだけに、シヨックがあるらしい。

そして何よりも。

こうして自分が穏やかな生活を享受している中、あの人は危険な連中に今も狙われている、もしくは関わっているということだ。

それが、何故か罪悪感を生む。

勇気付けてくれて、励ましてくれて、温かみをくれた人が、今は行方不明となって父が制限をかける程の連中も関わる程の危険な状態にあるらしい。それが、心が痛い。

オカリナを取り出し、撫でるように包み込み、適当に穴を塞いだりして弄る。

なんだかこうしているだけで、縋っているようで落ち着く。

「決めた筈です……たとえお父さんが止めようと、もう一度会って、そしてお礼をするって……」

まるで誤魔化すように、自分に言い聞かせる。

本当の気持ちはそうではない癖に、そしてそんな自分を自分で気付けていながら、気付かないフリをし続けた。

視線の先には、魚釣りを終えたエステルが何やら難しい顔で考え事をしているヨシユアに近づいて話しかけている。

思わず立ち上がりそちらへ向かうと、声が聞こえてきた。

5年もどうして何も聞かずに一緒に暮らせたりするのか、とか。

昔のことを一切喋らない得体の知れない自分をどうして君たちは受け入れるのか、とか。そんな事をヨシユアが言っている。

テイオは気付いていた。

己の隠し続けている能力により、ヨシユアの動機や鼓動が極端に上昇した瞬間を察知し、彼が『ロランス少尉』と呼ばれていた存在を見詰め大きく目を見開いていた事に。

どうやら彼が兄の過去に関係しているらしい、と当たりをつける。

(フ……こうして訳知り顔でこっさり当たりをつける……自分のことながら最低です)

思わず自分を嘲笑し、兄と姉の間に割り込むのを止めようと足を止め、引き返そうとする。

だが、そこで姉は弟にこう言った。

「そんなの当たり前じゃない」

「あのジョゼットたち兄妹と空賊たちもたぶんあたし達と一緒になの。ずっと一緒にいて、お互いに積み重ねてきたものがあるから、たとえどんな事があっても相手への想いは変わらないのよ」

「だから、たとえ何があっても、ヨシユアにどんな過去があっても、

あたし達はずっと家族よ！」

と。

そういえばとテイオは思い出す。ジヨゼットたち空賊が言ったが、兄であり首領のドルンは突然人が変わったようになってしまったと。昔は人を襲ったりしなかったと。いつものドルンじゃないと。

事実、ヨシユアがドルンを殴った直後、彼は全く別人のように穏やかな性格になってしまったのだ。

そしてそんな彼でも、皆は彼を信じ、そして元に戻った事を即座に喜んでいた。あれこそが姉のいう変わらない絆というものなのだろう。

「フフ……」

テイオは無意識に微笑んでいた。姉の前向きな考えはなんて心地よいのだろうと。

無意識に真実を突き、皆を正しき道へ、光へと導く姉の言葉は、まさに自分にはないものだ。

止めていた足は自然と前へと向き、近づいてきた妹に気付いたエステルとヨシユアは彼女の名前を呼んで嬉しそうに手招きをする。

「テイオ、聞いてたんだ？」

「ええ。姉さんの恥ずかしい言葉を聞いて思わず笑ってしまいました」

「ちょ！？」

「ははは。でも嬉しかったよ。それにそうだよ。あの空賊の兄妹たちの団結力を見習うべきところかな」

「そ、そうよ！ だからあたし達も、ずっと仲のいい姉弟でいようね！」

「……………姉弟か……………ハア……………」

「な、なによ、その深い溜息は！ あたしがお姉さんだと不満なの！？」

「いいですよ、もう、弟で」

「なあに、その投げやりな言い方！」

「……………どっちもどっちですけどね」

「え！？ どこが！？」

ギャンギャンと喚くエステルに、苦笑するヨシユア。突っ込むテイオ。

これが自分たち姉弟の関係だ。そうテイオは思う。

姉の言った通り、ずっと一緒にいて積み重ねてきたものがあるから変わらない、相手への想いも変わらない。

「え？」

「え？」

「ん？」

突如、うめき声を上げたテイオにエステルとヨシユアは思わず妹を見やり、顔色が真っ青になった妹に気がついた。

「ちよ、ちよっと、どうしたのよ！」

「テイオ？ 大丈夫かい？」

姉と兄の心配する言葉も、今は聞こえない。

テイオは壊れたロボットのようにつくりと首を回してエステルへと向け、

「ずっと一緒にいて積み重ねてきたものがあるから変わらないなら

……………ルシアはどうなるのです？」

「……………え？」
「……………」

テイオの言葉にサツと顔色を変えたのもエステルであった。ヨシユアは厳しい顔をしてこちらを窺っている。

やめろ、と。心が叫んでいるが止まらない。

理屈では姉の言葉の矛盾点などを見つけ論破できるのに、心がそれが正しいと叫ぶ。

それ故に、自分は気付いてしまった。

自分たちがもっているこの気持ちの、最大の矛盾に。

「決して長くもない時間だから……………私も、姉さんも、本当はルシアと絆も何もないって事じゃ？」

自分は一週間程度で。

姉は3年程度とはいえ、会った回数も日数も両手で足りる程で。

決して口数が多い彼ではなかったから、交わした言葉は少なく、また彼について何も知らない。

ソレを言葉にしなくても、エステルもテイオが何が言いたいのか、空気で悟ってしまった。

もしかすると……………父はこの点に気付いていたから、自分達に彼を捜すなど言ったのかもしれない、と。

「……………」
「……………」

自然とテイオとエステルが向かい合う形になり、両者の間に夕日

が挟まれる形になった。

太陽の断末魔のような真っ赤な夕日なのに、背に流れる汗と風は冷たすぎる。

エステルとテイオが次第に睨みあうように目が細くなり、エステルが反論しようと口を開けようとして　　。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ドン、と激震が走り、池の水しぶきが20メートルも吹きあがった。

何事かと振り返った三人の先にいたものは。

池の中から現れた、トカゲのようなワニのようなもの。

例えるなら、そう。

物語の中に出てくる、水竜と呼ばれそうなドラゴン。

そしてその上には、人にはあり得ない青色の身体をした、だが腕が6本もあり尾も生えている金髪の女の化け物だった。

「あのお方達の命令だ。突然で悪いけど　　死んでもらうよ」

その言葉と共に、戦いの火ぶたが切って落とされた。

そしてその瞬間だった。

テイオの脳裏に何故か過った、ある人物の会話。

「ねえあんた。変なこと聞くけどさ」

「おう、どうした母ちゃん」

目の前の化け物女が金髪の髪だからだろうか。
だから過つたのかもしれない。

『あの占い師のロウイスさんだけどさ』

『？』

『賊に捕まった時、あたい達乗客の中にいたっけ？』

『……な、なに言ってるんでい！ いなかったら一緒に牢に入れられてる訳ねえだろうが！』

『そ、そうよね。気付かなかっただけよね』

『お、おうよ。まったく変なこといいやがって。変な母ちゃんだぜ』

救助された乗客の中にいた、一組の中年夫婦の会話が、何故か蘇った。

29話 絆とは共にいた長さ（後書き）

お待たせいたしました。

感想返しは起きてから行います。すいません。

仕事で激しくダウンしているもので（泣）

【コミケ告知】

30日 東 - 21b

コミケ2日目になります！

もちろん内容は『LUNAR 英雄伝説』になります！

是非来場された方は寄って行って下さい！

自分がいるか分かりませんが、仲間が販売していますので読んでやってください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5063o/>

LUNAR ~ 英雄伝説 ~

2011年12月29日02時56分発行